タイ国王暗殺事件

THE DEVIL'S DISCUS

著◉レイン・クルーガー　訳◉徳岡孝夫

タイ国内では発禁
衝撃のドキュメント

YELL books

タイ国王暗殺事件

レイン・クルーガー◉著　徳岡孝夫◉訳

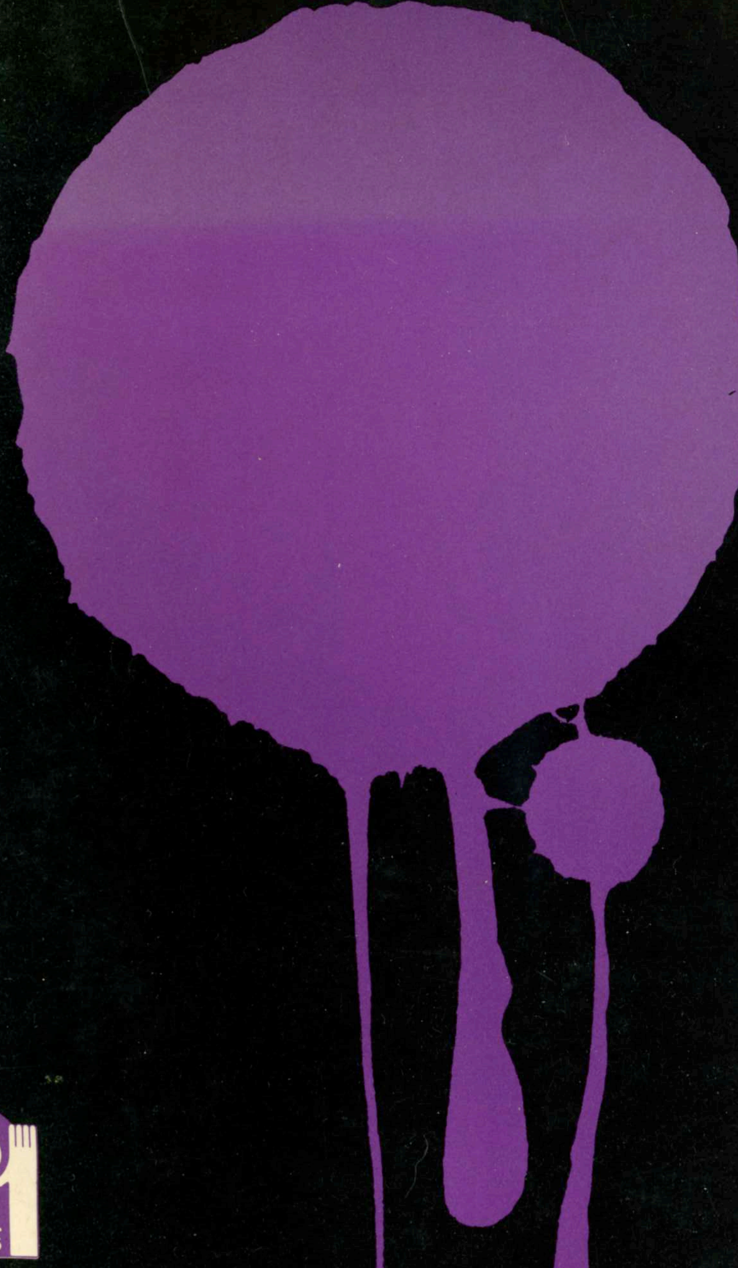
タイ国内では発禁
衝撃のドキュメント

YELL books

エール
出版社

0036—0160—0641

一〇〇〇円



YELL books

この驚くべき事実

これは驚くべき事実である。推理小説よりも手のこんだ、小説よりも小説的な筋書が、ほんとうに起ったとは信じられないくらいだ。しかし、ここに述べられているできごとは実際に起り、国家の枢機に干与していた人々の運命を変え、タイ三千万国民の幸福を左右したのであった。

原著は、今日のバンコクの書店の本棚にはいっさい見かけることができない。それにもかかわらず、タイ在留外国人のあいだでひそかに入手、回覧されている理由は、本書の内容が現国王の兄であるアナンダ・マヒドン前国王の死の真因に迫っているだけでなく、現代タイの政治、社会を知るうえに貴重な鍵を提供しているからだろう。

もしこれが日本の皇室の事件であれば、日本人はどう反応することだろうか。（訳者あとがきの一部より）

カバー・相田尚志

原著者のことば

私が原著を書いてから十年がたった。しかし、この中に紹介した素材や結論は、なに一つ変更する必要がない。もし明るい材料があるとすれば、それは本書の主人公の一人、プリディ・パノムヨンの身の上に起ったことだろう。

昨年、彼は中国を出て西欧に移住した。私は、はじめてプリディ氏に会うという感動的な機会を経験した。運命の悪魔的ないたずらは、この勇敢、聡明でかつ礼儀正しい人物の意気をいささかも沮喪させていない。タイの人々のために正義を望むプリディ氏の胸の炎は、彼の目の輝やきの中にさえ燃えているようであった。（原著者あとがきの一部より）

タイ國王暗殺事件

THE DEVIL'S DISCUS

著◎レイン・クルーガー　訳◎徳岡孝夫

タイ国王暗殺事件

THE DEVIL'S DISCUS

著⊙レイン・クルーガー　訳⊙徳岡孝夫

もくじ

1部　その背景……5
2部　アナンダの生と死……29
3部　裁判……143
4部　真犯人……239

主な登場人物

チュラロンコン　チャクリ王朝第五代の王。在位一八六八～一九一〇年。

ラマ六世　チュランコンの子、マヒドン王子の異母兄。在位一九一〇～二五年。

プラチャーディポク　チュラロンコンの子、マヒドン王子の異母兄。在位一九二五～三五年。

アナンダ　マヒドン王子と同王妃（のちに王母殿下）のあいだに生れた長男。姉にガルヤニがいる。在位一九三五～四六年。

プミポン　アナンダの弟。一九四六年に即位し、現在タイ国王。

サワン妃　チュロンコンの妃の一人。マヒドン王子の母。

シリキット　プミポンの妻。現タイ王妃。

ナイ・アネク・スプラピャヤ　ローザンヌにおける王母殿下の秘書。

クレオン・O・セライダリス　ローザンヌでのアナンダ兄弟の家庭教師の一人。

プリディ・パノムヨン　祖師。タイ首相、摂政を歴任。

ピブン・ソンクラム　戦中、戦後のタイ宰相。

クオン・アパイオン　一九三二年革命推進団の一員。民主党総裁。二度首相をつとめる。

パホン大佐　革命推進団の一人。一九三三～三八年首相。

ダムロン提督　一九四七年のクーデターまでプリディ内閣を継承。

パオ・シャノン　警察長官。四七年クーデターの指導者。「バンコクの屠殺人」と呼ばれる。

サリット・タナラート　四七年クーデターに参加。一九五七～六三年タイの独裁者。

セニー・プラモート　弁護士。駐米大使時代に自由タイ運動を組織。のち首相。民主党領袖。ククリ・プラモートの兄。

ククリ・プラモート　ジャーナリストにして政治家。

ワチャラチャイ　海軍大尉。プリディ付き武官、のちに侍従武官。ダムロン首相秘書。

チャリュー・パトムロス　会社社長。政治家。アナンダ国王秘書。

ナイ・チット・シンガセニ　王宮のボーイ。

ブット・パラマリン　同。

アーチット王子　元摂政。

ランシット王子　アナンダの叔父。ピブンにより一九三八年に投獄さる。アナンダの死後の摂政。

スパ・スワット王子　モンクット王の孫、プラチャーディポク王妃の弟。英国における自由タイ運動指導者。

プラピニット・チョンカット　元警察長官。国王暗殺事件の捜査本部長。

ジョフリー・トンプソン卿、タイ駐在イギリス大使。

エドウィン・スタントン　同アメリカ大使。

スキーツ・ガルダス　米大使館つき海軍武官。

ニット博士　アナンダ国王の侍医。

ハク・ナソンクラ　国王暗殺事件の主任弁護人。

メー　王宮の給仕。裁判における証人の一人。

セー　殺し屋。

チャオム　ワチャラチャイの妻。

マルレーネ・フェラリ　ローザンヌの女子学生。

1部　その背景

1

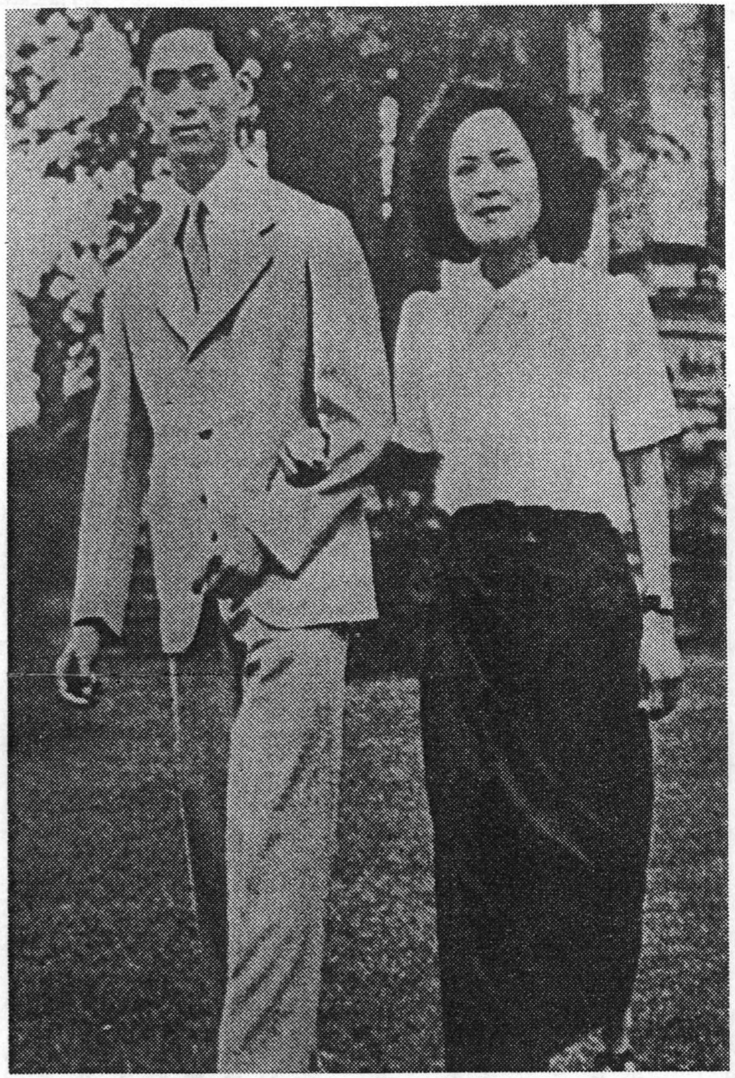
一九四六年夏の某日である。ロンドンの『タイムズ』に、六月九日付のバンコク発AP通信の電報が載った。

「シャムの青年王アナンダ・マヒドンは、きょう、バロンピマン宮殿の寝室で、頭部に銃弾を受け、死んでいるところを発見された。正午少し前、第一発見者は召使いだった。警察長官とチュラロンコン病院の医長らが即刻、宮殿に召喚されたが、彼らの話によると、王の死は事故死だったらしい。……宮殿のそとには王の死去を静かに悼む大群衆が集った。彼らの大多数は、午後七時の政府放送がニュースを告げるまで、王の身に起ったことについてはなに一つ知らなかった」

AP通信員の報道は、細部については誤りを犯している個所があった。しかし、シャム、つまりタイ国に関するかぎり、厳密に正確な事実を聞き出すなどということは非常な難事だ。その点、この通信員は、事件の核心はちゃんとつかんでいた。二十歳のアンダナ王は、確かに死んでいたのである——頭を銃弾で撃ち抜かれて。

これほど豪奢な現場で殺人が行なわれたことはかつてなかった。バロンピマン宮殿は、この世のものとは思えぬほど美しいシャム王宮の一角にあったのだ。

すんなりと痩せた青年王の遺体が横たわるダブルベッドをはさんで、冷房用の氷塊が両側に立ち、窓のそとには美しい宮殿の群れがひしめいていた。そそり立つ屋根は、釉を塗った瓦で葺かれ、微妙な線に縁どられた破風やレリーフの像があり、宮殿の棟や梁を飾る彫刻の竜の長い尾は、その鱗の一つ一つがガラスの破片で飾られ太陽の光を紫に、サフラン色に、あるいは緑やサファイヤの色をした虹に分解してみせていた。金色や、その他さまざまの色をした尖塔は、常に深味を失ったことのない真っ青な空にそそり立っていた。壁画の美しい僧房もあった。磁器のモザイクを張りつめた柱や小宮殿もあった。真珠を象嵌した巨大なドアがあり、神獣たちの彫刻もあった。全身が金色の巨人像が向き合っている通路



スイスでのアナンダ王と王母殿下

は、よこしまな心を持ったものがそこを通ればたちまち像がとびかかって殺すと信じられていた。だから、殺人者が、これまでだれ一人として巨人像のあいだを通り抜けたことがないことだけは確実だった。

この王宮の想像を絶する美しさの中でも、エメラルド仏寺院はぬきん出ていた。寺院の中にまつられたエメラルド仏は、全タイ人にとって希望と幸福の至上至高の象徴であり、最高の聖性をそなえた仏像だった。この至聖なるご本尊は、高さ一メートルに満たなかったが、高い壇の上にまつられ、足を組み、両手をひざに置き、目は永遠を見つめていた。タイ人がふつう祭る仏像のように痩せてはいなかったが、中国人ほどふとってもいなかった。アナンダが死んだ六月九日は、タイの夏にあたっていたので、エメラルド仏の宝石をちりばめた衣は、雨季や冬（といっても熱帯のだが）ほど分厚いものではなかったが、その薄い衣裳さえ金（かね）に換算できないほど高価なものだった。もちろん高価さという点で、はるかにまさるのは像そのもので、これは実はエメラルドではなくヒスイのかたまりであり、アレキサンダー大王がインドに残した彫工の手になるものであった。

エメラルド仏寺は、王宮の内部にあり、王の居室からほど遠くない距離にあるのだが、聖なる本尊には真っ白なライトが当てられ、あまりにも気高いこともあって、それほど王に身近かというわけではなかった。もっと身近かな仏像は、王の遺体から歩いて十歩ばかりのカーテンのかかった仏壇の中に安置してあった。一般のタイ人と同じように、アナンダも自分用の仏像を祭っていたのである。仏壇は、タイのあらゆる家庭におけると同様、二階にあった。タイでは目上の人や仏像の頭より高いところに自分の頭があってはならないことになっている。アナンダの寝室も二階にあった。仏壇は寝室の一角に大きい壁龕（へきがん）のようにつくりつけてあった。

子供のころからのしきたりに従って、王は前夜も就寝前に仏壇の前にぬかづき、自分の仏像を礼拝した。ロウソクをつけ、花を捧げ、それからタイ人が握手がわりにするあの優にやさしいあいさつ——合掌（がっしょう）を額の前まで上げて仏を拝んだ。もし合掌が腹の前で行われれば、それは目下の者のあいさつへの答礼にすぎないのだ。しかし、六月九日の朝には、アナンダの仏像も、すぐそばのエメラルド仏寺からタイ全土をみそなわす至高の仏も、アナンダのいのちを救うことはできなかった。アメリカ陸軍用45口径ピストルから発射された一発の銃弾は、何千分の一秒かのあいだに、あえなくアナンダの頭の中を突き抜けたのである。

一個の鉛のつぶ、何千分の一秒。だが、王の死は、現代のどんな殺人事件も比肩しえないほどのミステリーに包まれていた。今日なお、王の死は世界のこの一角を一瞬の沈黙に追込むほどの重みを持っている。彼の死をめぐって何人もの人が死刑囚として人生を終り、何人もが亡命先を求めて祖国をあとにした。二千三百万の人口を持つ国が蒙った王の死の影響は、今日なおはかり知れないものがある。復讐を叫ぶ声が、あるいは正義の行われることを訴える声が、完全に消えてしまうまでは、東南アジアの平和はおぼつかない。そして東南アジアの平和は、世界の平和にとって欠くべからざるものだ。

命題は極めて簡単である。アナンダ王を殺したのはだれか、だ。答えも、同様に簡単なものであるはずだ。だが、問いと答えのあいだには、複雑にして怪奇な空間が介在している。

複雑に入り組んだ謎の核心に迫る人は、スケールの大きい探偵であることが要求される。私は、全力を尽してタイを理解しようとした。独特の貴族制度と、素朴な魅力を持った農民と、その中間に位置する中国人とタイ人の混血中産階級からなるこの国、どこまでが希望でどこまでが諦めに属するかわからない理想主義と腐敗とが渾然一体となったこのタイという国を。私は、歴史を渉猟し、家系を調べ、プライバシーの深部をさぐり、政界のうずの中心をきわめるためにアジアのみならずヨーロッパ各地をとび回らねばならなかった。完全な記録、客観的な記録などというものは、一つもなかった。だが、そのすべてがアナンダの死と結びついていたので、すべてを調べ上げる必要があった。

私は、数えきれないほどの人と、はてしもなく長いインタビューをやらねばならなかった。取材対象の多くはひそかに手をまわして捜（さが）す以外に突きとめようがなかった。こころよく話そうと言ってくれる人は、ほとんど皆無だった。タイは警察国家だ。そのうえ王室への尊敬は崇敬の域に達している。人々は恐怖のあまり、またあるときにはおそれ多さのあまり、話すのをいやがった。真実を話すのは、なおさらだった。やっとのことに話し

てくれる人もいた。しかし、話を聞かせてもらうのと引換えに、私は彼らの名を伏せるよう約束するほかなかった。へたをすると、彼らの生命、自由、職業、あるいは社会的な地位などが危機に瀕するのである。

情報のやりとりに当って私と私の相手が経験した困難あるいは取引きのことを書けば、この本はもっと面白くなることだろう。だが、たとえ別段さしさわりのない人人の名を書くだけでも、事情をよく知っている人の目に触れればすべてがわかってしまい、多くの人を裏切ることになるだろう。われわれが求めているのは事実であって、私がそれをだれから、どんな手段によって獲得したかではないのだ。

ただ、以下に書くニュースソースぬきの話を読者が信用してくださるなら、私は、二つのことを保証することができる。一つは、どんな情報も、それが真実であることを完全にチェックするまでは、私は採用しなかったことである。だから、とくにバンコクの人々に覚えておいてもらいたいのだが、私が述べる一つの事実に関しては、必ず二人以上の証言者が存在するのだ。二つ目は、この事件への私のアプローチにいささかも偏見、先入主のないことである。理由は簡単だ。調査を始めたとき、私はタイに一人の知合いもなく一片の予備知識もなかった。また、いかなる政治的意見にもくみせず、データを全部集めるまでは絶対に結論を引出そうとしなかったのである。

不必要だと思う人がいるかもしれないが、ちょっと古いところを書いておきたい。現代タイは、過去の歴史の強い影響下にある。だから、アナンダの死も、過去、現在の双方に関係がある。その両方とも実に興味深いし、これ以後の話に重要な参考になるはずだ。

一説にはシャム族は外モンゴルから来たということである。荒々しい砂漠の中に生きる武骨な人々のイメージは、いま、はてしない山ふところをおおうチークの森の中から姿を現わす、小柄で優雅なタイ人のそれではない。やさしい緑色のシャム湾に臨む南タイの人々のイメージでもない。バンコクを中心に、中部タイ平野にひろがる豊沃な水田地帯で出会うタイ人とも違う。今日のバンコクでは、工場の煙突やテレビ塔や西洋かぶれの高層

ビルが、美しい仏教寺院のすぐそばに醜悪な姿をさらしている。それは、西洋人のごつごつした四肢や顔が、優美なタイ人のそれにまじってひどい違和感を感じさせるのに似ている。

それはともかく、タイ人は移民なのである。紀元前三千年には南シナにいた。それからシナ人に追われて南下してきたのだ。南下の途中、彼らは、強力な支配者の下で奴隷になっている民族にも出会ったが、彼ら自身はあくまでも自由人だった。一九三九年、初めてシャムという名を捨て公式にタイ国を名乗るようになったが、タイという名の語源にはさまざまな異説がある。

シャム族は、その歴史のほとんどを、少くとも外面的には自由人として過してきた。植民地主義の害毒にはほとんど侵されることなく、西洋でいえばイギリス人のような優越感を身につけるにいたった。事実、イギリス人とタイ人が対座しているときには、わざとらしいへり下りの態度ではどっちが上か判定しかねるほどだ。イギリス人とタイ人のこの共通性は、古い伝統が好きだという点でも似てはいるのだが、ただタイ人のほうは二十世紀の初頭まで民主主義という個人の自由の概念についてはなにも知らなかった。この点は、いまから私が書こうとする物語の中でも重要な役割を演ずるはずだ。

シャム族が移動した通路は、ヒマラヤの雪が熱帯東南アジアを流れる大河川の源流をつくり、インド洋から黄海に至る東アジアを鉗子のようにはさむいくつかの長大な川の上流地帯にあたっていた。また、今日ではビルマ、マレー、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムなどと呼ばれる地域も彼らの通路だった。マルコ・ポーロがシナからうどんを持って帰り、故国のスパゲティ製造業を創始しようとしていたころ、この亜大陸は「小インド」の名で呼ばれていた。彼は、この地方のスオウの木、金、ゾウなどについて書いたが「野蛮な土地なので、行く人もめったにいない」とつけ加えるのを忘れなかった。そのころ、シャム人は現在よりずっと北のほうにいて、もっと強大な民族に朝貢しながら、なんとか自由を保っていた。

他民族の中でももっとも強大だったのはクメール人で、廃虚になりはてた今日でも世界の七不思議に数えられているあの奇怪、壮麗なアンコールの都の建設を、シャム人たちは労働を捧げ、水を送ることによって助けた

のだ。その見かえりとして、シャム人は芸術と宗教をクメール人から習った。それは、彼らが十三世紀になって初めて自分たちの国「幸福の暁王国」（訳注　暹＝スコータイ国のこと）を建てたとき大いに参考になった。

この王国でもっとも有名な王は剛勇王ラマだろう。彼は、のちにアナンダが即位するタイ王朝の開祖といってもいい。ラマの王宮は、やがてクメール人にも引継がれるヒンズー信仰の強い影響下にあったが、シャム族の魂の奥深くには、これもインドからクメール経由で入ってきた南方仏教が根づいていた。宗教の併存は、ヒンズーと仏教だけにとどまらない。現代タイ人の住宅のそとには必ず鳩小屋のように小さなやしろが建っているが、これは彼らの祖先がシナから持ってきたアニミズムの名残りで、彼らの家をみそなわす精霊のおくつきである。さまざまな信仰をごっちゃまぜにすることに、タイ人はほとんど抵抗を感じない。ときには、その上に占星術をつけ加えたりする。宗教や芸術と同じく、彼らの文字も借りものだが、これも表現の点ではまったくタイ化されてしまっている。たとえば剛勇王ラマの時代のものとされている、もっとも古いタイの文学を引用してみよう。

よきかな「幸福の暁の国」は。魚は水に躍り、野には稲が稔る。王は民をいつくしみ給い、商い人はほしいままに商いにいそしむ。民草の顔の幸福の光に輝く。よきかな。

陰険な西洋人は、陰険な手をタイに伸ばした。タイ内部にも、これから私が述べようとするような陰惨な物語があった。しかし、昔ながらのタイ人の気質はやはり消えてしまったわけではない。

剛勇王ラマの子孫は死に絶えた。しかし彼が支配した部族は再び結束してより大きい王国をつくり、一三五〇年には、いまのバンコクから川を五十マイルほど遡った地に首都を定めた。首都は「聖なる町アユタヤ」と呼ばれた。アユタヤ王朝は、ほぼ現在のタイ全土にわたる地域を治下におさめた。彼らはクメール人に復讐をはたし、敗れたクメールは退いてカンボジアを名乗り、以後六百年のあいだアンコールをジャングルの中に放置することになる。

一五〇〇年ごろ、喜望峰をめぐったヴァスコ・ダ・ガマの大航海の時代の初期に、ポルトガル人が最初の西洋人としてやって来た。アユタヤは、そのころ百万の人口と数百の僧院を持つ大きな都だった。僧院の中には学校や図書館があり、巨大な仏像を安置した寺があった。仏像のうちのあるものは、高さが五十フィートもあり、重さ八百ポンドもの金で覆われていた。

現代人の生活感覚は、そのころにくらべても、ほとんど変っていない。彼らの生活を三つの同心円にたとえれば、王と政府はその中心の円にあり、個々の家族は外縁に位置している。まん中の円は僧院である。妊婦は寺へおまいりに行く。だから、タイ人は、胎内にいるときにまず寺の門をくぐるわけだ。学齢期になれば寺の中の学校へ行って勉強し、元服式には寺でひざまづいて頭のてっぺんの髪を一房切ってもらう。祭礼のときは、両親に連れられてお寺まいりをし、そこで将来の花嫁に出会い、僧に布施をして功徳を積む。結婚する前にはしばらくのあいだ寺に入り、僧として暮らす。僧籍に入ってしまうかどうかは彼の自由だ。その後も、ときには奉仕に、ときには将来を占ってもらったり知的な議論の相手を求めて寺を訪れる。やがて死ねば、彼の遺体は寺に送られ、そこで荼毗に付される。百姓も王も同じことだ。

タイの男の生活は、まるで織機の中をくぐるタイシルクの糸のように、お寺とは切っても切れない関係にある。今日でもこの伝統はりっぱに生きていて、自宅にテレビ受像機を持たないタイ人は、テレビを見たくなると僧院に出かけて行く。

こうした伝統の神聖視は、アナンダの弟にあたる現タイ王がジェット旅客機で海外へ出かけるような時代にも、やはり連綿として続いている。王の臣下たちは、彼らがケンブリッジやハーバードで受けた教育の成果を王に助言するときにでも、パリ製のドレス、ロンドン仕立ての背広にはお構いなしに、通路をいざりながら王に近づくのである。

バンコクの保守的な貴族の家などでは、目上の人の頭より頭を高くしてはいけないという配慮から、召使いたちは、やはりいざりながらカクテルを運んでくる。小づくりなタイ人がいとも優雅にそれをやるのだから、いやらしい印象は受けないが、その敬意は、礼儀にあまり注意を払わない西洋人をしばしば感動させてしまうのだ。

高度三万フィートの旅客機の中で展開される王への敬意は、タイの人々が国よりは王に対して忠誠を誓ったア

ユタヤ王朝いらいの伝統である。王は絶対者だった。何百万という人々の目に、彼は聖なるものと映（うつ）っていたからだ。聖なる血は、一滴も流してはならない。だから王族が叛乱を起して捕えられたときは、彼は絹の袋に入れられ、香り高いビャクダンの棒で殴り殺されたのだった。一夫多妻制だったから、王族の数は多かった。だが王妃になるのは常に一人で、ふつうはその実子が王位を継いだ。王からの血の遠近に従って複雑な爵位制度がつくられたが、貴族が平民より多くなったりしないよう、子は常に親より一つ低い爵位を与えられ、こうして現代にいたるまで五代以上続いた貴族はありえない仕組みになっている。

貴族と、ごく少数の顕職につく平民——そのずっと下のほうに農民がいる。戦争があって徴兵されるか、公共事業のために労務提供を命じられるときを除いて、農民は、農民ならだれでもが与えられる十エーカーの田を、だれにも干渉されずに耕しておればよかった。彼らは、現代でも、ほとんど自作農だ。土地はおおむね肥沃で、太陽が照らすままに稲はすくすくと育つ。飢餓がなく、人口がほどほどで、大地主による土地寡占の問題もなかったので、世界をゆり動かした革命的な政治思想もタイには無縁のものだった。照りつける太陽の下で、むりをして働かなくても十分に食っていける。商業を、彼らはシナからやって来た華僑にまかせた。華僑のエネルギーは国を豊かにし、シナ人の血はアナンダの家系を豊かにした。なかなか現地に同化しないシナ人だから、その点が少し問題になっただけである。

アユタヤにポルトガル人が来たのに続いて、オランダ人、イギリス人、フランス人が来始めた。だれもが歓迎され、貿易の便宜を与えられ、彼らの教会に対しては国王自らが寄付を与えた。寛容（トレランス）は仏教の体質である。人それぞれが、自分の信じる宗教によって救いを得ればそれでよいのだった。仏はまた温和であることを教えた。タイ式ボクシングの選手たちが蹴りあうときを除いて、私はタイ人よりも温和柔順な民族に出会ったことがない。ただ王国の上層階級のあいだでは、暴力は必ずしも珍しいものではなかった。王座をめぐってさまざまな陰謀が計画され、多くの人が殺されている。ある場合には、王は、息子たちがよからぬたくらみを起さないよう自分の王子を七人も殺してしまった。戦争も、もちろんあった。ポルトガル人が、キリスト教のほかに大砲鋳造の技術も伝えたのだ。しかし、隣国と戦うときの主要武器は、今日の戦車にも匹敵するゾウ群であった。タイが勝つ場合が多かったが、例外はビルマで、長いはげしい戦争のあいだ、優勢なのはいつもビルマだった。

戦争の発端は、ビルマ王が白いゾウを要求したことからだった。白というより実際はピンクに近いのだが、タイ人は昔から白ゾウを王の徳の象徴としてあがめてきた。現在は、白ゾウは王宮の大ゾウ舎を出て動物園で飼われているが、それを神聖視する伝統はいまでも生きていて、白い子ゾウは人間の女性の胸から乳を吸って成長するのだという。そのほかにも、白ゾウたちには好きざんまいの生活が許される。王は毎年サトウキビの初穂を手ずから与え、彼らには王族としての名や爵位が贈られる。ビルマ王がそんな白ゾウを要求したとき、ときのタイ王は七頭もの白ゾウを所有していた。七が幸福の数字であることは、いうまでもない。

タイ側がビルマ王の要求を拒否したため、三百年にもわたる断続的な戦争が始り、英仏戦争そのままの伝説的な英雄や悪者が戦争の中から生まれた。その戦いは、イギリスがビルマを占領し、クワイ川の西の三仏峠に国境線が引かれるまで続いた。しかし、それに先立つ一七六七年のある夜、ビルマ軍は首都アユタヤに乱入し、掠奪と破壊をほしいままにした。王も大量殺戮の巻きぞえになり、奴隷として連れ去られた人の数を除くと、百万の首都の生存者はわずか一万人にすぎなかった。

四世紀にわたるアユタヤ王朝には三十三人の王がいたが、その三分の一は殺されるか王位を簒（さん）奪しようとした敵を殺した。殺されたものの中には何人もの大臣や王の兄弟や、そして王の母も一人いた。だからアナンダが死んだとき、自分の生命に危険を感じた人もまた多かった。王殺しの前例は、ふんだんにあったからである。

ビルマ人に破壊されたとき、アユタヤは東洋における一大貿易拠点だった。アユタヤは、航海のしやすい大河に面していた。アニミズムを信仰するタイ人は、その川にチャオプラヤ、つまり公爵という名を与えて敬った。西洋人は、その川のことをがんこに「メナム」と呼んでいるのだが、それはタイ語で単に「川」という意味にすぎない。

王たちは、貿易水路としてのチャオプラヤを大切にし

てきた。ある王はコンスタンチン・ファウルコンというギリシャ人を重用した。彼は最初イギリスの東インド商会の水夫としてアユタヤに来たのだが、王に認められて叡知卿という称号をもらうまでに出世し、最後は西洋列強に侵略をそそのかした疑いをかけられ、一六八八年に八つ裂きの刑に処された。彼の死後は西洋諸国の侵略に備えて防塁が築かれた。それをとり壊したのはアナンダの曽祖父で、実は彼はその行為によって、のちにアナンダの身に起った悲劇の種を播くことになるのである。

　アナンダの家系、チャクリ王朝はアユタヤの廃虚から生まれた。タクシンという将軍がアユタヤを逃れ、軍隊を組織してビルマ人を追払い、新しい首都を定め、やがて自らを王と定めた。彼は古い廷臣とシナ人の妃とのあいだに生まれた息子に軍司令官の地位を与えた。数十年前までのタイでは、国の高い位についた人は、自分の名前を捨てて、その職名を名前にするのが例だった。タクシン王の軍司令官（チャクリ）も、こうしてチャクリを自分の名とした。

　あるとき、チャクリが軍を率いて遠征に出ているあいだに叛乱が勃発した。そのころタクシン王は気が狂い、空中を飛べるようにと断食して祈禱にふけっていたのだった。叛乱軍の指導者は、首都にはせ戻ってきたチャクリに王位を献上した。一七八二年四月六日、チャクリはその申出を嘉納した。チャクリ新王は、例のビャクダンの棒でタクシンを殴殺させたあと、再び叛乱が起らないように叛乱の指導者にも死を与えた。

　王位についたチャクリはラマ一世を名乗った。彼は、メナム・チャオプラヤの河口から二十マイルにある野生の桃の木（バンコク）が茂る村を首都に定め、その地を「神なる帝釈天の珠玉のおくつき」と名づけた。だが、西洋人は、ここでもそんな命名を無視し、新しい首都を単にバンコクと呼んだ。迷路のような運河の中から、やがて無数の寺や住宅が誕生した。だが町の中心は、今日もそうであるように、王宮だった。バンコクを訪れた人は、必ずその王宮を見たことがあるはずだ。寺院、宮殿、接見室、内庭、劇場、そして王の何人かの妻やその子たちが生活した禁裏などを備えた、文字どおり〝町の中の町〟である。

　禁裏は、タイの女が今日なお置かれている地位の一つの象徴である。パートナーとしての夫と妻の協力は、西洋で教育を受けた現代タイ女性がしきりに推進しようとしているものの一つだが、なかなかその成果は上がらない。それというのも、一般のタイ女の理想はもっとシンプルなところにあるからだ。美しく装い、たとえようもないほどのやさしさで夫を愛し、澄明な仏陀の叡知とほのぐらい神秘に包まれた星占いの中間にただよう不思議な世界に知的生活をまかせ、美しく黒いひとみが涙に濡れるときでもこの不可解な人の世に微笑を投げ、美しい宝石を蒐集し、男の子を甘やかし、娘を罰するときにはその指をむりに曲げてしなやかさをつけてやり、あかつきごろには托鉢に来る僧のために食べものを整え、夫の客が来たときには板の間の一隅につつましくすわって静かに語りかけられるのを待つ。それだけでいいのだ。

　つまり、女は月のようなものであり、男という太陽の光を反射することによってのみ輝く。だが、そんな月もひそかに潮の干満を左右する不思議な力を、ちゃんと備えているのである。

　この神秘な力は、だが、いつも別の力によって減殺される。タイの風習によれば、男は複数の妻を持つことが許されるからである。現代のタイ民法は一人の夫に一人の妻しか認めていないが、社会のほうは相変らず複数の妻、その子らをすんなり許容している。町の中に本邸、郊外に別荘を持ち、スポーツカーと堂々たるセダンを持つのもいい。だが、物質的な所有物は、持ってしまえばそれで終りだ。それにくらべて女は一人一人が未発見の喜びを与えてくれる。貧しい男にとっては、複数の妻は複数の収入源でもある。あるいは商売や儀礼的な理由から重婚が行われるときもある。たとえば、ラマ一世は二十九人の妻を持っていたが、そんな女たちの多くは王にとりいろうとした貴族の娘たちであり、王はただ断らずに贈与された女を受取っただけだったのである。

　妃たちは四十二人の子といっしょに召使いにかしづかれながら禁裏の中で生活し、生涯そこから出ることがなかった。禁裏は王を除いては男子禁制で、警官さえも女だった。

　もっともチャクリは、めったにこの後宮（ハレム）を訪れることがなかった。彼は、タイ国内各地を巡回し、法律を定め、仏典を編纂し、芸術を奨励し、行政機構の整備やバンコクを美しい首都に仕上げる仕事にかかりっきりだった。アナンダの弟である現タイ国王プミポンに至るま

で、チャクリ王朝歴代の王は、群を抜いて有能な人物ぞろいである。

　ラマ一世の即位式は、太古には火の玉だった地球がようやく冷え固ったとき香り高い蒸気が立上り、それが神々の宿りどころになったというヒンズー信仰にのっとって行われた。こうして地に下りたった神々は王となり、その主神があらゆる王の祖先になったのだ。この即位式は、式の日を待たずに死んだアナンダの場合を除き、新しい王の即位ごとに繰返された。今日なお、よほどのタイ知識人でさえ、国王の半神性を完全に否定することは不可能だ。王に対するこんな信仰のうらには、歴代の王たちの輝かしい業績、そして「生命の王」という尊称があずかって力あるようだ。

　ラマ一世統治の後期には、王への叛乱が試みられたことがあった。ラマ二世の即位後まもなくにも、故タクシン王の息子が父の亡霊に励まされて王を倒そうとした。こんな騒ぎは、きっとラマ二世が白ゾウを二頭しか持っていなかったことと関係があるのだろう。しかも、そのうち一頭は、前の持主が手離すのがいやさに尻尾を切取っていたので、〝まったき白ゾウ〟というわけではなかった。しかし、まもなく三頭が新しく捕えられ、おかげで国内も安定した。

　ラマ二世はしきりに法の制定に努力したが、彼が定めた民法にある協議離婚の規定はいまでも有効である。それによると、夫と妻の合意が得られないときは、妻の不貞は離婚の理由になるが、夫の不貞ではだめなのだ。

　寛容なことで知られていたラマ二世は、だが、阿片中毒を根絶するためにきびしい罰則を伴った麻薬取締り法を制定した。しかし、中毒者が発狂したりしたときなどには極刑が科せられることを知っていながら、タイ人の阿片吸飲は今日でもなお続いている。イギリスと同様に、タイもまた阿片の密輸出で稼いだが、北京が輸入をしぶったからといって戦争をしかけるようなあこぎなまねはしなかった。このころ、イギリスの領土拡張主義は最高潮に達し、おかげでビルマからの圧力は弱まったが、フランスのコーチシナ侵入によってタイは二大勢力のあいだの不安な均衡の上に立つことになった。西欧列強の勢力はファウルコンが築いた防塁にまで押寄せてきていた。ただラマ二世は、そんな現実を傲然と無視し、詩作に没頭していた。そして臣下のなかでもっとも美しい詩をつくる彼のライバルに、あえて「麗文卿」の称号を授けてやったりした。

　ラマ二世の七十三人の息子の中に、こうした孤立策に疑問を持ち、やがて対外障壁を取除く努力を始めるようになった天才的な王子がいた。これがアナンダの曾祖父にあたる、のちのモンクット王である。モンクットは、アンナ・レオノーエンの日記と、それに基いたミュージカル『王様と私』によって、タイ王のなかでもっとも有名な存在になった。

　父ラマ二世が死んだとき、モンクットは僧院に入っていた。第一王妃の息子だけに与えられる名「天の王子」たちのなかで最年長者だったが、ラマ三世となって父を継いだのは、彼より年かさで野心的な異母兄だった。モンクットは、そのまま僧院生活を静かに続けた。いたずらに蛮勇をふるうより思慮分別にたよるのがタイの知慧というものである。この知慧は、タイ人を生れながらの外交官にもしている。ぎりぎりにまで追いつめられてもタイ人は決して反撃に出ることがない。しかし、相手が退いた瞬間には目にもとまらぬ早わざで押し戻すのだ。

　タイの国民性は、まるでバネのように彼らの身中に秘蔵されていて、どんなに強く押しつけられても決して弾性の限界を超えることがない。

　ラマ三世は夜遅くまで職務に熱中したので起床がとても遅かった。だが、だれも王のからだに触ることはできない。そんなことをすれば死刑だ。王宮の中でももっともきびしいこの戒律は、アナンダが死んだときにも発揮されたわけだが、おかげでラマ三世の小姓は、王の耳のそばで一時間がかりで刻々の時刻を朗唱し、それでやっと王が目ざめるといった調子だった。

　ただ、目がさめさえすれば、ラマ三世の行動力はすさまじかった。長々と続く朝の勤行（ごんぎょう）も、彼の仕事を妨げはしなかった。王は僧たちが長い経文を読んでいるのを聞き流しながら、その場へ大臣を呼んで、さまざまな指示を下したのである。

　仏教は、その寛容にかけては比類ない宗教である。私は、現国王が長い海外旅行から帰ってきた日に、たまたまバンコクの有名な寺へ行ったことがある。その寺には、八十体もの実物大の僧の石像が、仏陀の口をもれる教えに永遠の傾聴を続けているのだが、私は、ちょうどそのそばに三、四人のほんものの僧がすわっているのを

見た。彼らは、お茶をすすり煙草を吸いながらトランジスタ・ラジオに向い、プミポン王帰国のニュース解説を聞いていた（彼らは毎日正午から翌朝の日があけるまで食事をとってはならないので、煙草とお茶は空腹をまぎらすためのものなのだ。タイにはふとった僧などというものは、一人も存在しない）。

私が訪れたお寺は涼しく、そして美しかった。そこにすわってラジオを聞くのは、なんと快適な生活だろう。仏教のつつましい教義に、私はあらためて尊敬を禁じえなかった。タイの寺に入るときには、西洋人も靴を脱がねばならない。いや、寺でなくても、ふつうの家でも、主人と美しいチーク材の床に敬意を表して、訪問客は必ず靴を脱ぐことになっている。

宣教師たちは、タイをキリスト教国に改宗させることができなかった。これも仏教の寛容と関係がある。タイ王は常に宣教師たちへの助力を惜しまなかったが、それでも一世紀半の弘布の努力のはてに、宣教師たちはかえってひとにぎりの改宗者を獲得しただけだった。だが、たった一度だけ、王の庇護が絶えたときがあった。

ラマ三世のとき、バンコクで伝染病がはやったときがあって、王は病魔退散のための放生会を布告した。王自身も率先して屠殺用の動物を買い、それを放してやった。タイ人は誕生日やそのほかの大切な記念の日には鳥屋から絞める寸前の鶏を買ったり、生きている魚を魚屋から買って川に放してやったりする。だが、何人かの宣教師が、放生のしきたりを迷信だとして攻撃したのだった。このことはチャクリ王朝の一つの伝統でもある、ものすごい激怒の機会をラマ三世に与える結果になった。結局、司教が平謝りに謝り、王が放すためのアヒルやガチョウを献上し、なんとか王の気嫌をとり結んだ。

やがてアメリカ人宣教師のなかでもっとも有名だったブラッドレー博士が天然痘予防のための種痘を導入し、その効用が現われ始めた。ラマ三世は、彼に命じてその手法をタイ人医師に伝授させた。こうして、西洋列強は、銃剣よりも注射針をかざして、やっとタイの排外主義のかべを破るのに成功したのだった。

もちろん、銃剣の先も、ごく近くまで迫っていた。ビルマやマレーがたどった運命、あるいは香港をイギリスに割譲しなければならなかった中国のことを考慮したラマ三世は、イギリスとのあいだに「相互信頼と誠意、公平の原則に立脚したイギリス、タイ両国間の友情と愛」うんぬんの条約を締結した。信頼、誠意のほうはちょっと疑問だが、少くとも友情と愛は、その後も長く持続した。数年後に同じような条約が「アメリカの代表エドウィン・ラバド閣下」とのあいだにも結ばれた。この代表とは、アンドリュー・ジャクソンの特使エドモンド・ロバーツの名を誤って発音したものだった。

ラマ三世の二十七年間の統治は、活気に満ちていた。貿易は進み、首都バンコクの美しさはいやまさり、川は浚渫され、運河が開かれた。そのほかにも、王は、秘密結社をつくっていたというかどで三千人のシナ人を殺し、タイに臣従していたラオス王が謀反を企てたといっては捕え、籠詰めにして町にさらした。だが、モンクットの静かな僧院生活には、こうしたあいだにも、さざ波一つ立たなかった。三十三歳のとき、彼はバンコク聖仏座寺の管長になり、美しい仏像を寺に迎えた。

モンクットは、また、英語を習い、タイ人で初めて英語を話し、書けるようになった。英語で書かれた彼の文章は、しばしばすばらしい文体だった。一つの発音の五声を使いわけることによって異った意味の言葉をつくる

タイ人にとって、英語はやさしいものではなかった。そのうえタイの単語は常に一音節で、彼らはそれを中国人の算盤の珠のようにつなぎ合わせて熟語をつくるのだ。労働者は「傭われた子」であり、親指は「てのひらの母」、電気は「天の火」、マッチは「火を打出す木」、川は「水の母」といったぐあいなのだ。名詞に複数がないから、それを表わす接尾語を使って「テーブル三脚」というふうに表現する（訳注　このような造語法は、以下のものを含めて、多くは日本語によく似ている）。

時制もタイ語に欠けているものの一つだ。「きのう私はバンコクへ行く」といっても通用する。性もないから兄弟姉妹はみな「はらから」でいい。だからタイ人が英語で「兄を紹介します」と言うので会ってみたら妹だったりすることがある。また「そのうえことばとことばのあいだにすぺえすがないからひつようなときはことばのあいだをひろくあけてかく」のもタイ語の特色である。

王様に向って話すとき、あるいは単に王のことを話すときには、ふだんとはまったく異る言葉を使う。王の四肢は、すべて臣下のそれとは違った名称を持っている。王が食べ、眠り、歩く言葉もすべて特殊なものだ（訳注

これは非常にていねいな敬語のことを指している)。そのほかにもデリケートな言葉、ブタのように〝汚れた動物〟についての用語はむずかしい。そんなものすべてにもまして、西洋人はタイ語の第一歩において、どうしようもないほどの名称の混乱に直面して途方にくれる。「ジャパン」が実は「日本」であるように、西洋人のシャムはタイだし、首都バンコクはクルンテープ、そこを流れる川はメナムでなくてチャオプラヤである。タイ人の名は、絶対にローマ字の綴りどおりには発音しない。タイ人は、実に不思議の国の住民である。

　モンクットはラテン語も習い、聖書をラテン語で読んだ。しかし西洋文明への彼の目をひらいたのは、やはり英語だった。ラマ三世が死に、モンクットがついに僧籍を捨てて王位についたとき、王のこの知識は非常に重要な意味を持つことになった。一八五五年にイギリスの使節が彼に会ったとき、王は宝石をちりばめた王冠をかぶって月光の射す玉座にすわっていた。しかし、その同じモンクット王が、イギリス使節に葉巻をすすめ、やおら立って彼を書斎へ案内すると、そこにはさまざまな時計、晴雨計、その他の機械類がいっぱい飾ってあった。使節がビクトリア女王からの贈りものとして持っていった汽車の模型は、直ちに王のコレクションの中に加えられた。それは、古いものを捨て去り、渾（こん）身の力をふるって十九世紀の世界に仲間入りしようとする王の熱意の象徴だった。モンクット王は、自分が先頭に立って国を引張っていく決意をしていたのだった。

　それまでは、臣下たちは王を直視するのを禁じられていた。そんなことをしたら、衛士に投げ矢を投げつけられて失明するかもしれなかった。モンクットはこんなしきたりを廃止し、これからは王を見てもよいという勅令を出した。また、そのころまでは、男も女も、からだの下半身に布をまとっているだけだった。これに対して、王は、ちゃんと服を着るようにと勅令を発した。「皮膚にアザがついていたり、汗をかいているのは、いずれも見苦しいものである」というのが、その理由だった。こうしてタイを近代化するために五百以上の勅令が公布された。その一つ一つが、数えきれないほど多い王の称号の列挙と「獅子（しし）の如くとどろかせ給える王の御声（みこえ）によりて」という文章で始っていた。勅令は、信仰の自由から「運河に動物の死骸を捨てるはしたなき所業」の禁止ま

で、広い範囲にわたっていた。

　国父としてバンコクの美化につとめる一方で、王は運河以外の交通路としての道路をつくった最初の人でもあった。彼は工事を監督するために、よく二頭立ての馬車に乗ってその道路を走らせた。外輪つきの御座船でシャム湾に出るときもあったが、単なる舟遊びだけではなく、イギリス人の船長を招いてつくらせた蒸気船の商船隊を観閲する目的もあった。

　モンクットは、外人宣教師に医学を教え、病院を建てるよう奨励した。ブラッドレー博士に印刷工場をつくらせ、また造幣局を建てて、それまでの銀の粒にかわる貨幣を鋳造させた。イギリスの陸軍将校を招いて、英国軍の軍服を着た陸軍を組織させた（王の弟の一人は砲術に非常な関心を示し、王宮の庭師やコックにまで大砲の操作を教えた）。しかし、モンクットの近代化の中で、なによりも重要な事業は、欧米のアドバイザーから政府の改組とその運営のしかたを学んだことだろう。王を動かしたのは、単なる近代化の情熱だけではなかった。彼は、列強に〝介入〟の口実を与えないよう全力をつくした。そのためには、シャムの主権を損わない範囲で不平等条約も受入れたし、貿易も自由化した。彼はまた米の増産を奨励し、それ以後、米はいまだにタイの主要輸出品の地位を堅持している。

　国の指導者になるのは主として王族だったから、彼は自分の子には西洋人の家庭教師をつけ、世界の進歩開化に遅れまいとした。モンクットは三十五人の妻に八十二人の子を産ませた。これはタイでも記録破りだが、王の経歴を考えると実に驚くべきことである。というのは、二十歳で僧籍に入ったとき、彼には二人の子がいただけだったのである。四十七歳で寺を出るまで、彼は戒律を守って女には一指も触れなかった。そして六十四歳で死んだのだ。

　モンクットの子のなかでもっとも有名なのはチュラロンコンだろう。彼は父を継いで即位し、やがてアナンダの祖父になる。モンクットがイギリスから女家庭教師アンナ・レオノーエンを招いたのは、チュラロンコンたちの教育のためだった。だが、彼女の誤った観察は、ハリウッドのカメラを通して、いやがうえにもタイ王宮の事実をゆがめることになった。もっとも彼女の記録には一半の真理もなくはない。確かに怒りっぽかったが、モン

クットには実にやさしい一面があった。そのうえ燃えるような知的好奇心は、彼を歴代タイ国王のだれよりも魅力ある王にしたのであった。

モンクットは、白ゾウについて本を一冊書いている。聖なる白ゾウの美点を列挙しているところで、彼は、美しい寝息のことを指摘している——もっとも「女といっしょで好き好きだが」とことわってはいるのだが。しかし、彼が情熱を注いだのは、なんといっても自然科学、とくに天文学だった。遠出をするたびに彼は太陽を観測して自分の居場所の緯度、経度を割出した。一八六八年には皆既日食の時刻を正確に算定し、日食は巨大な蛇が太陽を隠すためだと思っていたタイ人の迷信を打破った。バンコク郊外で日食を観測するため、彼はわざわざ西洋から科学者を招きさえした。マラリヤにかかったのはこの観察行のときである。釈迦と同じように彼も自分の誕生日に死んだ。死の床で、これも釈迦と同様に彼は右向きに寝返り、いつものように教えさとす口調でつぶやいた——「いいか、これが正しい死にかたなのだぞ」

こうしてチュラロンコンは王位につき、シャムの手をとって二十世紀へエスコートする役割をはたすことになる。彼のその姿勢は、のちに彼が外遊したときに、西洋の淑女たちの腕をとってパーティーにエスコートしたのと同じ優雅な騎士のそれだった。彼は、広く外遊した最初のタイ王でもある。父モンクットは、なかば過去の影の中に立っていたが、チュラロンコンはまるまるとした腹を突出し、自信に満ちた歩調で現代の日なたの中へ歩み入ってきたのである。

彼は父に習って財政にはイギリス人を、外交にはアメリカ人を、法律にはフランス人の顧問を起用した。政府の他の部門にはデンマーク人、ドイツ人、ほかに一人の著名なベルギー人を招いてこれに当てた。政府に命じて初等教育から高等教育までを整備させもした。警察の機構、郵便、電信、鉄道もつくった。病院を建て、精神病院を置き、医学校と衛生をつかさどる行政府を創設した。法律学校、刑法、近代的な司法省と監獄もつくった。土地所有登記法も制定したが、土地の多くは王自身が買上げ、これがのちのちまで王家の財政を利することになった。つまり、アラジンのランプを一こすりでもしたように、みるみるうちに二十世紀国家シャムが出現したのだ。

アラジンのランプ——王の愛読書は『アラビヤン・ナイツ』だったのだから、それは偶然ではなかった。チュラロンコンは、まるで千一夜を語り明かして倦ませなかった語り手にも似ていた。たとえば彼がピクニックに出かけるときの様子を想像してみるがいい。聖の聖なる王は、二千、三千、いや、ときには四千人の従者を引連れ、緋の式服を着た漕手が操る無数の竜頭船の列をつくって川を遡っていく。途中で彼が立寄る竹葺きの行宮は、わずか一夜の仮りの宿というのに、その屋根の上は色とりどりのはなびらを縫い合わせた花の幕で覆われていたのだ。

ときには、彼は王子たちを集め、彼らのまん中にすわって自ら学問を教えた。七十七人の王子のうちごく限られたエリートだけが、父から直接に教わる特権を授るのである。あるいは、この「生命の王」は、午前四時まで執務するため、起床は正午ごろになるので、政府の役人はすべて王の生活に合せなければならなかった。休憩時間には、彼は黄色く塗ったオープンカーに乗ってバンコク市内を走らせた。シナ人やインド人のコックに調理させた外国料理を食べることもあった。食通だった彼は、西洋料理の本を書いたこともあり、そのなかにはサンドイッチだけで十四種類のバラエティが収録されている。もっとも、この食道楽は、糖尿病その他の原因となって、王の晩年に禍根を残した。

一九一〇年、チュラロンコンは五十七歳の働きざかりで死んだ。しかし、父モンクットを継いだときはまだティーンエージャーだったので、彼の治世は四十二年間にも及んだ。はじめのうち、彼には摂政がいたのだが、それは奇しくもアユタヤ王朝時代に王を殺した摂政と同じ名前だった。こんどの摂政は、さいわい王殺しはしなかったが、もっと悪質な弊害を残した。つまり有能な王族が政府諸機関の上層部を独占したところまではよかったのだが、彼らは忙しい王から大きい権限を与えられ、かえって自分たちを行政のネックにしてしまったのだ。

王が創設した教育制度を卒業したエリートたちは、職と地位と富を求めてこんな連中のまわりに集り、その数は年とともにふくれ上った。こうした実力者貴族の家は、しだいに小型王宮のような役目をはたすようになり、おのがじし利益をねらう役人たちの阿諛追従で満ち満ちた。二十世紀タイ政界の葛藤は、まさにここから生

まれたのである。

アナンダの悲劇のもう一つの根になったのは、チュラロンコンの異常な性生活だった。王には九十二人の妻がいたのだが、彼とベッドをともにした妻の数は多くなかった。禁裏の中には「イエロー・ルーム」と呼ばれる部屋があって、そこでは王のお気に入りになれない女たちが、夜ごと王が部屋の前を通るたびに聞き耳を立てていたのだが、王のほうは立止って中をのぞこうともしなかった。

「イエロー・ルーム」で待つ必要がないのは三人だけだった。この三人は姉妹で、実はチュラロンコンの父の愛妾の娘だったから、王にとっては異母妹というわけである。王室における近親相姦は珍しい話ではない。しかし、のちに起った事件から思うと、チュラロンコンのこの選択は決してチャクリの血を強める道ではなかった。また、これは科学的に立証できるわけではないが、同じくらい重要なのは三人姉妹の人柄であった。三人がもっと違った性格の持主であれば、アナンダは死ぬ必要はなかったことだろう。しかし、彼女たちがいなければ、アナンダの誕生もありえなかったのだ。

三人姉妹のうち一人が二十一歳のとき、舟遊びの最中に乗っていた船が転覆して川に落ちた。しかし、貴人のからだには絶対に触れてはならないという戒律は守られ、従者たちは妃とその二人の子が溺れ死ぬのを、ただ手をつかねて見守っていた。心痛のチュラロンコンは、生残った二人に、これまでに倍した愛を注いだ。二人とも王妃の位にまで上ったが、なかでも姉の方には「至高の王妃」なる尊称が与えられ、やがて国政に絶大な権力をふるい始める。彼女はチュラロンコンの不在中、摂政に任命されたが、外遊中の夫に宛てて一時間ごとの気分、なにを食べなにを飲んだか、そして便の色まで報告した。小柄な彼女のからだの上に、王は、爵位や宝石を雨あられと注いだ。十万ポンドの真珠の首飾り、年に九万ポンドの利息を生む財産は、そのほんの一部にすぎない。

チャクリ王朝の伝統に従って、彼女も王宮内に女子学校を開き、娘たちを集めて家事や行儀作法を教えた。王宮のそとでも、女子学校を建てたり寄付をしたり、またタイの若い娘たちの外国留学には奨学金を出してやった。タイ赤十字を創設したのも彼女で、何人ものタイ女性が看護婦の訓練を受けるためイギリスへ渡った。助産婦の養成も行われた。それまでタイ女性の出産時死亡率は異常なほど高かった。出産の時刻が近づくと、産婦は消毒もしていない床の上にすわらされ、生まれたばかりの子は焚火のそばに寝させるのが習慣だったからである。

夫チュラロンコンの死後、彼女には「万寿妃」という尊称が与えられ、王家一門を牛耳る実力者になった。彼女は夫からは朝寝坊という困った悪習を引継ぎ（朝食は十時半だった——午後の）、また自動車気違いでもあった。毎年、ロンドンのモーターショーのカタログの中から彼女は三、四台をピックアップして買い、その新車を親戚への贈りものにした。

妹のサワン妃にも、チュラロンコンは、ほぼ同じ贅のかぎりを尽させた。タイ人の例外ではなく彼女も賭博狂（五十七歳のときに、二十四時間ぶっ通しでポーカーをやった）だったが、それでも国家への奉仕という点では、彼女は姉にならった。このことは、われわれの物語にも重大な関係がある。彼女もまた、姉と同様に、娘たちを集めて教育し、留学を奨励した。やがて、そのうちの一人、しかも思いもかけない娘が、彼女の息子と結婚することになる。そして、もっともっと思いがけないことには、なんという天の配剤によってか、その娘が生んだ息子二人が、二人とも王になるのだ。

二人の王——その一人が、この物語の主人公アナンダであり、一人は彼の弟、兄の死後に王位についた現タイ国王プミポンである。

なぜ、こんな偶然が起ったか。その疑問は、われわれをミステリーと悲劇へと導いていく。一人の悲劇ではない。多数の人がそのために殺される、壮大な悲劇だ。

悲劇が多くの人々を襲ったと同じように、噂と疑惑がアナンダの弟とその母、そして現代タイの二人の偉大な指導者をはじめとした人々を押し包んでいる。その内容は、私が書き進むにつれて、やがて明らかにされるだろう。アナンダを殺したのはだれか。それは暗殺だったのか、それとも事故か自殺か。憶測は、今日もなお晴れることがない。たしかに王殺し犯人の裁判は行われた。しかし、それは世にも不思議な裁判であった。裁判の進行には、今日なお疑問の点が多い。

この本の目的は、そうした疑惑を晴らし、後世のために、この一件に公正な判決を与えることである。

2部　アナンダの生と死

1

アナンダの生と死にとって決定的な事件の多くは、彼の祖国を遠く離れた土地で起った。そもそも彼が一九二五年に生れたのがドイツのハイデルベルグでだった。そして、そのころ、ハイデルベルグからほど近いパリに住んでいた若いシャム人の何人かが、やがてアナンダの生涯とは切っても切れない運命の糸につむがれていくのだ。

そのころは、だれ一人そんなことを予想もしなかった。若者たちは、大学院奨学金を得てパリに遊学中の書生たちにすぎなかった。背広を着て町に出ると、振り返る人さえいなかった。一九二〇年代のパリには、東洋からの留学生がうようよしていた。それに狂乱と放縦のあの時代、パリっ子のだれが他人のことに構ってなどいただろうか。

シャム人天性の陽気さは、時代の風潮にもマッチしていた。ただ、陽気さの底で、祖国の将来を憂える学生たちの心には、不安と救国の情がうず巻いていた。その一人、私の物語に最後までつき合ってもらわねばならないのはプリディ・パノムヨンである。

小ぶとりのプリディは、当時、髪を短く刈りそろえていた。目に特徴のあるシャム人の中でも、とりわけ目がきらきら光っている以外には、とりたてて目立つ男ではなかった。常に微笑をたたえていて、よく笑いもした。だが、どこか底の知れない深味があった。仮面を着た心なのだ。だから、彼の性格の中にある他人への思いやりや忍耐心は、なんとなく場違いな感じを与えた。

プリディは、バンコクの北の古都アユタヤの近くの農家に生れた。シナ人の血が少しまじっているという説もある。国王から庶民まで、国民の多くがシナ人と混血しているタイのことだから、これは異とするにたりない。

生れてまもなく、プリディはもうちょっとで死ぬところだった。誕生は一九〇〇年五月十一日だが、母子ともに危険な状態に陥り、集った人々は母親を救うのに全力をつくした。だれかが、ふとしたはずみに、赤ん坊が息をしているのに気づいたのだ。

家の近くの公立小学校を出たあと、彼はバンコクの学校に進んだ。いまなら、彼の名を知らぬ人のないバンコクである。内気なプリディ少年は、高級官吏をしていた親戚に引き取られ、お寺が経営する学校に入った。フットボールが好きだったが、ずば抜けて頭がよかったため、勉強をやればやるほど面白くなるタイプだった。やがて法律学校に入学した。創立から日は浅いが名門だった。

前章で、シャムの近代化が聡明でエネルギッシュなチュラロンコン王によって始められたことを書いた。この王は、七十七人の子供をつくり、また無数の改革を断行した。その子供たちはシャムを支配したが、改革は近代化に役立った。しかし、王の子孫と改革の成果とは、相対立することを宿命づけられていた。

近代化のおかげで教育の機会を与えられるようになった平民たちは、いざ政府官庁に就職してみると、下っぱの職にしかつけず、王族に頭を押えつけられてどうにもならないことがわかったのである。皮肉なことに、新しく生れたインテリ階級の不満に方向を与えたのは一人の王子だった。

司法省立の法律学校で、その王子は、ときには小説について、ときには民主主義という極めて魅力的だが危険きわまる思想について講演した。この思想は、たちまち国内各地に飛び火した。一人の騎兵将校が飲み屋で会った客とけんかし、将校は処罰されたが、一方の男がチュラロンコンの庇護を受けているという理由だけで処分されなかったとき、将校の同僚たちは抜刀して町に押し出し、もう少しで暴動になるところだった。

また、これまでは神聖不可侵だった絶対王制に向って挑戦するという前例のない動きも出始めた。チュラロンコン王に対して憲法制定を求める請願が出されたのだ。国王は「時期尚早」として受けつけなかったが、あるいはウエリントンの有名な言葉「わが求むるところは、今日の特権を失わぬことにこそ」が、実は拒否のほんとうの理由だったのかもしれない。

チュラロンコンが死ぬと、皇太子が王位を継いだ。英国のサンドハーストとオックスフォードで教育を受けた新王は、まるまるふとって、いい声の持ち主だったが、もっぱら宦官の世界に耽溺（たんでき）し、宦官を通じて政府を動した。第一次大戦には、シャム軍のごく一部がフランスへ送られたが、すでに戦争のヤマは過ぎたときで、たいし

た死傷者も出さなかった。だが、この海外派兵は、国民の愛国心を鼓舞するのには役立ち、それは戦後にまで尾を引いて、国王の専制に対する不満になった。

プリディがシャムの自由主義の牙城である法律学校へ通ったのは、こんな時期だった。彼は自由主義の香を深く吸い込んだ。法律を学ぶだけでは十分ではない。法律は自由な人々、すべての国民によって自由な同意を得たもの、民主主義によるものでなければ価値はない。彼の理性は、彼がその中で生れ育った平民への共感と結びついて、ますます民主主義への信念を深めた。その信念は、法律学校を卒業し、奨学金を得てパリへ留学するにつれて、さらに強固になっていった。

プリディはじめパリのシャム留学生は、あちこちの学生センターに下宿していたが、彼らには共通の監視役がいた。耳がほとんど聞えず、がんこで怒りっぽい、つまりどうにもしようのない大使だった。トロカデロの近くの小さい大使館にランチに招かれたことのある人の記憶によると、大使の息子のジョークに一座の人々がみんな笑ったときも大使一人はにこりともせず、息子にジョークを繰り返すように命じたという。彼が三度も四度も同じ話を繰返して座が白けてしまったが、大使はさらに大声を張り上げて「ひとこともわからん。すぐ紙に書け」とどなったということだ。

大使は、留学中のシャムのエリートたちに対して絶対的な権力をふるっていたが、はじめのうちはプリディはなんの関係もなかった。彼は法律学校と科学政治学院に登録し、本に埋もれ、学問の分野をひろげるのに熱中していた。もちろん、友人と連れだって、ダンスや玉突きやムーランルージュ通いなどのパリ生活もエンジョイしていた。だが、夜の享楽よりももっと彼が没頭したのはカルチェラタンのカフェでの長く活発な政治談議や政治集会への参加などだった。プリディは、パリの知的社会の底に流れる過激主義にみるみる染っていった。彼の新鮮な知性は、やがて彼をシャム人グループの指導的な立場にまで押し上げた。同国人たちは彼の意見に耳を傾け、彼を「祖師」と呼ぶようになった。まもなく、シャムじゅうが彼をそう呼ぶことになるのだ。

パリ留学生たちは、ときどき、横暴な大使とはまったく違った種類の若い王子に会うことがあった。彼らに対してとても親切で、そのうえ理想家であったその王子は、チャクリ家の中でも異分子だった。国王の異母弟で、パリ留学生の庇護者であった王子には、一九二五年の秋、ハイデルベルグで長男アナンダが生れたということだった。そのアナンダとプリディの運命は、やがて悲劇的な出会いをするのだが、当時のプリディは、そんなこと知るよしもなかった。

アナンダの誕生は、そのころ、つぎの王位継承者がだれかという重要な問題には、ほとんど関係がありそうになかった。宦官びいきの王さまは、生涯の最後のエネルギーをふりしぼって結婚はしてみたが、王女を一人もうけただけで国王はまもなく世を去ってしまった。皇太子がいないので、王位は軍人だった実弟のプラチャーディポクへ行った。

パリ留学生にとっては、これは歓迎すべきニュースだった。新王は、チャクリ家歴代の中では、もっともまともな人物だったし、王家始っていらいはじめて王妃一人だけを妻としたのである。自由主義的な思想を持ち、名誉を重んじはするが個人的な野望のなかったプラチャーディポクはウールイッチで教育を受けたとおり軍人らしい生活で身を律しようとしていた。彼の即位は国王による専制に終止符を打ったかのように見えた。プラチャーディポク自身もそう信じていた。

しかし、深まる国際的不況は、たちまち彼の治政をめちゃめちゃにしてしまった。イギリスが金本位制を停止したため、ポンド地域へのシャム米輸出はストップした。プラチャーディポクは、政治を王族たちにまかせていた。有能な王子たちだったが、その経済政策はやはり不評を買った。国王は優秀な平民を採用して政府のキー・ポストを与えたかったのだが、有力な王族が反対し、そのため民衆の不満は絶望に変った。

祖国のこんな状況を知らせる便りがパリにいるプリディの心にどう響いたか——それは、シャムにとって、当時幼かったアナンダにとって、そしてプリディ自身にとって、それぞれの運命にやがて甚大な影響を及ぼすことになる。だが、当時のプリディは、モンマルトルの丘に登ってはひとり気をはき、ブルバール・サン・ジェルマンのカフェで勝手なオダを上げている貧乏な一留学生にすぎなかった。帽子をかぶり、ガロワを喫い、祖国を遠く離れているおかげで、彼の精神までシャムから遊離してしまったようにさえ見えた。

しかし、パリにいても、シャムが意外に身近かに感じられる瞬間はあった。たとえば、アレキサンドル三世橋の上に立って、銅像の背景にひろがる夕焼けを眺めていると、心は、廃兵院のドームからほっそりと高いエッフェル塔にかけてたなびく金色の雲を通して、バンコクの美しい夕景の記憶へと飛ぶのだった。プリディの心も、決してシャムを忘れてはいなかった。シャムの人々のために尽そう、自分がシャムを救うことができるかもしれない。彼はそう考え始めていた。

祖師プリディは、友人を集めて、国を救う道を話して聞かせた。王制は、イギリス式の立憲君主制でなければならない。経済の立直しのためには綿密な計画経済が必要だ……。彼の世代の若者がおしなべてそうであったように、プリディもまた社会主義に夢を託していた。

もとより世界には認められず、その一部をなすシャム国民からも注目を受ける存在ではなかったが、プリディの影響力には芽生えの強さがあった。旧勢力は、プリディを警戒し始めていた。

ヨーロッパにいるシャム学生たちは、プリディを代表者に選挙した。金銭上の相談も、女とのトラブルも、故郷の両親との対立も、すべてプリディのもとに持ちこまれた。彼は敢然として、彼の同僚たちと彼らをしいたげるもののあいだに割って入った。あるときには、学生たちと学生を監督する大使館のトラブルの調停にも当った。例のツンボの大使は、プリディの出すぎた行為を怒った。過激な思想に首を突っ込んでいるらしいといううわさも、彼を怒らせるもとになった。そしてその怒りはついに爆発した。

プリディはじめ数人が、ロンドンで開かれるシャム学生の集会に招かれたことがあった。大使は、一言のもとにプリディの渡航を禁止したのである。険悪な空気になった。大使は、国王宛てに手紙を書いて、パリ留学生の中にボルシェビキがいること、プリディがその政治委員であることを報告した。学生たちも対抗して丁重な直訴状を出した。大使は公金を費消し、よその夫人に手をつけ、国際聯盟ではシャムの名に泥を塗るような失敗をしている、という文面だった。

王族の罪をあばくなどという行為は、当時のシャムでは死に値いする大罪だった。しかし、公正なプラチャーディポク王は公平な調査を命じ、ボルシェビキだと告発された学生たちに対しては、学業により精励するようにとのごさたがあっただけだった。

失望した大使に追打ちをかけるように、プリディは優等の成績で留学を終了した。怒った大使は、帰国する彼に、労働服を着て船の三等で帰るように命じた。対抗する留学生たちは、金を出しあってプリディに一等の切符を買い、ちゃんとした服を与えた。それだけではない。彼らはプリディを助けて祖国の民主化のために働くことを誓い合ったのである。

留学生たちは前後してシャムに帰った。多くは官庁に職を得、それぞれに結婚して、やがて子ができた。留学時代の誓いから六年が経過したが、団結の誓約は、日々の生活の中に忘れられてしまったかに見えた。プリディ自身も、はじめてバンコクに出てきたときに止宿した官吏の家の娘をもらった。就職した司法省で、彼はしだいに昇進し、省立の法律学校に講師として迎えられた。

学校へはタイの若いインテリたちが集り、法律の講義にことよせてプリディが説く民主主義の原理に聞き入った。政府の首脳たちは、そんな自由主義の芽ばえは単に学問的な遊びだろうとたかをくくって、見て見ぬふりをしていた。シャムの経済を破産寸前にまで追いつめている大恐慌に対処するだけでも手いっぱいだったからである。不況はいたるところに失業者をあふれさせ、陸軍などでも将校の大量退役を断行した。こうして、一方には改革のための理論を持った文民の集団ができ、一方には行動にはやる軍人の集団ができた。この二つが融合されれば、革命の頭脳と手足はそろったことになる。

二つのグループの連結をやってのけたのは、ピブン・ソンクラムという若い砲兵将校だった。

のちに元帥にまでなったピブンが生れたとき、両親は「ヘンテコな」という意味のパレクというニックネームで彼を呼ぶことにした。両耳を結ぶ線よりも上に目があったからヘンテコだったのである。生れは一八九八年七月十四日で、父親はバンコク郊外の果樹園主だった。幼いときは泣き虫で、よく病気もした。そとへ出すと運河に落ちてはいけないと思った両親は、早くから読書を勧めた。エネルギッシュで人好きのする性格は、年をとってからそなわったものだった。人好きがしたというのは、彼に関して忘れてはならない特徴である。士官学校

を出て、中尉に任官したときに、彼はライアット（繊細なという意味）という娘に出会った。それまでは内気な青年で、彼がハンサムなことに魅かれて近づいてくる娘たちを避けていたのだが、ライアットのときは急に積極的になり、思いきって彼女に接近するようになった。はじめのうち、わずか十三歳だったライアットは逃げまわっていたが、ピブンは恋の歌をつくって言い寄り、二年後にはついに希望を達して彼女を妻に迎えた。このロマンスは、ピブンのようなシャム史上の傑物には、あるいは不似合いかもしれない。しかし、タイ・シルクのような人ざわり、甘い説得力、そして求めるものは必ず手に入れるねばり強さを兼ねそなえた人物だったからこそ、以下の物語にもしばしば登場するような歴史的な役割りをはたすことができたのだった。

士官学校を出て任官したピブンは、パリ郊外フォンテンブローの砲術学校の奨学金を獲得した。自分の誕生日がフランス革命の日と同じであることを知ったのは、一九二四年に渡仏してのちのことである。迷信深いシャム人は、偶然の一致にも必ず神　な意義を見つける。しかし、当時のピブンには、とりたてて革命の申し子のような特徴もなく、彼は二〇年代のパリ留学生の例に洩れずプリディが口にする高遠な理想に傾聴し、帰国のあかつきには祖国民主化のために働くという誓約に参加したのだった。

帰国して昇進し、ピブンは少佐になった。王族の専制に幻滅した将校たちを知ったのはそのころである。連中の鬱積した不満に、はっきりしたイデオロギーと改革の方途を示し、プリディが理想とした方向に導いたのはピブンだった。

プリディが書いた憲法草案に盛りこまれた「民主主義」という言葉は、魔法のような響きを持っていた。プリディの経済政策は、どうせわからない経済のことだから、だれもたいした関心を払わなかった。彼ら将校たちは、人民党と呼ばれる文民の同志たちと手をつないだ。約二百人の人民党の中には「革命推進団」という五十七人の党内秘密組織があり、その指導者格であった四人は「四匹のトラ」と呼ばれた。チャクリ王朝をくつがえそうと隠密のうちにことを進めていたのは、このグループである。

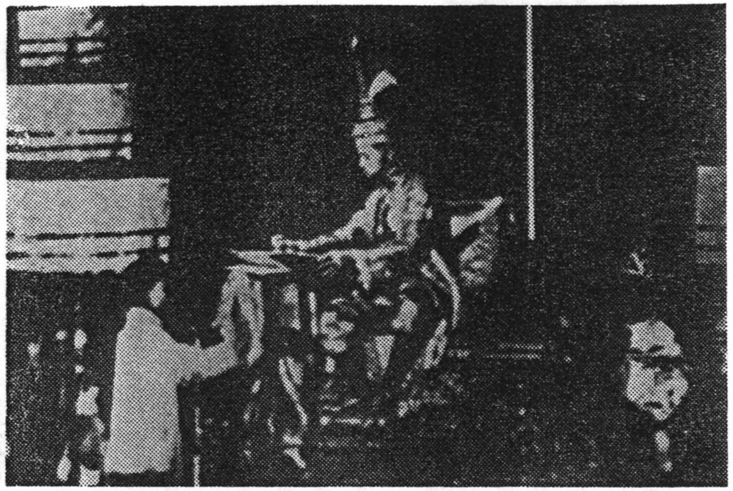
彼らは知らなかったが、同じころ、チャクリ家の中にも政治の民主化を熱心に考えていた人が一人いた。ほかならぬプラチャーディポク王その人である。「私は軍人だ。どうして金本位制のことがわかるだろうか」と、王は、日ごろから自分が置かれた地位に不満だったが、彼は、ロシアのツアーや清朝の皇帝たちがたどった運命をも熟知し、国民に対して圧政を施している政府にもっとよく人々の声を反映させる方法を模索していた。王族によって運営されている政府に向って、憲法を制定するよう要請もした。政府は、アメリカ人顧問の意見をいれて、これを時期尚早と突っぱねた。そこでプラチャーディポクは、政府が憲法をしりぞけるなら自分の退位で対抗することに決心し、その実行を具体的に考えるため、海辺の離宮、無憂園へ小旅行に出かけた。

旅行中のある朝のことだった。国王は、ゴルフに興じていた。これが、シャム現代史の中でもっとも記憶されるべき一九三二年六月二十四日だったのである。

一人の王子が、真っ青な顔をして王のところまで走って来、革命勃発のニュースを伝えた。やがて詳報がつぎつぎに届き始めた。ここでは、その要点だけを書いおくことにしよう。

チュラロンコン王は、例の黄色いオープンカーで、近代化の進むバンコク市内各所を巡視したが、その中にはロンドンのモールやパリのシャンゼリゼーに模してつくられたラジャダムナン大通りがある。グランド・パレスからほぼ二マイル、政府の重要な公式行事が行われるドゥシット宮に達する美しい道だ。六月二十四日の日の出前、バンコク連隊の主要部隊は、このラジャダムナンに集合させられた。防空練習をやるというのが、出動の理由とされていた。

これは、実は革命推進団の計略だった。彼らは、武装なしに集合した連隊を、あらかじめ手に入れておいた戦車隊を出動させることによって押えてしまった。これで陸軍の協力、少くとも中立は確保されたわけである。それと同時に、官庁や政府通信機関の占拠が静かに、しかも速かに行われた。夜明けとともに王族実力者の大邸宅が襲撃された。革命など夢にも想像していなかった王子たちは、パジャマのままドゥシット宮の大理石でつくった広間に駆り集められた。何百年も続いた絶対的な支配者たちも、こうなっては、寝ぼけまなこの人間集団にすぎなかった。



1932年革命後，憲法改正に署名するプラチャーディポク王

一般の人々は、こんな大事が進行中とはつゆ知らなかった。シャム人の政治への無関心は、このさきも繰返し出てくる特色だが、このときは革命が無血で成就（警官一人が負傷しただけだった）したこともあって、革命推進団の布告が町に張り出されても、人々はとりたてて反応を示すようなことはなかった。

少し的はずれなのだが、宣言文は、経済政策の失敗をすべて国王に押しつけていた。それから、これは的はずれではないが、国王が政府の重要ポストをすべて王族に与えていることを糾弾していた。そこには「王族は私益のために貴族政治によって国政を壟断」し、国民は「めくら同然に扱われてきた」と書かれていた。宣言文によると、革命は制限君主制の確立をめざし、その線に沿って国王には最後通告が送られたということだった。

ゴルフに始った無憂園の平和な一日はかき乱され、国王は自分の運命について選択を迫られた。地方の軍隊を味方につけ、バンコクの宮殿に監禁されている王族の安全を犠牲にするつもりなら、内戦に訴えるチャンスは十分にあった。しかし、結局、国王は革命に屈することにした。革命の中身には疑問もなくはない。しかし、これで国民は話のわからない王族たちからは解放されるわけである。国王は、希望に満ちて民主主義という挑戦に直面する決心をしたのだった。

それからの六カ月間、首都に戻った国王は、プリディらと積極的に協力した。憲法は完成し、一九三二年十二月一日には、シュロの葉に書かれた憲法正文に彼は署名した。一千年の絶対王制にはピリオドが打たれた。革命推進団は、国王に忠誠を誓った。

「この慶賀すべき日に当り、われわれ臣民は、国王陛下に永遠の忠誠を捧げたてまつる」

新しい内閣が生れた。王族は政治に携ることを禁止されたので、前最高裁長官を首相とする新内閣は、プリディ派の平民によって組織された。文民も軍人も参加した。総選挙が行われるまで、人民党による暫定議会もできた。一九三二年革命は成功したのである。自由と民主主義のすばらしい新時代が、まもなく到来するはずだった。憲法は、国のすみずみにまで徹底された。憲法の時代が来たのだと教えられた百姓たちは「ケンポーさんって、だれの息子かね」と首をひねった。

ケンポーさんの時代は四カ月しかもたなかった。

無任所相のポストを得たプリディは、経済危機を解決するため、驚くべき新経済案を提案した。農業、商業をすべて国有化しようというのである。そこには、彼の社会主義的な理想が盛りこまれていた。内閣は分裂し、プリディは辞職した。首相は憲法と議会を停止し、内閣を改造してプリディ一派を追放した。プリディは、フランスに亡命しなければならなかった。彼を追い出した首相が、新聞記者を集めて、プリディは共産党員だと説明し「いいか、わしの言葉を一字のつけたりや差し引きもなしに書かないと承知しないぞ」と命じたからだった。

これでは、王族による専制時代となんら変りなかった。実際、昔の夢を追う貴族たちや同調者による王制派の再起もうわさに上っていた。首相は首相で、政治という現実にくじけながらもなお燃え続ける革命の理想家たちから復讐されることを恐れていた。そんなとき、文民と軍人両派は再び和合して陸軍にクーデターを起させ、首相を追い出して、かわりに愛国主義者のパホン大佐を内閣主班に据えた。プリディも亡命先から戻り、共産主義者という罪を改めて問われた。政府から独立した委員会が組織され、外人をまじえた委員がプリディの無罪を

裁決した。そして内務大臣として内閣に復帰したプリディは、共産主義を非合法とする法律を制定した。

新政権の敵は、実は共産主義などではなかった。追放された王制派はおもむろに力をたくわえ、また昇進から取り残された軍人たちや、革命推進団の政策に懐疑的な穏健主義者も、ひそかに機会をうかがっていた。

一九三三年十月、政権奪回をあせる一人の王子が不平分子や地方の軍隊を糾合し、バンコクへ向って進撃を開始した。これが王制派叛乱で、戦いは四日間続いたのち叛乱派の指導者が逮捕されてむなしくついえた。犯罪人たちは裁判にかけられ、六人が死刑に、約三百人が実刑に処せられた。このとき投獄された連中が、これからの物語の中に何度も登場する「政治犯」の最初のグループである。

プラクチャーディポク王は、叛乱に当って、中立を守るという誤ちを犯してしまった。政府の側に立っておればいいものを、知り合いのイギリス人貿易商の手引きでマラヤ国境へ逃げたのである。叛乱鎮圧後に首都へ帰還した国王を迎えた革命推進団は、彼が叛乱の煽動者だと勘違いしていた。

あくる月、シャムの歴史始っていらい最初の総選挙が行われた。国民の無関心は、改まる気配がなく、パホン大佐に率いられた旧内閣が再び政権を握った。しかし、実は、このあいだに大きい変化が深く秘かに進行していた。真の政治権力は、みせかけ民主主義を支える国民の手などにはなくて、軍部を握る者の手に移っていたのだ。パホン大佐はいまのところ軍部の支持を得ていたが、真の実力者は、いまだ無名ながら、彼のすぐ背後にまで迫っていた。

一九三二年革命の産婆役をはたしながら、ピブンは、なんの恩恵も受けていなかった。彼が、その心中深く、国家の盛衰と自己の運命とを結びつけ始めたのはこの時期ではなかったかと私は思う。ピブンは、マラパリタが書いた『クーデターの手法』を愛読していたが、その人柄は、むしろ『オセロー』の悪役イアーゴに影響されていると断じてもいい。のちに「金の舌」とさえ呼ばれた巧妙奸佞の説得力を駆使し、あるところでは友情を誓い、別のところでは懐疑の種を播きながらクーデターの背後で暗躍し、プリディをフランスから呼び戻したパホン大佐を首相にまで押し上げたのは、ほかならぬピブン

だった。その功労としてバンコク連隊の指揮権を与えられたピブンがいたからこそ、王制派叛乱も壊滅されたのである。

悲運の国王プラチャーディポク。彼はもともとはチャクリ王朝の栄光をなげうっても、啓蒙民主主義の推進者になるつもりだったが、はからずも疑惑の渦中に立たされ、新政府内部のみにくい私利争奪合戦を目撃しなければならない立場に追い込まれた。

いや気がさした国王は、病気静養を口実にイギリスへ脱出し、そこから自分の政府に対して取引きを提案した。政治犯の死刑執行命令には署名しないが、国民にはもっと大幅な言論の自由と民主主義を与える。それが国王の要求だった。政情の不安定を恐れる政府は、これを拒否し、そのため国王は一九三五年三月五日に退位を通告した。国民に宛てたパセティックな別れの手紙の中で、国王は、二度と国王の名による叛乱を起さないようシャム国民に懇願した。退位してからの王は、ロンドンに近いバージニアウォーターに隠棲し、それから六年後に亡くなった。

プラチャーディポクには子がなかったため、王位継承権は、その数年前に死亡している彼の異母弟（あの、パリの留学生たちに歓迎された王子）の子に移った。ローザンヌのチソット通りにあるマンションを、タイ政府の使者が訪問するにいたったのは、こうした理由からであった。

微熱を出して床についている十歳の少年の枕もとに彼の母が立っていた。それは、不思議な光景だった。母は、か細いがきっぱりした口調で、子に話しかけた。

「ナンドや。客間に、政府のえらい使者が三人おみえになっています。あなたに王様になってくれないかというのがご用件なのですよ」

少年は、真面目で思慮深い性格だった。彼は答えた。

「お母さま。私は、あなたがおっしゃるとおりにいたします」

「あなたが決めるべきです。（母は、そこでちょっと口ごもった）　しかし、あなたには、受けねばならない義務があります」

「それでは王位をお受けします」

母はうなずいて微笑した。のちになって、彼女は何千回、何万回あのとき「受けてはなりません」と言えばよ

かったと後悔したことか。しかし、やがて起るべき悲劇を神以外のだれが予知しえただろう。そのときの彼女の胸をよぎったのは、とまどいと感動の気持だけだった。シャム王アナンダをわが子としたことの。

2

イギリスでは、キングの即位のときには「神の恩寵によりて」という言葉が使われる。タイ王室の場合は、もちろんこんな表現は使わないのだが、アナンダの場合には、彼が即位に至るまでになにか超自然的なものの加護があったと考えたくなるほどの幸運があった。

アナンダの祖父チュラロンコンは二人の姉妹を妃にしていた。姉は五人の息子を生んだが、二人は夭折し、一人は外国人と結婚することによって王位継承の資格を失った。残る二人のうち兄がチュラロンコンを継いで即位したが、彼が男の廷臣ばかりを寵愛したために、男子継承のルールは甚だ具合の悪いものになった。彼は遺子を一人も残さずに死んだのだが、こんなことはチャクリ家でも先例がなく、長いシャムの歴史にも一度だけのことだった。やむなく弟のプラチャーディポクが即位し、この三十二歳の王はまもなく健康な妃を迎えたので、先王のような都合の悪い事態は二度と起こるまいと思われた。ところが、そのプラチャーディポクは、皇子が生まれる前に退位してしまった。

王位継承の順位は、こうしてチュラロンコンの妹妃の系統に移った。彼女には八人の子があったが、男の子のなかで成人したのはわずか一人で、その一人もプラチャーディポクの退位の前に死んでいた。だが、彼は三人の子を遺していた。姉と二人の弟である。というわけで、その二人のうちの兄のほうに即位の順がまわってきた。それは、まるで気まぐれなルーレットの上をころがる球のようなめぐりあわせだった。その子がアナンダだったというわけである。

これほど王位に就きそうもない人物が王になったのは例がないだろう。だが、とにかく、アナンダは十歳にして「生命の王」となった。

アナンダの父はマヒドン王子である。一八九二年に生れた王子は、イギリスに留学し、ハローに学んだが、アナンダへの影響という点からも、彼の生涯と性格には、ここで一瞥を与えておく必要がある。

チュラロンコンは、外交と教育を兼ねて、彼の子や孫を西欧のいろんな国に分散留学させたのだが、マヒドン

にはカイゼルのドイツ海軍を指定した。だが、任官したマヒドンは帰国したものの、タイ海軍にはごく短期間しか勤務しなかった。ヨーロッパにいるあいだに、彼は公衆衛生に目を開かれ、その専門家になろうと決心していた。第一次大戦が始ったとき、彼は衛生学の勉強のためアメリカのマサチューセッツ工科大学にいたのだが、親戚の一人に宛てて、こんな手紙を書いている。

> ドイツで教育を受け、そのあいだにできた友人には感謝もし友情も感じていますが、それでも私は王の対独参戦のご決意を欣快としています。私の国と私の国民が第一で、個人的な感情はあとまわしにするべきでしょう。……タイはフランスに兵を派遣するそうです。われわれの農民の子らは、やがてドイツ人と戦い、殺されることでしょう。しかし、王族はまだだれ一人、彼らと困苦を分かちあうために派遣されてはいません。

戦地へ行きたいという彼の希望は、王の裁可するところとならなかった。しかし国のために尽くしたいという強い願望を彼は捨てることができなかった。マヒドンは自分の生活を簡素にし、余った金で奨学金を出したばかりでなく、アメリカに来たタイ留学生には一人残らず会って相談相手になってやった。「天の王子」の称号を持ち、玉座につくかもしれない人が、この時点で、どれほど心から平民になろうと努力していたか、正確なことを知るのはむずかしい。しかし、あるとき、イギリスで留学していたタイ学生の一人が、帰国の途中、ボストンにあるマヒドンのアパートに泊ったときに、彼はついイギリスでの習慣どおり、寝る前に靴を寝室のそとへ出しておいた。召使いを雇っていない王子が、夜のうちにそっと自分の靴を磨いておいてくれたのを知った彼は、いいようのない感動に打たれたという。

マヒドン王子の〝奇行〟の最たるものは、一九一九年に彼がやった平民との婚約だった。花嫁は、ボストンのシモンズ・カレッジ医学部で看護婦をしていた美しく快活なタイ娘である。

この女性こそ、私のこの物語の中のもっとも重要な登場人物の一人である。これからさきも何度か、私は彼女の動きをたどって私の推理を進めていくことになる。

彼女の生れは謎に包まれている。ここでは、別段その謎を追及する必要はない。平民の出だったというだけで十分である。彼女が、チャクリ家の王を二人も生むことになるという予期せぬできごとのためではなく、平民という出身の条件が彼女の態度や人々との関係に与えた影響が大切なのである。

彼女はマヒドン王子より八つ年下である。王子をはじめて見たのは、王子の母に当るチュラロンコンの妹妃の宮殿だったと思われる。十歳になる前に母を失った彼女は、下級役人だった父のコネで、妹妃の宮殿に出入りするようになっていた。王族の生活に慣れない彼女にとっては、すべてが固苦しく貴族的で、宮殿は必ずしも楽しい場所ではなかった。

あるとき、なにかのはずみで怪我をした彼女は、王妃お抱えの外科医のところへ送られた。外科医の家には同じ年ごろの娘もいて、とても居心地がよさそうだったので、彼女は王妃に願い出て、そちらへ移ることになった。

西欧とくらべると、タイ人の家族関係は、ときにはより緊密、ときにはその逆に思える。タイ人は、たとえば、ずっと昔に死んだ祖父の命日を記念するために法事をしたりする。祖先の銅像の前を通りかかったときは、わざわざ帽子を取っておじぎをする。結婚した女は、婚家にはいって義理の両親につかえる。かと思うと、彼らは簡単に子供を手離す。あと継ぎのない祖母のためにわが子を提供したり、男の子をあっさり僧院へ献上してしまったりする。

彼女もそんなわけで外科医の家へ入り、実の娘と姉妹のように暮すことになった。二人の娘は公立の学校を出ると病院が経営する看護婦学校へ進んだ。暁の寺（ワット・アルン）のすぐ近くにある三階建てのモダンな病院である。二人のうちでも養女のほうは、頭のいい娘だった。学校を出ると留学試験に合格し、かつてその宮殿に出入りしたことのあるチュラロンコン妹妃の奨学金を得てアメリカに渡った。妃の息子マヒドン王子と二度目に会ったのは、アメリカでの留学のはじめに彼女がボストンを通過したときだった。

はじめはバークレーのエマーソン・スクールに、のちにコネチカット州ハートフォードのノースウェスト・スクールに移った。どちらの学校でも、彼女は、アメリカ人の家庭に下宿していた。ときどきマヒドン王子が様子

を見に巡回してきた。アメリカ留学中のシャム人学生の保護者だった王子を、彼女のほうから訪ねるときもあった。やがて愛情が芽ばえ、二人は直系王族と平民のみぞを越えて結ばれた。王子がはじめて彼女との結婚の意志を表明したとき、バンコクの人々は、あまりのことに驚き、眉をひそめた。しかし、マヒドン王子の目は狂ってはいなかった。一九二〇年に結婚してマヒドン王女になったこの平民娘は、その知性と美しい心で、りっぱに王子と釣り合っていた。

私は、タイの暑さとしきたりのわずらわしさを避けて、スイスの三部屋だけのアパートに住んでいる彼女にインタビューしたことがある。そのとき、彼女は六十歳を過ぎ、この本の中で私が物語ろうとする過酷な試練を経験したあとだったが、飾らない人柄は昔のままのように思われた。身のこなしは洗練され、ほとんどなまりのない英語だった。いきいきした顔に絶えず微笑が現われたが、それは彼女の内気さと悲しい記憶と深い憂愁のためか、現われてはすぐに消えた。非常に痩せ、手の指は神経質そうに動いていたが、若いときの陽気で快活だったころの名残りはうかがうことができた。世界じゅう（いや、宇宙といってもいいかもしれない）の新しいことに彼女が抱いている若々しい好奇心も印象的だった。できるなら月へも行ってみたいという話が会話のあいだにも出た。それは、あるいは若いころの旅行好きの残影かもしれない。王子と彼女は、新婚旅行にヨーロッパをくまなく旅行し、その途中にローザンヌにもはじめて立ち寄ったのだった。

マヒドン殿下は、公衆衛生学だけではものたりなくなって、やがて医学部に移った。学校もハーバードに移り、一九二八年に優等で卒業した。卒業までにこれだけの年月がかかったのは、途中で何度も公用のためバンコクへ帰ったり、ヨーロッパの大学の講座に出たりしたからである。パリにいたプリディたちが王子を歓迎したことはすでに書いた。たとえば、イギリスに留学していた王子の甥は、マヒドン王子がクリスマス休暇に訪問したときのことをこう書いている。

「劇場、映画館、それから美術館へも行きました。なんでもよく知っておいでのマヒドン王子が案内をしてくださったのです。王子は、どこへ行っても美術館だけは見

マヒドン王女と三人の子供たち，円内はマヒドン王子

るように、美術館を見ないのは野蛮人だとおっしゃいました。私よりずっとお金持ちなのに、王子は倹約家で、美しい王女さまも同じようにつつましいかたです。で、私たちもクロムウェル街の安いアパートに泊りました」

王子夫妻には、まもなく最初の子供が生れた。一九二三年、ロンドンで、女の子だった。一九二五年には、夫妻はハイデルベルグにいた。王子が疫痢で入院しているあいだに王女には九月二十日に最初の男子アナンダが生れた。末っ子のプミポンの誕生は二年後で、ボストンでだった。現タイ国王のプミポンは、これまでにアメリカで生れたただ一人の王様である。ハイデルベルグの場合だけ、王女は二週間も陣痛に苦しんだのだが、ドイツ人の医師は無痛分娩法を施さなかった。成長してからは、だれにもまして思いやりの深かったアナンダは、母親の苦痛のうちに生れ、苦悶のうちに死んだわけである。

三人の子供が、それぞれ別の国で生まれたという事実は、夫妻が一九二〇年代を通じていかに世界各地をとび回っていたかを物語るものだろう。しかし、ほんとうに夫妻が家と感じていたのは、バンコクよりもボストンだ

った。二人は、ロングウッド街からのちにブルックリン街のアパートに移った。ともに、たかだか四室か五室の家である。召使いは一人もいなかった。例外は乳母である。留学前にバンコクで王女と同僚だった女性で、乳母になったのもそのころからの約束であった。彼女は、のちに王室女官長になり、一家の悲劇の瞬間にほんの少しだけ顔を見せることになる。

　マヒドン王子とつき合っていたボストンの人々は、彼を殿下とは呼ばず、称号の中の地名をとって「ミスター・ソンクラ」と呼び慣らわしていた。シャムに対する王子の忠誠心は確固たるものがあったけれど、アメリカに住んでいるかぎりは、バンコクのわずらわしい宮廷儀礼から逃れることができた。王女にとっても、出生がほとんど問題にならないアメリカは住み心地がよかった。

　一家はしあわせだった。三人の子と育児の本と、アパートと乳母と、ささやか型（タイプ）ではあったがフォードの乗用車があった。夫妻は、ともに酒も煙草も口にしなかった（いまでは、王母殿下は煙草を喫われるようだが）。王女が料理をつくり、王子はあと片づけを手伝った。

シャムの学生たちがよく立ち寄って長い物語りをしていった。ときどき夫妻そろって劇場へ行ったが、そのほかには、あまり外出することもなかった。男の子は二人とも、のちに音楽的な才能を発揮するようになるが、ボストン時代の一家は不思議に音楽とは縁がなかった。マヒドン王子は生真面目な人柄で、話し上手ではあったが、笑い声が起るのはたいてい王女のほうからであった。

　王子はハーバードへ通い、一九二八年には博士号を取って、一家はバンコクに帰った。その日から、王女の存在は急に目立たないものとなった。

　バンコクの大病院の一つであるシリラット病院でインターンとして働くのが王子の希望だった。だが、これは想像以上にむずかしいことがわかった。そのことは、同じように医学博士になってバンコクへ帰ってきた王子の一人が告白している。

「患者を診断するのは事実上、不可能だった。患者が来ると、私は『どこが悪いんですか。私は王子だから、あなたの頭だけしか診察することができないんだが』と断らねばならなかった。もし、相手が国王なら、私は足だけしかみることができなかったことだろう」

　シャム人は頭をひどく尊敬し、逆に足を軽蔑する。このことは前章にも書いたが、常に目上の人の頭より自分の頭を低いところに置かねばならないのだ。たとえ目下のものであっても、他人の頭にさわるなどもってのほかである。どうしてもさわらねばならないときは、そっとやらねばならない。

　これは、決して階級意識ではない。位の高下にかかわらず、シャム人は相手を尊敬する。頭を大切にするのは、頭には魂が宿っているという迷信ないしはタブーがあるからだ。急に魂のおくつきをゆり動かすと、魂は頭からとび出し、二度と帰ってこないかもしれない。頭にさわるのは、だから、不作法なのではなく、不吉なのだ。

　西洋人がシャム人の子供を見て思わず頭をなでる行為には、シャム人たちは長年のあいだドキリとしたものである。このごろでは、西洋人がものを知らないということが知れわたったから彼らも平気になったが、頭とは逆にうとんぜられているものに足がある。足を他人に向けると、向けられた人々が不吉に感じるのだ。私が、はじめてバンコク在住のシャム人を訪問したとき、そばにいた通訳がしきりに私の袖を引いた。私は、彼に教えられて、やっと爪先が相手にむかないよう足を組むのをやめたのだった。

　こうした迷信の重要さは、この物語の中にもこれから登場してくる。当面われわれにとって大切なのは、マヒドン王子がさまざまな制約のためにシリラット病院に勤務できなくなったことである。病院を経営していた英米人の医師たちが、かえってことが面倒になるから王子をどこかへ移してほしいと国王に懇請したのだ。病院はメナムの向う岸にあったが、王子は通勤のときも王子らしい船列を組まず、通船を雇って川を渡っていた。国王も、かねてから、それを苦々しく思っていられたのだった。

　王子らしくない所業は困るというわけで、インターン勤務はとりやめになった。北のチエンマイには、アメリカ人の長老派教会宣教師が建てたマコーミック病院というのがあって、コルト博士というのが院長をしていた。マヒドン王子は、バンコクを離れて、その病院に移った。そして、もとから頑健なほうでもないのに、たちまち仕事に熱中した。まもなく、王子が、百姓の患者に沐浴の世話までしているという憂うべきニュースがバンコクに届き始めた。

王子は妃や子供たちを、例のポーカー好きの母親のもとに残していた。スラパトムとも呼ばれるマヒドン宮殿である。グランド・パレスからは一、二マイル離れ、騒々しく暑いバンコクの中心にあったが、敷地が広々としているせいか、いなかの荘園屋敷に似たたたずまいだった。宮殿で百人の召使いを使って采配をふるっていたのは、マヒドン王妃にとっては義母でもあり、もとのパトロンでもあるチュラロンコンの妹妃である。

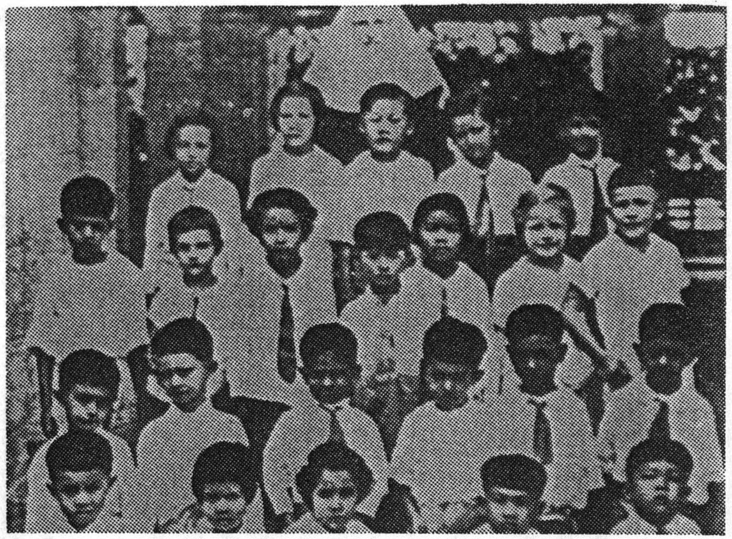
このころ、王女は、よく頭痛に悩まされた。おそらくボストンのブルックリン街での簡素な生活とはあまりにかけ離れた環境のせいであろう。夫と離ればなれに暮らすのもはじめての経験で、その夫は北の都チエンマイにあって熱帯病やときにはハンセン氏病の治療にも当っているというのであった。

一九二九年の、チエンマイ勤務が始ってから三カ月たったある朝、マヒドン王子はシリラット病院へ帰ってきた。西洋人の平民そっくりに開襟シャツに半ズボンをはき、ヘルメットをかぶったかっこうで、手には検査用の患者の便を入れたガラスびんを持っていた。ただ、この日の王子の旅行は、自分自身の健康診断も兼ねていた。

王子を診察したのはイギリス人のノブル博士だった。博士は、王子に、すぐ自宅に帰って安静にするように命じた。その日から彼とアメリカ人のウィリアム・パーキンス博士が治療に当ったが、王子のアメーバー赤痢はもう手遅れだった。王子は、死の日まで男らしく、他人への思いやりを忘れなかった。亡くなったのは三十七歳である。チャクリ家のもっとも愛された王子だった。

シャムの将来に希望を抱く人々にとって、王子の死は大打撃だった。王子が直接に面倒をみた学生たちも、パリで彼に会い最近帰国したばかりのプリディたちも、この保護者の死を悼んだ。マヒドン王女にとっては、たとえようもない悲運だった。このあと、彼女は子供たちだけをたよりに生きることになる。父が死んだとき、アナンダは四歳、プミポンは二歳、長女もわずか六歳だった。

それから一年か二年後、アナンダはマーテルデイ修道院経営の幼稚園へ通い始めた。幼稚園は、高級住宅地バンガピの美しいイギリス大使館の真向いにあった。修道院はアカシアの大樹のかげにあり、子供の送迎用の馬車が轍をきらめかせながら出入りしていた。芝生と熱帯樹の木立ちをはさんで高床になった園舎が建っていた。修道院の建物には不似合いな話だが、もとインド人の金持ちが女たちを囲っておくために建てた家で、従ってシャム風の建物とは趣きが少し異っていた。だが、黒い服をまとった尼僧たちは「奉仕」のモットーに徹し、そのため、ここはバンコクのもっとも進んだ幼稚園として有名だった。各国から集った尼僧たちは、マヒドン王女のような仏教徒の子でも進んで受けいれた。


幼稚園時代のアナンダ（中央に立っている）

入園したアナンダは、白シャツとネービーブルーの半ズボンという制服を着、通退園にはよく王女がつきそっていった。ただ昼食だけは、ほかの子とは違って、おつきの侍女が持ってくる弁当を食べた。非常に真面目なアナンダの性格は、このころからすでに目立っていた。そのころの彼のことは、いささかのお追従をまじえてではあるが、数年後に最かれた校内誌『インヴィオラータ』のつぎの一節からうかがい知ることができる。

「殿下は、授業中はとても熱心でしたが、友達とふざけ合うこともよくありました。あまりご健康がすぐれないので、特別に遅刻を許されていましたが、殿下がお着き

ものにしてしまったのである。スイスの屋敷までバンコクから使者がやってきて、折りから風邪で寝ていた十歳のマヒドンに王位を与えたのは、こういういきさつからであった。

この瞬間からシャムの運命やプリディ、ピブン、アナンダのそれは、一本の縄にない合わされ始める。ただ、その中でアナンダにだけは、当分のあいだ、少し離れた世界に暮す自由が与えられた。彼が成人するまでは、バンコクの摂政評議会が、国王としての彼の国事行為を代行することになったからである。

旧式な人々は、王位に必要な重要条件が欠けていることに、ひそかに気づいていた。これまでのチャクリ家では、一頭の白ゾウも持たない王が王位につくことはなかったのだ。しかし、時代は二十世紀で、すでにその三分の一は過ぎているのである。

3

微賤の出、もとは一介の看護婦にすぎなかったマヒドン王女は、「王母殿下」にまで昇格し、世にも数奇な星を背負ったわが子の養育を一任されることになった。わが子は突如としてシャム数千年の歴史の最前面に押し出され、二千数百万の臣民からは生きる神として敬われることになったのである。

借家住いでは、あまりにも恐れ多いというので、政府がピュリーに別荘を買ってくれた。静かな小径（こみち）。曲りくねった壁。こんもりと茂った庭園と湖を見下ろすシェードつきの窓を持った別荘の群れ。ピュリーは一見、農村のようにも見えるが、ヴォー州の中でもとびきり美しい町ローザンヌの中心から十分しかかからない郊外である。アナンダは、この別荘で育った。王母殿下はこんな場合でも巧みに義母の名の一つをとって、別荘をワタナ荘と命名した。ワタナ——光の箭（や）の意味である。

別荘は、湖に臨む丘の中腹にあった。敷地は小さくなったが、今日でも家はそのままに残っている。二階建てで、その上に屋根裏部屋、下には半地下室がある。壁は白く、屋根は赤い扇型の瓦で葺かれている。いかにもスイスの銀行家の家といったおもむきだが、くすみがちな印象をひきたてているのは、樅（もみ）と栗の木に囲まれた二エーカーもの庭園だった。家から下り坂になっている芝生と灌木の木立ちが尽きたところには、小さい果樹園があり、その脇には野菜畑があった。王母殿下は、栄養のバランスにとくに気のつくかただった。

ワタナ荘の内部に、王母殿下は、ヨーロッパとシャム製の調度品を置いた。別荘を建てた人はイギリスに住んでいたことがあるので、スイスの家には珍しく煖炉があった。スイス人のハウスキーパーと女中二人が雇われた。年とった庭師と助手二人が庭の手入れをすることになった。上品な侍女が何人か、それにバンコクの政府から派遣された役人、家庭教師、運転手、門番……そのほかにも、定期的に通ってくる雇い人がいて、世帯はかなりの規模にふくれ上った。十二部屋あるワタナ荘も手ぜまになり、やがて道をへだてて反対側の家も借上げられた。

予期もしなかった暮し向きの変化に、王母殿下は全力

を注いで適応を試みた。しかし、家庭のプライベートな内部は、不思議なほどこれまでとそっくりに保たれていた。仏壇は、彼女が一人になって考えごとをする私室に据えられた。そして、子供たちをできるだけふつうの人間として育てようというのが彼女の考えだった。さしあたりはたさねばならない義務を一つ一つやっていく、つまり、一般のスイス女性と同じように、主婦として母親としての仕事を、彼女は実行した。

ただ、子供の教育については、彼女の識見は、スイスの母親たちのように行きあたりばったりのそれではなかった。ジャン・ジャック・ルソーの著作から強い影響を受けていた彼女は、マリア・モンテッソリ式の教育を信奉していた。子供たちは自由にさせるが、常に他人のことを配慮するようにしつける、そしてお仕置きよりも理解を通じて規律を身につけさせるのだ。もちろん、よい習慣は、きちんと教え込まれた。三人の子供たちは自分の部屋（男の子二人は一部屋を共有していた）を掃除したし、アナンダはおそらく自分でベッドメーキングをやった史上最初の王様だろう。

王母殿下はフランス語を学んだ。ローザンヌに着いてから間もなく、子供たちが学校へ行き始めたからである。子供たちは、フランス系スイス人の運転手が運転するサムソン、のちにはメルセデス・ベンツで、学校へ通った。自動車のことをよく知っているこの運転手は子供たちのたいへんなお気に入りで、大叔母の血をひくアナンダ兄弟は、そろって自動車が大好きだった。一家がワタナ荘へ移った一九三六年、アナンダは新学校へ進んだ（プミポンも同じ学校に入り、姉は女子修道院の付属学校へ行った）。

その後八年間にわたってアナンダが教育を受けたエコル・ヌーベルは、丘の多いローザンヌのまん中に、見ばえのしない庭に囲まれた二棟の大きい家である。外見は索漠としているが、学校の中には厳格でないまでも真面目な雰囲気がただよっている。校則には「生徒たちを現実の生活のみならず将来の試練に備えさせることは、学校の神聖な義務。学校での生活は、同時に人生の修養でもある」と書かれている。何カ国もから集った教師たちが、この校則の下に、スイス人と外国人を含めて百五十人の男女生徒の修養を心がけたのである。アナンダは、ここで、勉強や遊戯や作業をみっちり教え込まれた。

作業——農園を耕すのも授業のうちだった。アナンダは、自分がつくった作物を売って、たった二フランだった小遣いのたしにした。王母殿下は、倹約だった夫の習慣を守り、息子の在学中は、それ以上の小遣いを与えなかった。

新入生アナンダは敏感で、行儀がよくて物静かだった。だれとでもすぐに友達になったが、いつも遠慮深げな様子があって、なれなれしくするようなことはなかった。身分の違いを意識していたわけではない。家柄や立場の重大さを知ってのことでもなく、単に彼の性格がそうなのだった。陽気に騒ぐほうではなかったのだ。気だてのやさしい子供だった。仕事ばかりしていて遊ぶ時間がないお前はかわいそうだね、と、馬に話しかけていたこともあった。暴力はきらいだった。入学して間がないころ、一人の少年がはしゃぎまわって、だれかれなしに組みついていたことがあったが、アナンダが片手を上げて制すると、それはさすがに皇帝の拒否で、少年も彼には組みつかなかった。

やがてワタナ荘とエコル・ヌーベルに慣れたアナンダは、一九三八年ごろには、ようやく少年期を脱け、より波乱に満ちた青年期へと成長していった。この年は、彼の最初のシャム訪問という重要なできごとがあった年だ。十三歳になった王は、このときはじめて彼の臣民に会ったのである。

十月十七日、メオニア号で彼はマルセイユを離れた。母、弟、姉も同行した。おつきの中には英語教師ペビズもまじっていた。一カ月の航海中の王のことを、船長は「王様は一流の船乗りだった。船上のあらゆるスポーツやゲームをお好みになり、インド洋のしけのときも一度だって船酔いされなかった」と書きとめている。しかし、彼がバンコクではじめて遭遇するタイの政治風土は、インド洋よりもはるかに荒れ模様だった。

革命、ついで王制派叛乱のあとのクーデターによってプラチャーディポク王が退位してから四年近くが経過していた。政治的な暴風圏を抜けた国は、不況から立直り、民主主義の建設に取組んでいた。いや、指導層がそれに取組み、一般大衆は相変らず政治にはさっぱり関心を持っていなかった。

首相の座を占めていたのは、軍人らしくぶっきらぼうなパホン大佐だった。アナンダ王の名において彼の政府

は中央や地方の政治をより民主的な軌道に乗せ、教育、財政、司法制度など多くの面で改革を進めていた。その背景にあって輝いていたのはプリディの英知である。プリディは内相、ついで外相になっていた。アメリカ人顧問の協力を得て、彼は西欧諸国を説き伏せ、列強がシャム独立と引換えにもぎとっていた治外法権を完全に放棄させた。新しい条約は、シャムの完全な自由を認め、国の収入をふやした。それはまた革命によって冷えきっていた西欧との関係を、もとの親しさにまで引戻していた。大東亜共栄圏をとなえる日本の不穏な動きが始っているときだったので、このことはとくに重要な意味を持っている。プリディは、将来にそなえてシャムの生命線を開いておいたのだ。

外務大臣は劇職だったが、プリディは職務のかたわら相変らずシャム人の祖師だった。元の法律学校を、彼は、民主主義の知識と実践を教える大学に改組し、そこで教えていた。年をとると、人間は倫理と政治が一体のものだと思い始める。プリディは、青年期にもとくに若若しくなかったかわりに、年をとっても老けてしまったわけではなかった。彼は、新しい大学を倫理政治大学と名づけた。

彼の講義の日は、教室は満員だった。一般のタイ人よりはごく少しだけ背が高く、色が白いのを除けば、短く刈った髪、細いきらきら光る目、いつも口辺に浮んでいる内気そうな微笑があった。しかし、プリディは学生たちに身近かな存在だったにもかかわらず、なんとなく近づきにくく、謎めいたところがあった。学生たちが、この精神の指導者に捧げる尊敬は熱烈だった。講義をするかたわら、彼は法律その他のテーマについて何冊もの本を書いた。『少年少女と両親のための手引』は民主主義を自由＝社会主義的な立場から解説した啓蒙書だった。シャムは確かに前進してはいたが、その裏には無気味な底流が流れていたからである。

その底流は、たとえば奇妙な官職の売買になって現れていた。軍がそれを望んでいるというだけの理由で、他にはなんの資格もない連中が知事になった。政府人事への軍の介入は、公費の濫費や、工事が規格どおりかどうかよりも賄路のほうに重点を置いた公共投資の原因になった。王制派時代よりもはるかに袖の下、割戻し、賄路、あるいはタイ人が「潤滑油」と呼ぶしきたりがさか

んになっていた。

こんな事態は、政治のワンマン支配に負うところが大きかった。クーデターを成功させてパホン大佐を首相の位につけ、王制派の叛乱を壊滅させた功で、ピブン将軍の威令はとみに高まっていた。やがて国防相兼国防軍副司令官になったピブンは、軍隊内部の昇進と政府官職の巧みな操作によって、しだいに支持者の数をふやしていた。プリディ支持の文民派は役職を追われるようになった。彼らの不満、また、やがて軍事独裁政権が生まれるのではないかという危惧は、政界内部に、はげしく複雑な暗闘を起こさせる原因になった。

一応は軍部全体を掌握していたパホンは、革命を成功に導いた文民派と軍人の結束を維持するために全力を尽くしていた。当時、彼が果たしていた機能は、両者の衝突を避けるための触媒ないしは中和剤のそれだった。しかしアナンダの最初の祖国公式訪問のころには、ピブン将軍の実力はますます強大の度を加え、プリディ派の文民たちは政府部内にとどまってはいたが、パホンを満足させるための無力な存在にすぎなかった。

ピブンは、あるとき、匿名で占い師に見てもらったことがある。「この人は、善を悪と見る希有の性格です」というのがご託宣だった。かつては女の子たちから逃げまわっていた青年は、いまでは肉づきもよくなり軍人らしい身のこなし、内面の自信を示す微笑などに助けられて、なかなか見ばえのする男になっていた。服装に気を配り、いつも美しいシャークスキンの背広を着用していた。挙措動作も優雅だった。人々は、じきに彼の魅力のとりこになった。美しい声、開けっぴろげで誠実そうな態度もプラスだった。他人を説得するとき、彼はしたたかな奸計を用いた。彼が二つの敵対する政治派閥をいかにうまくさばいたかを示す新聞記事を読むと、ピブンはほんとうに涙を流しながら、仏様の道を忘れずどうか和解してほしいと両派を説得したという。仏の道ならだれでも知っている。仏になったつもりで和解しようと思いさえすれば可能なのだ。それに、ピブンは、もし説得が失敗したときには、舞台裏でひそかに実力を行使するのであった。

ピブンを助けてこの権力の座につかせたのは、娘のころピブン青年から恋の歌を捧げられた一人の女性だった。ピブン夫人になっていた彼女は六人の子を産み、シ

ャムで最初の婦人国会議員になった。結婚二十六年目の記念日に、ピブンは雑誌に寄稿して「私は妻を甘やかしはしなかった。しかし、力の及ぶかぎり彼女を幸せにしようとしたのだ」と書いている。

　シャムの女性ならほとんど一人の例外もなしにあたりまえだと考える宝石の蒐集に血道をあげる女ではなかったが、詩を書くのが好きで、自分は彼女のそんな才能を助けたのだとピブンは自慢している。彼は、また、妻のことを「美しく慧く、夫に忠実」と最大級のほめ言葉で書き「職務が私を求める以外は」妻を顧みなかったことはないと、自信たっぷりだった。もっとも、当時のうわさによると、職務が彼を求める度数はかなり頻繁だったようで、それも国防大臣としての職務よりは、色好みの男としてのそれだったようだ。

　ただし、いまバンコクの国立図書館の蔵書目録の中にある『ピブンの愛情生活』という本によると、主人公のドンファンぶりは、それほどおさかんなものではなかったらしい。彼の三十年間にわたる公的生活の中に登場するのは、政府レセプションでの演奏を受持っていた情報局専属バンドの女性歌手が一人、これも政府美術局のダンサー、それとピブンの息子を一人生んだミス・シャム候補（この国の女性の内気なことと矛盾するようだが、毎年のビューティ・コンテストは、国をあげての行事なのである）くらいなものだ。

　女出入りが実際はもっと多かった証拠に、ピブンは、いつも、どこかに怪我をしていた。あるときには、サッカーの試合で、優勝トロフィーを渡してから車に乗ろうとしたとき、恋敵に雇われた殺し屋が発砲して、ほおに負傷したこともあった。しかし、ピブンの愛情生活の内幕がどうであったにせよ、それは、妻以外の女性とはついに一度もうわさに上らなかったプリディとは好対照だった。女性関係がスキャンダルにならないシャムのことだから、この差は倫理観の差というよりはプリディの禁欲によるものであったのだが。

　それぞれの支持者たちは、はげしい勢力争いに浮身をやつしてはいたが、ピブンとプリディの両御大は、少くとも表面上は、パリ留学時代の友情を維持していた。とくにプリディは、政争や腐敗からは孤高を保ち、民主主義的なムードや責任感が遠からず軍部の専横を打破してくれるだろうという希望に、彼らしい夢と理想をつないでいた。

　プリディが、なににもまして希望を託していたのは、一九三二年の革命によって創設された国会だった。憲法によれば、国会の半数は、かつての革命推進団が中核をなす人民党の指名によるもので、軍人が圧倒的に多かったが、一九三三年の最初の総選挙で選ばれた残りの半数は、その多くが穏健保守派かプリディ支持の自由主義者だった。プリディが共産主義者ではないかという危惧は相変らず消えなかったが、この両グループはよく協力して、シャムの初歩的民主主義の声を代弁していた。

　だが、一九三七年は、残酷な幻滅の年だった。

　プラチャーディポク王の財産の多くは政府に没収されていたが、摂政評議会が革命推進団の何人か（プリディは入っていないがピブン将軍を含む）に、その没収土地の多くを廉価に、しかも年賦で譲渡しているといううわさが高まったのである。国会は、こうした世論を背に政府を追求した結果、摂政評議会とパホン大佐を首班とする内閣は、総辞職にまで追い込まれてしまった。国民の意志に、政府があっさりと従ったのである。シャムの民主主義も、ようやく確立したかに見えた。

　だが、つぎの瞬間、それをぶちこわしたのはピブンだった。

　ピブンは国会を戦車で取巻き、もし議員たちがおとなしくしなければクーデターをやるぞと脅迫した。摂政と内閣は、おかげで辞職せずにすんだ。しかし、政府の実権を握ったのは、いまや明瞭にピブンで、パホン首相は、もはやピブンが全権を掌握するのをしばらく阻止しているだけの人物にすぎなくなった。

　政情は、急に不安の度を増した。一九三三年の、例の失敗に終った王制派叛乱の政治犯たちは、牢獄の中からシンパを指揮して暗殺を計画した。アナンダがメオニア号でバンコクに到着する一週間前、正装に着換えようとしていたピブンは、長靴をはいたあとズボンを手にした瞬間に従兵の一人にピストルで狙撃された。幸いにも命中しなかったが、それから一カ月もたたぬうちにピブン夫妻は昼食のデザートを食べたあと倒れた。これはコックのしわざで、コックの恋人というのが政治犯のシンパに買収されていたのだった。銃弾も毒物もピブンの生命を奪うには至らなかったが、現代タイの歴史に登場する指導者の中で、ピブンだけが、何度も、甚だ真相のあい

まいな暗殺未遂事件の被害者になっているのは、不思議といえば不思議である。

　こんな事件によって誘発された騒然たる政情の中で、国会は再び内閣の総辞職を求めた。力つきたバホン大佐は、国会を停止し、自身も辞職した。当然のことのように、そのあとを継いだのはピブンである。下っぱの砲兵将校は、こうして、そのころからたった六年間でシャム首相の地位に上った。

　アナンダ王は、そんなときに到着した。国民の多くは、突然、自分たちの国の将来を決定する政治紛争に、なんの意見も感情も持たなくなった。人々の心は、王様の訪問以外のことは考えることができなくなったのだ。お祭りほどタイ人を熱中させるものはない。春の到来を告げる春まつり一つを見ても、それはわかる。まして王の訪問は、王家への尊崇という点で昔から一致してきた国民感情を満足させるにたるチャンスである。五年間もシャムの地には王がおいでにならなかった。久しぶりの国王だ。人々の心は歓迎ムードで燃え上った。

　アナンダがバンコクに着いたのは一九三八年十一月十五日である。ものすごい歓迎だった。シャム湾の薄緑色の水の上、メナムの河口あたりに海軍の全艦艇が集結し、メオニア号の煙が水平線上に見えるのを待ち構えた。首相も三人の摂政評議会員も艦上にいた。つい何週間か前まではスイスの学校で野菜畑を耕し、ワタナ荘の自室でベッドメーキングをやっていた十三歳の少年が、いまや人間世界を超越した半神として迎えられるのだ。

　王の一行は、二十一発の礼砲を発射した王の海軍の旗艦アユタヤに移乗した。王の空軍の精鋭が百機、上空を祝賀飛行した。あらゆる種類の船がメナムに出ていた。それぞれに装いをこらし、彼らは戦艦アユタヤを取巻きながら川をさかのぼった。政府発表によると「この東洋のベニスもかつて見たことがない」盛事だった。

　グランド・パレスに近い王室専用棧橋には、王族、閣僚、外交使臣が礼装に身をかためて居並び、ほら貝や笛やラッパやドラムがいっせいにアナンダ王の到着を知らせると、一同おごそかに起立した。「国王もまた礼服をお召しになり、玉座の象徴たる黄金の剣をお手に」しておられた。僧侶の大群が読経する中を王がシャムの土を踏まれると同時に、王だけに許される九重の傘が、さっと彼の頭上にかざされた。

王として初めてバンコクを訪れたアナンダ　うしろは姉と弟

　いくつもの奉迎の辞が読み上げられ、何百万という国民がラジオの中継でそれを聞いた。そのあとグランド・パレスに入った王は、まずエメラルド仏寺院で聖像を礼拝した。つぎに王家の陵墓で「聖なるチャクリ家のかしこき先王」たちの霊に敬意を表した。陵墓に祭ってある先王の像は、どれも写実的な類似からはほど遠いものだったが、このおくつきでは、王母殿下もわが子のうしろで、ひれ伏しておられた。グランド・パレスを出るとき、国王が、バロンピマン宮の建物を見たかどうかは疑問だ。彼の人生の最後のドラマがのちに演じられるのは、この宮殿なのである。

　当時の王に、やがて来るドラマが予見できただろうか。白い礼装、金モール、羽根飾りの帽子を着、臣民のあいさつを受けるために馬車に乗ってラジャダムナン通りへ出立しようとする王の厳粛な顔には、そのとき、悲劇の翳（かげ）りさえなかった。いや、人々も、だれ一人、悲劇の到来を感じてはいなかった。バンコクは昼間は旗に、夜はイルミネーションにいろどられ、人々の大群は、あるいはお菓子を食べながら、あるいは陸や船上に展開されるお祭りのページェントを見物しながら恍惚の微笑を

浮べ、タイ人だけが知っているお祭りの完全な楽しみかたを、この秋の夜の祭りの一刻一刻に注いでいたのだった。

　アナンダがバンコクに滞在した二カ月のあいだに、政治の実力は、ピブン将軍の手にしっかりと握られていった。その同じ二カ月に、アナンダははじめて王の威厳を身につけることを学び、それを急速にわがものにした。彼は、いまや尊厳と慈悲を兼ね備えた王らしい王であった。恥ずかしげな微笑、とまどった態度が、ごく短い瞬間、少年らしさを見せるだけだった。人々は完全に満足していた。一般国民は「生命の王」を迎えて満ちたり、ピブンのような政治家はこのおとなしい少年なら御しやすいぞと安心し、王制派は国王歓迎の熱狂を見て再起の機近しと胸をときめかせた。

　一九三九年一月十三日に王が再びバンコクを離れるときには、三十万人の大群衆がメナムの両岸を埋めた。そのうちのだれがのちの暗殺者になる資格を持っていたのだろうか。しかし、その日は、ただ王への敬虔な礼拝があるだけだった。予見できない未来は黒い衣を頭からすっぽりとかぶり、群衆の歓声にまじってただ一人、沈黙を守っていた。

4

　アナンダの母国訪問に続く七年は、人類にとって現代の不毛の七年間だった。バンコクの寺院や宮殿も含めて、世界じゅうが第二次世界大戦に巻込まれた。例外だったのはスイスくらいなものである。ローザンヌのワタナ荘を見ているかぎりでは、地球上のいたるところで火を噴いている戦争にだれも気がつかなかったことだろう。戦火を思わせるものといえば、二人の少年と一人のおとなが興じている無邪気な戦争ごっこだけだった。この遊びを発明したおとなというのはセライダリスという男で、二人の少年――アナンダと弟のプミポン――は何年間も彼といっしょに遊んだのである。

　序章の中で、私は、ファウルコンというギリシャ人のことを書いた。十八世紀のシャムで、彼は不思議にも王の右腕「叡知卿」にまでとり立てられ、ついにねたみ深い廷臣に殺されたのだった。セライダリスの登場は、歴史の奇妙な繰返しを思わせる。というのは、彼もまたギリシャ人で、アナンダの死に先立つ六年間には絶えず王の側近にいた人物だからである。セライダリスはついにバンコクへは行かなかったが、まるで歴史のほぐれをかがりでもするかのように、王が変死をとげ彼が生き残ったとき、バンコクでは、この「ギリシャ人」のことが不気味な影を帯びた存在として人々のうわさの中でしばしばささやかれたのだった。

　この男――名刺によればクレオン・O・セライダリス――は、一九〇七年にドイツで生れた。煙草商人だった彼の父は、第一次大戦中にスイスに移った。そしてセライダリス自身がはじめて王母殿下に目通りしたのは、第二次世界大戦勃発の直前で、そのころの彼はエコル・ヌーベルで低学年生の面倒を見るかたわら博士課程の勉強をしていた。王母殿下は、ちょうど息子たちの宿題を見てくれる人物を物色中だったので、セライダリスは、まもなく常雇いの家庭教師に昇進した。

　住込みの家庭教師ではなかった。というのは、セライダリスは結婚したばかりで、遠からず彼自身も二人の男児の親になるところだったからである。しかし、彼は、まもなく家族の一員同様になった。私が会ったセライダ

リスは骨太な男で、髪は白くなりはじめていたが、どこかに押しの強い態度があった。物静かではあるが、王族はいっさいの誤ちを犯さないという説の熱烈な信者らしかった。もっとも、よい教師というのは、生徒の前でなければ真価を発揮しないものかもしれないが。

セライダリスは国王兄弟の学問上の教師（彼自身の専攻は自然科学）だっただけでなく、かなりのていどに父親がわりの役もはたしていた。三人は、庭の隅に置いた梱包用の箱を「クラブ」と呼んで、戦争ごっこの司令部にしていた。箱の中にすわってオレンジ・ジュースを飲んだり、ジェーン版の軍艦図版をひろげて議論したり、ペットの白ネズミやカナリヤで遊んだりした。屋根裏部屋で汽車のおもちゃを走らせて遊ぶこともあった。戦争ごっこは、もちろん、よくやった。シャムの忠実な臣下たちはさまざまなおもちゃを送ってきたが、不用になったのは売払って慈善事業に寄付するかクラブに新しいおもちゃや大工道具を買うときのたしにした。セライダリスは工作が得意で、この趣味はアナンダにも伝染した。

もっとも、アナンダは午後六時までに予習復習をすませてしまわなければならなかったから、遊びのための時間は限られていた。水曜日は授業が昼までで、そんな日には一家そろってピクニックに出かけた。休日はバレでの登山やアロサでのスキーに当てられた。そのほかヨットやボート、水泳もやった。セライダリスは、そんなとき、いつも兄弟のそばにいた。

王母殿下は、そんなことすべてをちゃんと掌握していた。すべての決定、栄養のバランスからピクニックの行き先、勉強の時間までが彼女によって決められた。「クラブ」の遊びのほかに、彼女は、子供たちに探偵小説から天文学にいたるあらゆる本を読ませ、切手を集め、写真に興味を持つように仕向けた。セライダリスは、いわば母の手先だった。

もう一人、王母殿下の信任のあついナイ・アネクという男がいたが、彼のことはのちに詳述しよう。ナイとセライダリスは、きわめて閉鎖的な家族の核の内部にいた。このほかにも家庭教師が二人——スイス人の音楽教師と隣りの家政学校から引抜いたイギリス人の女—がいた。タイ語と仏教を教えるマハ（神学博士に当る）も一人いたが、彼らは原則として土曜日にだけ王母殿下にお目通りを許されるシャム政府の役人や訪問客より少し親

しいていどだった。社交ぎらいの王母殿下は、週に一日だけを公的な仕事のために割いたのだが、ローザンヌの社交界には一歩も足を踏み入れなかった。新聞も、なにも書くことがなかったようである。ワタナ荘が、彼女の全世界であった。

規律は守られていたが、ワタナ荘内の生活は、きわめてくだけたものだった。食卓での会話もごく自然に行われた。召使いは床にはいつくばる必要も、にじり寄る必要もなかった。訪問客のベルにこたえてドアを開けるのは王母殿下で、庭仕事の最中だったときなどショーツ姿も珍しくなかったので、さすが平等に慣れたスイス人たちも驚いたものである。

王母殿下は、ある意味では、チャクリ王朝歴代の禁裏を支配した女性たちと同じように変人だといえるかもしれない。ただ彼女は愛と自ら模範を示すことによって子供たちの服従をかち得ようとしたところが先人と違っていた。子供たちに科せられる最高の刑罰は、犯した罪の大きさに見合う罰金だった。三人の子の中でもっとも扱いにくかったのは姉だった。彼女はチャクリ家の伝統を受けついで短気だったし、タイ人らしくなく米が嫌いだったからである。しかし戦争中の前半、彼女は大部分をジュネーブの寄宿学校で過していた。子供たちの中でだれよりも母に近かったのはアナンダより二つ下の末っ子プミポンだった。彼は、いつも道化役だった。

今日の、あの厳粛な顔つきのプミポン王からは、おどけて家じゅうをとびはねている眼鏡の少年を連想することはむずかしい。アナンダは母っ子の弟を嫉妬しただろうか？　いや、嫉妬や怒りを示すような態度はなにもなかった。かえって兄弟の仲がよかったことを示す証言ばかりである。二人は部屋を共有していたし、「クラブ」ごっこにもいっしょに熱中した。アナンダの母に対する態度にも疑念をさしはさむ余地がない。「よくお休みになれましたか」、あるいは「どうかご無理をなさらないように」と、彼はいつも母に声をかけた。アナンダの母への愛は常にゆるぎなかった。

アナンダは、ワタナ荘という母がつくってくれた城に完全に満足していたようだ。学校へ行くのは、城から定期的にうって出るようなものだった。学友たちは、ワタナ荘へ招かれなかった。しかし、彼のほうは少数の訪問先を持っていた。気球で名高いピカール教授の家へも、

息子が同じエコル・ヌーベルに通っていたのでよく訪問した。

そんなときには、セライダリスがついて行くのが常だった。おそらくアナンダの王としての地位を示すためだったのだろうか。もう一つ、王の地位を示すものがあったとすれば、それはスイス政府が二六時中ワタナ荘の門に配した番兵である。（この番兵隊を指揮していたのは、からだのいかつい、丸顔に黒髪の男で、しゃべればのろいが動作はすばしこい、かつてジュージュツの選手権保持者にもなった人物だった。この男は、のち、六十歳で引退し、そのとき二十五歳の女性と結婚した）。

外界では戦火が燃えさかっていたが、ワタナ荘の門の内側ではアナンダは心おきなく青春を満喫していた。そのころの彼のことをちょっと想像してみよう。

ふつうのタイ人よりは背が高く、形のよいほお骨が面長の輪郭の中におさまり、まだひげには少し早い。鹿のような東洋人の目に、彼は読書するときだけ眼鏡をかけた。いつも生真面目な顔で、目はまっすぐに前を見ているが、夢見るようなというべきだろうか、どこかちょっと隔たりを感じさせるものがある。無礼に出会っても、すぐには怒らず、よく考えたうえで静かに自分の気持を語る。答えるまえには必ず考える。暗闇を恐れないが、道を横切るときは、教えられたとおり注意深く周囲を見回す。ボイルド・エッグの殻を割るときでも、きちんと教えられたとおりにやる。真面目さとうらはらになったユーモアがなければタイ人とはいえないのだが、彼は、どんなときにも他人を傷つけるような冗談は言わなかった。女性に関する話は絶対にしなかったこと、畜生め！などという言葉を吐かなかったことなどから聖人君子だったという印象を受ける。しかし、学校では、学友たちが心から尊敬し、友人も少くはなかったのだ。弟のプミポンのほうは、頭こそ兄以上だったが、友達づきあいはさほど上手ではなかった。アナンダは、友人関係には弟よりも気をつかっていたようだ。

アナンダのあまりにも非の打ちどころのない人柄は、いくらか王様を敬う旧友たちの敬意に支えられているようでもある。その後に起った悲劇も、人々の記憶の結晶を助けたといえるだろう。しかし、もとの教師や級友たちからの長時間の取材のすえ、彼らが決してセンチメンタルに事実を美化していないことに気がついた私は、しだいにこうした意地悪い疑念を忘れてしまった。アナンダは確かに非の打ちどころがなく、すばらしい性格の持主だったのである。責任感、ユーモア、きっぱりしたけじめ、なにかわからないことがあると、それがわかるまで彼が顔に浮べる素直な当惑の表情、そしてなによりも「詩的」という言葉くらいでしか表現できない心のやさしさ……。秀才ではなかったが、頭は非常によかった。校長だった人は「高度の知的水準に充当」という表現を使っている。そのうえ向学心は旺盛で、記憶力もよかった。

一九四三年、アナンダは十八歳になろうとしていた。少しそとの空気にも慣れたほうがいいという母のすすめで、エコル・ヌーベルの最後の半年を彼は寄宿生として過した。王母殿下は、ワタナ荘の生活があまりに家族的でありすぎるのに気がついていたのだろうか。まもなくアナンダは入学試験にもパスしてローザンヌ大学の法学部に入り、彼の青春、いや彼の人生の最後の年に近づいた。人間は自分の死を予知できるものであろうか。アナンダがそうだったという証拠はなにもない。

大学入学と同時に、それまでの家族だけの閉鎖性が少し晴れたらしい気配がある。法学部は男の学生が十二人と女の学生はのちにふえるのだが入学時はたった一人だった。みんなはすぐに友達になり、ときどきワタナ荘に招待された。マヒドン家の子供たちは楽器が得意だった。アナンダはピアノ、フルート、ギター、バンジョーを弾けた。音楽のできる友人が加って、すぐにジャム・セッションになった。しかし、多くの場合は、アナンダのほうが友達の家へ出かけていった。ケーキを食べ、ときにはワインの杯を重ねながら、学生らしい威勢のいい話がはずんだ。アナンダはレストランへは行かなかったし、映画やコンサートにもごくまれに、しかもたいていは母といっしょにしか出かけなかった。なるべく一般の人の目は避けたかったらしい。

アナンダの人生にとって重大なこの時期の交友関係がどんなものであったか、私はタイの王族や側近の人々から繰り返し聞かされた。それは学友同士の友人関係にすぎなかった、それ以上のものではなかったと、彼らは強調するのだ。この点をだれよりも強く主張したのはセライダリス氏だった。氏は、そのころにはアナンダの離れがたい親友、そして彼と王母殿下とを結びつける紐帯の

役もはたしていたので、聴講生のような形でローザンヌ大学に通っていたらしい。

家族の団結の強さは、一九四四年に家族四人が全員、大学に通うという行為によって、いやがうえにも発揮された。アナンダの姉は、友人に誘われたのからその気になって化学部に入っていた。プミポン王子は理学部を選んだ。そして王母殿下も比較宗教学の単位を取ることにしたのである。大学への通学はこうして家族の行事の一部になってしまった。本質的には、アナンダは相変らずワタナ荘の中に保護されていたといえる。外界、つまり戦争から隔絶され、田園詩のようにやさしい小世界の中で、彼は成人していったのだった。

戦争はほとんどこの一家に余波を及ぼさなかった。スイス政府は配給の特別割当てを申し入れたが、王母殿下は米だけを増配してもらえれば結構だと答えた。石油が乏しいため黒のメルセデスもあまり使えず、兄弟とセライダリスはよく自転車に乗った。ほかに戦争の影響といえば、ヨーロッパ各地のタイ人留学生がスイスに逃げて来たことくらいで、その一人アラム・ラタナクンはワタナ荘の土曜接待日に来てアナンダの姉と親しくなり、まもなく一九四四年七月に結婚式を挙げた。

戦争の余波は、しかし、一家にとっては、ごく表面的なものにしかすぎなかった。ほんとうに重要だったのは門外に吹き荒れる嵐だった。昼夜ぶっとおしの番兵も、それを防ぐことはできない。それはあらゆるニュースの中に、あらゆる新聞の中に、タイ人の留学生とのあらゆる会話の中に、そしてなによりもシャムから届くニュースの中にあった。

ある日、日本の大使が贈りものの米を持ってワタナ荘を訪れた。外交術を心得た王母殿下は、だまって受取り、その米をそっと病院へ寄付した。日本大使のこの訪問は、シャムが置かれている困難きわまる立場を物語るものだった。はるかに離れた祖国で起っているできごとの知らせは、正確な判断をするために必要な細部に欠けていた。ただ明瞭なのは、将来のことは非常に不明だということだけだった。

それに、王がこれだけ長く玉座を離れていて、はたしてシャムの王制は元どおりに復活するのだろうか。王母殿下は、この疑問に対する回答を聞いたのだが、その回

答者というのは、書くにも値いしないほどあいまいな人物で、ただその人物が与えた予見がみごとに適中したことによってだけ記憶される価値があるのだ。というのは、王母殿下が、あるとき、友人がたってすすめたため、ほんの軽い気持で占い師に当ってみたのだが、その占いというのが——アナンダは王であり、成年に達し、平和が回復されれば即位式を待つだけだが、実は玉座にすわるのは弟のプミポンのほうだというのであった。

前に少し触れた相談相手のナイ・アネクにも、こんな話は打明けられなかった。シャム政府は、すでにアナンダの侍従をスイスに派遣し、彼は即位前の王に求められるごくわずかの決裁事項をベルンのシャム大使館に取次ぐ役をしていた。王母殿下は、一九四三年まで勤務していた侍従はお気に召していたのだが、その後継者は気に入らず、自然、家族のことも政治向きのこともナイ・アネクに相談するようになっていた。アナンダの死後、バンコクに流れたうわさは、ギリシャ人セライダリス以上にナイ・アネクのことをさまざまに取りさたしていたので、私もまた、ここで少し彼のことを書いておこうと思う。

ナイは「ミスター」と同じで、本名アネク・スプラビャヤは一九〇五年にバンコクの上流家庭に生れた。マンチェスターとパリで工学の勉強をし、パリではいろいろとプリディの世話になった。スイスへ来たのは肺病の治療のためで、一九二六年にマヒドン殿下夫妻の訪問を受けたのに感激して以後はマヒドン家のために献身することになった。病気は完全に治癒したわけではなかったが、いつも微笑を絶やさぬ、気立てのいい男だった。長いあいだ故国を離れていても、タイ人に独特の誠実さ、穏かな物腰、寛大さを失っていなかった。小柄できびきびしたところは、ヨーロッパで孤独な独身生活を送ったとは思えぬ、忠良なシャム臣民だった。

ナイ・アネクは、自分のアパートから、自転車でワタナ荘へ通い、王母殿下の相談に乗るのはもちろん、家族全員の友人の役割もはたしていた。あらゆることが話題になったが、なによりもよく議論の対象になることが一つだけあった。それは、当時、世界じゅうの人々が考え、議論していたことでもあった。すなわち——「戦争が終ったら」だった。

戦争が終ったらどうなる？　それは、想像できないほ

どの幸福を内に蔵した、はるかに遠い門であり、また未知のものを防いでくれる高い壁でもあった。だが、不確定な要素が多すぎた。戦争はいつ終り、だれが勝つのかがわからないから、戦後を考えることは、どこか夢を考えるのに似ていた。戦争が長引けば長引くほど、戦後についてのさまざまな思惑は現実味を失った。日独伊の枢軸国側の敗北が明白になったときにも、焦点ははっきり定まったわけではなかった。焦点は、むしろ常に大きなクエッション・マークの上にあった。

　そんなある日、突然、侍従が一通の電報を持ってワタナ荘へやって来た。王母殿下は、一読して、それをナイ・アネクに渡した。信じられないことが起こったのだ。「戦争が終ったら」と長いあいだ考えてきた。その問いに、いま答えが出たのがある。

　以下が、その電文だった。この電文は、これまでどこにも発表されたことがない。しかし、国王に対してタイ人が用いる複雑な敬語を普通の言葉遣いに改めた点を除いては、ほぼ電文の全容を伝えるものである。

仏暦二四八八年（西暦一九四五年）九月六日

在ローザンヌ　アナンダ・マヒドン国王陛下

記

仏暦二四八七年八月一日の国会議決に関する国会議長の通告により任命された本摂政は、本年九月二十日に国王陛下が二十歳の成人に達せられる事実にかんがみ、国王陛下が正式に国事を遂行される日が切迫しつつあることを上奏申し上げるものであります。

　本摂政は、国王陛下が首都へご帰還のうえ国事を総攬されるよう伏して願い上げ、同時に九月二十日をもって憲法の規定により本摂政職は停止される旨を申し述べるものであります。陛下のかしこき聖慮を、ひたすらこいねがいつつ……。

　この電文にサインしていた摂政の名は、読者の耳には意外に響くかもしれない。戦前のアナンダのシャム公式訪問のころを思い出してくだされば、意気揚々と首相の地位についたのがピブン将軍だったことをご記憶のはずだ。その当時の摂政は、政府のいいなりになるポストにすぎなかった。ところが、いまの摂政は、政府のいいなりになどなるのを欲しない、いな彼こそシャムの民主主義を推進した人物だった。いや、しかし、ひょっとすると、彼はピブンの威勢に恐れをなし、いいなりになる決心をしたのだろうか？

　——そんな危惧を抱く人がいるかもしれない。だが、私が調べあげた真相は、それとは正反対なのだ。そして真相を解きあかしていくにつれて、もっとも本質的な疑問も解明されるだろう。この電文は、打電されたとき、すでにアナンダの死亡宣告書になるべく意図されていたのかどうかという疑問が。

　電報を受取ってから九カ月後にアナンダは死ぬのである。そして、アナンダの暗殺者に擬せられたのは、とりも直さず電報の発信人——摂政のプリディであった。

5

ここで目を転じて、アナンダがローザンヌのワタナ荘で成人していったあいだにシャムで何が起ったかを見てみたい。母国への彼の公式訪問と摂政プリディから記念すべき電報を受取るまでの、その大部分を戦争が占めていた歳月を、である。

一九三九年一月にアナンダ一家がバンコクを離れたとき、ピブンを権力の座に押し上げたシャムの政治的条件は、まだ力を出しきったわけではなかった。民主主義を夢見ていた人々は希望を破られ、叛乱を企てた。その動きを事前に察知したピブンは、王制派が絶対王制の復活をねらっているという口実をもうけて、まず陸軍部内の反対派を手ぎわよく処分してしまった。口実をほんとうらしく見せるため、彼は捕えた貴族の多くに一般の犯罪者と同じ拘置所に入れるという屈辱を与えた。政治犯のうち十八人が処刑され、十人に終身刑が言渡された。捕えられた人々の中には、王家の血縁、それもアナンダの叔父に当るランシット王子も含まれていた。芸術が好きで気さくで、政治的な陰謀からはおよそ遠い人である。この人の名は記憶しておいてほしい。

こうしてピブンは、だれもゆるがすことのできない天下人になった。軍を完全に手中に収めただけでなく、王制派に加えた最後の鉄槌は、あらゆる反対派の息の根をとめてしまった。文民、とくにプリディを支持する自由主義者は、もうなんの力もなかった。国会での彼らの存在は、基本的にファシストのピブン政権に民主主義の仮面を着せる役割を与えられていたにすぎない。プリディが閣僚の地位にとどまっているのも、かつて彼を祖師と仰いだピブンのお情けだった。民主主義へのプリディの情熱から始った革命が、ほぼ完全に彼の希望を粉砕したような結果に終ったのは皮肉というほかない。

プリディは、しかし、こんな情勢を驚くべき平静さで、さりげなく受けとめていた。底知れぬ忍耐力をもって公務に当り、倫理政治大学で教えながら、ひたすら時流に耐えた。

プリディは三十八歳になっていた。〝聡明〟なシャムの政治家の中で彼は例外で、ほぼ六年間を通じて政府の顕職にあったというのに、蓄財からは縁遠かった。ときには何カ月も給料を持って帰るのを忘れ、妻が夕食のおかずが少いことを弁解しながら訴えるのを聞いて、はじめて思い出すことさえあった。

結婚した当座、プリディ夫妻は両親の邸内に家を持っていたが、のちに親にもらった土地に建てた新居に移った。そのときも建築費に当てたのは彼が書いた法律書の印税だった。政治に没頭していたが、私生活では幸福だった。彼は大切なことについては決断を下したが、子供の面倒や日々の家事はすべて夫人にまかせていた。息子と娘が二人ずつで、それぞれに大学へ進んだが、娘の一人はロンドンの王室音楽院に入学した。

彼を崇拝する学生たち、熱心な支持者のほかにも、プリディは多くの友人を持っていた。友人の中にはタイ人の常識では考えられないほど粗野だったりヅケヅケとものをいう連中がいたが、プリディ自身はあくまでも礼儀正しく、両親への昔風の礼を欠かさなかった。

プリディの人柄をうまく説明するのはむずかしい。友人をよく家へ招いて、パリ留学時代に覚えたフランス料理を自分でつくってみせたりしたが、それでいて、世を捨てた禅僧のような雰囲気を感じさせずにはおかないのだ。仕事に取組むと倦むことがなかったが、パーティーには出ず、公式行事もできるかぎり避け、めったに酒杯を手にしなかった。話すときには簡潔な言葉を用い、生活ぶりも簡潔、質素だった。こんな彼の性格、また彼の態度に現れた静かなあたたかさ、常にほおに浮ぶ微笑……そんなものは、彼に会う人々をアットホームな気持にさせた。しかし、そんな人柄も、身を持すること厳格な彼の内部に深く入り込むのを人々に許したわけではなかった。プリディは、やはり、手の届かないところにいる人であった。

プリディの人格の魅力は、そのキラキラ光る目や、英語、フランス語、タイ語の何を使ってもみごとに表現される頭脳の明晰さではなくて、実は、この近寄りにくさにあった。プリディの敵は、彼がこっそりと権力を狙っているのだと騒ぎたてたが、支持者たちは彼の温情と理想主義をほめたたえた。一つ一つの事実を検討すれば正しい解釈が得られるかもしれないが、いまそれをやってみるのは、あまり意味がないだろう。一つだけ注目され

5

ここで目を転じて、アナンダがローザンヌのワタナ荘で成人していったあいだにシャムで何が起ったかを見てみたい。母国への彼の公式訪問と摂政プリディから記念すべき電報を受取るまでの、その大部分を戦争が占めていた歳月を、である。

一九三九年一月にアナンダ一家がバンコクを離れたとき、ピブンを権力の座に押し上げたシャムの政治的条件は、まだ力を出しきったわけではなかった。民主主義を夢見ていた人々は希望を破られ、叛乱を企てた。その動きを事前に察知したピブンは、王制派が絶対王制の復活をねらっているという口実をもうけて、まず陸軍部内の反対派を手ぎわよく処分してしまった。口実をほんとうらしく見せるため、彼は捕えた貴族の多くに一般の犯罪者と同じ拘置所に入れるという屈辱を与えた。政治犯のうち十八人が処刑され、十人に終身刑が言渡された。捕えられた人々の中には、王家の血縁、それもアナンダの叔父に当るランシット王子も含まれていた。芸術が好きで気さくで、政治的な陰謀からはおよそ遠い人である。この人の名は記憶しておいてほしい。

こうしてピブンは、だれもゆるがすことのできない天下人になった。軍を完全に手中に収めただけでなく、王制派に加えた最後の鉄槌は、あらゆる反対派の息の根をとめてしまった。文民、とくにプリディを支持する自由主義者は、もうなんの力もなかった。国会での彼らの存在は、基本的にファシストのピブン政権に民主主義の仮面を着せる役割を与えられていたにすぎない。プリディが閣僚の地位にとどまっているのも、かつて彼を祖師と仰いだピブンのお情けだった。民主主義へのプリディの情熱から始った革命が、ほぼ完全に彼の希望を粉砕したような結果に終ったのは皮肉というほかない。

プリディは、しかし、こんな情勢を驚くべき平静さで、さりげなく受けとめていた。底知れぬ忍耐力をもって公務に当り、倫理政治大学で教えながら、ひたすら時流に耐えた。

プリディは三十八歳になっていた。〝聡明〟なシャムの政治家の中で彼は例外で、ほぼ六年間を通じて政府の顕職にあったというのに、蓄財からは縁遠かった。ときには何カ月も給料を持って帰るのを忘れ、妻が夕食のおかずが少いことを弁解しながら訴えるのを聞いて、はじめて思い出すことさえあった。

結婚した当座、プリディ夫妻は両親の邸内に家を持っていたが、のちに親にもらった土地に建てた新居に移った。そのときも建築費に当てたのは彼が書いた法律書の印税だった。政治に没頭していたが、私生活では幸福だった。彼は大切なことについては決断を下したが、子供の面倒や日々の家事はすべて夫人にまかせていた。息子と娘が二人ずつで、それぞれに大学へ進んだが、娘の一人はロンドンの王室音楽院に入学した。

彼を崇拝する学生たち、熱心な支持者のほかにも、プリディは多くの友人を持っていた。友人の中にはタイ人の常識では考えられないほど粗野だったりヅケヅケとものをいう連中がいたが、プリディ自身はあくまでも礼儀正しく、両親への昔風の礼を欠かさなかった。

プリディの人柄をうまく説明するのはむずかしい。友人をよく家へ招いて、パリ留学時代に覚えたフランス料理を自分でつくってみせたりしたが、それでいて、世を捨てた禅僧のような雰囲気を感じさせずにはおかないのだ。仕事に取組むと倦むことがなかったが、パーティーには出ず、公式行事もできるかぎり避け、めったに酒杯を手にしなかった。話すときには簡潔な言葉を用い、生活ぶりも簡潔、質素だった。こんな彼の性格、また彼の態度に現れた静かなあたたかさ、常にほおに浮ぶ微笑……そんなものは、彼に会う人々をアットホームな気持にさせた。しかし、そんな人柄も、身を持すること厳格な彼の内部に深く入り込むのを人々に許したわけではなかった。プリディは、やはり、手の届かないところにいる人であった。

プリディの人格の魅力は、そのキラキラ光る目や、英語、フランス語、タイ語の何を使ってもみごとに表現される頭脳の明晰さではなくて、実は、この近寄りにくさにあった。プリディの敵は、彼がこっそりと権力を狙っているのだと騒ぎたてたが、支持者たちは彼の温情と理想主義をほめたたえた。一つ一つの事実を検討すれば正しい解釈が得られるかもしれないが、いまそれをやってみるのは、あまり意味がないだろう。一つだけ注目され

るのは、プリディはときどきカード・ゲームをやったが、むしろチェスのほうを好んでいたことだ。これは、相手を負かすのに僥倖よりも戦略をえらんだ彼の性格の一端を示すものといえないだろうか。

プリディの敵はピブンではなかった。それは大衆の無知と、悪意ではないにしても彼らの政治への無関心だった。民主主義にとってのこの基本的な欠陥を、彼は時が治癒してくれるものと信じ、それまでのあいだ国事に精励することにしたのだ。敵であるピブンは、むしろ喜んでいた。プリディが倫理政治大学を創設したのに対抗して彼は自らをチュラロンコン大学総長に任命したが、そんなピブンは、インテリのあいだのプリディの人気をねたむことはあっても気に病みはしなかった。実権は、すべて彼の手中にあったのである。プリディが敵対行動に出ないかぎりは、持ち前の寛容さを発揮して放っておくことができたのだった。

ピブンは、プリディの頭脳を必要としていた。とくに経済面での助力がいった。世界が大戦に突入しようとしているときだ。軍備増強のための資金を調達しなければならなかった。ピブンの野望はつのり、彼はシャム防衛のために必要以上の戦力を持とうとしていた。

彼は宮殿のような官邸に住んでいたが、別にバンコク市内バンガピの英国大使館に近い街路の奥、運河のほとりに私邸を構えていた。美しい芝生のある広い敷地に二階建の家が三軒あった。一つは子供用、一つはピブン夫妻用、まん中の小さいのがピブン個人用の家だった。

見かけははでではないが、たっぷりとゼニのかかったらしいその応接間で、私は、最近、ピブンの二人の息子に会った（あいそのいい彼らが誇りをもって父を語ったことを、ピブンと彼らのために書き添えておこう）。英国風の応接間は、緑色の皮を使ったインテリアで、木組みにはタイ式の金の縁どりが施され、奥はゴシック風の高天井になっていた。私は、ただすわっているのではなくて、どこか宮殿の中にまつり上げられてでもいるような感じを持った。ピブン将軍が彼のさらに新たな栄光を夢に見たのはここなのだ。折りも折り、ヒトラーとムッソリーニは彼の想像力を刺戟し、すぐそばでは日本がダイナミックな国家主義のお手本を示していた。

ヒトラー・ユーゲントをまねて、ピブンもまた急進的な愛国心に燃える青年団を組織した。彼はシャムをタイと改名し、フランスやイギリスの植民地になってしまったかつてのシャム領を奪回しようという「全タイ運動」に拍車をかけた。目ざすは東南アジアのヒトラー総統であった。

ピブンが自らすすんで大それた野望に賭けたのか、あるいは野望のほうがピブンの気づかぬうちに彼をとりこにしたのかは、だれにもわからない。とにかく東南アジアのヒトラーを目ざす気持は、はじめのうちは、それほどはっきりしたものではなかった。ヨーロッパでまず戦争が始ったとき、彼はタイの中立を宣言し、フランス、イギリス、日本と不可侵条約まで結んだのである。

それは一九四〇年六月のことだった。しかし、フランスの敗北は、あまりにも大きい誘惑だった。三カ月後、彼は、陸海空軍を動員してフランス領カンボジアに攻め込んだ。フランスがタイに対して打ってきた手もきわめて拙劣なものだったので、ピブンによるハゲタカ的侵略行為も、かなりのていどに正当化されていた。とにかく、カンボジア侵攻は当面の大成功だった。なぜなら日本が〝仲裁〟に入り、まんまとカンボジア領の一部をタイに編入させてくれたからである。

ピブン自身も〝総統〟をたたえる民衆の熱狂に取巻かれた。人々は勝利に酔い、西欧スパイ組織なるものは粉砕され、陸軍はバンコクを凱旋行進し、市内のロータリーには巨大な戦勝記念碑が建立され、ピブンはこのとき自分自身を元帥に昇任した。

しかし、タイに対する日本の〝友情〟は、とどまるところがなかった。大日本帝国は、まず経済的な面から、タイの締めつけにとりかかった。ピブンは再び中立を宣言し、百万の兵力がわが中立を護持するだろうとミエをきった。プリディはピブンに勧めて、国内外の全タイ人に祖国独立のために生命を捧げるべしという法律を制定させようとした。これだけの決意を表明すれば、侵略者を防げるだろうと読んだからである。外国を刺戟しない範囲で力の集中を狙っていたピブンは乗り気になった。それに、もし都合が悪くなれば、法律などいつでも変えることができるのだ。だが、プリディにとっては、この法律はもっと重要なものを意味していた。国民に奇跡のような将来と希望を約束した一九三二年の革命が無残に夢破れたのち、ひたすら忍従し沈黙を守ってきたプリディにとって、それは引返し不能地点であったのだ。しか

し、最大の試練は、だれも予測しなかったほど早くやって来た。法律が成立するかしないかに、タイは最後通告を突きつけられたのである。

一九四一年十二月七日の夜遅く、日本大使がタイ外相邸を訪れた。彼は、丁重に来意を述べた——ガラガラヘビの息のように丁重に。

日本大使は、英領ビルマとマラヤを攻撃するために、日本陸軍のタイ領内通過を求めていた。しかもタイ政府の返事を午前一時までにほしいという。

ピブンは、そのとき、隠れていたとも危機を察して事前にバンコクを離れていたともいわれる。真相はともかく、ピブンの不在によって、決断の責任は最先任の閣僚、つまりプリディの肩にかかることになった。閣議を開いて責任を共同分担する時間はもうなかった。プリディが受けとめた責任の重さは、想像を絶するものだったろう。強大な日本軍は国境のそとに待機して、もし平和主義者プリディが彼らの思いどおりにならなければ、彼も彼の国タイも一気に蹴散らそうと満を持していた。プリディにとっては、人生の大転回点だった。

そのプリディは、みごとに自己の偉大さを証明した。徹底抗戦を命じたのである。だが、この危機は、ピブンにとっても一大転回点だった。そして、彼のほうは、矮小さを立証した。翌日になって姿を現したピブンは、侵攻してくる日本軍がタイ陸軍の強固な抵抗線に達した瞬間にプリディの命令の撤回を命じたのである。南部タイではいくつかの衝突があり、何百人かのタイ人が死んだが、日本軍の主力はらくらくとバンコクに入城した。

チャーチルの最後の訴えも効を奏さなかった。シャム湾でイギリスの誇りだったプリンス・オブ・ウェールズとレパルスが撃沈され、イギリス陸軍はヨーロッパ大陸からも追払われた。アメリカは、バンコク占領と同じ日に真珠湾をたたかれ、しばしの麻痺に陥った。連合軍にとって、すべては暗澹（たん）の極だった。

国土が蹂躙（じゅうりん）されるのを防がねばならなかった——という意味で、ピブンの決断は、あるいは許すべきかもしれない。しかし、侵略してきた日本軍と同盟を結んだ点では弁解の余地がない。彼は、軍事同盟条約を、ほかならぬエメラルド仏寺院で、日本とのあいだに結んだのである。プリディは、こんな条約に関係するのを拒否した。不名誉を担うよりはと、彼は、いさぎよく閣僚のポスト

を捨てた。

プリディの辞任は、ピブンにとっては甚だ具合が悪かった。政府のそとに出たプリディは、面倒な反対運動をやらかすかもしれない。ちょうど、いつも政府のいいなりになっている摂政評議会に空席があった。プリディをここに据えておけば、おとなしくしているに違いない。評議会といっても、プリディのほかにはアーチット摂政だけで、この男は夫人のほうこそ才色兼備だったが、彼自身は文学好きの弱々しい伊達男にすぎなかった。

日本と同盟を結んでしまったピブンは、英米に対して宣戦を布告しなければならなかった。しかし、民主主義のかっこうだけはつけておきたかった彼は、国会の批准を求めた。議員の多くは欠席し、顔を見せた連中の多くは、ピブンによって議員に指名された面々だった。プリディが地方へ出ていっているすきを狙って、彼は、アーチット摂政にも署名をさせた。これだけの手続きを踏んだので日本は感激し、マラヤとビルマの各一部分をタイに割譲した。

それからの日本は、戦争遂行のためにタイを自由に利用した。ただ、ビルマ国境の泰緬鉄道建設工事を除くと、西洋人の被収容者には、さほど残虐行為を加えなかった。日本人は、タイ人に対してはさらに寛容で、少くとも法律的にはピブンに率いられたタイ政府に口出ししなかった。（ピブンも、戒厳令を出しはしたが、みせかけだけの国会はそのままにしておいた）バンコクへの連合軍の空襲は、ないに等しかった。それに食糧の不安もない。戦争に参加したからといって、タイは格段、痛い目をする心要もなかった。

東南アジアのヒトラーを自認するピブンは、アホらしいことをやり始めた。バンコク唯一の英字新聞は日本軍の検閲下にあったが、紙面には毎日、同じスローガンが刷り込まれていた。「国家は一つ——タイ。指導者は一人——ピブン。目標は一つ——勝利！」　ピブンの腰ぎんちゃく閣僚の一人は宣言した——「太陽は偉大だ。だがわれらの総理はもっと偉大だ！」

太陽よりも偉大なそのピブンは、文明という名の新しい宗教をタイに導入した。無定見きわまる話だが、彼は文明の名のもとに西欧化を推進した。女は帽子を着、手袋をし、靴下をはかなければならない。違反者は処罰するという布告だった。口じゅうが真っ赤になるビンロウ

ジュの実の服用も直ちにやめよとおふれが出た。ピブン自身の母も、しょうことなしにビンロウジュの実を噛むのをやめなければならなかった。全国のビンロウジュの木が伐（き）り倒された。また別の布告によると、夫たるものはこれまでのように妻をないがしろにしてはならず、帰宅のさいには必ず妻に接吻すべしとあった。かと思うと愛国精神を鼓舞するため、パーティーを開くときには、たとえそれがどんなプライベートなパーティーでも、一夜に一度は必ず全員がタイ・ダンスを踊らねばならないと定められた。内容にくらべて言葉だけは厳粛きわまる政府命令を、タイ国民は軽蔑しながらも、表面は大いに面白がっていた。

しかし、話がこれだけであったら、タイは醜悪な侵略者の仲間入りをし、歴史に永遠の汚点を残すという誤ちを犯したわけである。ただ、話は、実をいうと、これだけではなかったのだ。

タイが英米に宣戦を布否した一九四二年一月、ワシントンにいたシャム大使（訳注　当時は公使）セニー・プラモートは、チャクリ王家の一族だった。弟と並んでシャムが誇るインテリ兄弟として有名なセニーは、王子の子に当たり、例の逓減爵位法によってモンムラチョンの位（ふつうモンと略称）を持っていた。モン・セニーはオックスフォード法科でバーケンヘット賞を獲得、バンコクに帰ってからは法務省に勤務するかたわら、倫理政治大学で教えていた。プリディの目にとまったのはこのときで、彼はそのプリディの推薦によってアメリカ公使という要職をピブンから与えられたのである。ワシントンに赴任してまもなく戦争が勃発した。歴史は、まるで傘をもたない男の頭上に降り注ぐ驟雨（しゅうう）のように彼を襲った。

そのときの彼の気持は、容易に想像できる。粋（いき）で、それでいてなかなかのインテリで小ぶとりのからだを、わざとさりげなく高価なスーツで包み、真っ白なカフスや左手の指には、これまたさりげなく宝石が光っている。だが、そんな優雅な手が戦争宣言文を国務省へつきつけることができただろうか。日米開戦は、この生活享楽者セニーから生活の楽しさを取り上げてしまった。

セニーは、自分が弁護士であること、チャクリ家の一員であることに思い至った。そして戦争宣言文を引出しの中へしまいこんだ。だから、アメリカに対しては、タイは一度も開戦を通告していないことになったわけである。セニー自身は、全タイ人はどんな事態に当っても国家のために全力を尽さねばならぬというプリディ制定の法にのっとって行動することにした。こうして有名なサンフランシスコからのラジオ放送の中で、セニーは、ピブンに率いられたバンコクの日本傀儡（かいらい）政権を認めず、祖国を救うために自由タイ運動を組織すると宣言した。

在米のタイ人留学生百人以上が自由タイ運動に加わり、米陸軍の訓練を受けることになった。イギリスで、同様のグループの中心になったのは、私たちの物語にとって非常に重要な人物である。その人の名はスバ・スワット王子（それよりもタンチンというニックネームで知られていたが）で、モンクット王の孫に当り、プラチャーディポク王妃の弟で、王の親衛隊長をつとめたこともある。ウールイッチの卒業生だった彼は、ヨーロッパの戦争勃発と同時にチャーチルに協力を申し出、英陸軍に編入された。そのタンチンが、若いタイ留学生を訓練し、彼らと苦難をともにする決心をしたのだ。

セニー・プラモートのサンフランシスコ放送は、予期以上の効果があった。ＢＢＣ放送がそれを中継して極東へ流し、プリディの耳に届いたのである。セニー演説を聞いて、プリディの心は躍った。なったばかりの摂政というポストは、政府部内の事情にも通じ、同時に独自の行動をとることができる便利なものである。タイ国内に自由タイ運動をつくり、抗日地下運動もやろうと思えばできる。

熟慮のすえ、プリディは、地下運動の組織づくりに乗り出した。

バンコクの暑苦しい路地から田舎のジャングルに至るまで、全国各地にゲリラ活動と破壊行動のためのグループが生れた。町では、商店主、官吏、医師などがそれぞれのグループのリーダー宅に集って武器取扱いの講習を受けた。郊外へ出かけるピクニックが急に大流行したが、それは人目につかないところで訓練をするためだった。地方では、政府の出先機関の役人や農夫も参加した。一九四二年が終わるころには、自由タイ運動は、かなり強固なものになっていた。一九四三年に入ると、それまでは政治的な動きの好きな陸軍とは一線を画してきたタイ海軍の幹部将校たちも参加した。武器はたりなかったが、人数は六万人にもふくれ上った。それぞれに命

がけの仕事だが、なかでも献身的だったのは地下運動の中心にいたプリディだった。

ピブン元帥は、地下運動のことを知っていたかどうか。彼は、少くとも自分の人気が衰えてきているのに気づいていた。一時は、現在の地位を確保するため、王として即位しようかとさえ考えた。チャクリ王朝の開祖も、もとはといえば将軍なのだ。だが、王室尊崇の念のあつい日本軍の反対で、この野望は実現しなかった。

王位簒奪に失敗したピブンは、さまざまな圧力や欺瞞（ぎまん）を用い始めた。一九四三年二月には、国会の反対派を根こそぎにするため、指名議員だけによる構成に変えようとしてアーチット摂政に裁可を強要した。アーチットは倫理政治大学やグランド・パレスに近いメナム川岸のプリディ摂政官邸に逃げ込んだ。海軍内部の自由タイ運動派は、直ちに川に面した官邸背後のパトロールを始め、海兵隊員を上陸させて陸側の正門を守った。さすがのピブンも、血を流してまでアーチットを引きずり出すことはできなかった。

二、三日で危機は去ったが、この事件は、ある意味で、非常に重要なものであった。というのは、このときにはじめてプリディに会った海軍将校の中にワチャラチャイ大尉がいたからである。ワチャラチャイは、この数カ月後にはプリディ付きの武官に任命される。そして、当時のせっぱつまった自由タイ運動の日々には予想だにされなかったことが、まもなくプリディとアナンダの死を結びつけることになるのだ。当時は、ただピブンの動きが自由タイ運動派の決起の機が熟したのを感じさせただけであった。決起は可能だ、武器さえあれば……。

プリディは、二人の使者を送り出した。各自が千ポンド分の現金をベルトに縫い込み、国境を越えて中国へ入り、日本軍と戦っている蒋介石と連絡をとろうという計画だった。非常に危険な脱出行だったが、使者の一人は一九四三年五月、無事に重慶へたどりついた。

連合軍は、そのころ、蒋介石を信じきっていた。タイを含む東南アジアにまで中国領土を拡張しようという彼の野心にも気づかなかった。しかし、こんな野心を持つ蒋介石は、プリディの使者に、連合軍代表との接触を思いとどまらせようとした。使者は蒋介石の禁令をおかして重慶の西側筋とひそかに接触を始めたが、まもなく謎の死をとげた。蒋政府側の発表では「急性胃ガン」ということだったが。

使者が持ってきた情報のおかげで、連合国はタイ内部の情勢、だれが敵でだれが味方かなどの重要なデータを知ることができた。このころには、自由タイ運動の戦士たちは、アメリカのOSS（戦略活動局）の一支隊として続々と重慶に集ってきていた。イギリスからの一団は第百三十六部隊に編入されてインドにいた。両者ともルイス・マウントバッテン卿の東南アジア司令部の指揮下に入り、日本軍に対する反撃の機をうかがっていた。

ヨーロッパでは、すでに潮の向きが変っていた。ムッソリーニの失脚は、事態が微妙に転換しつつあることをピブンにも教えた。ピブンは立場を変える準備を始めた。彼は、タイの首都をバンコクから北西部の町へ移そうとした。日本軍の攻撃からは守りやすいし、ビルマにいる連合軍とは連絡をとりやすい町へ政府の座を移そうというのだ。だが、日本人たちはだまされなかった。連合軍の東南アジア司令部が傍受したバンコク駐在日本大使の電報は、日本軍がピブンの意図に疑惑を抱き、ピブン政権に不安を持ち始めていることを示唆していた。

一九四四年五月には、OSS系の自由タイ運動は、中国から北部タイへ侵入し始めた。苦難に満ちた進撃だった。同じころ第百三十六部隊の自由タイ運動も行動を開始した。無電通信機を持った一隊員がタイ領に降下したがピブン軍に捕えられ、バンコクの拘置所に放り込まれた。これは、だが、かえって幸運だった。看守が自由タイ運動の国内隊員だったので、プリディの命令でひそかに特別待遇が与えられ、艦房は秘密の送信所として使用されることになった。プリディは、彼を通じてマウントバッテンと直接に連絡をとり、まもなく東南アジア司令部ではプリディのことを指す「ルース」という名が特別な重みをもって語られるようになった。シャムとアナンダの将来を決める重要な会議がおぜん立てされた。英国サイドの自由タイ運動指導者スパ・スワット王子は、英国空軍の水上機で南タイの海岸に夜間着水し、一隻のランチに迎えられた。ランチの指揮をとっていたのは、のちにアナンダの暗殺者として人々に記憶されることになる（もちろん、当時はそんなことはわからなかったが）ワチャラチャイ大尉だった。大尉は、王子を乗せた船を巧みに操り、ピブンの海軍や日本軍のパトロールの目をくぐりながら、メナム河畔のプリディの官邸へ案内し

た。

彼らが討議した軍事的な戦術のことは、ここにくわしく書く心要もないだろう。しかし、アナンダのやがて来る死に関係のあることは、この会議の席上で、戦後が討議されたことだった。スパ・スワット王子は、その夜のうちに無事バンコクから脱出したのだが、プリディは彼に向って、もし自分が戦後も権力の枢要にあるなら、アナンダ王の下で民主主義的な理念に立脚した国家的統一のために尽力しようと約束した。プリディはまた王制派が圧倒的多数を占める政治犯を釈放し、王子たちの政治参加を禁止した法を撤廃しようと確言したのである。

その翌月、ピブン内閣が倒れた。

ピブンの命令で建設中の新首都は、すでに工事中の強制労働者二万人が病気で死ぬという惨事を招いていた。そこへ自由タイ運動のシンパが浸透していた国会が、新首都法案を否決したのである。「トラを洞窟から追い出すことはできない」というタイの格言が、必ずしも正しくないことがわかったわけだ。それまではいいなりだった国会にも押切られ、日本軍の支持も失ったピブンは、辞職するよりほかなかった。アーチット摂政も連袂して辞めた。摂政で残ったのはプリディだけである。しかも裏では、彼は自由タイ運動の国内指揮者だった。

しかし、日本の勢力はまだ強大だった。決起の時機が熟するまで、表面をつくろわねばならなかった。プリディがつくらせた新内閣は、リベラル派の文民と海軍が中心で、裏では自由タイ運動に力を貸しながら、表面はわざと大声で日本に忠誠を誓った。自由タイ運動は、その間にも、空輸によって兵員、武器を徐々に増強していた。日本へのみせかけをより完全なものにするため、プリディは臨時首相を任命した。これからの話に、非常に深く関係してくる人物である。

クオン・アパイオン。——長躯痩身、眼鏡をかけたクオンは、自宅ではコーヒー色のパジャマふう中国服を着、タイでは珍しいほど満開に咲かせた庭のバラの花に鼻を埋めているか、上流家庭ではたいていガラス・ケースに入れて客間に飾っている煎茶セットの美しいコレクションに囲まれて応接室にすわっているかだった。矛盾に満ちた男だが、なによりもおどけた人物として知られていた。

カンボジア系中国人の血を引いたクオンは一九二〇年代のパリへ工学の勉強に留学し、従ってプリディに率いられる留学生グループの一人でもあった。のちに一九三二年の革命時には、革命推進団の一人として、逓信省勤務の地位を利用し、通信の保全に功があった。ピブンの内閣には、プリディ派として入閣したこともあった。

新首相クオンに与えられた役目は、道化師という役者的な彼の才能をいかして、うまく日本人をだますことだった。大きなしぐさを使っておどけてみせる以外に抗日は不可能な状況だった。彼のタイのニックネームは「道化師」で、事実、彼については、おどけた話がいくつもあった。

ピブン元帥が全国民に帽子を着るようにとの布告を発したとき、クオンは帽子をかぶって閣議に出席し、会議中も脱帽することを拒否した。いつかぶらねばならないか、いつ脱がねばならないかを考えると注意力が散漫になる、というのが彼の主張だった。また、ピブンが兵役時代の彼を大尉に昇進して恩を売ろうとしたとき、クオンはわざわざ自分が拍車を前後さかさまにつけているといううわさをつくって、それを言いふらさせた。

こうした奇行のうらには、もちろん、ちゃんと慎重な配慮があるので、プリディの指名で首相に就任したクオンは、およそ世の首相たるものがかつて口にしたこともないようなうそをついて、日本人をだまし始めたのだった。たとえば、自由タイ運動がつくった秘密飛行場を発見した日本人が色をなして詰め寄ったとき、クオンは呵呵大笑して「あれはトウガラシを植える畑をつくってるんですよ」と説明した。首相の説明がうそでないのを証明するため、自由タイ運動の勇士たちは、あわてて滑走路にトウガラシを播かねばならなかった。業を煮やした日本人たちが、いったいタイ政府は日本を裏切るつもりなのかと詰問すると、クオンは即座にきりかえした。「とんでもない。あなたがたのほうが私たちを裏切るんじゃないかと、さっきまで話していたところですよ」。だまされた日本人は、不信の種を播く連合軍の宣伝には乗らないようにと懇請して引下ってしまった。

道化師クオンは、こうして巧みに時間をかせぎながら、自由タイ運動が力をつけるのを待った。試練の時は迫っていた。一九四五年の初夏には、ビルマでの敗北によって日本の東南アジア支配はゆるぎ、連合軍はマラヤ解放を準備していた。タイの内情安定は、タイを基地と

して使う日本にとっては絶対的な必要条件だった。東南アジア司令部から連合軍の進撃開始の連絡を受けたプリディは、自由タイ運動に行動開始の指示を与えようとしていた。同じころ、自由タイ運動の存在について確信を持った日本軍は、決起に先立って彼らを叩こうと準備していた。しかし日本軍が動き出す直前、そして自由タイ運動が緊張のぎりぎりの限界に追いつめられた瞬間に、歴史は大転換した。八月六日と九日、広島と長崎に原爆が投下されたのである。

　日本は崩壊した。タイにおいては、自由タイ運動の戦士たちが決起の機を失った。おかげで多くのタイ女が寡婦になりそこねた。

　歓喜、安堵、そして興奮がうず巻いた。希望と挑戦に満ちた「戦争が終ったら」という合言葉が、いま現実になったのである。しかし、連合軍の第一陣として第七インド師団がバンコクに到着すると、多くのタイ人は、法的にはタイは連合国の敵であったという事実を思い出し、また外国軍の占領が始るのかと心配し始めた。だが、それは杞憂だった。アメリカは、タイの宣戦布告を無視したし、イギリスは、国家のプライドを傷つけないでほしいという自由タイ運動のアピールに理解のある態度を示した。タイでのイギリスの権益は、アメリカのそれ以上に破壊されていたが、英軍は日本軍の復員業務に必要な兵員を残しただけで、スパ・スワット王子を通じてプリディと友好的な関係のもとに平和条約交渉を開始した。

　プリディは、すぐさま新しい民主主義の建設にとりかかった。おぞましいピブンの記憶につながる「タイ」は廃止され、昔通りの「シャム」が、まるで戦争のあいだ金庫にしまい込まれていた宝石のように取出された。しばらく使わなかったために「シャム」は、よりいっそうすばらしく響いた。

　しかし、王なくてなんのシャムであろう。それに、王様はちゃんとスイスにいるのだ。戦争が終った年の九月、こうしてプリディは前に紹介した（七二ページ）電報を打って、アナンダに帰国をうながしたのである。

　プリディとアナンダ、それに二人にまつわる多くの人々の生命の糸は、かくて一本に綯い合わされ、戦争を生抜いて平和を喜ばねばならない瞬間にかえって破滅のときを迎えることになる。当時は、だが、ワタナ荘の人々は、プリディの電報に破滅の予感を抱いたわけではなかった。ただ、あまりにも明るい未来の輝きに、思わず手をあげて目を覆ったにすぎなかったのだ。

　一週間後にアナンダは返電を打った。

在バンコク　摂政閣下

国事遂行を求める手紙を受取りました。私は、国に尽す熱意には燃えていますが、学業を終了したあとなら、よりよい形で尽すことができると信じます。七月には法学部入学後最初の試験にパスしましたが、これから一年半のあいだにもう一つの、よりむずかしい試験に合格しなければなりません。そのあと博士論文の審査には、もう一年が必要なのです。私は、あなたが私の向学心を理解してくれるものと信じます。

　もしあなたと政府が同意してくれるなら、私は、学業終了前の一時訪問という形で祖国を見たいと思います。あなたが私の名代としてはたし、現在もりっぱにはたしつつある困難な職務に対して心からの感謝を送ります。

アナンダ・マヒドン

返電を受取ったプリディは、慎重に考えた。アナンダには、ぜひともバンコクに帰ってもらいたかった。国王の存在は戦争終結によって達成された国家統一を、より完全なものにするだろう。彼は一九三二年の憲法をより自由なものに改正するつもりだった。国王の帰還は、その新しい民主主義への国民の歓迎ムードをうながすことになるだろう。それに、プリディは、戦後のヨーロッパ諸国にきざし始めた共同体構想に似た東南アジア連邦のようなものを考えていた。新しいものへの出発、新しい時代の第一歩である。やはり国王にいてもらわなければならない。

　陛下の九月十四日付ご返電を、摂政および政府は衷心の感謝をもって拝読いたしました。陛下はご学業終了前に首都を訪問されたい聖慮のよし、恐悦至極でございます。（憲法改正について）つつしんで言上申し上げますれば、陛下が親しくご帰国のうえ、ご自身のご関与と裁可によってこの重要案件を処理していただけますなら、たとえ短期のご帰国であっても、国益上このうえなく望ましいことと思うしだいであります。

プリディは、さらにつけ加えて、イギリスと交渉して国王帰国用の飛行機を準備しているところだと書いた。なるべく早く帰国してほしいという意向を巧みににおわせたわけである。電文は「陛下が本摂政の招待をお受けくださり、短期間の王国訪問のことご嘉納のほどを心から祈りつつ」という文句でしめくくられている。

アナンダの返電は短かかった。プリディと政府が憲法に関する問題を「公正かつ有能に」処理するものと信じているし、「私は経験が浅い」ので、バンコクに帰ってもあまり役には立たないだろうが「もし摂政が私の短い訪問を望むなら喜んで招待を受ける」という内容だった。ただ電文の末尾に秘書が一つだけ条件をつけていた。

> 王母殿下のご希望によれば、国王陛下は、来る十二月初頭に当地をご出発のうえ、一月第一週にはスイスにご帰還されることが、ご学業その他の関係から見てもっとも望ましいとのご意向でございます。

そのときの王母殿下には、もちろん神ならぬ身の知るよしもなかったのだが、追伸の中に述べられた彼女のこの希望は、ついに天の聞き入れるところとはならなかったのである。国王の祖国訪問は、彼女の希望どおりにアレンジされ、ほどなく同様にことなく終るはずだった。一九四五年十二月の第一週に、アナンダは母と弟とともにワタナ荘を出た。姉はお産（女の子だった）のすぐあとだったので、こんどは同道できなかった。

空港は、見送りの人々で混雑していた。アナンダは、ほんの何分間か人垣からぬけ出し、ある学友に電話をかけるのがやっとだった。

新聞記者もいっぱい来ていたが、アナンダは、さよならを言うのがせいいっぱいだった。電話のことを、彼はだれにも告げなかった。

6

バンコクへ向って飛ぶアナンダの眼下で、アユタヤの廃虚に生れた王朝を彼が正式に継ぐ時を刻一刻にきざむ世界は、また、かの勇猛な始祖チャクリさえもたじろがせずにはおかない混沌の世界だった。

イギリスは耐乏の中にいた。アメリカにとっては不満の時代だった。両国は、戦争で失った生命を悼み、国内の再建の苦痛に耐えながら、世界を覆う混迷と取組もうとしていた。彼らの盟友であったスターリンのソ連は、ジョージ六世治下のロンドンで開かれた最初の国連総会で、のちにチャーチルが「鉄のカーテン」と名づけた厚い幕を張る身構えを見せて彼らを驚かせた。世界はブッケンワルドやベルセンなどユダヤ人収容所のなまなましい写真を見て身ぶるいし、悲しそうに首を振っていた。ニュルンベルクでは軍事裁判が開かれ、ナチが、協力者が、裏切者が、売国奴が処刑されていた。やがて不幸な一生を閉じるヤン・マサリク政権下のプラハでは、四千人もの市民がヘルマン・フランクの絞首刑を見るために行列した。闇屋から難民まで、あらゆる種類のあやしげな人々がうろついていた。核エネルギーとジェット・エンジンとペニシリンがやがてもたらす光明を半信半疑に待つ時代でもあった。中国とギリシャには内戦が燃えていた。イギリス委任統治のパレスチナでは、ユダヤ人とアラブ人が争っていた。ガンジーのインドで、ファルークのエジプトで、スーダンで、ビルマで、インドシナで、反植民地暴動が火をふいていた。地球儀からイギリス領土の赤を消し、共産主義の赤を塗る時代だった。しかし、なににもまして飢餓と流浪の時代であった。ソ連の二つの自治国——白ロシアとウクライナ——だけで、二千五百万の人々が、冬が来るというのに、住む家もないのだった。中国では千五百万人が飢え死にしようとしていた。しかも、こんなことは、巨大な悲惨さのごく一部分にしかすぎなかったのである。

世界のこんな状況にくらべると、一九四五年十二月五日にアナンダが降りたった祖国は、まるで天国だった。日本軍は経済を混乱させ、猛烈なインフレを残して去ったが、それによって一木一草とてところを変えたわけで

はなかった。アナンダの臣民たちは十分に食べ、寒さの心配もなく、住む家にこと欠かなかった。そのうえに国王が帰ってきたのだ。しかも王はりっぱに成長し、王らしくなられた。一九三八年の一時帰国のときにもまして、農夫もインテリも、王が持つ政治的な意義などそっちのけで、王の帰国を喜び、神秘なものへの崇拝にわれを忘れた。慈雨を降らせてくださる王、幸運をもたらす王、天の恵みを与えてくれる王の帰還！

　王は、すらりとした長身だった。賢明であった。自由な教育を受け、世界をよく知り、真面目で、しかも悪意のないユーモアのセンスも持っておられる。やさしいが東洋的なずるさとは縁遠いハキハキした動作の人だ。落着いて、王にふさわしいたしなみも持っておられる。二十歳を迎えたローザンヌのたのもしい一青年は、いまや生命の王として飛行機のタラップを下り、臣民の代表多数に出迎えられた。

　アナンダの前に身を投げ出して文字どおり平伏した首相は、あの道化師クオン・アパイオンではなかった。彼は日本の敗戦と同時に職を去り、セニー・プラモートがそのあとを継いでいた。自由タイ運動の創設者セニーは、国民的英雄としてワシントンから帰国し、プリディの懇請をいれて内閣の首班になったのだった。弁護士で、欧米人に信のあついセニーは、イギリスとの平和条約締結という当面の懸案を解決するにはうってつけの人物だった。

　プリディ自身は、王の帰還と同時に摂政の役を解かれ、四十五歳という働きざかりで「長老」という称号を得た。彼は、いまや比肩するもののない影響力の持ち主だったが、その力をセニー・プラモートに指導される内閣を通じてふるうほうを択んだのである。それは、彼の敵が指摘するプリディの狡猾か、それとも友人たちが主張するような単なる内気のせいかはあまり問題ではない。だれも否定できない事実は、プリディが最初から最後まで一個人の自由と議会民主主義という理想の擁護者として一貫していたことである。

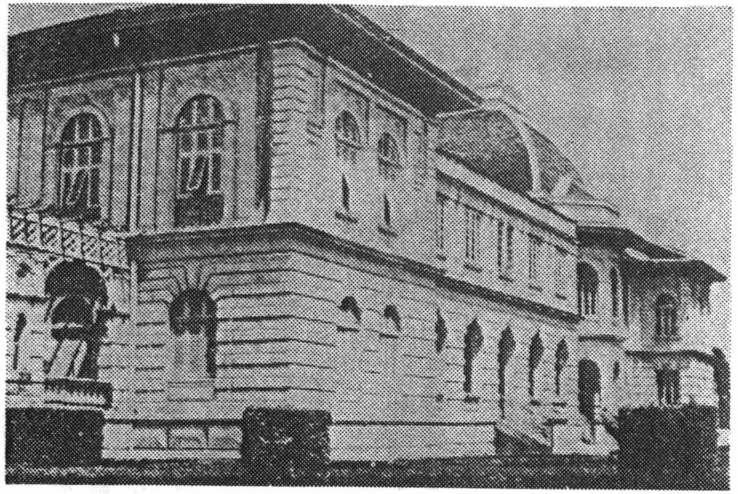
　理想は、いままさに現実になろうとしていた。ピブンのファシズム政治は終焉した。国家的な団結と民主主義への願望という美しい風が、全国民のあいだをそよいでいた。それを証明するために、セニー・プラモート内閣は戦争犯罪法を制定し、ピブン元帥を逮捕した。一説によると、ピブンは、このことでプリディをひどくうらんだといわれる。しかし、この逮捕がなければ、連合軍はもっと迅速にピブンを〝処理〟していたかもしれないし、タイ人たちの面目が立たないような事態も起っていたかもしれないのだ。とにかく、週に三度、ピブンは黒い囚人護送車に乗せられて拘置所から戦犯法廷へ通い、のんびりと進行する裁判の主役をつとめた。長い裁判のあいだに、彼は自分の運命を嘆くヘタクソな歌をつくった。

　海の深さも悲痛の青も
　やすけきものを
　わが身の上にくらぶれば
　空と檻とにくらぶれば

　青空と拘置所の檻を見て暮しているピブンから数百メートルしか離れていないところで、アナンダはピブンとはまったく違った、希望の光景をまのあたりにしていた。バンコクに帰った日、彼はまずグランド・パレスの中のバロンピマン宮に案内された。

　アナンダの生涯の最後の住み家となるこの宮殿へ彼が入っていくところを、読者といっしょにあとをつけてみよう。パレスのそとには、樹木に取り巻かれているがちょっとほこりっぽい、あの有名なプラメーン広場がある。王族が荼毘に付されるかと思うと休日にはマーケットが店を開き、見世物小屋が出る広場である。広場を囲んで、三方に政府官庁と倫理政治大学と国立図書館、美術館がある。そして四つ目がグランド・パレスだ。パレスは、メナム河畔に一マイル四方の広さを占めている。巨大な白い城壁が、パレスを外界からさえぎっている。木の葉の形をした銃眼がついた城壁は、場所によっては十二フィートもの厚さがあり、ところどころに物見のとりでがついている。そのとりでは、タイ・ダンスの踊り子の帽子のような尖塔を持っている。

　「光栄ある勝利の門」と名づけられた正門を入ると、樹木の並んだ百ヤードほどの道がある。右手は王室財務部、聖ゾウ舎、王室学校、左手にはエメラルド寺院の敷地に続く芝生、そして王室資産庁がある。道をまっすぐ行くと、主馬寮と王室庁のあいだの道に出てしまう。だから外苑の中央にある庭で立止ることにしよう。目の前には、想像を絶する美しい宮殿がならんでいる。王の即位式や葬儀に使われる建物だ。その向うには、王家の女や子供たち、その従者などかつては三千人が住んだ禁裏



アナンダ王が住むことになったバロンピマン宮殿

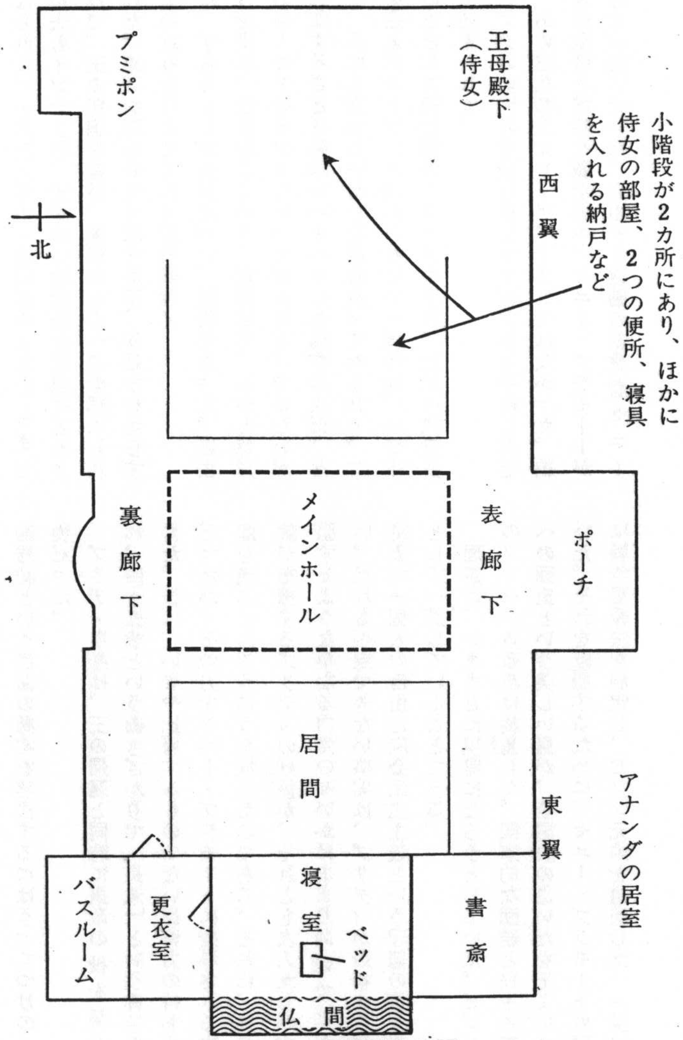
がある。しかし、その禁裏は、アナンダが到着したときには、ほとんど住む人もなかった。この日も、アナンダは禁裏に入らずに庭で左に折れ、鉄の門をくぐった。ここがバロンピマン宮殿である。

きらめく太陽の下で、宮殿のたたずまいが、なんと洗練されて見えたことだろう。

宮殿は故チュラロンコン王のヨーロッパ訪問の成果である。エドワード朝の百万長者がモンテカルロかジュネーブに建てた別荘という感じである。いずれにしても、スイス帰りのアナンダには奇異な感じは与えなかったことだろう。二階建てで東西に長く、正面玄関とその裏側に翼が張出している。中央でドーム型に盛上った屋根がアクセントをつけている。横二百フィート奥行き八十フィートという大きさだが、その割りには部屋数は少い。部屋はすべて天井が高く、広々としている。

さて内部の構造だが、それは、これからも繰返し問題になる点である。どんな犯罪を解明するときにも現場は重要なのだが、この場合とくにその重要性は非常な重みを持っている。

階下には食堂、謁見室、控えの間がある。その大部分


アナンダの居室
東翼
ポーチ
表廊下
西翼
小階段が2カ所にあり、ほかに侍女の部屋、2つの便所、寝具を入れる納戸など
王母殿下（侍女）
プミポン
北
メインホール
裏廊下
居間
書斎
寝室
ベッド
仏間
更衣室
バスルーム

バロンピマン宮殿見取り図

はボーイや召使い、護衛の兵士たちの使用にあてられている。大膳部は、シャムの習慣に従って別棟の台所で働いている。階下にはもう一つ、女官長の私室がある。彼女は、一九三九年にアナンダがスイスに帰ったときには病気のためシャムにとどまったのだが、いまアナンダ一家が帰国したので再び職務に復帰したのだ。

われわれにとってもっとも関心の深い二階は、正面玄関から広々とした階段を上ったところに、まずメインホールがある。このホールは、西側にある小さな二つの階段にもつながっている。メインホールは、いわば二階における交通の中心で、その位置関係は九三ページの見取り図を見ていただければ明瞭だろう。見取り図では、この話に直接関係の深いアナンダの居室部分をとくに詳しく図示した。

二階は大別して二つの部分に分かれる。正面から見て左側の東翼と右側の西翼だ。両翼はメインホールをはさんでつらなり、宮殿の前面と後面にそれぞれ四十ヤードの長さの廊下がある。二階の住人は四人だけである。アナンダは東翼に住み、弟のプミポンと王母殿下と殿下の侍女が一人、西翼に住んでいる。

窓の多いバロンピマン宮の二階は、すばらしい見はらしを持っている。こんな美しい部屋を、だれが殺人の現場に想定できるだろうか。午前七時には、さわやかな朝日の火箭がまず窓を射し貫く。やがて太陽は、一点の雲もない紺青の空をかけめぐって、午後六時には西空を巨大な金と紅と青に塗り上げる。サフラン色の、ばら色の、あるいは緑の屋根瓦が、破風のガラスや陶器の飾りが、尖塔や柱が、そして金ぴかの鐘楼が、昼のうちは陽光に映えて目もくらむばかりだ。夜は夜で、月光が一つ一つの影に神秘な暗示を与える。屋根のさまざまに入り組んだ形、巨大なサボテンのような塔、あるいは糸のように細く夜空を刺している塔……。

バロンピマン宮の前、王室庁の向うにはエメラルド仏寺院の敷地がひろがる。王室陵墓部、王室図書室、七つの天体を示す七本の柱の夢のような構図、宮殿の裏には「亀の庭」と呼ばれる小苑がある。庭の向うは王室劇場その他の建物があって、そのさきは巨大な寝釈迦をまつるワット・ポー（寺院）に続いている。目を南から南西に転じると、禁裏と「天国の庭」である。そしてグランド・パレスの敷地が尽きるところには満々と水をたたえたメナム川があり、はるか対岸には暁の寺の塔が高々とそびえている。

アナンダの生活は、実にみごとな景観に取り巻かれていた。そして、彼のまわりにいる人々は、侍従武官、ボーイや秘書たちである。彼らはすべて王室庁に所属していた。そのうち何人かは、これからの物語の展開の中に端役として登場する。重要な役割を与えられ、やがて全国にその名を知られるようになるのは、彼らのうち四人だけである。

一人はワチャラチャイ大尉である。ピブンから逃れたアーチット摂政がプリディに救いを求めたとき、プリディ邸を警備して信任を得、のちにプリディ摂政付き武官にもなった男である。国王には三軍それぞれに侍従武官を出すのだが、プリディはワチャラチャイを海軍代表に推薦したのだ。

プリディは、のちにワチャラチャイ同様注目を浴びることになるもう一人をバロンピマン宮に送り込んでいた。それは政治家としてのプリディを支持していたチャリューという男である。彼の職務はアナンダの個人秘書だったから、この本では彼のことをチャリュー秘書と呼ぶことにしたい。

やがて多くの人々に記憶されるあと二人の名前は、王の私室のボーイたち、つまりアナンダにもっとも親しく接していた男たちである。二人の家は、ともにもう何代も王室に仕えている。二人とも四十歳を越していて、アナンダがスイスへ行くまでにも仕えた経験があった。二人の名はブットとチットである。チットのほうはからだも大きく、教育もあり、かしこかった。ここではブットと区別する意味でナイ（ミスター）をつけてナイ・チットと呼ぶことにしよう。王室庁内の彼らの所属は「絹の部」だった。ほとんどのものが世襲的にこの職につくのである。彼らだけが王の聖なるからだに触れることを許される。王の散髪をしたり爪を磨くのも彼らの仕事だった。唯一の例外は侍医で、王が病気のときには診察を許されたが、その他の者は絶対に玉体に触れてはいけなかった。

アナンダがグランド・パレス内のバロンピマン宮に入ったのを機に、ここで、これまでに登場した主要な人物を列挙しておこう。アナンダの突然の死まで、あと六カ月もない。彼の到着を迎えた歓喜の鐘の音は、まもなく

弔鐘となってシャムの歴史に尾を引くことになるのだ。

　バンコクにいたのは——

アナンダ王　グランド・パレス内のバロンピマン宮に、弟の**プミポン王子**、母の**王母殿下**とともに住む。

侍女　王母殿下に仕え、バロンピマン宮の二階、殿下に非常に近い距離にいる。

女官長　王母殿下が看護婦だったころの同僚。アナンダ帰国と同時に職務に復帰し、バロンピマン宮に私室を与えられている。

プリディ　国の長老。摂政時代の官邸に住んでいる。官邸は倫理政治大学やグランド・パレスに近いメナム河畔にある。

チャリュー秘書　プリディに任命された国王の私的秘書。

ナイ・チット、ブット　二人とも王の私室のボーイ。

ワチャラチャイ海軍大尉　プリディ任命の侍従武官。

ピブン元帥　かつてのワンマン。いまは戦犯として獄につながれている。

モン・セニー・プラモート　首相。法律家。もとアメリカ駐在大使で自由タイ運動の創始者。

クオン　あだ名は道化師。政治家。ピブンのあとを継いで首相をつとめたことがある。

王子たち　**アーチット元摂政**。**スパ・スワット**（あだ名はタンチン。モンクット王の孫で軍人。イギリス側の自由タイ運動を率いた）。**ランシット**（アナンダの叔父。一九三九年に無実の罪で終身刑を宣告されたが、プリディによって他の王制派政治犯といっしょに釈放された）。

　ローザンヌにいたのは——

ナイ・アネク　王母殿下の相談役で個人秘書。

セライダリス　家庭教師。

ガルヤニ王女　国王の姉。夫と生まれたばかりの娘といっしょに。

学友たち。

　美しい眺望を持ったバロンピマン宮の広い部屋に落着いて、アナンダは、まもなく新しい日常生活に慣れていった。

　彼は午前八時半から九時のあいだに起床した。バンコク人の標準からいうと早いほうではないが、チャクリ王家の人としては早起きである。朝食は、母や弟といっしょに階下のポーチでとった。十時にチャリュー秘書と一日の日程について打合せをする。それからシャム語と仏教を還俗僧から習う（僧というのは、ローザンヌにいた神学博士だが、帰国して還俗していたのだ）。そのあと大臣や長官たちに謁見を許し、国事を聴く。昼食の前には読書か手紙。車を運転してグランド・パレスの中を走る日もある。午後零時半の昼食は母、弟、それに王族や大臣が加わるときもある。午後は再びタイ語と仏教の勉強、あるいは外国使臣や政府の役人を引見。お茶の時間は、多くの場合、バロンピマン宮の裏の亀の庭にテーブルが出る。夕食の前には父方の祖母を見舞うかプミポンと遊ぶ。午後七時の夕食後には、また客がある。プミポンたちと楽器をいじったり、王室劇場で芝居や映画を見たり、弟やボーイを連れて庭を散歩したりする。十時半の就寝には、母の部屋へおやすみを言いに行く。

　表面だけを見ると、グランド・パレスの生活は、きわめて静かなものだった。しかし、まもなく政治がアナンダの生活の内面をかき乱し始める。

　アナンダは、よくバンコク近郊の町へも出かけた。ナッシュか青いロールスロイスに乗って、彼は主な寺々をまわり、仏像を拝んだ。政府官庁や工場なども訪問した。夜には、ワチャラチャイ大尉、ときにはプリディをお供に、おしのびでバンコクの町へ出かけるときもあった。

　バンコクを離れて、地方の県を公式訪問する機会も多かった。その最初の旅行のことは、彼自身の悲劇とも深い関係があるので、ちょっと触れておきたい。

　それは十二月二十三日、シャム湾の東にあるチョンブリへの旅で、自由タイ運動の解散式に出席するためだった。プリディが随行した。ナイ・チット、チャリュー秘書もいっしょで、随行武官団の中にはワチャラチャイ大尉の顔もあった。

　プリディは、王にジープを一台献上するつもりだった。王ご自身が運転されるのも面白いだろうと考えたのである。ところが、チョンブリへ行く途中で、そのジープは転覆して侍従武官長は死亡、ワチャラチャイとチャリューも負傷した。こんなアクシデントはあったが、式そのものは成功で、なかでも王が喜んだのは戦利品の献

上だった。そして献上品の中には製造番号2C81459のアメリカ製45口径ピストルがあった。

人によっては、ここのところの説明が少し違っている。アメリカ人のOSS隊員がプリディにピストルをプレゼントし、プリディがそれを国王に差上げたという説もある。プミポンの記憶では、ボーイがそれを王に献上していたという。いずれにしても、この前後にアナンダは45口径ピストルを所有するにいたった。そしてアナンダとプミポンは、この新しいおもちゃに夢中になった。

アナンダのコレクションの中にある自動小銃、ピストル、ライフルなどを使って、兄弟はバロンピマン宮二階の裏廊下からよく射撃に興じるようになった。亀の庭は射撃練習場としてもってこいだったので、遊びは、やがて廊下から庭に移った。ワチャラチャイが標的を立て、射撃の指南役をつとめた。兄弟は、いつのまにか一日に五、六百発も撃ちまくるようになっていた。

7

私の物語は、とうとうアナンダ生涯の最後の年まで来た。

事件と、それに関係した人々の輪郭を、これからは、以前にましてはっきりと描いていきたいと思う。

イギリスとシャムの平和条約はデッドロックに乗り上げた。首相であり、シャム側の全権でもあったセニー・プラモートが、相手の条件を見てふるえ上ったからである。条約案によると、シャム政府と軍には完全な自由が与えられていたが、英軍はなお日本軍の復員をスムーズに行うという理由からシャムの駐留と資源に対する権益を求めていたからである。もっとも、こんな条件は、連合軍がシャム以外の占領地や敗戦国に課したものとくらべると、はるかにゆるやかだった。

セニー・プラモートという人物は、その貴族の血とオックスフォードという学歴があいまって、ユーモアとわざとらしくない立居振舞と美しい音楽、本、そしてとりとめもないゴシップの愛好者として申しぶんのない人物だった。ごく少数の例外を除いてタイの貴族にはほとんど普遍的な尊大ぶった挙措も、セニーの場合、かえって人をひきつける魅力だった。法律家として、大学教授として、そして私生活で、彼はいずれも成功者だった。あるとき、セニーは「生活の知慧」というテーマで講演したことがある。私はその講演コピーを持っている。実に巧みな話しぶりだが、残念にも、そこには「指導者としての知慧」を示唆するものがなにもない。二つの知慧は、おそらく互いに相反するものなのだろう。彼は自由タイ運動の創始者としてシャムの歴史に確固たる地位を築いたが、運動に参加した連中は必ずしも全面的に彼を信頼していたわけではなかった。

イギリスとの平和条約は、法律家としてのセニーに、その字句の裏にあるものに対して警戒心を抱かせただけでなく、相手の基本的な意図さえも疑わせるものであった。戦争中アメリカにいたセニーは、大西洋憲章という保証があったにもかかわらず、イギリス帝国主義の悪を相変らず信じて疑わなかった。とくにケベック会議で、イギリズがタイを植民地ないしは委任統治領として要求

したと信じ込んでいた。だから、平和条約案を、彼はイギリスの邪悪な意図のかくれみのだと信じ、それに反対することこそタイを愛するものの道だと思っていた。バンコクのアメリカ代理大使は、そんなセニーを励まし、事情によっては、そのころ、イギリスへの援助を討議していた米議会を動かしてもいいとけしかけた。

プリディはイギリスの良識を信じ、一日も早く条約に署名して、それを新生タイの門出にしたいと考えていただけに困った立場に立たされた。戦前には外務大臣として列強の治外法権を撤廃させるために努力したのも彼だったし、戦争中は外国軍隊の阻止のために生命を賭しさえした。だから、この場合、プリディのほうが対イギリスの交渉相手としてセニーよりも適任者だといっても穏当であろう。しかし、セニーは、そうは思わなかった。

そのプリディのほうも、イギリスが最初の条約案よりはさらにきびしい第二案を示したときなど、なぜかふだんの忍耐を忘れてセニー首相を攻撃した。その結果、はげしい言葉のやりとりがあり、条約は一九四六年一月一日に無事調印*されたものの、タイ政界には、国王帰還祝典のころにはなかったしこりができ、それが長く尾を引くことになった。

（注）　条約の中でもっとも実質的な規定は、飢餓に直面しているアジア諸国へシャム米を供給する義務だった。ただし、結果的にはその援助米代金は、ほとんどイギリス政府によって支払われた。セニー・プラモートが抱いた疑念は、事実にはならなかった。

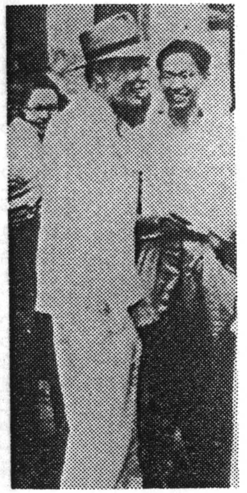
日本軍の復員業務を主目的とする英連邦軍は、ほぼ一年をめどに駐留中だったが、アナンダは、いまや完全に自由を回復した国家の元首だった。数週間後には、インド総督マウントバッテン卿が公式訪問し、アナンダははじめて元首としての大任をはたすことになった。

『タイムズ』の同行記者によれば、この行事は、万事に不慣れな新国王にとって「試練に近いもの」だったが、それでも彼は「非常に落着き、知性と誠意と広い知識でイギリス側を驚かせた」そうである。歓迎の式は三日間続き、フォーマルな舞踏会も開かれたが『タイムズ』によれば、それに出席したシャム貴族の夫人たちは「パリジェンヌのようにシック」だったという。

国王の存在、プリディによる政治犯の釈放、それに彼が自由タイ運動に提示した約束などの条件が重って、王制派は、たしかにわが世の春を謳歌していた。しかし、『タイムズ』の記者がマウントバッテン卿の訪問中に見聞したことは、そんなことよりも民衆の親米反英ムードだった。人々は、アメリカがイギリスに圧力を加えて平和条約を穏かなものに変更させたのだと信じていた。セニー・プラモートの対英不信感は、民衆のあいだにも浸透していたのである。

プリディ

セニー・プラモート


クオン

プリディとセニーの確執の原因は、ほかにもあった。セニーは、彼が駐米公使に任命されたとき、ピブンがそっとささやいてくれたことを忘れなかった。法律をやっている学生たちにセニーの人気がありすぎるので、外国のポストを与えるようにプリディがすすめた、というのだ。こうして、戦犯として獄につながれているピブンは、政界に無形の影響力を行使することになった。ほかにも原因があった。セニーが義弟を警察長官にしようとしたとき、プリディが反対したのだ。このことは、ずっとあとになって、どんな小説家の想像力も及ばぬほど皮肉な結果をもたらすことになる。

イギリスとの平和条約調印から一週間もたたないうちに総選挙が行われ、セニー・プラモート内閣は総辞職し

た。新しく選ばれた代議士たちは、政党がまだ確立していないこともあって、ほとんどが無所属だった。新しい国会が最初にやったのは、もちろん内閣総理大臣の投票である。セニーとのあいだがこじれていたプリディは、自派の一人を推薦した。

ピブンのあと一度首相をやったことのある例の道化師クオン・アパイオンは、プリディが当然、自分を支持してくれるものと自信たっぷりだったが、案に相違してプリディが推したのは別人だった。しかし、いざ投票になってみると、クオンのほうが僅差で選ばれてしまったのである。これにはクオン自身も驚いたらしい。プリディは、根回しを怠っていたのだ。しかし、そのプリディは、投票結果を冷静に受けとめると、さっそくつぎの大任、つまり憲法改正にとりかかった。

セニー派ではあったが、憲法改正に当ってプリディに協力したのは、セニーの実弟ククリ・プラモートだった。

ククリは、皮肉屋として有名なジャーナリストである。彼は、いまでも、タイでもっとも信用のおける新聞『サヤム・ラット』の発行者である。最近では、年とってきてやや色あせた感じだが、バンコク社交界では知る人ぞ知る政界のアンファン・テリブルだった。どちらかといえば情緒派で、会話の中には常に沈鬱なウィットが織り込まれている。マイホーム・タイプの兄とは異り、子供は二人いるが妻とは離婚している。生れがよく、しかもオックスフォードで教育を受けたククリは、貴族らしい虚栄や独善よりも鋭い知性に支えられた寛容で理想主義的な仕事を好む性格だった。彼が一部の人々からは尊敬され、一部からは恐れられながらも、常に愛される男であるのは、そういう理由からである。

憲法改正の作業が進んでいるあいだにも、新しい国会は、国家の統一をぶちこわすようなことをやっていた。その結果はアナンダの死とも深い関係があるので、以下に少し紹介しておくことにしたい。

首相選任の投票で、プリディが立てた候補者は六十五票を集め、セニーはわずか四票だった。しかし、セニーはプリディに断りなしにクオンと結んだ。しかも、新内閣は、一九三三年にプリディを追放した右翼内閣の実力者の一人を大臣に抜擢した。道化師クオンは、根っからのお人好しではなく、彼のキバは、かつての親分でありながら自分を見捨てたプリディに向けられた。一方のプリディ派には、政界の主流をはずれた不満に加えて一九三二年の革命推進団に対する右派の復讐が行われるのではないかという不安を感じた人が多かった。王制派カムパックと同時に首相に復帰したクオンは、シャムのことわざを使うと、「トラの背からとび降り」、そのトラを推進団の首魁セニーに向けてけしかけるのではないかと観測されていた。

プリディ対セニー、クオン連合軍の反目は、総選挙後初の国会でプリディ派の代議士たちが怒りにまかせてとった甚だ不動慎な行動によって、より決定的なものになった。対立は、すぐにはげしい個人攻撃合戦にエスカレートし、生れたばかりの民主主義はそっちのけにされた。三月十八日には、すべての商人は商品に正札をつけるべしという法案をめぐって、衆をたのむプリディ派はクオン政府案を廃案にし、おかげでクオン内閣はわずか二カ月という短命で総辞職してしまった。

こうなると、もはや政策論争どころではない。右派はクオン、セニー、それにセニーの弟ククリその他が加わって民主党をつくった。「民主」とはいうものの、この党はセニーら貴族に指導されていただけに王制派色が濃く、元政治犯たちの支持も受けていた。政治犯釈放という行為によって、かつては彼らを助けてやったプリディが、いまや皮肉にも彼らの敵になったわけである。王子たちに政治活動再開の許可を与え、前政権が剝奪したプラチャーディポク王の諱を復活したのがプリディだったことは忘れられてしまった。

その同じプリディが、いまでは、あまりにも人民的で、貧民と交りすぎ、宮廷での礼儀を十分にわきまえない無礼者呼ばわりされるようになったのだ。彼は、しだいに共産主義者ないしはアカというレッテルを張られるようになった。その実は、民主党に王制派を加えたグループを右派とすると、プリディ派はそれよりも左というだけのことだったのだが。

もちろん、いわゆる「左」の中には自由主義者たちもいた。しかし、こうしたレッテルは、子分をひき連れた親分同士の対立からなるシャム政界を理解するうえでは、まったく無意味なのだ。プリディ派には首都バンコクのインテリや自由タイ運動で働いた名もない地方運動家がいたが、これもまた反対派からの攻撃目標になっ

た。国家のために始った自由タイ運動を、プリディは私益のために利用している、というのである。また、戦後の心理として、軍部や十分に反日運動をやらなかった連中が、そのうしろめたさからプリディ批判派にまわるということもあった。

こうした反プリディのムードは、民主党がプリディは共産主義国家の建設をもくろんでいるというプロパガンダを流したために、よりいっそうかき立てられた。不思議なことだが、そんなときでも、プリディはもっともはげしい反プリディ派論客からさえ一種尊敬をこめた目で見られていた。しかし、それはかえって反対党の敵意を刺戟することになった。政局が騒然とし始めてもプリディはあえて政治の表面に出なかったのだが、反対党は、それをプリディが教育に熱意を注いでいるからとは解釈せず、野望を隠すための作為だと曲解していた。

この誤解は、まったく突然に、誤解でないことがわかった。というのは、クオンが辞職すると、いきなり後任首相になったのはプリディだったからである。

なぜ？　なぜ、よりにもよって、みすみす彼にとって致命傷になるはずのこの時期に首相になったのか。ピブーン失脚直後なら、いつでもなれたのではなかったか。

プリディは、新憲法にすべてを託していたのだと私は思う。新しい憲法は、人物よりも主張が重んじられる民主的議会をつくるはずだった。その憲法案を成立させ、改革を自分の手でやるために、プリディは自ら乗り出したのだろう。新しい政治秩序をつくる仕事の重要さを理由に、彼はアナンダに、新憲法に御璽を押すまではシャムに滞在してほしいと要請した。こうして、はじめは一カ月の予定だったアナンダの訪問は、何カ月も引きのばされることになった。そしてシャム政界の混迷は、アナンダ帰国時の挙国一致態勢にくらべて、ますます対決の色を濃くしていった。

アナンダの側近で、政界の混乱にだれよりも心を痛めていたのは、タンチンことスパ・スワット王子だった。王子自身は政界には近づかないようにしていたが、戦争中にバンコクに潜入したときの記憶はまだ新しい。彼は、そのときにプリディが文書と態度で示した忠誠心を信じていた。政治指導者の対立を憂慮した王子は、志を同じくする人々と語らって、和解工作を試みた。あとになってわかることだが、この善意から出た調停の動き

は、結局は政治家たちに利用されただけだった。さんざん苦心をして、そのあげくに、王子はプリディに買収されていると非難を受けるはめに陥ったのである。

道化師クオンが職を辞し、プリディが首相になったのは一九四六年三月のことである。少くともこのころまでは、国王は非常な親愛の情をプリディに寄せていた。二月に、アナンダは、母や弟といっしょに海岸のホアヒン離宮で数日を過したが、そのときにはプリディを誘っている。間近かに迫った悲劇は、二人の親密な間柄からは到底予測もできなかった。

二人は年齢の差を越える共通点を持っていた。まず法律への興味。プリディは法律の教師、アナンダはその学生なのである。また権力をいかに正しく行使するべきかというテーマも、二人に共通の課題だった。二人は、ともに国民への強い義務感を抱き、真面目に責務をはたそうとしていた。アナンダは知的好奇心に燃え、それを満たしたのは「祖師」のプリディだった。アナンダが戦争中のことについて質問すると、自由タイ運動の指揮をとっていたプリディは喜んでそれに答えた。毎日、食事をともにし、海水浴も散歩もいっしょだった。二人は、お互いに相手の奥底まで知りつくした。いや、それとも、プリディは依然として邪悪な企みを隠していたのだろうか？

王母殿下がプリディのことをどう思っていたかにもちょっと触れておく必要があるだろう。これまでは緊密な紐帯で結ばれていた一家だったのに、アナンダがことあるごとにプリディの助言を求めるようになったことには、王母殿下は決して無関心ではいられなかったはずだ。彼女は、国王としてのわが子が保つべき威厳についても神経質だったことと思われる。しかし、タイ政界になんの足場も持たない彼女にとっては、アナンダが政界の実力者と仲良くしてくれることは好ましいことだったに違いない。それに、一家は、まもなくローザンヌのワタナ荘という安全地帯へ引揚げてしまうのである。だが、はたして彼女の心には疑念がきざさなかったのだろうか——プリディは信用できる男かどうか、という。

事件のあとになってから、たしかにその兆候はあったと思い当った人々はいた。しかし、王母殿下が当時そのことに気づいていたかどうか、たとえ気づいていても、はっきりプリディの謀心と考えたかどうかは疑問だ。こ

こでは、その兆候のうち二、三をあげておこう。

まず、戦争中にワタナ荘の秘書としてローザンヌへ送られた男のことだ。王母殿下の気に入らなかった男だが、彼はプリディが摂政として任命した人物だった。彼がプリディのスパイだったらしいといううわさは、ここから起った。つぎにマウントバッテン卿訪問のときの公式晩餐会のできごとがある。プリディには、メインテーブルの席が与えられなかった。彼は、そのとき、摂政でも首相でもなかったのだから、あるいは当然といえるかもしれない。しかし、抵抗運動の国家的英雄に対してとられた待遇にしては明らかに不当なものであったし、当のプリディが病気を口実に国王退出よりさきに退席したことはプリディの立腹を証明するものと解釈された。

後述するが、ホアヒンでの休日のあいだにも、そういえば思い当るできごとがいくつかあった。そんな事実をすべて寄せ集めても、なおプリディの不敬は仮定にしかすぎないのだが、やがてそのような些細なことのために何人かの人間が生命を失うことになるのだ。同じ理由から、プリディに直接の関係はないが、彼の周囲の人々が関係した事件についても少し書いておこう。

たとえば、プリディが任命したアナンダの個人秘書チャリューの退職である。チャリューは王室のガレージの管理もやっていた。そのガレージから車が一台盗まれたのである。終戦直後の世情では、車の窃盗など日常茶飯事だったが、このことはチャリューの責任にされた。すでに王家から不興を買っていた彼は職を辞した。それが自発的な退職だったか免職だったかは、のちに論争のまとになる。

同じころ、ワチャラチャイ海軍大尉も侍従武官の職を解かれた。病気と称して欠勤した日、心配した王母殿下が侍医をさし向けたところ、彼はぴんぴんしていて友人とトランプ遊びをしていたのだ。こうして、プリディに任命された二人は、疑惑の雲に包まれながら王宮から去っていった。

しかし、このような事件は、すべて五月に入ってから起ったものである。王母殿下が、もしプリディになんらかの疑念を抱いたとしても、それは、あとになってから事件を回想し、個々のできごとをつなぎ合わせたときのことだろう。三月にクオンのあとを襲ってプリディが首相になったときには、なにもなかったとみてもいい。

プリディが正式に就任する一日か二日前だが、ピブン元帥への判決が下った。裁判所は、戦争犯罪があまりに遡及的であるという理由（その同じ理由は、ニュルンベルク法廷では却下されている）で、裁判を放棄したのである。ピブンは、こうして青天白日の身になった。

もちろん、一応は裁かれ、すべての地位を取り上げられたのだから、ピブンにとってはつらい経験だった。もうこれで十分だろうと思ったプリディは、ピブンを放っておいた。ピブンは、自分も自分なりのやりかたで連合軍に協力したのだと主張していた。とにかく彼は日蔭の身ではあるが自由を獲得したのだ。田舎へ退いたピブンは、ひそかに野望をあたためながら、政界にうず巻く憎悪の波の衝突がチャンスを与えてくれるのを待った。

首相就任という当面の目標を達したプリディは、新憲法の成立に情熱を傾けた。新憲法によると、国会には上院が置かれることになっていた。上下両院が政府を択ぶのだから、上院議員選挙は重要な意味を持っている。ここでも選挙につきものの権謀術数がうずを巻いた。しかし、ともかくも結果は出て、下院で過半数を占めていたプリディ派は、上院でも過半数を取った。プリディ内閣は総辞職し、上下両院は改めて彼を首相に選び直し、王はプリディを招いて首相再任を命じた。このプリディ任命は、アナンダが、その在世中に行った最後の国事になった。

任命状の日付は六月八日になっている。だが、アナンダは、おそらく前夜のうちに署名しておいたのだろう。その夜——六月七日の夜までは、王とプリディのあいだの親愛の感情になにかの陰影がさしたと思わせる事実は一つもない。アナンダは、政争にはいっさい手を染めず、超然としていた。民主党は自分たちこそ国王の恩寵を得ているのだと宣伝し、それを反プリディ分子の結束の大切な旗じるしにしていた。たしかに民主党の指導者たちは、しばしばバロンピマン宮へ伺候していたが、とりわけ王の寵愛を得ている様子はなかった。新憲法が公布されたいま、若い国王は、待ちに待ったスイスへの帰還に心を奪われていたからである。

こんどの旅行には、いままでにない楽しみが待ち構えていた。「スイスへ帰るまでにぜひ」とイギリス、アメリカ両国政府から公式訪問の招請が届いていたのだ。バンコクを離れるのは六月十三日ときめられた。西洋人な

ら、不吉な十三日を避けたことだろう。だが、タイ人はそんな迷信を持たなかった。それに、この佳き日は、王室占星術師によって決定されたものだった。

タイ人は、重要なことをするときには必ず星占いにたよる。選挙、即位、国王の旅行といった国家的行事は、王室占星庁を牛耳るブラーミンに相談なしにきめられることがない（私は、その占星術師に会おうとしたのだが、タイ人の友人は、国家がいまだに迷信を信じているのを恥じてか、古来の伝統をそっとしておきたいためか、私をうまくそらしてしまった）。いずれにしても、占星術師は摩訶不思議な計算によって霊感を得たらしい。彼がきめた出発の日付は国王に裁可され、正式に発表された。

国王の裁可は、どうも急に与えられたものらしい。英米への公式訪問の準備をしている人たちは、もっと遅い出発を望んでいた。国王がどこに立って、だれとどう握手するかなどということをきめなければならなかったからである。しかし、このときのアナンダは、いつになく性急で、できるかぎり早い出発を主張したのだ。そういうわけで、六月十三日という日は決定された。

出発に先立つ数週間、アナンダは国内各地へ旅行した。大群衆が、彼の行く先々の道路を埋めた。臣民たちは、国王到着の何時間も前から道路に土下座し、花束や羽がい絞めにした鶏などを献上しようと待ち構えた。彼らは、バンコクで行われている政争のことを知りもしなかったし、気にもかけていなかった。若々しい王様が、いま、ここにおいでになる。恥ずかしそうな微笑をたたえながら彼らをご覧になり、忠誠のしるしをお受取りになることによって、われわれに福録と徳を与えてくださるのだ。それが民衆の無知から起る信仰であったにせよ、これほども人々に愛されるということは、たしかにアナンダにとってはうれしいことだった。ときには王と天上の神との特別な関係を示すかのように王の行先に雨が降ることもあったが、そんな奇蹟は、若い王をテレさせずにはおかなかった。

六月三日に、彼は、もっとも記憶されるべき外出をした。行先はバンコクの、しかも王宮から数分の距離のところである。アナンダは、中国人街へ行ったのだ。

ネオン・サインがギラギラ光り、映画館の前にはけばけばしい看板が出、宝石屋から漢方薬屋まで商店がひしめいている。それがバンコクの中心にある中国人街ヤワラードだ。この外出をプリディが勧めたかどうかについては、のちに議論がわかれた。一つだけたしかなのは、そのときのアナンダが明らかに気分がすぐれない顔だったことだ。だが、ピブン時代のタイのナショナリズムが強かったときには、自分たちの地位に危惧を抱いていた中国人たちは、国王訪問を王の庇護のしるしだと受取り、熱狂的な歓迎をした。ある住民は、アナンダの靴が踏んだ土をすくい上げてポケットにしまったほどだった。

三日後の六月六日、アナンダは、オックスフォード、ケンブリッジ両大学の同窓生の会に出席した。宮中で行われたプライベートな行事で、王子が一人と、ほかにイギリスで教育を受けたシャム要人や在留イギリス人たちが出ていた。国王は、もう全快しておられたようだった。

翌六月七日夜、プリディが夕食に招かれ、食後に王と二人だけで話し合った。プリディを首相に任命する翌日付の勅令は、きっとこのときにサインされたものだろう。二人は、一週間後に迫ったアナンダの出発にそなえて、国王不在中の摂政評議会についても話をした。この話の中身は、のちに思いもかけない重要な意味を持つに至る。プリディが提案したのは故プラチャーティポク王の妃だった。アナンダが希望ないしは提案したのは、例の政治犯の大物だった叔父のランシット王子である。意見の食い違いというほどのものだったかどうか、いずれにしてもこのことは、やがて決定的な意味を持つことになる。

翌日、アナンダは腹痛を訴えた。いつものように母や弟といっしょに朝食と昼食をとったが、腹痛はつのった。その日には公式行事が二つあった。一つは元摂政アーチットの荼毘であり、もう一つは王室警備隊のディナーだったが、両方とも弟のプミポンがかわりに行くことになった。午後になって、息子のことを気遣った王母殿下は侍医ニット博士を王宮に招いた。

ニタヤベジット博士（それが彼の長ったらしい本名のごく一部分にすぎないのだが）は、国王一家とはアメリカいらいのつき合いだった。彼は、マヒドン殿下の奨学金で留学していたのだが、マヒドン一家が最初に祖国へ帰ってきたときから侍医に任命されていたのだ。この場合、彼が呼ばれたのは、ごく自然なことだった。

バロンピマン宮に着いてみると、アナンダは居間（九

三ページ見取り図参照）のソファに横になっていた。下腹が不安定で吐き気がするという。舌には舌ごけがあり、胃が少しふくれ、微熱があった。べつに心配することはない。アナンダは、前にも消化不良からくる同じような〝胃炎〟にかかったことをニット博士は知っている。博士は、とりあえず下熱剤のノバミンを与えた。夜になったら浣腸し、そのあとで眠れないときの用意にと睡眠薬オプタリドンを残した。また翌朝に服用するためにとカスター・オイルを処方した。

王母殿下は、博士が言い残したとおりの手当てをした。夕食はアナンダの居間でとり、アナンダのためにはオートミールを注文した。女官長が同席し、勤務に当っているボーイが給仕をした。

さきに名前をあげておいた二人のボーイ、ナイ・チットとブットは、一日交替で勤務していた。つまり、一人が二十四時間、国王の身辺に仕えるのである。交替するのは午前十一時ごろだった。国王が就寝したときには、出番のボーイは、王宮内のバロンピマン宮のそばにある控え室で眠ることが許される。その日はブットの勤務に当っていた。

ブットはプラチャーディポク王に仕えたことがある。彼の父も祖父も王家に仕えた。痩せていて小柄でつつしみ深い男だ。小さい顔に表情があり、目が生き生きしている。アナンダもブットが好きだった。彼が最初にバンコクを訪問したとき、馬になって彼を乗せてくれたのはブットなのだ。だから髪をなでつけたり、入浴のあとからだを拭かせたりすることもあった。こんどの旅行では、ブットをスイスへ連れて行くことになっていた。そのために王母殿下は洋服を買う金を彼に与え、旅行中は給料の半額を彼の家族へ送るようにとりはからってやった。ブットも敬虔なタイ人らしく、お寺へ行って身を潔め、幸運を感謝した。もっとも、事件のあとでは、ブットがいったいどんな幸運を祈ったかが改めて議論されたのだったが。

勤務に当っていたブットは、アナンダの浣腸をするように王母殿下に命じられた。それから午後九時から十時までのあいだに夜の祈りがあった。アナンダとブットは仏間に入った。見取り図でわかるように、仏間は、寝室からカーテンで仕切られている。ブットはロウソクをつけ、それをアナンダに渡した。アナンダは、ロウソクを

仏壇に捧げて祈った。

つぎにブットは、寝台のまわりの蚊帳の合わせ目を開いた。ベッドは蚊帳から約一歩の距離にある。アナンダは青い中国製シルクのパジャマ・ズボンをはき、上には薄いTシャツを着ていた。王母殿下が来て、睡眠薬を一粒、彼に手渡した。

「ナンドや、なにかあればベルを押してください」

「はい、お母さま」

王母殿下は自室へ去った。ブットもまもなく控室へ引揚げた。

それが六月八日の夜であった。一九四六年、仏暦二四八九年、イヌの年。土曜の夜だった。アナンダにとっては、人生最後の夜である。

8

翌六月九日の朝六時ごろ、王母殿下は、アナンダの容態を見るため、バロンピマン宮の北西隅にある自室を出た。彼女の部屋とアナンダの部屋を結ぶ表廊下を歩いて行けば書斎に出る。しかし、書斎のドアは、ふつう夜のあいだは鍵がかかっている。王母殿下は、それを知っていたのでメインホールを横切り、裏廊下の突当りの更衣室に向った。

夜が明けて、人が動きだす気配は、この宮殿の二階にも感じられた。夜のあいだ二時間おきに交替する夜警は、二階のメインホールの脇に二人、階段の登り口に二人と夜警隊長が配置されていたが、ちょうど持場を去るところだった。掃除婦たちが入れかわりに入ってきた。王室ボーイ次長は、お湯、ミルク、ブランデー、それに小さいグラスを二つ用意して控えていた。彼は、王母殿下のあとについて、更衣室からアナンダの寝室に入った。

のちに王母殿下の話によると、アナンダはぐっすり眠っていたという。彼女は、息子をゆり起して尋ねてみた。

「よく休みましたか」

アナンダは、目をさまして答えた。

「はい、よく」

彼女は、カスター・オイルにブランデーをまぜたのをすすめた。アナンダは、そのあと、ホットミルクを少しだけ飲んだ。それからベッドを出て、歯を磨きに行った。もう少し眠りたいのだろうと思った王母殿下は自室へ戻り、もう一度ベッドに入った。

午前七時少し前、大膳部のボーイが二人、ポーチに朝食の用意を始めた。ポーチは、メインホールのすぐ横、表廊下から張出している部分である。二人のうちの一人は気分が悪いといって、深夜番ボーイ長の許可を得て早退していた。だから、ボーイ長がそのかわりにテーブルを整えていた。彼らは、いったん階下に降りたが、午前七時半にはポーチに戻っていた。

七時から七時半のあいだにブットがやって来た。彼はバロンピマン宮を外苑から遮る鉄の扉のすぐ脇にある控室で休んでいたのだ。彼の説明によると、この時刻の出仕は「いつもどおり」だという。

日は、もうかなり高かった。夜になっても二十七度を下らないバンコクの気温は再び上り始めていた。日曜日も、とりたててほかの日と変っているわけではない。宮殿を取り巻くバンコクの町は、すでに一日の活動を始めていた。運河の奥のフローティング・マーケットでは、小舟が野菜や果物を売っていた。商人たちは店の床に敷いた寝具をたたみ、表の鉄格子戸を開け始めていた。仏僧たちは、朝の托鉢を終ったところで、重くなった鉄鉢を抱いてそれぞれの寺へ帰るところだった。自動車が走り、市電が走り、超満員のバスが走り、リキシャが夜のあいだ町をうろついていた野良犬たちをけ散らしながら走り始めるにつれて、バンコクの町はにぎわいを増していった。

ブットは、ナイ・チットと同様、勤務の日には必ずやる仕事の段取りに従って動き始めた。まず掃除婦たちが来ているのを確認した（彼らは、国王が自室にいるときは、東翼には来ないことになっていた）。つぎにブットは裏廊下からアナンダの更衣室に通じる網戸を半開きにした。国王は、午前八時から八時半までのあいだに起き、更衣室を横切ってバスルームに入る。そのあいだにブットはグラスに入れたオレンジジュースを持って寝室に入り、ベッドの脇のキャビネットの上に置くことになっている。それから蚊帳を取りはずし、朝刊を書斎のデスクの上に置く（王が読む手間をできるだけはぶくため、ブットは二つ以上の新聞にのっている同じ記事に赤か青の鉛筆でしるしをつけることになっていた）。最後に書斎と表廊下のあいだのドアの鍵をはずす。それがブットにとって一日の始まりだった。

いつものオレンジジュースは、メインホールの近くのサービステーブルの上にあった。ブットは、それを取って更衣室のそとの窓枠の上に置き、廊下にすわって半開きのドアごしに更衣室の中を見ていた。午前八時ちょっと前に新聞が配達されてきた。そのすぐあとに、だれかが、国王が読みたいといっていた王室ボーイ部の歴史についての本を持ってきた。

ブットの説明によれば、そのつぎに起ったできごとはこうである。

午前八時半ごろ、更衣室のそとから部屋のほうを向い

ているブットは国王が立っているのを見た。王は寝室のほうに顔を向け、つまりバスルームには背を向けていた。そしてブットをちらっと見たが、なにも言わなかった。ブットは、国王がバスルームから帰るところだと思った。そこでオレンジジュースのグラスを取上げ、部屋に入った。国王は、ものも言わずに寝室へ入っていく。ブットは寝室のドアのところで立ちどまった。

アナンダは、ベッドに入っていた。ベッドは寝室の中央に置かれ、頭板は仏間のほうにある。国王は両膝を立てて頭板に背をもたせ、ベッドの裾のほうを向いていた。そしてブットに近いほうの手、つまり左手で、あっちへ行っていなさいという合図をした。

ブットは、更衣室のそとのもとの位置に戻った。約十五分後に、予期しない登場人物が現れた。ナイ・チットだった。ブットとの引継ぎまでには、まだ二時間もある。ナイ・チットは説明した。チャクリ家の勲章を入れておく箱を注文するように命じられたので、けさ宝石商へ行ってきたところだ。更衣室の金庫の中にある勲章の正確な大きさを知りたいので、いま大膳部へ行って、それを書き込む紙をもらってきたのだという。

国王はバスルームへおいでになったのだが、とブットは教えてやった。しかし、オレンジジュースも飲まずに寝室へお戻りになったのだ。国王の目をさまさせてはと思ったナイ・チットは、更衣室の前の廊下で、ブットといっしょに待つことにした。少くとも、それが二人のボーイの自供である。

十分後——午前九時ごろに王弟のプミポン殿下が裏廊下づたいにやって来た。もう朝食をすませたのだという。プミポンは、二人のボーイに、兄の容態を尋ねた。

「ご心配なさることはないと思います。王様はトイレのあと寝室へお戻りになり、まだオレンジジュースも召し上っていないのですが」

と、ブットが答えた。プミポンは回れ右をして自室へ帰っていった。

さらに十分たった。正確には九時二十分前後だっただろうか。

一発の銃声が空気を引裂いた。疑いもなくピストルの発射音だ。しかもアナンダの寝室からである。

宮殿の反対側では、王母殿下は侍女を従えて朝食のために自室を出ようとしたところだった。突然、ナイ・チ

ットが駆け込んできた。

「王様が自害なさいました！」

彼は、そう絶叫した。

王母殿下のくちびるを洩れた最初の言葉は、機械の音のような響きを持っていた。

「ああ、ナンド……」

恐怖と息子への愛と絶望、それに加えていま聞いたことが信じられなくて、王母殿下は一瞬その場に立ちすくんだ。つぎの瞬間、彼女は駆けだしていた。駆けながら、彼女は、ボーイの間違いであってくれればいい、かすり傷かなにかで、アナンダがいつものように寂しそうな微笑を浮べながらピストルなどいじっていたことを謝ってくれればいいと思っていた。だが、寝室に入ったとたん、王母殿下の希望はうちくだかれた。

アナンダは、まるで眠るようにベッドの上に横たわっていた。花模様の蒲団がアゴまでかかっている。アナンダは仰向けになり、足をまっすぐに伸している。両腕は蒲団の上に出て、これもほぼまっすぐに伸ばされていた。左手首に時計をしている。左手の指に指輪がある。そして、その手から一インチか二インチのところにアメリカ陸軍用45口径ピストルがあった。王母殿下は、そんなことを一瞬のうちに見たわけではない。彼女の目は、なによりもアナンダのひたいから流れ出る血にくぎづけになっていた。ナイ・チットが、彼女のために蚊帳を開いた。王母殿下は、悲鳴を上げながら、わが子の遺体にむしゃぶりついた。

まもなく女官長が来た。彼女は、プミポンの部屋で八ミリフィルムを片づけているところだった。そのとき銃声を聞き、それに続いて廊下を走っていく足音が聞えた。王母殿下が国王の私室のほうへ走っているのを見て、女官長は、すぐにあとを追った。王母殿下は、ベッドの上にかぶさるように倒れ、泣きながら「ナンドや、ナンドや」と繰返していた。女官長は、彼女をなかば抱き上げたが、王母殿下はベッドの脇に膝をつき、なおも泣きつのる。そのあいだにも国王の顔、肩、そして枕の上に血が噴き出していた。女官長は、やっとのことに泣きじゃくる王母殿下をベッドの裾のほうへ動かした。そこで、彼女は再び床に突っ伏してしまった。

女官長は、国王の手首をとって脈を見た。一四五〇年の王室法は新しい刑法にとってかわられたばかりで、新

法によると、王族のからだにさわっても重罪に処せられることはなかった。しかし、古来のタブーはやはり厳然と残っていたのだが、女官長はあえて禁を破って王の手をとったのである。

　脈は打っていた！　国王が生きているのを発見したつぎの瞬間、女官長は手首のすぐそばにあるピストルに気づいた。すべては、たとえようもないほど混乱していた。ピストルの銃口が王母殿下のほうを向いているのを見た女官長は、事故があってはいけないと思い、それを三本の指でつまみ上げて、ベッドの脇のキャビネットの上に置いた。そこにはアナンダの眼鏡があり、小さな置時計が、持ち主の生命の最後の秒を刻んでいた。というのは、女官長がもう一度、国王の手首をとったとき、脈はとまってしまっていたのだ。

「脈がある！」と彼女が叫んだ瞬間、思わず泣きやんだ王母殿下は、脈がとまったと聞いて、前よりもはげしく泣き始めた。そして蒲団の端でアナンダの傷口を押えて、流れる血を止めようとした。布がたりない、もっと持ってきて、と彼女は叫び始めた。

　プミポンは、彼自身の証言によると、自室にいて、だれかの叫び声を聞いた。ポーチのほうへ出ていくと、侍女がいて、兄国王が自殺したと教えてくれた。彼は、すぐに兄の寝室へ行った。女官長のすぐあとだった。部屋のそとにブットがいたので、大急ぎで侍医を呼ぶように命じた。寝室にとって返すと、母が兄の傷口をとめようと懸命になっているところだった。彼は母をなだめ、ベッドのすぐ横にあった椅子にすわらせた。十八歳の少年にしては、すべてに落着いた処置であった。

　血をとめる作業を、女官長がかわってやり始めた。彼女もまた、幼いころから面倒をみてきた国王の死を眼前にしながら冷静だった。信心一途の女だったので、死は避けられず、この世は仮りの世にすぎないという仏教の教義を信じきっていたこともある。

　プミポンの指示を受けたブットが階下へ行ってみると、侍医にはすでに連絡ずみだということだった。自宅のニット博士はパトロンだったマヒドン殿下の勤倹努力のしきたりに従って、庭に出て自分の車を洗っているとき呼出しを受けた。一人のボーイが、すぐにグランド・パレスに来るようにという王母殿下の命を携えて来たのである。博士は、手を洗って、バロンピマン宮へ急いだ。着いたのは午前十時少し前だった。

　ニット博士が王の寝室に入ったとき、王母殿下は寝室だったか、寝室の見えるドアの向こうの書斎だったかで椅子にすわり、プミポンは椅子の横の床にすわっていた。プミポンはくらい顔をしていたが冷静だった。博士は、急いで、しかし敬意を失わないていどに膝行してベッドににじり寄ったが、ちょっと診察しただけで弱々しい声を上げ、もうなにも打つ手はありませんと宣言した。そのとき、悲しみのあまり途切れがちの問いが王母殿下の口をついて出た。

「こんなこと……こんなことが、あって、いいのでしょうか」

　それを彼女は博士に聞いているのではなく、運命に向って質問しているのだった。

　王母殿下は、アナンダの遺体を清めてほしいと博士にたのんだ。博士は、女官長と二人のボーイに手伝わせて国王のからだを清めた。アナンダのひたいの左の眉の上にある弾丸の射入口を見た博士は、ふと、それが手紙の最後にキスのしるしにつける小さい十字のマークに似ていると思った。

　新しいシーツや下着が寝室に運ばれてきた。やがて大きな氷塊と扇風機がかつぎこまれた。氷塊をベッドの両脇に立て、扇風機で風を送って、遺体の上に冷たい空気を送ろうというのである。やがて扇風機のうなる音と王母殿下の泣き声を除いて、寝室は完全な沈黙に支配された。「生命の王」の死を前にして、だれ一人、物音一つ立てようとしなかった。

　しかし、バロンピマン宮の階下で、バンコクの町で、事実はうわさと結びつきながらひろがり、驚愕と懐疑とショックと疑念は思う存分に羽根をのばしていった。事実とうわさの結合は、やがて事件全体を覆いつくすに至るのだが、最初のうちは、グランド・パレスで実際に起った悲劇のほんの助奏にすぎなかった。

　ニット博士が呼び出されたとのほぼ前後して宮廷警備隊長は電話で事件を儀典課長に報告した。儀典課長は私邸にいたが、急ぎ参内する前に式部官長に連絡し、事件のことをメナム河畔の官邸にいるプリディ首相に伝えるよう命じた。報告を受けたプリディは、すぐに王室庁長官、内務大臣、警察長官を呼び寄せ、バロンピマン宮へ同行するよう命じた。王室庁長官は、そのときのプリデ

ィの言葉遣いをはっきり覚えている唯一の人である。

「総理は非常に興奮し、部尾の中を歩きまわっていました。私に、彼は英語で『国王は自殺なんだ』と言いました」

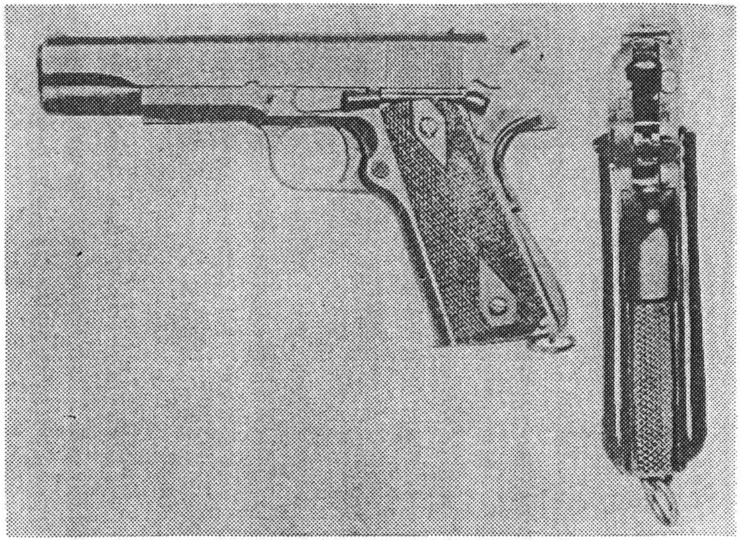
四人は、バロンピマン宮へ急いだ。宮殿には王族の長老格の王子が五人、主要閣僚、王室庁関係者らが続々と集ってきた。彼らは、まず王の遺体に表敬してから、階下の一室で収拾策を協議した。

警察長官はじめ警察関係者たちは敏捷に動いた。アナンダの遺体を検視したいという彼らの要請は、王の叔父ランシット王子に一蹴された。長いあいだ投獄されていた王子は、いまだに伝統の殻を固く守っていた。王族には、何者も触れてはならないのだ。そのかわり、宮殿内外の検案、ボーイたちや護衛兵、その他の宮殿勤務員の取調べが徹底的に行われた。警察長官は、はじめのうちは暗殺の線だった。しかし捜査の結果を聞いて自殺と断定した。

階下に集合していた王子たちや閣僚、政府高官たちも警察長官と同意見だった。興奮に包まれたこの重苦しい会議のことは、これからもたびたび出てくるので、ここで仮りに「宮廷会議」と名づけておきたい。それに出ていた何人かは、後日になって、自殺説には完全には承服できないものがあったと言い始めた。しかし、当時の混乱の中で、彼らがなにかの疑惑を感じたとしても、それは胸をよぎる漠然とした不安にすぎなかったものと思われる。

暗殺者が出入りした形跡は、なに一つ認められなかった。プリディ首相は、国王には自分を含めてだれ一人も敵がなかったと断言した。二人のボーイも宮廷会議に喚問された。ナイ・チットは、問題のピストルを持ってくるように命じられた。

ピストルは、国王のベッドのそばの小さなキャビネットの中に常に入っていた。女官長は、それをベッドの上からつまみ上げてキャビネットの上に置いた。だが、ブットは、ひょっとして王母殿下が後追い自殺をしてはと、あとで更衣室の引出しの中にしまっておいたのだ。ナイ・チットは、それを引出しごと持ってきた。引出しの中には、不思議なことに、王を殺した銃弾の薬莢も入っていた。（のちにナイ・チットは、それは自分がベッドの近くの床の上に落ちていたのを見つけ、ピストルといっしょにしておいたのだと説明した）。そのあとで、ナイ・チットは、国王がどういうふうにして自殺したかを演じてみせるように命令された。彼は、床の上に寝て、自分が想像するとおりをやってみせた。ブットのほうは、悲しみのあまり口もきけなかった。ピストルは、宮廷会議出席者の手から手へ渡された。安全装置ははずされ、いつでも発射できるようになっていた。弾倉は満室マイナス一発だった。



アナンダの死因となったコルト45口径ピストル

王子や政府要人たちが心を悩ませていたのは、国王の死の原因ではなかった。どう見ても、疑いもなしに自殺のケースである。だが、問題は、国民にどう説明するかであった。王室の名誉と威厳を考えると、自殺を公表することはショックが大きすぎる。ランシット王子が非常に強くそれを主張し、残りの人々も同意した。しかし、それでは、なんといって一般国民に知らせたらいいのだろうか。

混迷と悲嘆にくれる人々からいろんな提案が出たが、どれも満足なものがなかった。コレラにかかった、あるいは急な腹痛で……だが、ニット博士が死因を内部疾患にすることにはげしく反対した。バンコクというところ

は、世界のどこよりも、うわさが早くひろまるところだ。腹痛などと発表したら、たちまち毒殺説が出てくる。

　時間がたつばかりだ。なんとかしなければならない。午後もそろそろ日が傾くころになって、やっと発表文が書き上げられ、全員が賛成し、王室庁から発表された。

「今年六月二日いらい、国王においては腹部疾患のためご不快にわたらせられた。それにもかかわらず、王は公式行事に精励しておられたが、最近ではご疾病回復の兆もなく、やむなく病床につかれ、予定された行事にも欠席されることになった。九日朝、午前六時に起床された王は、カスター・オイルご服用のうえ再び就寝された。午前九時、一発の銃声が聞えたため、二人のボーイが王の私室に入ったところ、王はベッドの上でご薨去になっていた。ボーイたちは直ちにその旨を王母殿下に報告し、そのあとご遺体に仕えた。警察長官と厚生省専門家の調査により、王はご愛用のピストルをもてあそんでおられるうち暴発したとの結論を得た」

　声明文の中の細かい矛盾点は、タイ人が事実を忠実に再現する能力に欠けていることを示すと同時に、この不可思議きわまる文書に同意した少くとも過半数以上の人人がどれほど取り乱していたかを物語るものだろう。彼らは、なによりも玉座の神聖を守ろうとした。だから、なんとかして説得力のあるお話しをつくろうとした。国王は病気だった、弱っていた。そのことは、王がいつものようにピストルをいじくりまわしていて事故が起ったという説明に、いくらかでも信憑性を加えると思われたのだ。

　発表文は、その日の夕方、ラジオで全国に伝えられた。何人かは、午後のうちに耳にしたうわさがやはりほんとうだったのだなと合点した。国王の死を、神秘な前兆によって知った人も少くなかった。シャム人は、西欧で教育を受けたほどのインテリでも前兆を信じるのだが、この日もセニーとククリのプラモート兄弟は、夕焼けの空にチャクリ勲章の綬に似た黄色い筋を見て、手をとりあって泣いたのだった。

　しかし、大多数の国民にとっては、ラジオのニュースは第一報で、彼らは異様なショックに打たれた。運河の上に張り出した高床のチークの家から、川にただようサンパンの中から、木立ちに囲まれた富豪の邸宅から、ごみごみした商店や町工場の中から、突然のニュースを聞いて悲しみにうちひしがれ、あるいは心の奥に好奇心を燃やした人たちが何万何千と出てきて、グランド・パレスの白い城壁のそとに立った。バンコクだけではない。ニュースは水田や山やジャングルを越え、ラジオを持っている僧や金持たちの口を通して国のすみずみにまで伝わった。バンコクの人々よりも素朴で、王室への尊崇心あつい農民にとって、ショックはひとしおだった。

　ランシット王子は、バロンピマン宮に着くなり、義妹に当る王母殿下をつかまえ、あたりはばからぬ大声でのしった。

「そうだ、そうだ。あんたが見てもらった占い師は、やっぱりえらいやつだったな。アナンダじゃなくて、結局はプミポンが王になったじゃないか！」

　やがて、宮殿へ駆けつけてきた人の何人かがプミポンの前にひれ伏して臣従の礼をし始めた。王母殿下も、そのことに気づいた。はじめのうちは、あとに残ったたった一人の息子を王位につけるなど考えるだけでもいやだったが、そんな感情は、公的な立場への配慮によって押さえられた。そして、プミポン自身が、もし王として即位しなければならないのなら自分はそうするつもりだと洩らしたとき、彼女の気持もそれに傾いていた。ただ、この国には自動継承権はなかった。新王は、まず国会で提案、承認されねばならないのだ。

　マイカーの洗車に始ったニット博士の一日は長かった。長時間の宮廷会議が終り、政府声明文が発表されても、彼の仕事は終らなかった。午後九時、彼は鎮静剤を持って再びバロンピマン宮に戻った。彼は、それを女官長に渡すつもりだったが、姿を見せたのはプミポンだった。「母には私が渡しましょう」と言って、プミポンは薬を受け取った。

　王弟は沈鬱な顔だった。しかし、いまの彼には、それまでの陽気な少年を知っている博士にも、言葉では説明のできない静かな威厳があった。博士は、アメリカで、プミポンが生れる前から彼の両親を知っている。柔和な人柄の博士と、プミポンたちは親戚のようなつきあいをしてきたのだ。そのニット博士に向って、プミポンは静かに口をひらいた。

9

チュラロンコン医師団による〝発見〟は、やがて新聞に報ぜられた。この記事は、それよりさきに無数の怪電話によって口火を切られていたいまわしいうわさに〝科学的〟な裏づけを与えることになった。怪電話は、アナンダが死んだ日曜日にすでに始まっていたようだが、月曜日になると、それはアメリカやイギリスの大使館、軍の首脳その他の要人のところへもかかってきた。ただ暗殺だという電話が多かったが、暗殺者の名をはっきりいったものも少くなかった。その名は、ある映画館の暗やみの中でも、突然、だれかが叫んだ。

「プリディの王殺し！」

うわさは、バンコクを怒りと憶測と不信のうずに投げ込んだ。国王の急死というだけでもショッキングなのに、アナンダのそれは政治的な怨恨が錯綜する真っただ中で起ったのである。しかも、国民の目にうつる状況証拠は、疑惑をかき立てずにはおかなかった。

不審な状況証拠の最たるものは、例の政府発表文だった。長々と説明されているが、かんじんのところにはさっぱり触れていないのである。用心深く、しかも火器の扱いには不慣れではなかったはずの国王に、いったいどういうふうにして事故が起ったのか、また、急進的な王制主義者は、なぜ一人の検挙者も出ないのかと、彼らなりの不審をはっきり口にした。理由がどうであれ、国王が異常な死にかたをしたときには大量の処刑者が出るのが歴史的なしきたりなのだ。それに加えて、政府が翌日に発表した追加声明は、さらに事件のあいまいさを強調する結果になった。

この声明文は、警察本部のもので、例の宮廷会議とほぼ同じような会議のすえ、結論として発表されたものだった。すでにバンコクじゅうに蔓延し始めているうわさを打消すために、声明文はまず他殺、自殺、事故という三つの可能性を併記し、そのあとで国王の死が事故死以外のなにものかである証拠は一つもないと述べていた。アナンダはベッドの上でピストルをもてあそんでいた。安全装置が作動するかどうかを確めたのだろう。そのとき、偶然に指が引き金を引いた……。

あくる日、また声明文が出た。こんども警察からだった。運命の日の国王の公式予定である。午前中に一人の王子が僧籍に入る前のあいさつに来ることになっていた。昼食の客にはスバ・スワット王子が予定されていた。それから王室庁の神学博士が来て、国王出発前の大僧正との会見をアレンジする予定になっていた。声明文によると、こうした予定がある以上、国王は事故死で、「自殺説は明らかに取上げるにたりない」となっていた。

まるで説得力のない理由づけだが、とにかく自殺説だけは否定された。国王が自殺するなどと考えること自体いまわしいうえに、アナンダには自殺の動機がまったくなく、バンコクを去る日をわずか数日の先にひかえた国王には、情緒的不安定のかげらも発見できなかったからである。

しかし、暗殺のうわさと暗殺者の名は、昼も夜もバンコクの町に舞い、外国にまで流れ出た。人々は驚き怒り、猜疑と不信が充満していたシャム政界は大きくゆらいだ。プリディ支持派は、このようなうわさは王制派の謀略だと反論し、かえって謀略の背後にいる民主党を攻撃した。

怪電話や映画館の中の無名の糾弾者も民主党のしわざで、プリディをおとし入れるために人を雇ってバンコク市内各地でデマをふりまいているという〝事実〟も暴露された。もちろん、道化師クオンやプラモート兄弟はこんな抗議をはねつけた。国王の死については、政府声明では説明されていないなにものかがある。だから民衆はうわさしないではいられないのだ、というのが彼らの主張だった。

王の安全について責任をとるべき首相として、またアナンダに祖国訪問を要請し、さらにはその滞在期間を延長するよう懇請した責任者としてのプリディは、こうした疑問について説明できる立場にあったし、とりわけ彼の名が王殺しと結びつけてささやかれているときなのだから、国民に説明すべき義務もあった。しかし、王の怪死の時期にプリディがたまたま首相だったことはプリディ派にとっては取返しのつかないマイナスで、たとえ彼が説明しても、国民の動揺はおさまるはずもなかった。そのうえ王制派は、プリディを頭から信用していなかったので、彼らにとっては、うわさだけで証拠は十分、どのみちプリディの説明が役に立つはずはなかった。

プリディ以外にもうわさの口の端に上った人物がいないわけではない。プリディ派も、バンコク駐在の西欧外交筋も、それぞれ勝手に国王暗殺者の目星をつけていた。これまでに登場した人物のすべてが犯人視されたといってもいいほどだ。しかし、シャム国内に関するかぎりでは、その真偽はともかく、うわさの主人公は圧倒的にプリディだった。そのうちもっとも有力なのは――謀反を企てたプリディあるいは彼の一味が殺し屋を雇い、宮殿内部の同調者の手引きで国王暗殺に成功した、というのだった。

その理由として、プリディの野望があげられた。野心家のプリディは、もともと国王を尊敬などしていなかった――それを立証する事例はいくつもあった。そして、とくに東南アジア連邦案が国王の反対でつぶれていらい、シャムを赤い共和国にし、自分が大統領になるハラだった、と、うわさはいうのだ。

うわさは、とどまるところを知らなかった。それによると――プリディは、はじめ国王一家を皆殺しにするつもりだった。ところが、アナンダの出発を前にして、だれを摂政にするかでプリディと国王の意見が合わず、プリディ派は予定を早めてアナンダを消すことにした。国民は知らないが、プリディは病的な嫉妬心の持ち主で、前々からアナンダの人気と地位をねたんでいたのだ……等々。

また別のうわさによると、プリディの野望を察知したアナンダは、王位を弟のプミポンに譲って自らは政界に入り、国民の強い支持をバックにプリディ派と対決するつもりだった。その情報をつかんだプリディ派が先制攻撃をかけたのだ――ということになっていた。

プリディの名にかぶせられた嫌疑のかずかずは、理性的に考える西洋人なら小首をかしげるところだが、この国では、そんなことは問題にならなかった。東洋人は、論理的に殺人の動機を問いつめたりなどせず、直観的に感じたものを、その非合理性などは問題にせずに信じてしまうからである。

プリディをうわさの渦中に引きずり込んだ張本人であるチュラロンコン病院の医師団に対して首相プリディがとった処置は、彼自身の有罪、無罪どちらにでも解釈できるものだった。真実はともかく、国家の安全をおびやかしかねないうわさに対して手を打たねばならなかった。プリディは医師団を喚問し、彼らが情報を新聞に洩らしたことを難詰した。はじめは医師団全員を拘禁しようとしたのだが警察長官に説得されて思いとどまったのである。しかし、医師団を自ら叱責したことによって、プリディと医師たちは、はからずも対立関係に立つことになった。

医師のなかにも冷静な人はいた。国会が王殺しのうわさでわき立っているとき（事実、プリディ派の議員の一人は、反対党によって暴行を受けた）、そしてバンコクで人が二人集まるとその話でもちきりになっているときに、王家の侍医ニット博士は、ひそかに事実の立証にとりかかった。ブタを撃ってみようというのである。

ニット博士は、弾丸の射出口は射入口より常に大きいかどうかを実験によってためしてみようとした。彼は、警察長官にたのんで、数頭のブタを警察本部に集めてもらった。王様のかわりにブタを撃ってみようというのは奇想天外な発想で、批判もなくはなかったが、実験は貴重な結果をもたらした。何頭かのブタを、アナンダと同型のピストルで撃ってみた結果は、チュラロンコン病院医師団の通俗的な弾道学説とは大いに異なるものだったのだ。射出口は必ずしも射入口より大きいとはかぎらなかった。折りから、アナンダの頭があった位置のマットレスの中から弾丸が発見された。

弾丸を発見したのは、ナイ・チットの案内でアナンダの寝室を捜索した刑事たちで、その発見は水曜日だった。うわさがとめどもなく高まるので、警察としても放っておけなくなったのである。刑事たちは、寝具も調べてみた。花模様の掛け蒲団、シーツ、枕カバー、それにパジャマや蚊帳は、すでに洗濯に出され、一滴の血痕も残っていなかった。しかし、洗濯屋は、枕の本体だけは、ふんだんに血を吸ってしまって洗いようもないので、だれにも断らずに近くのゴルフコースの土を掘って埋めておいた。それを掘り返して調べてみると、弾丸は枕には当らず、頭から直接マットレスに侵入したことがわかった。

しかし、このような新事実も、暗殺の疑惑が定着してからではたいして効果がなかった。アナンダがうしろから撃たれたのでなければ、前から撃たれた可能性も十分にあるわけだし、寝ているところを襲われたと考えれば、そのほうが蓋然性が高いほどだった。

疑惑のうずがプリディを中心に回転し始め、新聞の煽動によって収拾がつかない状況になったので、プリディもはじめて具体的な対策をとった。調査委員会を置いたのである。プミポンが成人するまでという条件つきで設置された摂政評議会（議長にはランシット王子がなった）の同意を得て、内閣はアナンダの死後九日目に、この委員会に国王の死因調査についての全権を与えた。警察は、調査委員会の要請に従って入手しうるかぎりの証拠を提供しなければならず、証人の喚問に協力することもきめられた。調査委員長には最高裁判所長官が任命された。委員のうち三人は控訴裁判所長、刑事裁判所長、検察庁長官で、いずれも王族だった。ほかに陸海空三軍の代表、上下両院議長も委員に名を連ねた。

委員会は設置の翌日から活動を開始した。まずバロンピマン宮を実地検証し、ついで四人の西欧人医師を含む十数人の医学諮問委員を任命した。そして、この諮問委は、タイの歴史では先例はもちろん、それまでなら想像もされなかったような調査に着手した。つまり、アナンダの遺体検証をやったのである。

金甕は八つのパーツに分解され、銀甕の蓋が取り外された。遺体は取り出され、からだをぐるぐる巻きにしていた白布も除かれた。それから十方向からエックス線写真をとり、そのあとで国王の遺体を解剖に付した。

左の目の上一インチのところにあった十字型の射入口は、縦横それぞれ一インチと〇・五インチだった。外科用ピンを傷口から差し込むと、弾道はまず頭蓋骨に直径〇・五インチの穴をあけてから、やや下向きに真っすぐ脳を貫き、後頭部左寄りの首筋に近い位置に抜けていた。射入口、射出口ともに細かい骨片がくっついていたが、金属片は認められなかった。弾丸は脳の中枢部を貫通しているため、王は即死だったものと判定された。ひたいの射入口から採取した皮膚を調べたところ、火傷と硝薬粉が認められた。弾丸がひたいから後頭部へ抜けたことは、もはや疑う余地がなかった。腸全部と肝臓、腎臓の一部が取り出されたが、分析の結果は毒物は認められず、アナンダの腹痛をめぐる憶測はこれではっきりと否定された。

医学諮問委は、発射されたピストルの位置についても調査をした。王母殿下がかつて看護婦をしていたシリラット病院で、数体の遺体をえらんで実際にピストルを発射してみた。二十歳から四十歳までの、死後日数もさまざまな遺体が実験材料になった。結論は、ピストルの銃口は、ひたいから一インチ半以内の距離から発射されたに違いないというのだった。

六月二十六日に、調査委員会は、フラメーン広場をへだててグランド・パレスの反対側にある司法省で証人審理を開始した。傍聴席に入りきれない群集は広場にまであふれ、まるでお祭りのような騒ぎだった。バンコクの暑いまっ盛りに、好奇心に駆られた人々は、家族連れでほこりっぽいフラメーン広場にやって来、てんでに歩いたり、すわり込んだり、世間話をしたりして日を過した。屋台店ができ、大鍋を据えて煮込みを売るかと思えば、天秤棒に果物やお菓子をかついできた連中が大声で売り歩いていた。貧しくてそんな食べものも買えない連中や中毒患者は、しわくちゃの手のひらで火だねをころがしながら阿片を喫っていた。

広場のお祭りさわぎをよそに、調査は極めて重苦しい雰囲気のうちに進行した。証人として喚問されたナイ・チット、ブット、チャリュー秘書の姿が見えると、傍聴席からは罵声がとんだ。うわさと新聞が創作し、人々の心の中に定着し始めている王殺し犯人像は、そんな民衆の反応ぶりから見ても明瞭だった。女官長が証人台に立って、国王は暗殺されたのだと思いますと述べたときには、傍聴席から拍手が起った。

そんな様子は、新聞によって逐一報道され、事件はますますセンセーショナルになっていった。シャムの新聞は、欧米のそれのようにちゃんとした機構を持った新聞社とは話が違う。およそ信じられないようなバラックに一台か二台の印刷機を据え、わずかな数の記者たちにも職業人としての自覚がない。スキャンダルを報道するよりは創造したほうが手っとりばやいと考えている連中が多く、資料写真はおろか新聞のバックナンバーや切り抜きなど地道な資料整理は考えたこともないといった新聞である。

プリディも、ついに臨時措置として新聞検閲を始めることにした。調査委員会そっちのけで勝手な想像を書き散らすことさえ困りものなのに、このままでは総選挙にも影響を与えかねなかったからである。総選挙は、それまで任命制だった国会議員の半数が国民の投票によって選任されることになっていた。

安全装置という二カ所を同時に押すという動作が要求される。もしベッドの上に仰向けに寝ていたアナンダがピストルをおもちゃにしていて、なにかのはずみにピストルが滑ったとしても、誤って二カ所を同時に押すなどということが起りうるはずがない。しかもそのときに銃口が彼の頭に向いていなければ死ぬはずがない。アナンダは用心深い性格だったのだし、どうにも説明のつけようがないわけである。

警察は事故説をとっているのだから、たとえ調査委が異る結論を出してもさほどあわてる必要がないというプリディの思惑に反して、国民の声はますますわき立つばかりだった。窮地に追い込まれた政府は、調査委の勧告に従って、警察にさらに捜査継続を命じるよりほかなかった。なぜか、この命令は十月七日まで出されなかったが、警察は重大事件処理の慣例に従って、とにかくも捜査本部を設けた。捜査は、しかし、なかなかはかどらなかった。そして、国民に対してなにも新しい事実を示すことができないうちに十六カ月もの時間が経過し、一九四七年十一月の事件が突然、それに終止符を打つことになった。

プリディは、自分が首相を辞し、政治の第一線から退いたことによって、うわさはやがて消えるだろうと信じていた。だが、調査委員会の報告は、彼の希望を打破った。その後の捜査のスローモーぶりもかえってマイナスだった。結論が出ないままに、何人かの人物に対して疑惑が集中し始めたからである。

だれよりも目立ったのはワチャラチャイ海軍大尉だった。侍従武官をクビになった彼はプリディの秘書に、ついで後継のダムロン首相の秘書になった。総選挙がすみ、検閲を解かれた新聞が、しきりにワチャラチャイを王殺しの実行者として書きたてているというのに、これは不可解な登用だった。彼と並んで人々のうわさの端に上っていたチャリュー元秘書も、クビになってからかえって出世した。プリディの推薦で上院議員になったのである。

アナンダの怪死事件と密接な関係にあるとされている問題の二人をプリディは、なぜ重用したのだろうか。また彼の政府は世論が殺人者の一味と指弾しているボーイ二人をなぜ放っておいたのだろうか。なぜ、だれ一人として検挙されなかったのだろうか。

国王暗殺事件の余波は、とくに国会で、戦後経済と苦戦中のダムロン内閣を苦しめた。米不足に悩む周辺諸国への米の密輸は、それ以外の物資をめぐってすでに起っていた政府役人の汚職に拍車をかけた。腐敗は国会議員にも及び、政治をするのは金もうけのためだというシャム人の常識は確認された形になった。一九四七年に入ると、政府はきびしい態度で汚職に臨み始めたが、それでも人心一新にはほど遠かった。だが、議会民主主義はまがりなりにも活動を開始していた。もし十分な時間を与えられれば、それは定着するだろう。問題は、その時間があるかどうかであった。

一九四六年末には、英連邦軍はすべて引揚げてしまった。シャム陸軍は、新憲法の規定を除いては、再びだれにも妨げられずに政治に介入できるようになったわけである。その憲法も元軍人の政界入りを妨げるものではなかった。一九四七年三月には、元首相ピブンは、この抜け道を利用し、実力党を結成して突然、政界にカムバックした。党の支持者や右翼過激主義者は喜んだが、民主党やプリディ派ははっきりと議会民主主義擁護を標榜（ひょうぼう）している。ピブンが再起しても、ファシズムの再来がありうるとは思えなかった。

国王暗殺事件の暗雲はたれこめていた。だが、第一線から退いたプリディは、うとんぜられはしなかった。長老として、もとの官邸にとどまった彼は、政府の助言役として、激励役として、多忙な日々を送っていた。

倫理政治大学の近く、メナム川に面した官邸は、さほどりっぱな建物ではなかったが、なによりも便利だった。ささやかな庭を高い塀が取り巻き、二カ所に木造の門がある。庭には数本の植木があり、川岸が庭園になっている以外は、とりたてて飾りはなかった。家は二棟に分かれていた。プリディは、その古いほうを執務や来客との面会に使い、横の新しいほうを住居にしていた。この新しいほうは、コンクリートの箱型の家が流行した一九二〇年代に建てられたもので、私はその二階を見たが、壁いっぱいにつくりつけた本棚には隠し戸がついていた。自由タイ運動時代の名残りで、戦争末期には、プリディはその奥に無線送信機を置いていたのである。

しかし、そんな時代は、もう遠い過去のことだった。プリディが植えた民主主義の若木は、まだ弱々しかったが成長しつつあった。国王暗殺事件が忘れられさえすれ

ば、すべてはうまくいくはずだった。

　自宅にくつろいでいるプリディの姿には、王殺し犯人を思わせる疑惑の片鱗もなかった。真面目な人柄だが、愉快なときには気持よさそうに笑う。教えを乞う人にはていねいに指導し、家族ともおしゃべりをするし、友人が来れば留学時代に習ったクレープ・シュゼットをつくってすすめる。ごく親しい友人が来ればチェスをして夜を過す……たとえ彼が野心家であったとしても、それは決して物欲を伴った野心ではなかった。そのころの彼は、イギリスの教育費をしきりに調べていた。自分のサラリーの中から子供たちをイギリスに留学させようと思ったのである。公費留学を、彼は固辞していた。

　一九四七年十一月七日の夜、このプリディ邸をダムロン首相が訪れた。三軍の司令官や警察長官もいっしょだった。陸軍部内にクーデターのうわさがあったため、事前に十分な警戒をさせるためプリディが彼らを招いたのである。タイでは、うわさは米粒の数ほどもある。だが、警戒をしておくのにこしたことはない。訪問者たちは、なにも心配することはないとうけあって、まもなく帰っていった。ダムロン首相は、とりわけ、そそくさと出ていった。その夜は慈善舞踏会があり、楽しい音楽と美女たちのドレスや宝石を見て、うすぐらいうわさのことなど忘れる予定になっていたからである。

　しかし、そのあいだにも、プリディの書斎では、電話のベルが鳴り続けていた。そして、そのベルの音は、彼にとっての弔鐘なのであった。

10

　バンコクの夜は、神秘な力を持っている。焼けつくような昼間の暑さはやわらいで、夜の大気に一種の香気を与える。降るような星空。人々の話し声も、まるで柔いささやきのように聞える。運河のさざ波は月光をうつして金色にきらめく。花の香が流れる庭では（蚊さえ気にしなければ）仏に祈るのも恋をささやくのも意のままだ。

　夜、プリディはよく川べりを歩いた。すぐ前には、上流から米を運んできた船が浮び、船頭の家族の話し声がする。約六百ヤード離れた暗い対岸の果樹園には、ときどき女たちが煙草でも喫っているのか、たまに光るものが見えるだけである。ときどき櫓のきしむ音がして、船が滑るように川を上下していく。

　家の中では、電話のベルが鳴り続けていた。だれかが、なにか急用を思いついたのだろう。プリディは、おもむろに散歩を打切った。だが、受話器をとったとたん、彼はまるで電気に打たれたようになった。大事件が突発したのだ。やはりクーデターが起った。陸軍が市内各地で行動を起したという。プリディを捕え、あるいは殺すための決起だ。すぐ逃げなければならない。

　手遅れになる一歩前だった。すでに戦車が走る音が聞え、銃声がした。木の門がこわされる音がする。やがて兵士たちがなだれ込んで邸内をくまなく探した。

　プリディはいなかった。彼は、通りかかったサンパンを呼びとめ、間一髪で自邸を脱出して対岸の闇の中へ消えたのである。

　プリディ捜索は、夜を徹して続けられた。陸軍は政府官庁を占拠し、道路に検問所を設け、大臣や政府の高官を逮捕した。あくる朝、兵士たちはピブンを肩にかついで国防省に入り、ピブンはシャム三軍の指揮官に就任したことを宣言した。彼は、自分がクーデターの計画者であることを否定した。主謀者は空軍司令官とバンコク師団長と、ほかに陸軍の将軍が一人、それにピブンの義息に当る警察将校だと発表された。ここでは、その四人目の男の名だけをあげておこう。このあとシャム戦後史に長く汚点を残したその名はパオ警視である。計画に直接

加っていたかどうかはともかく、クーデターの裏にピブンがいたことは、だれも否定できない。

クーデターの目的は国王暗殺事件の疑惑を解くためだと宣言したピブンは、ランシット摂政の前にプリディ憲法の自由主義的条項を大幅に削った新憲法案を提出した。ただ、西欧諸国がクーデターによる政権を承認しなかったので、まず合法的な政府をつくる必要があった。ピブンは民主党のクオンやセニー・プラモートらを呼びつけ、新内閣をつくるように命じた。新しい政府がピブンの意を体したものでなければならないのは、いうまでもない。

ピブンに招かれた政界人は、日本人にタイを売ったピブンの行為に反対した人々である。合法的な政府を軍によって倒されたうえ、彼らたちもその誕生に参画した自由な憲法を捨てよというのである。さすがの道化師クオンにとっても、つらいことだったに違いない。長い議論のすえに、彼らはピブンの命令を受けることがかえって国益に沿うものと判断した。政府を組織することによって民主主義を維持していけるかもしれないと判断したのである。こうしてクオンは再び首相になった。

プリディの行方は、依然としてわからなかった。ダムロン首相も行方不明だった。舞踏会の最中に警報を受けたダムロンは、兵士たちが表門から入ってきたのと入れかわりに裏門から立ち去ったのだ。彼はバンコクの路地から路地を車に乗って検問所をかわしながら逃げ、翌朝六時三十分にイギリス大使館に到着した。

当時のイギリス大使は、有名なジョフレー・トンプソン卿だった。アイルランドで生れ、オランダで教育を受けた豪胆の士である。すでに世界各地に勤務し、ユーモアと聡明さで知られるベテラン外交官だった。ことあるごとに本省の指示を仰ぐ外交官より一世代前の人物だったトンプソンは、疲れはてたダムロンを一目見るなり、人道的な立場から政治亡命を許す決心をした。ダムロンのほうも、はじめは亡命のつもりだったらしいが、トンプソンに迷惑をかけまいという配慮からか、ひげをそり朝食をとったあと、一台の車の助手席にうずくまるようにして再び大使館から出てしまった。

ピブン指揮下の軍の手を逃れたダムロンはじめプリディ派の主要メンバーは、バンコク市内の秘密のアジトに集り、クーデター粉砕の策を練った。机の上には彼らが

常時携帯しているピストルが置かれていた。

彼らは海軍の協力を求めるつもりだった。プリディが海軍にたよるらしいといううわさは、すでにバンコク市内に流れていた。海軍は、政治に介入したがる陸軍に対して批判的な立場をとってきたからである。民主主義はまだ根が浅く、一般民衆に決起を期待するのはむりだった。またプリディは戦時中の公約を守って、自由タイ運動を正直に武装解除してしまっていた。反撃するなら、力になるのは海軍しかない。しかし、海軍が起てば内戦の恐れがある。プリディは、それを心配していた。それに彼自身の存在がかえって海軍側の正義を減殺することになりかねないし、妥協のための犠牲にされるかもしれない。そう考えたプリディは、いったん身を寄せていたメナム河口の海軍基地サタヒップを出て、事態の推移を待つことにした。

パオ警察長官

事態は、プリディに不利な方向に動き続けた。民主党がピブンの要求をのんだため、政界を反クーデターに大同団結する可能性は消えた。バンコクを出て南東タイに逃れたダムロン首相も、決起に必要な兵力を集めることができなかった。英米両国は、海軍に内戦を避けるよう勧告した。クーデターの指導者たちは札束攻勢に出た。不穏分子は逮捕し、従うものには昇進を与え、まもなく軍事的にも完全な優位に立ってしまった。

プリディ捜索は続いていた。クーデターを正当化するため、いまや公然とプリディを国王暗殺の元凶者呼ばわりしていた。もし逮捕すれば、これも行方不明の暗殺実行者ワチャラチャイとともに裁判にかけるつもりだと彼らは公言した。その第一歩として、三人が逮捕され、脱走や救出を防ぐため市内の刑務所の奥まった監房に放り

込まれた。プリディの共犯者にされたその三人とは、ナイ・チット、ブット、そして元秘書のチャリューである。ほかに王室庁の高官一人とワチャラチャイ夫人も逮捕されたが、長い訊問のすえに釈放された。

捕った三人は、その後長く全国民の注目を浴びることになる。しかし、ここではプリディとワチャラチャイの捜索のほうに触れておこう。うわさは無数にあって、ときには同じ時刻に数カ所にプリディが「絶対にいた」こともあったが、どれ一つとしてプリディのほんとうの動きを捕えたものではなかった。

いま、ここに、真実を書いておこう。

当時のイギリス大使館付き海軍武官はストラットフォード・ハーキュリーズ・デニス大佐だった。アイルランドの伯楽（ばくろう）の子でグランド・ナショナル・レースで五度も優勝し、のちにケンブリッジを出たデニスは五十歳前後だった。小柄で、日に焦けた細面の静かな物腰からは、彼の剛毅な性格をうかがうことはできなかった。だが、彼は、第一次大戦ではユトランド海戦に、第二次大戦ではダンケルクからノルマンディーまで多くの激戦に参加したことがある。日本が降伏したときにはニューデリーにいて、東南アジア司令部の連合軍作戦部次長だった。バンコクには、日本軍の武装解除をするため六人のグルカ兵を連れて乗り込み、シャム海軍の再建にも力を貸した。そのあいだにプリディに会ったこともあった。

一九四七年十一月十九日の午前六時ごろだった。英国大使館からほど近い自邸で、デニスは一人の訪問者に呼び起された。訪問者はシャム海軍の将校で、彼に会うなり「ルースがいるんです」といった。デニスは即座に了解し、ドアを開いた。門のそとの車から海軍の制服を着た五人の男が出てきた。

トンプソン自動小銃二挺、手榴弾数個、ピストルなどが彼らの携行してきた武器だった。ワチャラチャイはすぐにわかった。しかし、大きな帽子を着、厚い眼鏡をかけたうえ、口ひげのあるほおのこけた男は、自分がプリディだと名乗るまでわからなかった。ポケットから入れ歯を出したので、はじめて合点したほどだった。

一行は、隠れ家からデニスの家まで二百キロも脇道ばかりを走ってきたという。疲れきった様子のプリディは、珍しくウィスキー・ソーダを飲んだ。どんな方法を使ってもいい国外に脱出したいという。脱出しなければ

生命が危険だというプリディの勘は、その後のできごとによっても証明されたのだが、そのときのプリディはデニスに脱出のための援助を要請した。デニスは、一行を二階の一室に案内し、窓に近寄らないように注意しておいてイギリス大使館へ急いだ。大使館の前庭にはビクトリア女王の銅像がある。アイルランド人らしく、大佐は駆けながらも銅像にウインクを送った。

公邸のトンプソン大使は朝食のテーブルに向ったところだった。そこへ中国人の執事が入ってきた。

「デニス大佐ドノ会いたい、イソイデ」

大使は、すぐにデニスを通した。そして一部始終を聞くと、アメリカ大使館へ行ってエドウィン・スタントン大使と密議した。両大使とも、いまから手がけようとすることが外交的にみて違法かどうかは二のつぎだと考えていた。プリディは戦時中の同盟者であり、国王暗殺者などではありえない。尊敬すべき人物だった。アメリカ大使館付き海軍武官のスキーツ・ガルダス、ついでシェル石油のバンコク代表ウィリアム・アダムが密議の席に呼ばれた。アダムは、捕虜としてビルマ国境の死の鉄道で働いたことがあり、ピブンが大きらいだった。そのアダムの話では、ちょうどシェルのシンガポール行きタンカーがメナム河口で汐待ちしているという。急拠、計画が練り上げられ、デニスがそれをプリディに伝達した。

プリディとの話が終ったか終らないときに、デニスの友人でピブン派の王子が表戸をノックした。プリディがバンコクにいて、メナムから逃亡をはかっているらしいが、なにも聞いていないかと王子は聞いた。たしかにそんなことを聞いた、対岸のトンブリから郷里のアユタヤへ逃げるらしい——と、大佐は答えた。そして王子が立ち去ると同時に、ほんものの脱出行が危険を冒して開始された。

午後一時になっていた。デニスがジープを運転して先頭に立ち、プリディらは乗用車であとに続いてバンコク市内を南へ走った。検問所で停められたときに疑惑を招かないように、武器の多くはデニス邸に残した。実際に彼らは検問所で停車を命ぜられた。しかし、西洋人の将校とシャムの海軍将校との組合せは自然だったし、兵士たちも海軍と無用の衝突を避けるよう指示されていたため、敬礼して一行を通してくれた。こうして彼らは、計画どおり午後一時半にクロントン港の第一突堤に横づけ

したランチにまでたどりついた。

ランチはスキーツ・ガルダスのもので、もと駆潜艇だった船である。脱出行にはうってつけだった。ことが洩れないようガルダスはタイ人の乗組員に休暇を与え、彼と十九歳になる妹の二人だけで操縦をすることにしていた。プリディが乗船すると同時にランチは星条旗をかかげ、ピブン派の警戒きびしいメナム川を二十マイル川下の河口へ向って針路をとった。

デニス大佐が自邸へ帰ると、ちょうどアメリカ大使館の武官から電話がかかってきたところだった。大使館周辺でシャム陸軍の不穏な動きが見られるのだが、いざというときの武器が十分にないという。デニスは、プリディたちが残していた自動小銃や手榴弾を外交行嚢に入れ、アメリカ大使館へ届けた。（さいわい、この武器は使われずじまいだったが）

プリディを送り出してしまったあとは、無事を祈りながら待つ以外にすることがなかった。タンカーは、午後四時に公海に出ることになっている。特定のランチに呼びとめられたときに無条件でその乗客を便乗させることは、すでに了解ずみだった。バンコクで待っている脱出援助者たちにとっては、息づまるような午後だった。シェルのウィリアム・アダムのところへタンカーから無電が届く手はずになっている。しかし、長い午後は無為に過ぎていった。

午後六時になって、やっとトンプソン大使のもとへアダムから電話がかかってきた。

「タンカーM・V・——からの報告によると、エンジン故障のためしばらく停船したが、航海を無事再開したとのことです」

それが成功の場合の暗号だった。プリディは脱出しおおせたのである。（もっとも、すべてがうまくはいかないもので、ガルダスの船は、プリディを送り届けたあとほんとうにエンジン故障を起し、そのうえ浅瀬に座礁したため、バンコクに帰りついたのは翌朝の十時だった）。

トンプソン大使は、ロンドンの外務省から叱責を受けるのを覚悟していたのだが、ときの外相アーネスト・ベバンは、彼の異例外交行為を事後承認する旨の訓電を送ってきた。その翌朝、大使は、アメリカ大使と連名で、シャム政府のクオン臨時首班（英米は、まだ新政府を承認していなかった）宛てに覚書を送った。両大使は、戦時中の友情にかんがみてプリディの懇願をいれ、国外への脱出を援助した。なお、このことがシャムの政情安定に貢献することを希望する。覚書は、そんな内容だった。公然とシャム主権に挑戦したこの覚書は、今日でもなお英米の〝裏切り〟を怒る王制派の憎悪のまとになっている。

プリディの逃亡は、たしかに政治的熱狂を鎮静する効果を持っていた。年があけて一月には総選挙が行われ、プリディ派がほとんど立候補しなかったため、民意によって信任された形のクオン政権に英米両国も承認を与えた。総選挙では、それでも民主党五十四、ピブン派七に対してプリディ派は十八議席を獲得していた。

プリディの憲法を改正し、国会議員の半数を任命制にすることによって、ピブンは軍部だけでなく政治までも掌中におさめた。しかし、プリディが生きているかぎり、それは彼にとって脅威の存在を意味していた。

その脅威を解消する方法は簡単だった。プリディの名前を国王暗殺と結びつけさえすれば、彼があらゆる公職に復帰することは不可能になる。プリディを犠牲ヤギにすることは、別の意味でも効果があった。王制派は、かずかずの〝証拠〟によって、プリディが王殺しの元凶だと確信していたからである。王制派以外の人々は、つぎつぎに提出される証拠にとまどい驚くばかりだった。そうした証拠を探し出したのは、皮肉なことにセニー・プラモートの義弟だった。セニーが首相だったとき、警察長官にしようとしてプリディが拒否したプラピニットという名の男である。

彼は引退していたのだが、国王暗殺事件を徹底的に追及しなければならぬと決心したとかで、希望して再び現役に復帰し、警察に置かれた捜査本部を指揮することになった。とりあえず逮捕した三人に対する起訴状が用意された。起訴状に記載された容疑者は、元国王秘書のチャリューとナイ・チット、ブットの三人だけだったが、その内容ははっきりとプリディ、ワチャラチャイの二人を元凶ときめつけていた。欠席裁判によって、彼らの汚名を歴史にとどめようというのである。世にも不思議な裁判は、こうして始った。法廷は、プリディの有罪をなんとか立証しなければならない立場に立たされた。

シェルのタンカーは、プリディを無事シンガポールに送り届けた。しばらく検疫用の離島にとじこめられるハ

プニングはあったが、脱出は成功した。しかし、自由になったプリディにも、国王暗殺事件の裁判が終るまでは、英米両国ともに喜んで亡命を許すはずがなかった。ワチャラチャイ以下少数の同志を従えて、プリディは、しばらくわれわれの前からも姿を消す。その前に、彼はイギリスの東南アジア特別弁務官だったキラーン卿に手紙を書いた。

「私は、アナンダ王の死を衷心から悼むとともに、私が国王の死にいっさいの関係を持たなかったことを誓う。なお、私の同行者も、あの不幸な事件に絶対関与しなかったことを私は知っているし、信じている」

プリディの手紙のこの文句が真実かどうかは、裁判が証明することだろう。国王暗殺事件の裁判は、ようやくにして一九四八年九月開廷ときまった。

開廷の前に、道化師クオンは、もう一つの喜劇的役割を演じた。プリディ失脚のあと、諸外国の承認をとりつけるためピブンの要請によって首相に就任したクオンは、ある日、四人の陸軍将校の訪問を受け、辞職を勧告された。軍に与えられたポストは、それが軍の意志なら放棄するほかない。

クオンにかわって首相になったのは、わずか三年前に全国民にののしられながら獄につながれたピブンだった。歴史の歯車は逆に回転し、新首相ピブンは、プリディを政治的に葬る国王暗殺事件公判の開廷を、自信たっぷりに待ちうけることになった。

3部　裁　　判

1

国王暗殺事件公判の完全な記録というものは存在しない。証言の記録もない。裁判官はそれぞれにメモをとり、それをたよりに評決に到達したのである。

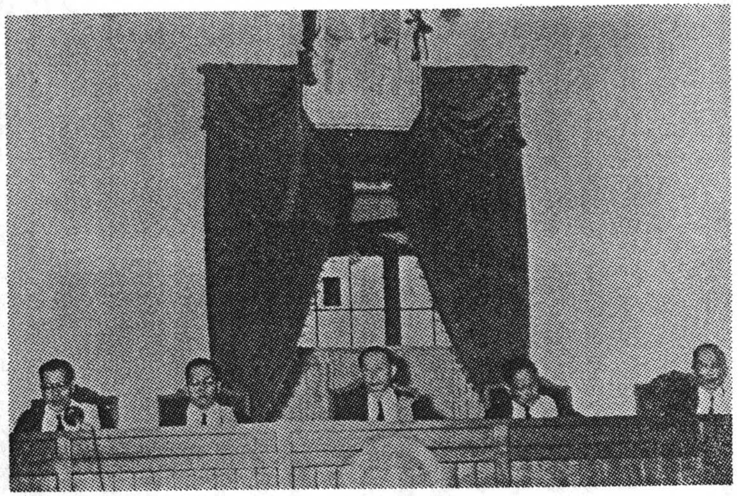
検察側は厖（ぼう）大な証拠を準備した。書類を積み重ねると三フィートもあり、ほかに数百枚の写真、模型、証拠物件があった。これらがいまでも残っているのかどうか、とにかくそれを見ることは許されない。私は閲覧許可を申請したが、「あなたは、なぜ不愉快な過去を掘り起そうとなさるのですか」と、いんぎんに拒否された。それでもなおがんばり、有能な助手の助けを借りて、アナンダの死が今日なおタイ人の上に投げかける恐怖と沈黙のベールをかきわけ、なんとか裁判の主要な部分を再現することができた。そして、裁判そのものが異常きわまるものであっただけでなく、私の結論にも重要なカギを提供するものであることがわかった。

裁判が始ったのは一九四八年九月二十八日、水曜日の午後であった。

法廷は犯行現場にきわめて近く、アナンダの寝室からはどうかすると望見できるほどだった。バンコク刑事裁判所は、司法省の大きな灰色の建物の中にある。それはバロンピマン宮の外郭を区切るグランド・パレスの城壁から道一つへだてた近さだ。司法省の敷地の一隅には、バンコクを守護する精霊が小さな祠（ほこら）に祭られている。タイでは、個々の家も村も町も、それぞれに守護神を持っているのである。

この精霊信仰（アニミズム）は、仏教と混然一体になっている。仏様のほうは室内に安置されていて、けばけばしい仏壇の中の像からは信心深い人々が押しつけた金箔がぶら下り、線香が香煙を上げている。司法省内の仏像にも、おまいりに来る人は多いが、わが身の功徳を積むためよりもむしろ司法省前の道路に店を出した占い師たちに運勢を見てもらうためである。だが、どんなに優秀な占い師でも、この裁判の予想だけは、卦を立てのがむずかしかったことだろう。

実際の裁判は、省内の一画にあって、やはり仏像を飾った平家建ての法廷で行われた。



プミポン王の写真の下の五人の裁判官

窓がいくつもついた細長いこの部屋は、「第二十四号法廷」と呼ばれていた。入口の反対側に安置した仏像の前には赤いうるしと金に塗り分けられた供物台があり、仏華が活（い）けられていた。仏像の前で、証人は真実を述べねばならないのである。裁判官席の上にプミポン国王の肖像がかかっているのを除くと、被告席、証言台、検察側、弁護側の席などは、西洋の法廷と大差がない。この国の司法制度は早くから西欧化され、裁判官の多くはオックスフォードやケンブリッジを出ている。

ふつうの刑事法廷は裁判官三人の合議だが、この場合は事件の重大性を考慮して五人合議になった。裁判長は刑事裁判所長がつとめた。彼は、この事件がタイの歴史の中でもっとも重要なものであることをわざわざ開廷時に宣言した。重要なだけでなく、もっとも長い裁判になりそうだった。検察側は二カ月近くの時間を公判準備に費し、三百人以上の証人を呼ぶ予定であることを公表していた。通常の週一回開廷ではまにあわず、週三回法廷を開くことに決定したが、それでも一年で終るかどうかおぼつかなかった。

チャリュー秘書と国王付きの二人のボーイ、ナイ・チ

ットとブットを被告人とする起訴状は、三つの訴因から成っていた。

第一訴因は、一九四六年四月九日から六月九日までのあいだに、三被告がアナンダ王を暗殺するべく共同謀議をしたことだった。第二訴因は、チャリューを除く二人にかかるもので、ナイ・チットとブットは（明らかにプリディのことを指す）「海外逃亡中の共犯と協力」し、「共同謀議によって決定された計画に従って」、一九四六年六月九日に国王を暗殺したことである。二人のボーイは、犯罪を阻止すべき立場にいながら、暗殺の実行者に「犯行を容易ならしめるよう援助を与え、教唆した」とされていた。

第三の訴因はナイ・チットだけに関するもので、実に驚くべき内容だった。彼は国王が死んだ直後の宮廷会議に45口径ピストルと床の上にあったと称する空薬莢の入った引出しを持ってきたのだが、それがあやしいとされたのである。起訴状によると、薬莢はたしかにそのピストルのものだが、ナイ・チットは、それが国王の頭を貫通したピストル弾でないことを承知していながら会議に提示した、とされていた。つまり、ピストルは「共犯者による犯行を隠蔽し、国王暗殺の事件を偽装し」て自殺と見せかけるために引出しの中に置かれていたもので、薬莢はずっと前に発射された銃弾に属するものだ、ということであった。

国王暗殺計画が想像以上に手のこんだものであることを知ったタイ人たちの興奮は、開廷の日には頂点に達した。千人もの傍聴者が第二十四号法廷につめかけ、部屋からあふれた人たちは審理の模様を逐一知らせるスピーカーに聞き耳を立てた。法廷の内外には、特別警察によって厳重な警戒網がしかれた。法廷の中へ入る人々は、きびしいボディーチェックを受けた。被告を有罪に追込むために十分な証拠を準備しているピブン政府にとっては、裁判が国民の目の前で公平に行われさえすればいいので、要は被告の逃亡を防ぐことだった。三人には、それぞれ半自動小銃を持った衛兵がつき添った。

被告たちは被告席についた。それぞれに妻も子もある三人が、被告一号、二号、三号というぶっきらぼうな番号で呼ばれることになった。三人ともカーキ色のズボンに白いシャツを着ていた。四十男ばかりである。小柄なブットのことはすでに書いた。眼鏡をかけたナイ・チットはブットよりもはしこく、背も高く、顔つきもりっぱだった。家柄もブットよりはよかったが、ブットと同様、数代にわたって王室に仕えてきた家の出である。ナイ・チットは娘ばかり六人の子持ちで、冗談を言ったり、ちょっとしたいたずらをしたり編みものをするのが好きだった。チャリューは、三人の中で一番もっさりしていた。でっぷりふとって、なんとなく粗野な感じがする。だが、もちろん、外見だけで人を裁くべきではない。

三人は、いずれも起訴事実を否定し、無罪を主張した。しかし、法廷を埋める人々は、実はプリディとワチャラチャイこそ被告席にすわるべきであり、彼らこそ有罪とされるべきであると信じていた。真の犯人は彼らなのだ。いや、二人の中でもとくにプリディだ。プリディこそタイ国民とタイの歴史の前で裁きを受けるべきなのであった。法廷にこうした空気が満ちていたうえ、プリディに関係があったり彼のことをほめる国民には容赦なく政治的な圧力や警察の手が伸びたので、弁護側にとっては非常にやりづらい裁判であった。

弁護士たちは、二カ月ほど前にはじめて被告との接見を許されたばかりで、開廷の前日になって検察側からどっとばかりに証拠資料を持ち込まれ、身動きできない有様だった。彼らは開廷延期を申請したが、法廷はそれを却下した。弁護士たちは、これ幸いとばかり弁護辞退を申し出た。このまま裁判を継続すれば依頼人にもフェアではなく、自分たちの名声も傷つくというのが表面上の理由だった。

裁判長は休廷を宣し、新しい弁護士探しにとりかかった。と同時に、バンコクの法曹界はいっせいに尻込みし始めた。だれも弁護人のなり手がないのである。

だれ一人として弁護を引き受けなかった事件を拾い上げたのはハク・ナソンクラという若い刑事弁護士だった。やっと依頼がふえ、収入もふえ始めていたところだったが、彼は、そんな仕事をなげうって国王暗殺事件の弁護を申し出た。

背が低く、がっしりした体格のナソンクラは、その四角い顔、小さい鼻がファイターであることを示している。話すときの物腰はやわらかで、自分の言葉の意味を伝えるのに熱中しているという印象を与える。人に会うときの態度は、ものやわらかで、内気ではないかとさえ思わせる。だが、そんな彼が勇気と情熱を発揮したの

で、やがてプリディの教え子数人も協力するようになり、弁護側の態勢は整い、裁判はどうにか軌道に乗った。

主任検事が簡単な冒頭陳述をした。複数の謀反人によって綿密に計画された殺人事件である、と彼は言った。彼らは、世にも恐ろしい計画を実行し、いまや法の裁きを待つばかりである。彼らが他人に洩らした計画のみならず、彼らが内輪で行った謀議の証拠もいずれ提出される。謀議の内容を耳にはさんだ人が実際にいるのだ。その他の決定的な証拠も法廷に提出されるであろう。……と、検事は、まず共同謀議の立証から始めた。

秘密の謀議を聞いた人がいるという情報が警察に入ったのは、裁判が始る数カ月前のことだった。まったくの偶然であった。グランド・パレスのそとにあるプラメーン広場では日曜ごとにマーケットが開かれるのだが、ある警部がそこで幼な友達に会い、世間ばなしのあいだに聞き込んだのである。

その友人は、北部タイに住む材木商のテーという男を知っていた。二カ月ほど前に、そのテーが訪ねてきて、彼の家に数日滞在した。ある夜、ほかにも客があって、話が国王暗殺事件に及び、プリディが関係しているかどうかが話題になった。突然、テーが「だれが王様を殺したか、お前たちは知らんじゃろう。わしは知っとる」と言ったという。一座の人々に問いつめられて、テーはしぶしぶしゃべった。テーが、あるとき、政府のえらい人の家に招かれて行ったとき、プリディとその同志が国王を殺すことを謀議しているのを立ち聞きしたという。えらい人に義理があるので、その人の名は明かせないとテーは言い、居合せた客にも他言を禁じた。しかし、客が去ったあとでさらに聞いてみると、えらい人というのは元侍従武官でもあった海軍少将で、プリディ内閣時代に国会議長をつとめた人物であること、またプリディと謀議していたのはチャリュー、ナイ・チット、トー（ワチャラチャイの通称）であることを告げたというのである。

日曜日のプラメーン広場で、テーの友人は、その話を警部に伝えた。捜査本部長のプラピニットは、直ちに北部のパクナムポーの町に住んでいるテーを喚問した。警察が彼を取調べた結果、このときの洩れ聞き事件の関係者たちがまず最初の証人として第二十四号法に呼ばれる

ことになった。

証人台に立った海軍少将は、事実をあっさり認めた。プリディは、結婚式の仲人をするため（タイでも結婚式のときには、著名な人にたのまれ仲人をよく依頼する）、一九四五年ごろにはじめて彼の家を訪れ、ついでアナンダ王が怪死（六月九日）する二カ月前の四六年四月にも一度か二度、来たことがあるという。少将は、また、プリディ訪問時に、材木商のテーが鉄道の枕木の取引きのことで来ていたこと、そのときのプリディはチャリュー、ワチャラチャイ、ほかに名前は忘れたが何人かといっしょだったことを認めた。客室へ案内したが、プリディと、たぶんチャリューとワチャラチャイしか入らなかったというのも確かだった。だが、そこからさきはテーが話したこととまるで違っていた。少将の証言によるとプリディたちの訪問はほんの十五分そこそこで、少将がやっている木材取引きやその他の世間話をしただけだった。王様を殺す話などは全然出なかった。もっとも、検事に問いつめられた少将は、飲みものを用意するためにほんの短い時間、客間を離れたことを認めた。そのため、テーが耳にはさんだという〝共同謀議〟は、そのあいだに行われたものかもしれないという疑問は残った。

弁護側は反証を持ち出した。それは木材関係のさる業者が一九四六年七月に少将宛てに書いた手紙である。手紙の中には、その月の十五日にテーといっしょにバンコクへ行くからよろしくと書かれてあった。七月十五日というのはアナンダの死後だから、テーは国王暗殺の共同謀議を聞くはずがない。少将も、たぶん自分の記憶違いだろうといってこれを認め、それに加えて、プリディが国王暗殺犯人であるはずがないし、プリディ犯人説は野党である民主党のでっち上げだと思うとまで宣言した。

しかし、テーの立ち聞きの信憑性を打ち破った弁護側の論拠は、まもなく覆えされてしまった。少将に手紙を書いた当人が登場して、自分は一九四六年三月二日に少将からバンコクへ来るようにとの手紙を受け取り、テーを同道して上京したあと三月三十一日にテーをバンコクに残して帰郷したと証言したのだ。つまり、テーが少将の家へ行ったのは国王が死ぬ前で、弁護側が出してきた手紙は、はるか後日の取引きに関するものだ、というのである。

検察側は追い打ちをかけるように、少将の家の女中を

証人として喚問した。彼女の話によると、五月下旬某日の午後六時ごろ、少将の息子のいいつけで焼きトウモロコシ（タイでは、それを黒焦げになるまで焼き、焦げた粒をナッツを噛むようにして食べる）を買いに出かける途中、いま被告席にいるチャリューが客間のテーブルに向ってすわっているのを見たという。そのとき、テーは、庭のマンゴーの木の下に腰を下していたという証言だった。

もちろん、たとえプリディたちが国王存命中に少将邸を訪れ、たまたまテーが居合せたとしても、それはテーが立ち聞きした話の内容の裏づけにはならないわけである。テーの話が真実かどうかは、テーが信頼の置ける男かどうかにかかっている。そして、テーが聞いたという話は、厳密にはどんな内容だったのか。……こうした疑問が山積し、テーの登場の機が熟したときを狙って、検察側は〝立ち聞き事件〟の主役であるテーを証人に喚問した。

プリディとは三度、少将邸で出会ったと、テーは確信ありげに語った。最初は五月初旬の某日で、プリディは、午後六時ごろに二人の男を伴って現われた。十日後にも、ほぼ同時刻に四人を連れて来たが、うち二人は最初の訪問の同行者と同じ人物でワチャラチャイとチャリューである。あとの二人のうち一人はナイ・チットだった。テーの話によると、彼はプリディに紹介されたがじきに客間を去った。しかし、だれかが「出発（たぶんアナンダの出発だろう）はもうすぐだ。それまでに、やるべきことをやってしまわねばならん」と話しているのを小耳にはさんだという。三度目は五月下旬で、このときは、プリディは午後七時ごろに来た。前と同じ四人もいっしょだった。全員が客間に入ったが、テーは客間から仕切りを隔てたつぎの間にいて、少将が知らないあいだにプリディたちの会話を立ち聞きしたという。

テーの証言によると、だれかが「子供のくせに、あんなすばしこいやつは見たことがない」と言った。

別の声が答えた。「私は、そばにいるからよく知っています。兄さんのほうは弟に位を譲って、国会にうって出たいらしいです。総理大臣になりたいとかで……」

まるでバーナード・ショーの『アップル・カート』の筋書きをそっくりそのまままねたような会話だった。テーは、はじめのうち、なんのことかわからなかったそうだが、やがてつぎの声がした。

「よし、わかった。向うさんの計画どおりにいったらたいへんなことになる。出発までに（アナンダの出発予定は六月十三日だった）、やつを処分してしまわなくっちゃ」

「私におまかせください」と、また別の声がした。

「もし仕損じたら首をさし上げますよ」

「そのかわり、うまくやったら、望みのものをほうびにやろう」

会話はそこまでだった、と、テーは証言した。十分後にプリディは出ていった。残りの連中はマンゴーの木の下で酒を飲んだ。テーもその席に加わったという。

「被告席に、そのときの人がいますか」と、検事が聞いた。

テーは、チャリューとナイ・チットを指さした。ブットはいなかったという。

「あなたは、立ち聞きしたことを少将に話しましたか」

「はい。あんたもプリディの一味なのかと聞きました。少将は、『いや違う。私は、はいはいと答えているだけだ。えらい人たちのご機嫌をそこねると商売にさしつかえるからね』と答えました。そんなことではダメだと思い、あんな連中とはつき合わないほうがいいと忠告しておきました」

テーの証言は、それで終った。反対訊問に立った弁護側は苦戦だった。テーが住所不定の男であり、バンコクに召喚されてからはテー夫婦は警察に食わせてもらっていることを、やっとのことで暴露した。少将の証言とテーのそれをつき合わせて、テーが客間を見た窓というのには少将の義母の家具が積み上げてあるから見えなかったはずだと追及してもみた。だが、テーは、がんとして証言内容を変えようとはしなかった。いなか者のテーがまるっきりのうそをつくとも思えず、結局、彼の証言によって検察側は大きく点をかせいだ。

検事は、すぐさま追い打ちをかけた。被告のうち少くとも二人が国王の死を事前に予言していたというのである。

それを証言したのは、王母殿下の侍女だった。彼女は王様が死ぬ二、三日前にナイ・チットとかわした会話のことを語った。そのとき、ナイ・チットが「王様は十三日にはご出発にはなりませんよ」と言ったという。

「それ、どういう意味かしら。あんたは、なぜ、そんなことがわかるの」と聞いたが、ナイ・チットは答えない。「信じられないわ」と言った彼女にナイ・チットは、「信じなくても結構。まあ見ていなさい」と言った。

侍女も王様の一行について洋行することになっていた。そのときは、ナイ・チットがいつもの調子でからかっているのだと思っていたのだが、六月九日に王が怪死したあとになって当時の会話に思い当ったのである。ナイ・チットは、ほかにも、給仕のメーという男に向って同様の予言をしていた。メーは、証人席で、会話を再現してみせた。

ナイ・チット　王様が、わざわざ十三日にご出発とは驚いたね。西洋人なら絶対に避けるんだが。

メー　王様はタイ人なんだから、西洋の迷信を信じて出発を遅らせたりはなさらないと思いますがね。

ナイ・チット　いや、ご出発にならんよ。

メー　王室占星庁がちゃんと決めたんだから、ご出発になるはずですよ。

ナイ・チット　いいや、お発ちにはなれないよ。

チャリューについても、同じような証拠が提出された。彼の古い友人である陸軍の某将校が証言台に立った。彼は僧籍に入っているあいだに、タイの習慣に従って、チャリューの功徳のためにチャリュー家の食事に招かれたほどの仲だった。彼は元摂政アーチット王子の葬儀のとき（六月八日。アナンダが病気だったので、プミポンが代行した）、チャリューに出会ったので「王様は、なぜ十三日などにご出発になるだね」と聞いた。チャリューは「いや、ご出発にはならんさ」と答えた。べつに理由は説明せず、「まあ見ていろよ」とだけ言ったという。

この証言を聞いて、満員の傍聴席はシーンとなってしまった。チャリューもナイ・チットも、あまりにも意味深長な予言をしているのだ。プリディらが彼らと共同謀議をしていたというテーの証言の信憑性も、おかげで飛躍的に高くなった。

検察側は、こうして世論を巧みに操作しながら徐々に証拠を積み重ねていった。だが、十二月一日になって、裁判は突然中断された。二十四時間の警戒つきだった担当検事室に、前夜、賊が侵入したのである。警戒を指揮していた男が失踪した旨が発表された。ただし、厖大な

証拠資料には手がつけられていなかった。それ以外には、警察からはなんの発表もない。プリディ支持派がやったのか、それとも被告たちのシンパが証拠湮滅をはかったのか？　さまざまな憶測が流れたが、にわかに高まった被告への警戒心は、とりわけチャリューには気の毒な結果になった。彼は四十万バーツの保釈金を積んで、息子の葬式への出席を兼ねて義歯の治療をし、獄中生活からくる疲労を回復するために保釈を申請中だったのである。保釈申請は却下され、まもなくチャリューは肺炎にかかった。

被告の不幸は、これだけにとどまらなかった。バンコク市民が『赤い壺』という怪文書をめぐって大騒ぎを始めたからである。このパンフレットは陸軍副司令官の名前で書かれ、プリディによる大逆行為の〝全貌〟を暴露したもので、チャリューも悪人の一味にされていた。内容の一部が新聞にも出始めたので、弁護人は法廷侮辱と予断の危険を理由に法廷に適切な措置を求めた。警察の取調べにこたえた副司令官は、机の上に置いておいた文書を友人が勝手に持ち去り発行したのだと説明した。彼は二百バーツ、その友人は四百バーツのそれぞれ科料に処せられたが、おかげでチャリューに対する世論は確立してしまった。

法廷は、まもなく退屈で単調な、いかにも裁判らしい雰囲気を持ち始めた。長々と続く立証段階は、だんだん現実ばなれしたものになってきた。だが、ときには、裁判の終局を予言するようなニュースに刺戟されることもあった。その一つは、一九四九年二月初旬に出たマハトマ・ガンジー暗殺犯人への死刑宣言である。

探偵小説めいた興味は薄らぎ、人々の関心は結審の日がいつかということに集中するようになった。二月までに二十五人の証人が出廷したが、その多くはごく事務的な証言か、あるいはすでに証言されたことを支持するような内容だった。テーや侍女の共同謀議説を支持する証言をしたのは女官長だった。彼女は、七日連続して証人台に立った。

女官長は正直一途な女で、王母殿下の献身的な友でもあった。国王一家がバロンピマン宮に滞在中はずっと側近に仕えてもいた。プリディは国王一家とは親密で、アナンダ王は彼をわざわざホアヒン離宮の休日に招いたほどだったと、彼女は証言した。ナイ・チットやブット

も、申しぶんのない召使いだった。だが、それにもかかわらず、女官長は不吉なうわさを耳にしていた。彼女にそのうわさを伝えたのは、国王が死ぬ二カ月前に原因不明の高熱を出して病死したボーイ長だった。女官長によると、このボーイ長は、王様の側近に不忠者がいるので王様の安全が気にかかると、しばしば語っていたという。病気で気が弱っているための取越し苦労なのだろうと聞き流していたが、王様が亡くなったので彼の予言を思い出した、という証言だった。このボーイ長は名をチャンといい、これからも私の物語りの上に黒い影を落す男である。

女官長は、王様の検屍をした警察が王の精神異常を可能性の一つに数えていたことに対して非常に強い怒りをぶつけた。「王様は物静かで、思いやりも深く、かしこいおかたでした」と、彼女は断言した。死の前日の王の態度は、まったく正常だった。とても元気で、一日の大半を近づく海外旅行のしたくのために費しておられたという。

このような女官長の証言を引き出した検察側の意図は、だれが見ても明瞭であった。ほかに国王の死の原因が考えられないことを立証するのは、国王暗殺説を強めこそすれ、それを否定する材料になりえないのである。自殺説は相変らず消えていなかったのだが、女官長の証言は、それを完全に打ち消す役割をはたした。検察側は、つぎにもう一つの可能性を質問した。国王の死いらい今日に至るまで、かつて一度も公けに質問されたことがないにもかかわらず、世界じゅうがひそひそ話の話題にし続けている質問を、検事はしたのだ。

国王アナンダと王弟プミポンの仲はどうだったか——証人の女官長に、その質問が発せられた。

彼女は、一瞬のためらいもなしに答えた。ご兄弟は実に仲がよかった。二人が幼いときから彼女は世話をしてきた。いつも「おとなしく、仲好く」と教えてきた。兄のアナンダが死んだ日、王位を継ぐようにと求められた弟プミポンは悲嘆にくれたほどだ。それまでは、プミポンは一市民として生きる以外になんの野望も持っていなかった、と、女官長は確言した。

つぎに、女官長は、悲劇が起った日曜日の朝のことについて質問された。プミポンの部屋にいたとき銃声を聞いたこと、王母殿下に続いて国王の寝室に駆け込んだこと、王の脈が打っていたこと……。彼女は、王母殿下がその後もずっとアナンダの死を歎きくらしていたこと、停電があるたびに謀反の第二波を恐れて王母殿下や新王をたたき起したことを物語った。アナンダ様は殺されたのです、と彼女は断言した。ナイ・チットもブットも暗殺者ではないはずだ。だが、銃声が聞えたとき王の部屋の前にいたのだから、だれが暗殺者か知っているはずだ、というのである。

はたしてそうだろうか。もし女官長の確信に誤りがなければ、二人のボーイの有罪は確実である。そのカギは、もう一つの疑問にかかってくる。国王暗殺者は、どこから入り、どこから抜け出したのか？

裁判官、検事、弁護人は、綿密な現場検証をした。バロンピマン宮にはいくつもの入口がある。前からもうしろからも入ることができる。宮殿の中に入ると、階段は一つではない。アナンダの部屋へ行くには、いろんな道順をとることができる（九三ページの見取り図参照）。

宮殿の前後を警戒している五人の衛兵、宮殿内部の深夜番、その他の召使い、庭師、王室庁の役人などについて詳細な訊問が行われた。その結果、ちゃんとした警戒態勢などなかったことがわかった。大きい宮殿だから、いたるところに人が配置されていたわけでもない。そのうえ衛兵たちが顔を覚えている人々は、べつにパスを見せずとも出入りしていたのだ。裁判官たちは結論を下した——「宮殿の内部を知っているものなら、やすやすとメインホールに達することができる。内部関係者に手引きされた場合は、犯行はきわめて容易に達成しうる。……国王に対して危害が加えられようとする場合には、それを目撃ないし阻止することは困難である」。

宮殿関係者たちは、国王の死の前夜あるいは当日に不審な人影を見かけなかったかという点について、とくに念入りに訊問された。バロンピマン宮の内部についてはノーだった。だが、庭師の一人が、銃声のする少し前に、宮殿の裏で人影を見たと証言した。銃声のあとで一階の窓からそとを見たボーイも、同じ男を見ていた。その男は、裏のベランダから庭に通じる階段を急いで下りていったという。それだけではない。彼らが男を見たという時刻より少し前に、その男の運転手が彼をバロンピマン宮の近くまで送ったと証言した。男が使っていた女中は、国王が死んだあと、主人のシャツの袖に血がつい

ていたと語った。

その男というのがワチャラチャイ大尉であった。

あとになると、ワチャラチャイに関する証拠はもっと出てくる。だが、この段階でも、検察側の立証はほぼ完璧だった。陰謀の中心にいるのはプリディに違いなかった。彼の手先になって国王暗殺を実行したのはワチャラチャイ、そしてそれを助けたのがナイ・チットとブットというわけである。

プリディから順ぐりに命令が下へ下ろされ、そのプリディはもう一人の手先であるチャリューを重用していた。犯人たちに関する証拠は相互に補完しあい、もはやゆるがすすべもなかった。暗殺者としてのワチャラチャイの容疑が深まるにつれて材木商テーの証言はますます真実味を帯び、他の容疑者たちが否応なしに引っ張り込まれるというしくみである。一人に関する証拠は、直ちに一味の犯行の証拠と解されるようになってきた。

二月中旬になると国王の侍医ニット博士も登場し、数日にわたって重要な証言をした。王の死の前日の病状、診察について物語ったあと、博士はアナンダの健康状態について語った。国王と王母殿下は、定期的にカルシウムの注射を受けていたが、風邪や腹痛を起しやすかったことを除くと、国王は完全な健康体だった。

王の死後についての質問に答えて、ニット博士は、プリディとは何度も連絡をとっていたこと、調査委員会の一人として国王死因追及に当ったことを証言した。委員会の医師たちの多くは他殺説だったが、彼一人は事故説をとっていたことも供述した。博士の意見では、あれだけのボーイや衛兵の目をかすめて宮殿の中に入るのは不可能であり、また内部の者が国王を殺すことも考えられないというのである。アナンダが受けた教育や性格からみて、自殺でもありえない。ニット博士は、アナンダ様は思慮深いが明るい王様でしたと語った。

五人の裁判官の一人が、国王と政治について質問した。博士は、アナンダともプミポンとも政治を話題にしたことはなかったが、国王一家がバンコクに着いて二カ月後に王母殿下がプリディをどう思うかと尋ねたと答えた。

「それで、王母殿下へのあなたの返事はどうでしたか？」

当時の法廷のムードでは、プリディを弁護することはまるで悪魔の味方をするようなものだったから、もしニット博士が安全で、自分の地位にも影響のない（この証言のあと、彼はひそかに侍医を解職された）返答をしようと思えば簡単だった。しかし、博士は、彼の性格そのままに正直な証言をした。

「私は王母殿下に答えました。なるほどプリディは、一九三三年の経済計画のために左翼呼ばわりされています。だが、あの人は非常な知識人だし、かしこいうえに思いやりのある人です、と」

五カ月前にこの事件の弁護を引受けたハク・ナソンクラは、他のすべての依頼を断って、国王暗殺事件にかかりっきりだった。彼は、ニット博士に向って、事件後のプリディの態度はどうだったかと質問した。プリディが事件の調査を妨害したり予断を強要するようなことはなかった、と、博士は答えた。

「プリディが、あなたに国王はコレラで亡くなったという診断に署名するように圧力を加えたといわれていますがどうですか」とハクは聞いた。博士は答えた。そんなことは絶対になかった。

二月二十六日が博士の証言の最終日だったが、彼は一つ奇妙なことをしゃべった。だれかが、王母殿下はもっと歴史を勉強して国王が弟に殺される先例を知っておくべきだったと事件後に言ったというのだ。しかし、この驚くべき情報を詳細に検討している時間はなかった。というのは、その夜、バンコクに起った一つの事件が、突如として裁判を中断させてしまったからである。

2

プリディは、遠くから見守っていた。

一九四七年十一月のクーデターに追われた彼がアメリカ大使館付き武官のランチでメナム河口へ逃げてから一年近くになる。シンガポールにいたプリディとワチャラチャイは、香港、マカオをへて広州から上海へと逃れていった。中国本土は、蔣介石政権の末期であった。プリディは、そのあいだも、帰国のチャンスを辛抱強く待った。

一九四九年の初頭になると、ピブンを擁してタイの政権を握った陸軍に反感を抱く海軍のシンパから隠密の連絡が届き始めた。時は熟した。国内につのる不満が、彼の帰国を待っているというのだ。

その数カ月前、バンコクの英字新聞が、政府の失政のリストを公表したことがあった。道路はいたるところでこぼこのまま、橋も修理されず、電力は不足し、新生児の性病罹患率は驚くべき高さを示し、結核患者を収容できる病院は全国に一カ所しかないというのだ。そのうえ、国内各地には盗賊が野放し状態になっている。新聞は、こうした失政は国の指導者たちが政治取引きに没頭しているからだと非難していた。この新聞社には、直ちに政府の圧力が加えられた。タイの新聞であるかぎり、ピブン首相を批判してはならないという理由からだった。数週間おいて、別の新聞の編集長が陸軍を批判する漫画をのせたため暴力団に襲われた。検閲はきびしくなり、反政府色の強い新聞は廃刊か路線変更に追い込まれてしまった。

戦争の傷跡が尾を引き、それに加えて戦後の物資不足があったという点で、ピブン内閣は、たしかにハンディキャップを負っていた。しかし、政府の腐敗と秘密警察による弾圧については弁解の口実がないはずである。ピブンの恐怖政治は、彼の政府をシャムの歴史の中でもっとも高圧的な政権にしていた。いや、シャムよりもタイといったほうがいい。ピブンは、例のばかばかしい愛国心を発揮して、このころ、シャムという国名を再びタイに改めていたのであった。

国王暗殺事件の裁判が始ってまもない一九四八年十月には、国民の不満は早くも表面に現れた。将校たちのグループが、クーデターを企てたという嫌疑で検挙されたのである。同じ十月の下旬には、数人の国会議員が、東北タイで分離運動の指導をしたというかどで逮捕された。翌一九四九年二月には、共産党員（といわれる）中国人八人が反政府運動をしたという理由で捕えられ、緊急事態が布告された。その後も、同じような理由で、同じような検束が続いた。この機逸すべからずと判断したプリディは、中国をあとにした。

極秘のうちに米国籍のヨット〈ブルーバード〉に乗ったプリディは、ひそかに祖国を目ざした。

彼とワチャラチャイは、無事にメナム河口に到達し、サタヒップの海軍基地にいる支持派と連絡をとった。計画が練られ、やがて一行は川をさかのぼってバンコクに潜入した。

一九四九年二月二十六日の夜、プリディは、なによりもさきに倫理政治大学のキャンパスを訪れた。ほかでもない、彼自身が民主主義を推進するために創立したこの大学を、いま、力によって政府を倒すための基地に使おうというのだ。だが、そんな皮肉なめぐりあわせに感傷を注いでいるひまはなかった。かつては彼の講義を傾聴するために学生があふれた教室は、いまでは無残に荒れはてていた。たとえ学生たちがそこにいても、口ひげをつけ海軍兵曹長の軍服を着た男が、かつての祖師プリディだとは気がつかなかっただろう。彼のまわりには二、三十人の兵士が決起の準備をしていた。そして、しめし合せた時刻が来ると、彼らを率いたワチャラチャイ大尉は、目と鼻の先のグランド・パレスへ進んでいった。

驚いた衛兵たちは四散し、グランド・パレスは決起軍の手に落ちた。プリディは午前零時を少しまわったころに到着した。

別の一隊は、フラメーン広場の反対側にある情報省を占領し、ラジオ放送局を押えた。バンコク市民が異変を知ったのは、ラジオのニュースが繰返し臨時政府の樹立を告げたときである。新首相は、民主的な憲法の復活を約束した。

そこまではうまくいった。プリディは、海軍が軍艦や海兵隊を動員して直ちに行動に移るものと信じていた。

グランド・パレスからはるかに遠いバンコクの高級住宅地バンガピではトンプソン英大使夫人が「興奮し、泣

きべそをかきながら」コンサートから戻ってきた。大使の著書によると——

妻が報告した。「あなた、クーデターですわ。バリケードのところで三十分間も止められ、そのあいだずっと海兵隊員が車の窓に機関銃を突きつけていたんですのよ」。私は、大きなグラスにウィスキー・ソーダをついでやった。……暑さがはげしいので、私たちはそのころベランダで寝ていた。午前三時を過ぎたころ、大使館のごく近くで閃光がきらめき、軽火器のはじける音に眠りを破られた。

「大使館の塀をもっと高くせんといかんな」と、私はつぶやいた。明けがたになって、お茶の用意を命じた。給仕がお茶を注いでいる最中に、再び銃声と迫撃砲と自動小銃の音が上った。曳光弾が、大使館の芝生をかすめた。門番たちは、庭にあるビクトリア女王の銅像のかげに伏せた。銃声は午前十時ごろまで続いたが、それきりなにも聞えなくなった。

聞えなくなったのも当然である。プリディが逃亡したのだ。

夜明けとともに態勢を建直したピブン指揮下の陸軍は反撃に転じた。はじめの計画では、このときに海軍が兵力を投入することになっていた。だが、兵員がたりなかった。陸軍は戦車を先頭に立て、火力でも兵力の点でも優っていた。同胞の血を流し、美しいグランド・パレスに傷をつけることを恐れたプリディは、いさぎよく旗を巻いた。

市内各地では、陸軍と海兵隊のあいだにいくつかの衝突があり、六人の市民を含む死者も出た。しかし、政府指導者の逮捕と通信手段の占拠というクーデター成功のための必須条件は満たされなかった。数日のあいだ。ピブン政府と海軍のあいだににらみ合いの状態が続いたが、クーデターの失敗は、だれの目にも明らかだった。

イギリスはじめ諸外国が調停に乗り出し、ピブンも宥和的な態度を示したので、まもなく和解は成立した。三月中旬には、ピブンは、三軍の将校たちを平服でガーデンパーティーに招待し「お互いのちょっとした誤解」を忘れるよう説得した。大衆は、国の上層部でなにが起っているかには相変らず無関心で、すぐにそれまでの満ちたりた日常生活に戻っていた。

力による政府転覆に失敗したプリディとワチャラチャイは、再び影のように消えうせた。こんども、プリディがあそこにいたここにいたという怪情報が乱れとんだ。バンコクの某国大使館に逃げ込んだらしいと書いた新聞もあったので、イギリス大使館は否定の声明を出した。

プリディは、実は、中国へ戻ったのである。再び亡命を余儀なくされた彼は、バンコクの第二十四号法廷で行われている国王暗殺事件公判の成行き、そしてそれに深く関係している彼の運命の行方を見守りながら、時が来るのを待たねばならなかった。

3

挫折に終ったクーデターのあいだ裁判は中断していたが、共同謀議の基本的な立証は、完了していたといってもいい。あとは動機の解明と、暗殺者間の関係を白日の下にさらす作業が残っているわけである。

しかし、たとえばワチャラチャイ大尉とプリディの共犯関係はだれの目にも歴然としていた。

ワチャラチャイは、最初プリディ付きの武官だった。そのあとプリディが国王付きの武官に推薦し、最後にはプリディの秘書だった。チャリューも同じようにプリディとは深い関係にある。まず政治的にはプリディ支持派に属し、国王の個人秘書に任命され、それが解任されてからはプリディのおかげで上院議員になっている。検察側はワチャラチャイとチャリューが王室での勤務を解任された理由を立証しさえすれば、プリディが王家に対して恨みを抱いていたことの立証に通じると主張した。恨む心さえあれば、国王暗殺を計画するのは当然だというわけである。

ワチャラチャイ解任のほうは問題がなかった。だが、王室庁の役人がチャリューの解職について証言した内容について、弁護側は反対訊問で食い下った。チャリューは、純粋に健康上の理由で職を辞したのだと弁護人は主張した。役人のほうは、チャリューに好ましくない言動があったからだと主張し、その証拠をあげた。

証言によると、チャリューは、いつも王のいる部屋にづかづかと入っていき、頭を十分に下げなかったばかりか、国王の前でたばこさえ喫った。そのうえ王室庁の女子職員に対しても好ましくない行為に出たという。ごく少数の高官だけに与えられる特権を自分に援用して、バロンピマン宮殿の内庭まで車で乗り入れたこともあった。しかも許しがたいことには、チャリューは、車の中で足を組んでいたというのだ（この不作法については、この本の冒頭でも触れた）。

弁護側は、この証人に向って、さまざまな角度から突っ込んだが、彼はがんとして一方的解任説を固持した。それでは、この銀のシガレットケースをどう説明するのか――と、弁護人は、それを取り出してみせた。シガレットケースには国王のイニシアルと「国王の秘書として申しぶんのない職務を尽したによりチャリュー・パトムロスにこれを授く。仏暦二四八九年（一九四六年）」という言葉が彫られていた。しかし、証人もがんばった。王の側近に仕える者が退職するときには御下賜品があるのがふつうで、チャリューのときも、追放されてから王の悪口をしゃべらないよう彼が王に進言してシガレットケースを与えることになったのだと説明をした。

証言の一つ一つから、検察側が彼らの求めるものをしぼり出す手口は実にみごとだった。チャリューとワチャラチャイの解任を認めれば、自分の手下が追放されたプリディが王室に怨恨を抱くことはごく自然に説明される。そしてプリディが王室に対してわだかまりを持っていたと仮定すれば、王の気に入らない二人を側近に送り込んだ行為は国王への不敬を意味することになる。しかも、のちに二人をそれぞれいいポストにつけていることは、王室無視と解釈することが可能である。

プリディの忠誠心を疑わせる決定的な証人が続々と出廷した。アナンダは、バロンピマン宮に滞在中に、仏教の講義を受けていた。それを授けた神学博士が証人台に立って、一つの暴露をやってのけたのだ。

六月七日の夕食後、宮殿を訪れたプリディは、国王不在中の摂政の人選について国王と協議したのだが、二人の意見は衝突したらしい。プリディは非常に怒りながら退出してきた、と、博士は証言した。王の決定に不満である旨をプリディは証人に打ち明けた。それだけではない。「王様のことは、もう知らんぞ」と、プリディが言ったというのである。

驚いた神学博士は、プリディの立腹ぶりを王母殿下に伝え、国王に知らせたほうがよくはないかと言上した。後日の王母殿下の証言にもあるように、彼女は、国王が病臥中という理由でそれを拒絶した。反対訊問が行われたが、博士の証言を覆すことはできなかった。証人台を去る前に、彼はアナンダの死後の王宮の緊張した様子についても語った。新王プミポンが、彼に、新しい秘書や職員は〝安全〟なのかどうかと念を押したというのだ。

検察側の論点の基礎になる王室に対するプリディの態度については、つぎからつぎに〝証拠〟が提出された。古い話でもなんでもいい。彼が上長に対して敬意を欠いたような例があると、それがあばき出され、法廷に持ち

出された。

　まず共産主義者らしいという容疑があった。共産主義者なら王室の敵にきまっている。また、王室庁に勤める貴族の一人が、留学中のプリディと当時のパリ駐在大使とのけんかを掘り返し、プリディが共産党の集会に出席しているという大使の報告が証拠として提出された*。しかし、この貴族のプリディ攻撃は、反対訊問によって少し勢いをそがれてしまった。弁護人の質問に答えて、彼は、プリディが優れた才能の持ち主であり、とくに戦争中など、貴族の多くがプリディを杖とも柱ともたのんでいたことを認めてしまったからである。

（注）　一九二〇年代にパリに留学していた東洋の学生たちの政治的傾向は注目すべきものがある。中国本土の共産主義革命をやったリーダーたちは、当時のフランス共産党の影響を受けている。カンボジア、ベトナムでフランス植民地主義を覆したのも、ほぼ同じころの留学生だった。

　貴族の一部には、たしかにプリディを恐れていた連中もいた。もっとも、そんなことは国王暗殺事件とはなんの関係もないのだが、実質的な証拠も状況証拠もごっちゃまぜになってしまったこの裁判では、要するにプリディの不敬を印象づければいいのだ。何人もの高名な王子が証人台に立った。学生時代、あるいはその後にプリディから恩を蒙ったことを証言する人もいたが、検察側の立場はびくともしなかった。

　ある王子は、プリディが国王の死因調査委員会をつくったのは世論に押されたからにすぎず、しかもプリディは警察に圧力を加えて、政府発表の事故説以外の結論を出さないように命令したと証言した。別の王子は、プリディの威勢を恐れていままでそれを口外できなかったのだと語った。プリディが事故説を強引に押し通そうとしたと証言した王子は、医学専門委員会の一人（つまりニット博士）は、プリディの命令を受けて事故説を強く主張したという匿名情報を聞いたと述べた。そのニット博士は、証人に喚問されたとき、すでにその事実をきっぱりと否定しているのに、である。

　証言が積み重るにつれて、プリディは事故説を信じていただけでなく、真相は自殺説を消すために王に〃事故死〃をしてもらいたかったのだという疑いが濃くなってきた。委員会に圧力を加えて事故説をとらせようとしたのが事実とすれば、もしそれ以外の死因（とくに他殺）ならプリディは困った立場に立ったのではないかという疑問が、ごく自然に引き出されるわけである。裁判は、こうして、徐々に、その基本的な疑問点に近づいてきた。事故でないとすると――他殺か、それとも自殺か？

　つぎに喚問された王子は、王室の内情にとくにくわしい人だった。外遊を控えてアナンダの様子はどうだったかと問われて、王子は、国王はトルーマン大統領とイギリス国王に会うのを非常に楽しみにしていたと証言した。それが事実なら、出発の四日前の自殺は、説明がつかないことになる。

　アナンダの叔父に当るランシット摂政は、アナンダの性格を知っている人はだれ一人として自殺説を信じないだろうと断言した。摂政によると、彼がアナンダの死を聞いてバロンピマン宮殿に駆けつけたとき、なによりさきに王母殿下とプミポンに、だれか王室に恨みを抱いている者はいないかと質問したが、二人は知らないと答えただけだった。ところが、宮廷会議が開かれると、プリディは、いやに力をこめて、王様を恨むような者は一人もいなかったと繰返した。プリディの話を信じ、アナンダが手にピストルを握っていたと知らされ、またプリディに任命された警察長官がしきりに他殺説をしりぞけたので、会議に出ていた人たちは、みんな自殺だと思いこんだ。だが、ナイ・チットが寝室から持ってきた大きいピストルを見たとき、ランシット王子は、このピストルで自殺するなら銃口をこめかみに当てるのが自然で、なぜ国王がそれをひたいに当てたのかと疑いを抱いたという。事故による死亡として国民に発表しようという決定に賛成したのは、自分がその種のことに素人だからだった――というのが、ランシット王子の証言であった。

　もちろん、法廷には、自殺に関するくろうとも数多く登場した。死因に関する証人だけでも四十人以上いた。科学的な調査も披露された。弾道学、法医学、その他あらゆる科学的な調査方法を動員した証拠が示された。

　こうした調査結果は、さまざまな紆余曲折をへて法廷に持ち出された。

　例の興奮に包まれた宮廷会議に出席していた警察関係者の中に一人の警部がいた。ナイ・チットが45口径ピストルを持ってきたとき、警部は、ひそかにそれを観察した。ピストル全体に錆がつき、銃身に新鮮な硝煙の臭い

がなかったからである。ほんとうに一時間か二時間前に使用された銃だろうか？　二日後、彼の上官は、くだんのピストルを科学警察局へ送って、局長の意見を求めた。

その科学警察局長が証人台に登場した。濃い眉、大きな耳、四角い顔をした陽気な男である。彼はドイツに留学して物理、化学、冶金を勉強し、さらに二年間現地に残って化学と冶金学を教え、タイに帰国してから十八年後に局長になった男である。捜査当局からピストルを受け取った彼は、それを化学検査課へまわした。課長は、バンコクの大学で薬学の博士号を取っている。彼は検査用の薬品を用意し、銃身の内側をこすってみた。不思議な結果が出た。同じ日の夕方、海軍にいる局長の友人で、ケンブリッジの理学部を卒業後デンマークで火薬の研究をした男が科学警察局に立ち寄った。ピストルを渡された彼は、銃身の中をのぞいてみて、化学検査課がテストによって得たのと同じ判定を下した。つまり、ピストルは、王の死より何日も前、もしかすると何週間も前に発射されたきりだ、というのである。

局長は、テスト結果を捜査当局に送るのをわざと遅らせ、局内会議を開いた。政府声明によると、国王は事故死だということになっている。だが、問題のピストルは、その日には発射されていないのだ。どうも、なにかがおかしい。警察の方針に真っ向から対立するわけにはいかない。よく考えたすえ、ピストルを受け取ってから三日後に書き上げられた報告書の中では。ピストルは確かに「ある時期」に発射されたことを認めながらも「いつ」については、あいまいな表現が使われていた。

「科学警察局は、現在においては、発射時期を明確に指摘するに十分な測定器具、薬品を持つに至っていない」と断ったあと、局長は、報告書を意味ありげな東洋的表現で結んでいた――「どうかご参考までに」。

捜査側は、報告書の表現が意味するものに気づかなかった。その後も長いあいだ、彼らは科学警察局と連絡をとらなかった。

しかし、化学検査課のテスト結果を知っていた局長は、捜査当局にはないしょで、同型の45口径ピストル二挺を手に入れ、数カ月かけてひそかに実験してみた。そして、最初のテスト結果に「完全な自信」を持った。もちろん、それはまだ口外せずにいた。

ピストルが発射されると、銃身の内側に微粒子がくっつく。その中には亜硝酸塩もあるのだが、これは日がたつにつれて消えてしまう。銃身に熱湯をくぐらせ、それをビーカーに受けてからある種の化学薬品を加えると、溶液は非常に濃いピンク色に染まる。ピンクが濃く、また速くピンクになる場合は亜硝酸塩が多いわけであり、従ってピストルの発射後まもなくだということがわかる。反応が遅く、ピンクが淡いときはその逆だ。局長のテストによると、国王のピストルと同じ結果を得るためには、ピストルは少くとも八日前に使用されていなければならないことが判明した。国王のピストルが最後に発射されたのは六月一日。そして国王が死んだのは六月九日というわけである。

なんとも奇妙なテスト結果は、一九四六年十一月に結論に達した。それでも局長は警察に連絡しなかった。彼の上官が、不要な口出し（タイ流の表現でいえば「トゲのある板の上を歩く」）をしないよう指示したのだ。しかし、その一年後にピブンのクーデターがあり、新政府は、国王暗殺事件の徹底追及を命じた。局長は、やっと腰を上げて、報告書を捜査局に送った。のちに、プラビニットが指揮をとった捜査本部の依頼で、彼はさらに数カ月をかけ、三度か四度も同じ実験を繰返した。

プラビニットにとっては、このテストこそ、どんな小説家の想像力も及ばない犯行の筋書きを組立てる礎石になったのだった。それが真実かどうかを決めるのは法廷の役目であった。

弁護側は、なんとかして他殺の線をゆるがそうと全力を反対訊問に集中した。攻撃の矢は、テストの方法論にまで向けられた。科学警察局長は、その統計的な杜撰さを追及された。信憑性のある結論は、わずか二挺のピストルを、しかも異った時期にテストした結果などからは得られないのではないか。また、亜硝酸塩の残留量は、銃身内部に付着している油その他によっても左右されるはずだ。そのうえ、法廷に提出されたテスト結果によると、十四日後のほうが八日後よりも濃いピンク色が出ている事例が一つある。科学警察局の検査にたよりすぎるのは危険ではないのか？

局長は答弁した。クーデター後は十挺以上のピストルを使って入念にデータを出してみた。弁護側が問題にしている一例は、無数のテストのあいだにたった一回だけ

起ったことにすぎない。弁護側はきり返した。溶液のピンク色は、単に「濃い」「薄い」「ほとんど視認しえない」など、単に目で見た感じをテスト結果としている。こんな不正確な測定で、亜硝酸塩の量を決定するのは不都合である。光量計が使用されたのは、テストのごく終りのほうだけではないか。局長は、しかし、テストの妥当性を主張した。彼の同僚も、テスト結果を支持する証言をし、これとは別種の検査が続いて披露された。

それは、銃身内部に付着する錆のテストだった。銃身には、そこにくっついた金属微粒子の種類によってさまざまな錆ができる。国王の死後二日目にピストルを受け取ったとき、科学警察局長は、付着していた微粒子を弾丸の発射薬だと思っていた。だが、化学検査課で調べたところ、錆であることがわかったというのだ。そのため、亜硝酸塩の定量テストと並行して錆のテストも行われた。発射してから二日間、銃身には錆がつかないことが判明した。国王のピストルと同量の錆が付着するまでには、四日から八日かかる。これは、残留亜硝酸塩についてのテスト結果とも符合していた。

検察側は、二十年間も軽火器を研究している砲兵大佐を証人として喚問した。彼によると、国王のピストルの金属質から考えると、発射直後の銃身内部は白い雲のような色に被われているはずで、宮廷会議に出席していた警部が見た土のような色は発射後四、五日たたなければつかないものだという。反対訊問も、この証言をくつがえすことにできなかった。ただ、大佐は、銃身の掃除が行き届いていない場合は、もっと速く錆が付着することもあるとだけは認めた。

王室庁関係者の証言によって、生前の国王がくだんのピストルを使ったのは何カ月も前とわかったが、ただどれほど掃除されていたかは不明だった。だが、国王は、いつも使ったあとのピストルを、おつきの者に渡して掃除させていたという証言が出た。「一般に使用されているピストルよりも、おそらく入念に掃除されていたであろう」という推測を採用するほかなかった。

砲兵大佐は、これとは別に、もっと重要な証言をした。銃身内部についている錆は、発射された弾丸にその痕跡を残しているはずだというのである。ところが、この弾丸のほうも、すでに大論争のまとになり始めていたのだ。

法廷には、さまざまな証拠品が提示されていた。国王の寝室の模型、彼が着ていた青いシルクのズボン、ゴルフコースから掘り返され枕の本体、論戦の焦点になっているピストル、ナイ・チットが国王のベッドのそばで拾ったという薬莢、事件の三日後にマットレスの中に埋っていた弾丸……。警察の専門家は、弾丸と薬莢は確かに45口径のピストルのものであると証言した。しかし、不思議なことに、その薬莢がマットレスから見つかった弾丸を発射したものであるという証言は、だれからもなかった。

検察側は、そのあいだに何人もの証人を繰出し、ナイ・チットが薬莢を見つけたと供述している場所が一貫していないこと、また、マットレスの中の弾丸は国王を殺したものではなく、暗殺者が自分の弾丸を隠すために、そこへ埋めておいたものに違いないという心証を提出してしまった。

こんな珍説を検察当局が出すにいたった動機は、調査委員会の依嘱を受けた医学専門委の報告であった。報告によると、アナンダの頭を貫通した弾丸は凹みも傷もなく、もとのままの形をしている。しかし、シリラット病院での実験で、テスト用の遺体の頭蓋骨を通過させた弾丸は、すべてひどくひしゃげてしまっていた。

調査委員会は、当時、ことの重大さに気がつかなかったが、これにとびついたのがプラピニットだった。証拠126号と127号――二枚の拡大写真が裁判官席に提示された。前者は、人間の頭蓋骨を貫通した弾丸のそれで、後者は一枚の紙を撃ち抜いた弾丸とマットレスの中から発見された弾丸のそれである。一枚目の写真は、原形をとどめないほどにひしゃげていた。二枚目の二つの弾丸は、原型どおりという点で、まったく同じだった。

検察側が喚問した鑑識の専門家は、人間の頭蓋骨を通った弾丸は、ひどく変形しているときも、さほどでないときもあるという証言を与えた。だが、彼はうっかりして、求められる以上の発言をしてしまった。これまでの例の中には、原形そのままだったこともあると付言したのだった。驚いた裁判官が、固い壁を二度――頭蓋骨の前とうしろ――も撃ち抜いた銃弾は変形するとみるのが常識ではないですか、と、助け舟を出したため、検事はほっと胸をなで下ろした。

一九四九年九月、裁判が始って一年がたった。検察側

の論点は、すでに多くの専門家によって支持されていた。亜硝酸塩のテストは、国王の45口径ピストルが凶弾を発射した武器ではないということを証明する有力なきめ手だった。自殺説や事故説は、ありうべからざるものとして葬られた。マットレスの中の傷一つない弾丸は、犯行をくらますためにそこに埋められた嫌疑が濃厚であった。もしそうだとすると、ナイ・チットが発見したと称する薬莢も犯行をくらますためのものと思われる。こんなすりかえは、内部の者の協力がなければできない。ナイ・チットとブットの両ボーイ、あるいはそのどちらかに違いない。また、これだけ巧妙に自殺と見せかけた他殺は、よほど綿密な計画の下に行われなければならない。そして、これほど周到な計画を立てうる男は、プリディをおいてない――。それほどかしこいプリディも、プラピニットによる完璧な捜査と、科学的なテスト結果から逃れることはできなかった。いや、科学的な証拠は、まだまだあるのだ。

殺人事件において、もっとも雄弁な証人は遺体である。遺体は、生命を失ったのちにも、なおりっぱに発言する。シーザーを抱き上げたアントニウスは「ああ、あわれ、ものいわぬ唇よ」と歎いたが、殺された遺体ほど実にさまざまな事実を物語るものはないのだ。ただ、問題は、遺体が語る言葉を聞きとる術である。

猛暑がモンスーンの雲を呼び寄せ、エメラルド寺院の本尊の衣裳が宝石でできた薄い衣から雨季用のそれに着せかえられるころ、法廷の証人台には医師たちがつぎつぎに喚問された。ある人はドイツとアメリカに留学し、ある人はロンドンのスコットランドヤードで法医学の実習をしていた。どの証人をとってみても、その筋の権威ばかりである。彼らの証言は、ある医学的な現象に集中していた。それについての証言は、後に一冊の教科書になるほど広範なものだった。これまで、タイの法廷では登場したことのないその用語は「死後痙攣」で、法廷では、まるで呪文のように、これが繰返し問題にされた。

人間が死ぬと、数時間のあいだは筋肉が弛緩し、やがて死後硬直が始る。だが、ときには、脳の特別な部分に損傷があったときなど、瞬間的な痙攣が起る。車にはねられた女性が、しっかり買物籠を握っていたり、兵士が突撃の姿勢のまま銃を握って死んでいたりするのがその例である。長いあいだ死後硬直と混同して考えられていたこの現象は、二十世紀初頭にはじめて分類されて「死後痙攣」という名が与えられた。それは、死の瞬間に使用されていた筋肉の緊縮を指すのである。

アナンダ王は枕に頭をのせ、両足をまっすぐ伸し、両腕も胸から足を覆う掛蒲団の上に伸し、目と口を閉じた安らかな死に顔だった。王母殿下が遺体にすがりつき、女官長が脈をとったことによって遺体の位置が変ったのではないかというのが、最初のうちの弁護側の主張だった。しかしナイ・チットが見た姿勢も、王母殿下や女官長、プミポンが見たそれも、いずれも眠っているような国王の遺体だった。

ニット博士が湯灌したときも、遺体はまだ柔く、痙攣が起らなかったことは確実であった。

検察側は、死の瞬間のアナンダはなに一つ筋肉を使っていなかったのだから痙攣が起らなかったのも当然だと主張した。つまり、彼は発見されたときの姿勢のままに横になっていたので、もともとピストルは握っていなかった。暗殺者が国王に気づかれずに侵入し、彼を殺したに違いないというわけである。

しかし、死後痙攣は、他の理由によっても起らないことがある。それは脳が非常に特異な損傷を蒙ったときだ。

脳の比較的上部に位置する大脳皮質の中に筋肉の収縮を司る中枢があるのだが、もしそれが損傷しても基底核が無傷なら、筋肉は、死の瞬間に使用されたままの収縮を継続する。だが、もしその双方が破壊されたときには、筋肉の収縮はありえない。アナンダがそうだったと仮定すれば、彼が、死の瞬間には別な姿勢をとっていたことも考えられる。死後痙攣がなかったことを主張する検察側は、大脳皮質は破壊されたが基底核はそのままだったことを立証しなければならなかった。それを証明しなければ、アナンダは仰臥とは別の姿勢をとって死んでいなければならないからである。

検察側の立証の根拠になるのはアナンダの脳の内部を通過した弾道であった。エックス線写真などによると、それは、ひたいからまっすぐに下り坂でうなじに出る着線を描いていた。それは大脳皮質を貫通したあと、すぐ下にある小脳のごく近くを通っている。基底核は小脳にくっついているのだが、基底核が破壊されているかどうかは不明だった。

解剖時には、傷口がふさがれていたので、正確な弾道を実際に頭蓋骨について測定することはできなかった。そこで、法廷には別の頭蓋骨が持ち出され、それにアナンダの頭と同じ位置に着径六ミリのガラス管が通された。ガラス管は大脳皮質を通り、小脳のすぐ近くを通り——そして、ごくわずかの差で、基底核からはずれていた。

決定的な打撃を受けたかに見えた弁護側だったが、まだ反撃の希望はなくはなかった。たとえ基底核が破壊されていなくとも、ピストル発射時の反動のほうが死後痙攣よりも強かったということが考えられるからである。ものすごい反動が、王の腕——あるいは両手を使っていたのなら両腕——を、発見されたときの位置まではじきとばし、ピストルもまた発見時の位置（伸ばした手のすぐ先）へはね返したという可能性もある。

これに対して、検察側は、二つの理由をたてにとって論駁した。軽火器にくわしい例の砲兵大佐が、銃の反動に関する大量の文献を法廷に持ち込んだ。要約すると、45口径ピストルの反動は、ピストル自体をアナンダのひたいの上から伸ばした腕の先まではねとばす力がないというのである。また人間の筋肉についての専門家の証言によれば、反動は、アナンダの両腕を大きく左右にひろげこそすれ、それを両脇に添えた位置にはしないことがわかった。

こうした専門家の意見に支持された検察側の立証は、素人もすなおにうなづける自然なものだった。もしアナンダが自分でピストルの引き金を引いたのなら、彼の腕（または両腕）は胸か頭か首の上にあるはずである。死後痙攣がないのなら、からだのあらゆる部分は、死と同時に、重力の命ずるままに下へ落ちるとみるのが常識でもある。

一人の老練な刑事が証人に立ち、類似事件について証言した。それまでに彼が扱った事例の中では、仰向けになって自殺した人が両腕をまっすぐに伸していた例は一つもないというのだ。また別の刑事は、アナンダとほぼ同年齢の死体に向ってピストルを射ち込んでみた結果を報告した。彼は、そのとき、血と骨片がピストルや手首に付着したと証言した。アナンダの場合は、そんなものはいっさいなかった。つまり、彼が自殺したことは考えられないというわけである。一方、ワチャラチャイの女

中は、主人のシャツに血がついていたと証言しているではないか。

弾道学や法医学についての長い長い詮索は、一九四九年末にはやっと完了し、傍聴席はほっと一息ついた。検察側の立証段階はまだ終ったわけではないが、それでも重点な論点は出尽したのである。

容疑は確かに濃厚ではあったが、被告たちは気の毒でもあった。あらゆる科学的証拠が彼らの眼前に展開され、現在までに登場した証人が六十人、まだ八十人も残っているというのだ。それは、まるで国家が全力をあげて彼らを有罪にするために、生者と死者を問わず、ありとあらゆる情報提供者から証言をしぼり出しているようにさえ見えた。

まわりくどい法廷用語。長い休廷。被告たちは、もう丸二年は服役したことになる。一口に二年というが、裁判に耐えながら時を刻む身にとってはたいへんなことである。希望と恐怖は一寸のばしにされ、神経はすり減ったに違いない。家族も苦労しているだろうと思うと、よけいやりきれなかったことと思われる。

いつなんどき処刑されるかもしれないという恐怖に加えて、有罪になれば妻や子までが社会から締め出されることが目に見えていた。長い監禁状態は精神的な苦痛をいやが上にもつのらせたはずである。拘置所の中で、彼らは、長いあいだ太さ一インチ以上もある重い鎖でつながれていた。警察は、自供を引き出すためにあらゆる手段を使った。満員の法廷の中で彼らを見つめる傍聴人の好奇の目、単調なやりとり、じっと見下している仏像。かと思うと、獄中の身も心もむしばんでやまない責苦。その二つに締めつけられた三人が発狂しなかったのは、よほどの意志力によるものだろう。

一九四九年十二月某日の朝、たった一度だけ第二十四号法廷のそとで爆発音がしたことがあった。被告たちは、救いの手が来たと淡い希望を抱いたかもしれないが、血相変えた衛兵が自動小銃を手に駆けつけてみると、それは子供が市電のレールに花火を仕掛けただけのことにすぎなかった。

裁判の進行中に、被告たちの目は、何度か裁判長の頭上に掛けられた新国王プミポンの肖像の上にとどまった。そして、裁判が一九五〇年に入ると、ひょっとしたら一時的に保釈してもらえるかもしれないと希望が、は

じめて彼らの心中にきざしたのだ。というのは、アナンダの死後まもなく祖国を離れた新王プミポンの帰国の日が近づきつつあったからである。

プミポンを乗せた船がタイへ向って航路を急いでいたこの年の三月、被告の家族は、二年半の獄中生活を一時中断させてほしいと陳情した。だが、陳情は却下され、世論も被告の身の上にほとんど関心を抱かなかった。国王の帰国は、国民の喜びの乱舞と悲しい思い出の涙を一つに結び合わせることになっていたからである。というのは、アナンダの遺体はやっと荼毘に付され、一方のプミポンは即位式をあげ、しかも結婚するというのであった。

4

タイ国民の熱狂が国王暗殺者の裁判に向けられているあいだ、国王一家はスイスの静寂の中に引きこもっていた。プミポン王と、十七歳になるタイ娘シリキットとの婚約が発表されたのは、一九四九年九月のことである。

シリキットは、非の打ちどころのない婚約者だった。

「つやのある黒髪は美しい流れを描きながらうなじにこぼれかかり、美しい目、つつましい鼻、そしてあでやかなくちびるには絶えず微笑が宿り、映画スターのような歯並びを見せている。タイの女性としては背も高く、しかもはちきれんばかりの健康……」

新聞記事も、彼女のことになると手ばなしだった。

プミポンがイギリス大使令嬢だった彼女に会ったのは一年前、彼がロンドンを訪れたときである。その数カ月後、彼は自動車事故に遭った。チャクリ王家に遺伝的なスピードへの愛着が、彼の身中にも流れていたのだろう。ローザンヌのワタナ荘に招かれたシリキットは、プミポンの看病を手伝った。負傷した右目には手術が施されたが視力は回復せず、王はその後サングラスを愛用されるようになる。医師の勧告に従って王はまた法律の勉強も中断してしまった。こうした悲しみの中から彼を立直らせたのはシリキットの愛である。彼女は、まもなくロンドンに帰ったが、タイ古来の慣習によって娘と入れかわりに父の大使がワタナ荘に招かれた。このことはシリキットの誕生日まで内々にされていたが、彼女が十七歳になった日にプミポンはダイヤの婚約指輪を贈り、婚約は正式にバンコクにいる摂政宛てに通告された。

ニュースを聞いて、タイ国民はわきたった。シリキットの父親がプリディの古い友人であることなど、だれ一人として忘れてしまっていた。二人は同期の留学生で、シリキットの父を外交官にしたのはプリディなのである。そのことは、彼がプリディに贈ったポートレートに書いた感謝の言葉の中にはっきりと記されている。

占星術師がさっそく活動を開始し、あくる三月挙式がよろしかろうと言上した。プミポン国王がその勧告を嘉納したしるしに、まもなくバンコクへ国王ご料車としてピカピカのダイムラー・ベンツが送られてきた。エアコン

と電話を備えた六千四百ポンドもする車で、それは摂政と枢密院議長列席のもとに、うやうやしく聖別された。

市民がもっと目を見張ったのは、実はバンコク市警が注文した車のほうである。警察力は、それまでも十分すぎるほど十分だったのだが、彼らはさらに一台十二トンもする装甲車を六十台も買い入れたのだ。警備用舟艇も多数発注された。バンコクは市民百五十人当り警官一人という警察都市になってしまった。

だが、もし読者が当時のバンコクに住んでいたら、これだけの警察力でもまだまだ安心しなかったはずだ。阿片、宝石、米などの密輸は、したいほうだいだった。法網をくぐった石油の再輸出、たばこ、モルヒネ、にせ薬品の密造、それに加えて盗賊がはびこっていた。きのうタイプライターが盗まれたかと思うと、きょうは金の延べ棒、あすは古い仏像といった調子で、しかもごっそり持って行かれるのだ。離島の監獄では、囚人とぐるになった刑務所長が政府のランチを使って海賊を働き、掠奪した船の船員五十人以上の手足を手錠で縛って海の中へ放り込んでいた。

警察力の大増強は、法を行使するためではなく、警察を一手に握る男の政治権力を強めることを目的としていた。タイを警察国家にしようとするその男は、ピブンの子分で三十九歳になる警察長官パオであった。

パオは、ピブンを復位させたクーデターに参加して出世の糸口をつかんだ。〝バンコクの首切り人〟パオの前歴は、どうもはっきりしない。人も殺したし、阿片の密売、売春宿の経営などもやっていたらしい。

警察の上部機関である内務省を握っていたパオは、自分が悪事を働くのはもちろん、政府全体の悪事の奔騰を黙認していた。警察の検挙率は六十件に一件の割合だった。別の例を引けば、責任あるはずの大臣が専売公社を動かし、お気に入りの国会議員には好きなだけのたばこを無料で与えていた。政治家も警官も官吏も商売人も、みんなが袖の下を取り、タイ人の言う〝潤滑油〟をふんだんに使って恥じなかった。

首相と蔵相を兼任するピブンは、自分自身もあらゆる形で〝潤滑油〟をふり撒いていた。買収してもうまくいかない場合は、パオを使って相手を射殺するなり投獄するなり自由だった。ピブンという男がいかに政治倫理に欠けていたかは、一九四九年二月のプリディによるクーデターを未遂に押えるために三百万バーツの金がかかった事実を、こともなげに認めたのからもわかる。クーデター鎮圧に働いた連中に報償を与えるため、これだけの金が国庫からつかみ出されたのである。これはまだ安いほうで、ピブンが返り咲いたクーデターは千五百万バーツもかかり、これも国庫から支出されたのだった。

二月のクーデター騒ぎのあと、パオは警察幹部たちに金の指輪を贈った。そんなパオは「俺は、これまでに人をだましたり、人の持ち物に手をつけたことがない。お前たちも見習え」が口ぐせだった。そして、指輪事件のことを国会で追及されたピブンは、パオ長官はきっとどこからか指輪の資金を捻出したのでありましょうと答えて眉一つ動かさなかった。

ピブン政権の専横を食いとめる歯どめといえば、国会での質問だけしかなかった。新聞は絶えず閉鎖されたり、編集者がおどされたりしていた。ある新聞社には、手榴弾が投げ込まれた。これは警察がいつも使う手だ。また別の新聞社は、パオを批判したかどで、編集長が出家しなければならなかった。セニーの弟のククリ・プラモートは皮肉や反語を駆使して政府に反抗する勇敢なジャーナリストの一人だったが、彼や彼の同僚たちが指導する民主党の命運は風前の灯であった。民主主義をタイに実現するという公約は、彼らがピブン政権を受けいれたことによって葬り去られていた。

ピブンは、自分の政権に議会主義の仮面を着せるため国会の存在を認めていたが、裏では彼を支持する多数派をうまく操り、必要なときには緊急事態を布告してタイ政界を思うままに動かしていた。私利をはかる一方では彼独特の理想主義もあったし、国の内外にいい顔をしてみせたかったので、民主主義の理想を言葉の上だけでは常に掲げていた。民主党内外の王党派をうまく味方につけ、そのため彼がプリディらと協力して一九三二年の革命をやった推進団の一人であるという事実は、いつのまにか忘れられていた。ピブンは、その態度といい、衣裳道楽といい、適度にブルジョア的な生活といい、王制派や保守派にとってはプリディなどよりはるかに近い存在だった。プリディの過激な自由主義を記憶している人々はピブンに好感を抱き、またプリディの罪が国王暗殺事件の裁判の進行につれて明らかになるにつれ、彼らの支持はプリディを追放し、その後タイの政治を一手に握っ

てプリディのカムバックを許さないピブンのほうに傾いていった。

愛国心を鼓舞することによって支持者を集めるという手法に、ピブンは通暁していた。シャムをタイに改めた新政権の当面のほこ先は、やがて華僑に向けられた。また戦争中の支配者、日本と協力したことを恥じていない証拠に、ピブンは戦後はじめてバンコクを訪れた日本の財界人を迎えて「久しぶりに日本語を聞いた。こんなうれしいことはない」と演説したりもした。

西欧もピブン支持にまわった。蒋介石が中国本土から追い出され、ソ連が共産中国に承認を与えるようになると、タイをしっかりと手中に収めているピブンは、西欧諸国に珍重され始めた。ピブンのほうも自分を反共のチャンピオンに擬し、タイを反共のとりでと諸外国に信じ込ませるのは有利な戦術であった。そう宣伝すれば、経済援助はどんどん流れ込んできたからである。売り手市場の農業と、戦時債務処理のために日本が支払った四千四百万ドル分の金をもってしても、腐敗しきったタイの経済を支えるのは容易なことではなかった。ピブンがロンドンへ送った使節団は「反共工作のため」の経済援助を五百万ポンドもとりつけて帰ってきた。

共産主義を鎮圧したのはもちろんだが、ピブンは、そのほかにも彼の権力を弱めそうなものはなんでもかんでも圧殺してしまった。表面は議会主義を標榜していてもパオ麾下の特高警察官千人の存在は警察国家以外のなにものでもなかった。第二十四号法廷での国王暗殺事件の裁判以外にも、国家転覆罪の裁判が二つ進行していた。さまざまな理由のために罪をかぶせられた人、とくに一九四九年二月のプリディによるクーデター未遂事件の関係者たちが被告だった。ほかに政治犯として投獄されていた人の数は、まったくつかめないほどである。

だが、少くとも六人については、末路の模様がはっきりしている。それはプリディ派の閣僚や国会議員六人で、彼らは裁判にもかけられないまま、一九四九年三月にパオの手で処刑されたのだ。そのうちの二人は、国王暗殺事件の弁護人だった。やっとかわりを見つけたと思ったら、その人たちも国家転覆を計画し反ピブン文書を配布したかどで同年の十月三十日には逮捕されてしまった。そのあとは、だれ一人として弁護の引き受け手がなく、残る二人の弁護人の一人も職を辞して法廷を去った。残ったのは、最初から一貫してたたかい続けているハク・ナソンクラただ一人だけ。だが、まもなく、大学を出たばかりの二十三歳の女性弁護士が彼の助手を志願した。それは被告チャリューの娘だった。彼女は、その後、裁判の終了まで、三人の被告のために尽力することになるのである。

被告たちは確かに気の毒だったし、ピブン政権のテロによる支配はなるほど邪悪なものに違いなかった。しかし、われわれは、だからといって裁判そのものに偏見を持ってはならないと思う。国王暗殺事件の公判は、少くとも形の上では、正しい手続きを踏んで進んでいた。立証の方法をくわしくチェックすることによって、われわれは真実に迫ることが可能なのである。

一九四九年が暮れるころには、弾道学や医学関係を含む六十人の証言が終っていた。あくる五〇年には、検察側は八十人の証人を予定していた。その中にはプミポン国王や王母殿下の名もあった。

プミポンが美しい婚約者を連れ、待ちかねたタイ国民に迎えられてバンコクに帰ったとき、王母殿下はスイスに残っていた。息子と同じように、彼女もまた自動車事故で負傷したのだ。だが、そのおかげで、彼女は悲しい思い出が宿る場所に再会をせずにすんだのだった。

いまとなっては痛ましい記憶となったアナンダ帰国の儀式は、プミポンを迎えて再び繰返された。戦艦に乗ってのメナム遡航。王国を象徴する金の剣の贈呈。臣下たちの歓迎の辞。僧侶の読経。王室桟橋に群れつどう外交官代表の姿。国王がグランド・パレスに入るのを見守る大群衆。……どれをとっても、かってプミポンが帰ってきたときと同じである。だが、前のときは、兄のアナンダがすべての中心だった。当時のプミポンは、主役アナンダのお添えものにすぎなかった。

そのアナンダは、いまは金甕の中である。ハンサムに成人したプミポンは、その兄の遺体の前にぬかずき、続いて王室墓所でチャクリ家先祖代々の霊に詣でた。彼がともしたロウソクの灯は、無数のロウソクに移しつがれ全国の主要な寺々へ運ばれた。

グランド・パレス訪問の最後に、プミポンは、エメラルド仏寺へ行き、ついで禁裏の中にある王国の霊のおくつき所に参拝した。これは敬虔な一般国民が「国の守護神」と呼び、皮肉なインテリたちは「王宮のじいさん」

と呼びならわしている精霊を安置した至高の場所である。そうするうちも悲劇の記憶は、プミポンの心に鮮明に残っていたのだろう。儀式のあいだ、彼は、顔の筋肉一つ動かさなかった。

　プミポンはバロンピマン宮殿には住まず、そこから二マイルほど離れたチトラダ宮に落ちつくことになっていた。道筋に当るラジャダムナン通りは美しいデコレーションに飾られ、熱狂した国民があふれていた。王様の御目を汚すような洗濯物がぶら下っていないか、屋上などに上って王様より頭の高いところから見下す者がいないかを、警察は、事前に入念にチェックしていた。

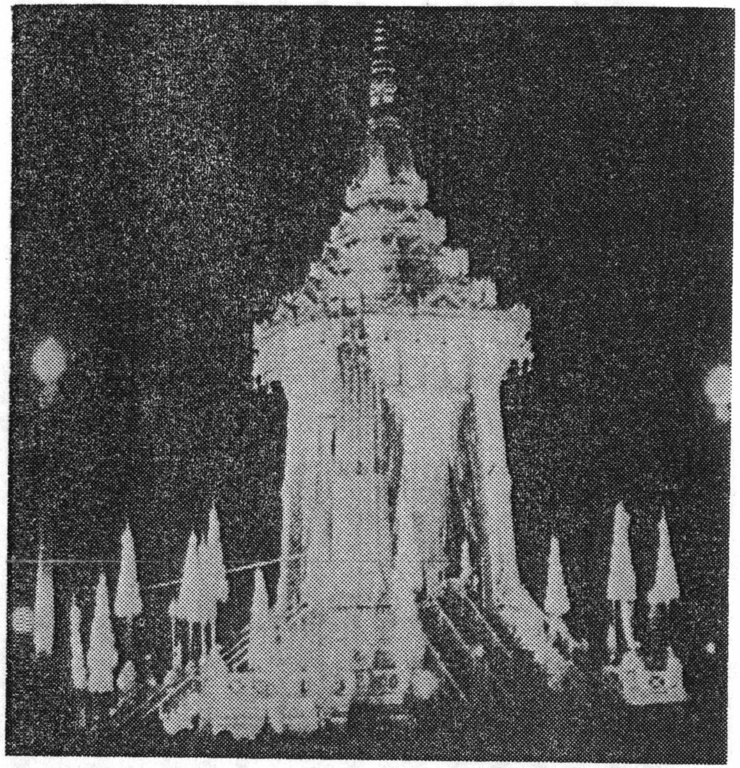
　翌朝早く、プミポンは、六十四人の僧を招いて布施し、新宮殿の前途を卜（ぼく）した。それを合図に、シャムの長い伝統に従った複雑きわまる儀式の幕が切って落された。

　グランド・パレスの中の朱と金の壁を持つアマリン玉座の間では、手に手にロウソクを持った僧たちがプミポンを取り巻いて祈った。メナム河上の儀式では、プミポンは自ら水の女神の霊を鎮（しず）めた。また別の日には、さりげなく背広を着て、グランドパレスの前にひろがるフラメーン広場へドライブに出かけた。広場には、兄アナンダの葬儀のための高楼が築かれていたのである。だが、この微行は、たちまち大群集に発見されることになり、プミポンはあわてて宮殿に引返さなくてはならなかった。そこから百ヤードと離れていないところには第二十四号法廷があり、そこでは彼の兄アナンダを殺した容疑者が裁かれているのである。

　一九五〇年三月三十日——白い布を巻きつけられたアナンダの遺体が銀甕の中に据えられてから四年近くがたち、やっと葬儀が始った。

　巨大な金甕は滑車に吊り上げられて、高さ四十フィートの霊柩台の上に置かれた。それは舟鉾のような形をした台車の中央に築かれた高台で、やがて百人の海兵隊員に曳（ひ）かれて茶毘の場所に向った。舟鉾の側面は朱と金の地に美しい象嵌（ぞうがん）が施され、緋の舌を出す竜や天使や、さまざまな幾何学模様などがいっぱいに彫刻されていた。人々の目の前をゆっくりと曳かれていくのだが、あまりにも美しい模様に目うつりがして十分に観賞できないほどだった。

　フラメーン広場にしつらえられた茶毘の高楼は、



フラメーン広場のこの高楼で，アナンダ王の火葬が夜通し行なわれた

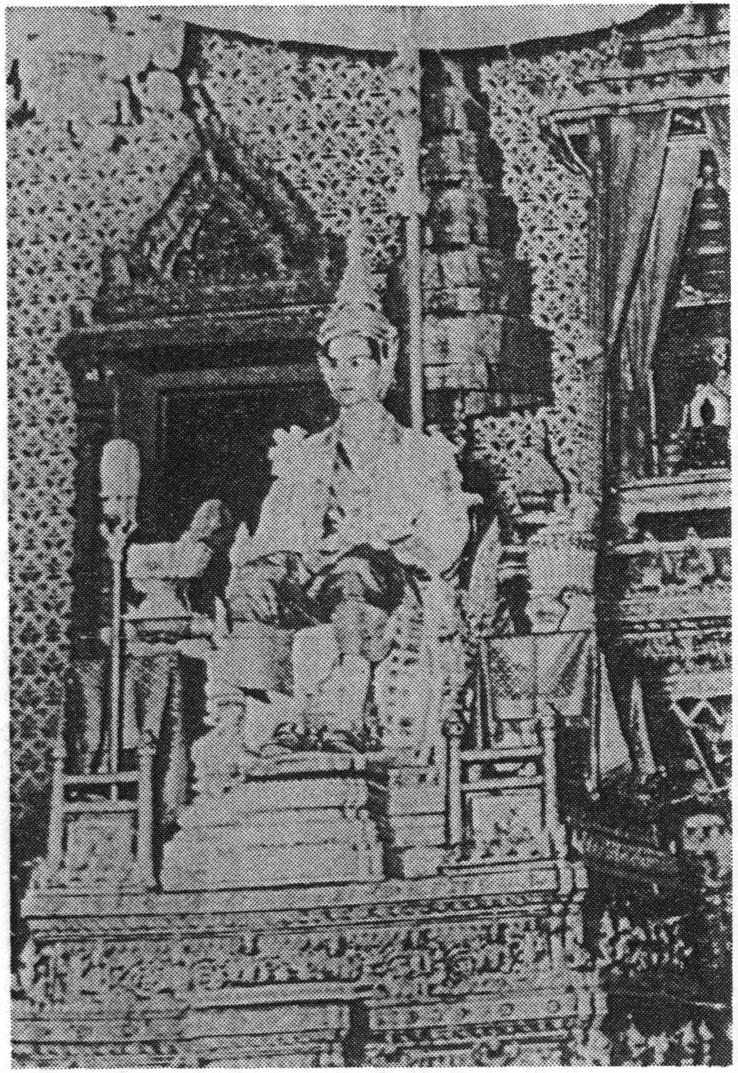
舟鉾よりもはるかに高く、頂上へは四方から長い階段がついている。その階段の一つにレールが敷かれ、いったん砲兵の砲車に乗せられて広場を二周した金甕はレールの上を頂上へと引き上げられた。

　午後四時三十分、近衛師団元帥の制服に身を固めたプミポンは、ゆっくと階段を上り、甕のロウソクに点火した。いったん下りて大僧正の説教を聞いてから、彼は再び階段を上っていった。広場には、津々浦々から道や運河を旅して集った群集が、その日の午前四時いらいぎっしりと集り、金甕とそれに向ってゆっくりと近づいていく国王の姿を見守っていた。プミポンが金甕の前に立ったとき、広場の上にひろがる美しい青空の下には絶対の静寂があった。国王は遺体に永遠の訣別を告げた。頭を下げただけではない。異例にも甕の前に両手をついたのである。大群集の中からは畏敬と悲嘆のささやきが洩れた。国王は、それから細長いロウソクをとって、点火の儀式を行った。その瞬間、三斉射の弔砲が発せられ、ラッパ手が訣別の調べを吹奏した。政府の高官や王族の代表が階段を上っていた。その一人は、王母殿下からの紙花を盛った金の鉢を捧げ持っていた。

　実際に火葬が始ったのは夜になってからだった。翌朝八時にはプミポンが出席して骨拾いの式が行われた。死の意味は、東洋と西洋とで大きく違う。西欧では、人格と実存を持つ霊が死後に永遠の生命を得ると考えるのだが、東洋では霊魂は宇宙の永遠に到達するまでに多くの形をとって地上に具現するという仏教の信仰がある。アナンダの霊も、その肉体の消滅とともに、その瞬間に生れた生物の体内に転生し、因果応報律に従って、その生物の現世での幸福は、アナンダが生前に積んだ功徳によって左右されるのである。

　荼毗のあとも数週間にわたって儀式が続いた。それがすむと、ご成婚と即位の式である。すべては悲しみから喜びへと一転した。それに、タイ人ほど手っとりばやく悲しみを忘れてしまう民族も、ちょっと例がないのだ。

　兄の葬儀から一カ月目の朝、プミポンは祖母（つまりマヒドン殿下の母）の家で、改めて花嫁に会った。結婚登記式が行われ、祖母は新郎新婦の両手に清めの水を注いだ。午後、グランド・パレスに王族や政府高官を招いた王は結婚を公告した。一同のうち重だった者が王と王妃の手に清めの水を注いだ。国王の結婚式はこれだけ。



即位式でのプミポン現国王

5

役人たち、警官、王室の使用人、政治家、そして彼らの妻や友人たちがかわるがわる証人台に立った。証人審理は、一九五〇年になっても継続した。提出された証拠は、なによりも捜査本部長プラピニットの完璧な捜査ぶりを物語っていた。しかし、検察側に役立ちそうな証拠は、細大洩らさずに集められはしたものの、その多くは、これまでに立証した事実を裏づけたり、わずかばかり拡張したにすぎなかった。

アナンダの死後、国王の一家がひどくおびえていたこと。国王よりさきに死んだボーイ長チャンが残した不吉な予言、政府がきめた事故説にもとる証拠をすべて消そうとしていたプリディ。そんな〝事実〟には、とくにスポットライトが当てられた。ほかに重要なものは、ごく一、二点だった。たとえば、ナイ・チットが言ったという証言、プリディが、アナンダは家族内の不和を苦にして自殺したのだろうと言ったという証言など。そんなものを除くと、新しい事実は、ごくわずかだった。

しかし、そのごくわずかの事実の中には、驚くべき新事実も含まれていた。

その一つは、悪名高い警察長官パオの証言だった。パオによると、プリディ派の有力政治家某氏は、アナンダの死よりも一カ月前に、アナンダ王がプミポンに譲位して政界入りしたいらしいと語っていたという。いや、もっと意外なことは、国王は死の翌日、ピブンを引見される予定だったというパオの暴露であった。

そのころ、ピブンは、出獄後まだ間がなかった。パオによると、国王は、パオの義弟の妻に当たる王母殿下のおつきの女官を通じて、ひそかにピブンに会いたい旨を宣下されたのだという。パオは、王の意向をピブンに伝え、会見の場所はわざとバロンピマン宮を避け、マヒドン家が所有するスラパトム宮に選定された。

この〝事実〟は、さまざまに解釈されたが、国王とプリディの不和のため、隠密にことを運ばなければならなかったらしいことは察しられた。国王とピブンが会えば、プリディにとって致命的な取引きが行われただろうことは確実であるからだ。極右王制派を除いては、こんな証言を信じる者はだれ一人いないことをパオは知っていたはずだ。だが、彼の証言は、ほかならぬ証人ピブンによって支持された。ピブンは、国王から会いたいとの伝言を受けたことをはっきりと認めたのである。

新証言をめぐって憶測がうずを巻いた。しかし、それは、まもなくもう一つの爆弾証言が大々的に新聞などに取り上げられるに及んで、影が薄れてしまった。ワチャラチャイ大尉が自ら国王に手を下したのは、彼が雇った殺し屋が最後の瞬間になって雲隠れしたからであると証言する人が登場したのだ。

証人になったのは、陸軍のある下級将校だった。一九三三年の王制派叛乱に加担して投獄された彼は、獄中で強盗犯人セーと知り合った。それから十年以上の歳月がたったが、アナンダが死ぬ四日前に、セーがその将校を訪ねて来て、興奮した様子で「さる高貴な人」を殺すために雇われたと打ち明けた。

その日のセーの話によると、雇った男というのはプリディ派の元自由タイ運動員で、アメリカ陸軍のピストル二挺と手榴弾一個を与え、六千五百ポンドの報酬を約束したという。セーは、アナンダが死んだあくる日に再びやって来た。そのときの話では、彼は国王の死の前日にグランド・パレスへ連れて行かれ、ナイ・チットとブットの助けで「さる高貴な人」を垣間見せてもらった。だが、それが国王であることを知ったセーは殺害計画を断り、その結果、ワチャラチャイが自ら暗殺を実行しなければならなかった。将校は、警察の目を恐れるセーを数日のあいだ自宅にかくまってやった。セーは、王殺しの犯人ワチャラチャイを殺す決心をしていた。ただ、それをやる前に、暗殺失敗にそなえて、一人の将軍に会い、家族の後事を託したいと申し出たという。

その将軍が証人に喚問され、将校の話を裏づけるような証言をした。ただし、彼はナイ・チットやブットの名については、聞いたことがなかった。将軍は無用の暗殺をセーに思いとどまらせ、彼を将校の家へ送り返した。セーは、そこに一カ月隠れていたが、そのあと某警察幹部の妾宅へ運転手として雇われていった。その後はどうなったかわからない。どうやら新しい雇い主に殺されたらしいが、その警察幹部も行方不明であった。セーが、なんらかの方法で消された疑いが濃くなってきたが、プラピニットの躍起の捜査もセーを探し当てることはでき

なかった。

　セーの性格や犯歴から見て、彼の打明け話が信を置くにたるとは思えないが、不審な点は二つだけあった。その一つは、宮殿内部のことをなにも知らないセーが、王の死後二十四時間以内にナイ・チットとブットの名を知っていことだ。それに、もし彼が当時の町のうわさを聞いて作り話を発明したり、だれかに教えられてお話しをしゃべっていたのなら、自由タイ運動の元戦士などと言わずにチャリューに雇われたと言ったはずである。そのチャリューは、もちろん、殺し屋など聞いたこともないと、はっきり否定した。

　法の前には人はすべて平等であるという原則は、この国王暗殺事件の裁判の中にも生きていた。殺し屋セーのようなあいまいな人物のつぎに検察側第九十六号証人として証言を求められたのは、ほかでもない新王プミポンであった。

　国王が殺人事件の証人に立つなどということは、まず先例がないだろう。それが「生命の王」であれば、なおさらである。だが国民は、実際にドラマチックな国王証言の場面を目撃することはできなかった。プミポンは第二十四号法廷には姿を見せず、かわって裁判官、検事、弁護人、被告のほうが王宮へ出かけていて、五人の枢密顧問官立会いのもとに国王の証言を拝聴したのである。

　国王は、二日間にわたって、当時の模様を話した。内容は、私が「アナンダの生と死」の八章に書いた事実ほぼそのままである。兄王の遺体の位置は、他の証人の描写と符合していた。女官長ら第一発見者たちが、掛け蒲団のそとにまっすぐに伸びていたというアナンダの右手の位置について、プミポンが「私は記憶がない」と述べた点が違っていたくらいのものである。以下、宮廷用語を取り除いて王の証言の概要を紹介すると、

〈外国にいるときは、アナンダ王は、お祭りのときなど、おもちゃのピストルで遊んでことがある。バンコクに帰ってからは、プリディが彼を招待したチョンブリの自由タイ運動解散式で数挺のほんものの銃をもらい。射撃を楽しんでいた。取扱い法を教えたのはワチャラチャイ大尉である。王に銃を贈った人たちがワチャラチャイを教師として推薦したので、王は自分の意志で習うことにきめられた。射撃練習はバロンピマン宮の裏庭で行われ、私も参加した。ピストルもライフルも使った。アメリカ陸軍の45口径ピストルもあった。練習のあと、ボーイたちが薬莢を拾い集めていたようだ。その中にはナイ・チットやブットもいた。練習のあと、銃の手入れはワチャラチャイに任せた。国王は眼鏡をかけていられたが、射撃のときも必ずかけていたかどうかは記憶にない。事件の日、ナイ・チットは、王の寝室の正確にどこで薬莢を拾ったか覚えていなかった。

　チャリューが、車をバロンピマン宮殿の玄関に乗りつけた話は聞いた。王がそのことにどんな気持を持たれたかは知らない。あるとき、母が自動車を必要とされたことがあったが、一台は修理中で、残る一台はチャリューがプリディに貸したことがわかった。そのため、母は、クオン・アバイオンの車を借りなければならなかった。王は、チャリューの不敬を口に出されたことはなかったが、私は、彼が王の不興を蒙って職を辞したという印象を持っている。

　国王のホアヒンの休暇にはプリディが同行した。そこで、プリディは、王の許可を得ずに、国王専用のジープを使ったことがある。プリディは、また、王の許可なしに自由タイ運動の元戦士たちのパーティーを開いた。非常にやかましいパーティーだった。

　あるときプリディは国王のためにとピアノを一台、宮殿に運ばせた。私たちは、プリディが自分のピアノを奉呈したものと思っていたが、あとでそれは王室庁のものだとわかった。国王とプリディが、摂政任命について対立したことは知らない。しかし、チャリューの後任を早く決めるようという国王の意志にそむいてプリディがぐずぐずしていたので、国王が亡くなった日にチャリューはまだ公式には秘書の地位にいたわけである。

　スイスへ帰る途中の英米両国訪問は、国王のご意向でもあった。十三日の出発がま近かだったので、国王はとても急いでおられた。

　国王と私（プミポン）と王母殿下のあいだには、不和はなかった。国王が心配ごとを洩らされたこともなかった。ただ、バンコクの暑さをこぼしておられたことはあった。

　公務についてご不満があったのかどうか、少くとも私は聞いていない。私生活の上には、なにもなかったはずだ。国王は物静かな人柄で、銃を扱うときには非常に慎

重であった。私にも、ピストルは弾倉をよく確認するようにと注意されたほどだ。

　国王と私は、政治を話題にしたことはなかった。ピブンに会いたいというご意向は聞いたことがない。ボーイ長のチャンは実に忠実な男で、いつも私たちの身の上を心配していた。あまり彼と言葉をかわしたわけではないが、よく気をつけなさいという意味のことを何度か言っていた。私は健康に注意せよという意味だと解釈した。私たちがタイに帰ってから、チャンは繰返し同じことを私に忠告していたように思う〉

　反対訊問に答えて、プミポン王は、兄アナンダの死の直後について物語った。変事に気づいたのは、だれかが廊下を走る足音を聞いたときだった、ということについては――

〈足音を聞く前には、なにも異常なことがなかった。私は寝室と子供部屋のあいだを何回か往復していたときだったが、人の気配もなかったと思う。走る足音を聞いても、はじめのうちは別に気にもとめなかった。それから叫び声と泣き声がした。一人の声だった。ドアを開けて駆け出してからは、フロントポーチのところで侍女を見た以外、だれにも会わなかった。国王の書斎のドアが開いていたかどうかは知らない。あのドアは、国王のご就寝中は、ふつう鍵がかかっていた〉

　プミポンの記憶によれば、彼が国王の寝室に入っていったとき、紋帳は左右に開かれていた。国王に45口径ピストルを与えたのはチャンで、それはアナンダのバンコク帰国時だった。死の前の数日間、国王は射撃練習をされなかった。

　プミポン新王の証言はそれだけだった。新事実がいくつか出たが、いずれも重要なので、私は、すでに「アナンダの生と死」の中に書いている。

　この証言のあとまもなく、プミポン国王は再びタイを離れ、シリキット王妃とともにスイスに帰った。検察側の証人で残るはあと三人だけである。その一人は、捜査本部でプラピニットの補佐をしていた刑事だ。彼は、ナイ・チットとブットに自白剤を注射して取調べた結果について証言した。二人とも無罪を主張していた。だが、

刑事は、ナイ・チットがなおもなにかを隠していること、ブットが重要な諸点について記憶を喪失していることを証言した。

　一九五〇年八月には、法廷は、第二十四号法廷を一時休廷し、スイスへ移動した。ハク・ナソンクラもチャリューの娘も、これには同行しなかった。旅費がなかったこともあるが、王母殿下に向ってほんとうの意味の反対訊問などできないことを知っていたからである。で、裁判官、検事、警察関係者だけが行くことになった。安全上の理由で、被告たちもバンコクにとめ置かれた。この証人審理は、スイス政府の同意を得たうえ、ベルンのタイ大使館で行われた。王母殿下は、忠実なナイ・アネクを連れて、毎日、車で臨時法廷に通った。

　法廷がバンコクに戻るまで、証言内容は公表されなかった。裁判官のうち二人がイギリスへ旅行したので、この公表は九月下旬になった。待ちかねた世論は大いに期待したのだが、王母殿下の証言の中には、とりわけセンセーショナルなものはなにもなかった。

　王母殿下の記憶は、ナイ・チットが王様が「ご自害なさいました」と叫んだところまでは、かなりしっかりしていた。だが、あまりにも深い悲哀がいまだに尾を引いているためか（王母殿下は交通事故のためだと説明したが）、それからの話は少しあいまいだった。

　彼女が王の寝室に入ったとき、ベッドのまわりの蚊帳が閉じていたという記憶はあった。部屋が乱された形跡はなかった。のちに、彼女は、アナンダの机の中を探させた。自殺なら遺書があるはずだと思ったからである。アナンダは、タイに帰る前には、空気銃を使っていたことはあった。事件の二日前の六月七日の夕食後、プリディが国王に会いに来たことは覚えている。その席で、プリディは、プラチャーディポク王妃を摂政に推薦し、国王は叔父のランシット王子を望んだ。アナンダは、母に向って、憲法の規定によると摂政を択ぶのは自分の権限だと語ったという。この日の謁見のあとで、神学博士が彼女のもとへ来て「王様のことはもう知らんぞ」というプリディの言葉を告げ口した事実も確認された。そのほか王母殿下が証言したことは――

〈国王と私のあいだには、なに一つトラブルはなかった。停電があるたびに、王は私の部屋を訪れ、異常はな

いかを確認してくれた。一度だけ彼が怒ったのを見たことがある。それは、私が車を命じて、プリディが使用中だとわかったときだった。チャリューは不適任と認めたから解職した。医師一人と何人かの武官も同じように職を解かれた。すべてプリディ派だった。国王がチャリューにシガレットケースを与えたのは、ずっとのちのことで、とくに過失のために解任された者以外にはそうするのがしきたりになっているからと助言されたからだった。事件の数日前、アナンダは、ボーイたちに勲章を磨いておくように命じた。勲章は、ベッドのそばの棚の中にあったが、王の目をさまさないようそっと開けることは可能だった〉

王母殿下の証言は、それだけだった。一見、内容に乏しかったが、あとになってこれが重要なものであることがわかるのだ。

検察側の最後の証人として登場した真打ちは、ほかでもない、この事件の捜査本部長プラピニットだった。彼の証言は一九五〇年十月に始った。

プラピニットは、警察の巡査部長から身を起して警察少将にまで昇進し、一九四七年に引退したと、自分の経歴をまず供述した。現役に復帰したのは、国王暗殺事件についてプリディ政府の捜査に不満だったからである。ピブンのクーデターのあと政権をとった民主党政府に願い出て復帰を許され、今日まで第二十四号法廷に提出された証拠は、すべて彼の指揮下に収集されたものである。

弁護側の反対訊問に答えたプラピニットは、戦時中に彼が日本軍と取引きして財産を築いたといううわさを否定した。彼はまた、証言の最後に、スパ・スワット王子との会見の結果、プリディが戦後のタイ政界安定のために民主党と協力するようになったことについて語った（第二部七章参照）。そのあとプラピニットは、王子がクオン・アバイオンに「プリディと協力しなければタイ王制が危機に陥るから」という理由で、プリディとの提携を承諾させたという話を披露した。（不思議なことに、スパ・スワット王子は、この件について出廷を求められなかった。それに、王子のクオン説得の言葉がたとえ事実だとしても、それは政界の大同団結がなければ国の安定がおぼつかないという意味にも解釈できるのである。

いずれにしても、この証言は単なる伝聞にすぎないのだから、西欧の法廷では証拠として採用されるものでないことは明らかである）。

プラピニットは、証人第百二十四号だった。彼の証言をもって、検察側の立証は、すべて終了した。

十一月には、弁護側の証人審理が始った。裁判の進行に恐れおののいていた三人の被告たちに、やっとのことで口を開く順番がまわってきた。

6

弁護人ハク・ナソンクラは、三人の被告の無罪を証明しなければならないのだが、これは難事中の難事だった。いまさら科学的な実験をやって、警察の実験結果を覆すのは不可能だった。暗殺の真犯人を探し出す手段もない。そのうえ、暗殺自体を否定することもできなかった。臣下の身で、王様が自殺したなどと主張することはできないのである。

また、好むと好まないにかかわらず、彼は、三被告のほかに二人の亡命者、とりわけプリディを弁護しなければならなかった。プリディの有罪と被告とプリディの共謀という二つが合わさったものが検察側の主張の基盤になっているからである。ナソンクラは、まず、その前者から論駁を始めた。プリディが国王に怨恨を抱いていたという検察側の主張は事実無根であるという点から証明を開始したわけである。

弁護側の証人が召喚された。最初は被告第一号、つまりチャリューからだった。チャリューが証人台に移って、長いあいだ彼が占めてきた被告席に一人分の空白ができた。裁判がもっとも重要な山にさしかかったことを、その空席は雄弁に物語っていた。

チャリューは、容疑を完全に否定した。彼は政治信条の上でプリディを支持していただけで、それ以上のなにものでもない。ナイ・チットとの共謀の事実もない。彼をスパイとして使ったこともない。国王暗殺計画を聞いたこともないし、もちろん加担したこともない。

チャリューは、また、彼が解職されたという事実をも否定した。解職される原因になる行為は何一つなかった。不敬の事実があったというのもうそである。たしかに、二、三度だけは、車で宮殿に乗りつけたことがあった。しかし、それは、アナンダ王が自由タイ運動の観閲をした日にジープが転覆したために負傷したからである。国王が彼を宮殿から追放したがっていたなどということは、この法廷で聞いたのがはじめてだ。王の秘書をやめたのは、ジープ事件の傷が悪化したからで、まったく自発的なものだ。辞職したときは、まだ国王の信任を得ていたはずだ。だからこそシガレットケースも頂戴し

たのだ。

国王に忠誠を尽していたことをチャリューは強調した。六月九日に国王の死を聞いたときは、心から悲嘆に暮れたと述べた。彼の証言によると、彼が国王の死を聞いたのは、当日の午後も遅くなってからで、はじめのうちは信じられなかった。そして上院議員に課せられた任務に従って国会へ行き、プミポン王子の王位継承に賛成票を投じたのだ。国会へ行く前に、王宮の衛兵隊長から国王は自殺だと聞いた。翌日、再び王室庁の職員から同じことを聞かされた。国王の自殺の原因について、その二人の説明は一致していた。すなわち「王様は決断力のあるおかただったから」というのである。

「もっとくわしく説明してください」と、ナソンクラが突っ込んだ。

チャリューは、口ごもった。

「秘密法廷にしていただけませんか。王室のご尊厳を傷つけることにもなりかねませんから」

裁判長が合意し、傍聴人と新聞記者は、第二十四号法廷から追い出された。空っぽになった法廷で、チャリューは証言を続けた。

王室庁の職員の話によると、国王と王母殿下のあいだに、なにか不和の原因になることがあったらしい。アナンダは、それに関して心痛のあまり、われとわが生命を断ったということだ。だが、チャリュー自身は、実際にいさかいを目撃したことはなかった。

再び法廷は公開された。チャリューの証言は続いた。王の死の翌日から、彼もまた暗殺のうわさを耳にし始めた。一説によると、チャリュー自身も王室の車を盗んで、すでに外国へ亡命したことになっていた。まもなくワチャラチャイとプリディを結びつけようという意図を持った流言がとびかい始めたので、政治がいやになったチャリューは、自ら上院議員の地位を退いた。彼の推測では、こうしたうわさは、反対党である民主党によって故意に流されたものらしい。逮捕されてからは、もっとも重い足かせをかけられ、また、きつい手錠のために何度も傷を負ったが、一度も治療をしてもらえなかった。一晩じゅう十分おきに明るいライトをまともに顔に浴びせられたため、発狂しそうな状態にまで追い込まれた。

チャリューの法廷での証言は、彼が最初に警察の訊問に答えた内容と寸分たがわなかった。例の自白剤の注射

のために二十四時間も意識を失ったナイ・チットやブットに関しても、これは同様のはずだ、と、チャリューは答えた。

　チャリューの証言は六日間続いた。それから反対訊問が始った。

　主席検事が立上った。

「被告の証言によると、国王の個人秘書という地位は、非常に重要かつ誇るべきものであるということだが、被告は、ほかに数社の会社社長も兼ね、経済的に安定した生活を享受している。王宮での仕事を退いたのは、よほど重大な理由があったからではないか」

「理由は、すでに申し上げました。健康上の理由で勤務ができなくなったからです」

「しかし、被告は退職後すぐにプリディの招きを受けて上院議員になったのではなかったのか」

「議員の仕事は、さほど疲れないし、働く時間も短くてすみます。政治をやってみたいという気持もありましたから」

　検事は、そんな説明ではだめだというふうに手を振った。

「会社役員のほうはそのままで、上院議員になったのですね。被告が近く下院にうって出ようとしていた証拠もあります。とても健康を害していた人の行為とは思えません。それに、被告が海軍少将の自宅でテーという材木商に目撃され、のちに何人か並んだ中からテーが被告を指し当てたという事実をどう説明するんですか」

「あのときは、警察は私だけに緑色の服を着せたのです。テーがすぐに識別できたのはそのためです」

「テーのことはまあよろしい。被告は、海軍少将の家へは行ったことがないと証言している。しかし、少将自身も女中も、被告が確かに来たと述べています」

「私は、ほんとうに行ったことがありません」

「それでは、アーチット元摂政の葬儀のときの将校はどうです。被告が彼に向って、王様は十三日には、ご出発にならないと告げたという話はうそですか」

「あのときは、王様に関する話は、いっさい出ませんでした」

「その将校とは古い友人ではありませんか。彼は、被告の自宅の棟上げに招かれたほどの親友です。そんな男が、なぜあなたのことに関してうそをつくのです？　十三日に国王はご出発になるはずがないと言うのさえ悪いのに、被告は、そんなことを口にした覚えはないとシラをきる。被告は、罪を免れるために否定しているのではありませんか」

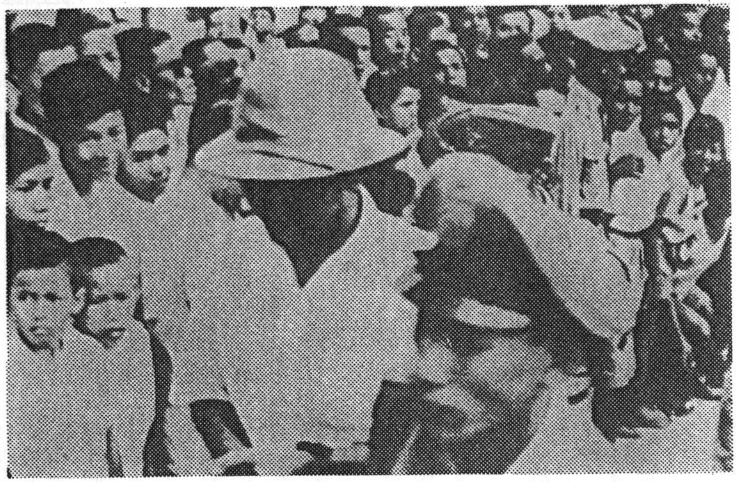
「王様が十三日にはご出発にならないなどという話はいっさい出なかったと、すでに申し上げました」

「被告は、検察官の質問を回避しているようです。しかたがありません。別のことを聞きましょう。被告はナイ・チットと深く志を通じていたが、ナイ・チットはスパ・スワット王子の遠縁に当り、そのスパ・スワット王子はプリディと政治的な取引きをしたことが知られています。取引きの内容を知っていますか」

「取引きがあったなどということは聞いたことがありません。王子は政界の大同団結をはかられただけと承っています」

　チャリューの証言は、何度もプリディに言及した。それを要約すると、つぎのようになる。

「私はプリディの側近ではなかったが、プリディを尊敬はしていた。子供のときからの知り合いで、アユタヤで同じ学校にも通った。一九三二年の革命には、私も文民



公判のあと，裁判所から出てきたチャリュー

の一人として参加した。抗日運動で、プリディが身を賭して祖国のために働いているのを見て、非常に心をうたれた。彼の忠誠心を疑わせるような事実を、私は関知しない。プリディは、王室に対して、非常に尊敬の念があつかった。ランシット王子を含む政治犯人の釈放を実行したのは彼だし、プラチャーディポク王の退位後そこなわれていた王の名誉と遺産を回復したのも彼だった。プリディは、また、王族に政治活動の自由を回復した。ホアヒンでの休日では、王とプリディの仲はきわめてよかった。ワチャラチャイのことは、ほとんど知らない。私は、国王暗殺とは絶対に関係がないし、また国王暗殺という行為を憎むものである」

裁判官は、こうした証言を、眉ひとつ動かさずに聞いていた。チャリューの証言がどれほどの心証を与えたかは疑問だった。無実と王室への忠誠を誓ったチャリューは、再び被告席に戻った。

ナイ・チットが証人台に立ったのは、その年のクリスマス前であった。

背の高さはチャリューと同じくらいだが、ナイ・チットはずっと細面（おもて）だった。チャリューの言葉遣いがタフな経営者のそれを思わせたのに反して、ナイチットの証言には宮廷用語の響きが残っていた。しかし、生れや言葉や人物の外見が法廷ではなんの役にも立たないのはいうまでもない。現実から抽出される証拠、過去の行動が法廷に投影するものだけが問題なのである。

ナイ・チットの場合、有罪性は、チャリューと親密だったという状況証拠による以外に、材木商テーが立ち聞きしたという会話の内容によっても支持されていた。そのほか、彼は、殺し屋セーに国王を指さし示したし、侍女や同僚のボーイに国王が十三日には出発しないという確信をしゃべっている。

これに対するナイ・チットの証言は、始めから終りまで否定で一貫していた。王様には心から忠誠を誓っていたと彼は断言した。子供のときのアナンダとはいっしょに遊んだほどなのだ。祖父や父と同じように、彼も半生を王室のために尽くしてきた。王様を殺すなどという恐ろしいことをして、いったい、なんのとくになるというのか。

「買収されたからだ」と検事は応じた。

そんなばかなことは絶対にない、と、ナイ・チットは応酬した。暗殺者を王宮に引き入れ、実行後に逃してやるなどということも絶対にしなかった。銃声がして、すぐに国王の寝室へ駆け込んだのだが、だれ一人見なかった。薬莢を拾った正確な場所について供述が食い違っているのは、彼自身もショックで混乱していたからだ。王の死の三日後に、マットレスの中に埋っていた銃弾（検察側は、彼が自殺偽装のためにそこに置いたと主張している）を見つけたのは、それまでマットレスを調べてみたことがなかったからだ……。

ナイ・チットの嫌疑は、それだけではない。きわめて重要な点が、まだ二つ残っているのである。一つは、勤務時間外だというのに、王の死の直前にバロンピマン宮殿に来たこと。もう一つは、王母殿下に向って「王様が自害なさいました」と告げたことだ。王は確かに死んではいたが、彼がそれを自殺だと判断する材料はなかったはずではないか。

なぜ、あの朝に宮殿へ行ったかについて、ナイ・チットは長々と説明した。午前八時少し前、彼は大ブランコ（バンコクの中心にある赤い鳥居状の建造物で、仏教の儀式のときに使用される）の近くの宝石屋へ行った。連れて行ってくれたのは、王室庁の、ナイ・チットにとっては上官に当る男だった。王母殿下の命令で、王の外遊中に勲章を入れておく箱を作らせるためである。そのサンプルとして、彼は、注文の品よりは小さ目のプミポン用の箱を持っていった。王室庁の役人は、彼を宝石屋に残して去り、そのあとで彼は勲章の正確な大きさを測るためにバロンピマン宮へ行き、更衣室のたんすの中にある勲章に当ってみようとしたのだ。午前九時ごろ、更衣室の入口でブットに会った。王様は便所へおいでになったが、また寝室に戻られたと聞いて、王様の目をさますよりはと、そとで待つことにした。それが彼とブットがいっしょにいた理由である。

タイ人の勤労態度を知らない人にとっては、休日に出動したことがなぜこんなに大問題になるかを理解できないことだろう。タイ人というのは、必要なとき以外には働かないものだからである。ナイ・チットは、だから、なぜ彼がそのような〝異常〟な行動に出たのかを懸命に弁明した。王室庁の役人が、その日の朝に宝石屋と約束をしていたし、それに国王一行の出発がさし迫っていたからだ。検察側も論駁した。プミポン用の箱がすでにあ

るのだから、正確な大きさをわざわざ知る必要はなかったのではないか。ブットといっしょに待っていたのもおかしい。宮殿の中で静かに動きまわることに慣れていた彼は、王の目をさまさないように勲章を取出すことができたはずではないか。

　しかし、検察側がなににもましてナイ・チットをきびしく追及したのは、彼が王母殿下に向って叫んだ言葉だった。事件の瞬間には、被告はピストルがあるのを見なかったと証言している。ピストルがあったのを知らずに、どうして自害だと断定できたのか。

　ナイ・チットは、それまでにもたびたび主張していたことを繰返した。銃声がして、それが王の寝室からだと直感するまでには一秒か二秒の時間しかなかった。更衣室に駆け込むと、寝室とのあいだのドアが開いていたので手が見えた。王はベッドの中で、蚊帳は閉じられ、王様は寝ているように見えた。不審に思って爪先立ちでベッドに近づくと、王の頭や肩、枕に血があふれていた。それで一目散に王母殿下に知らせに行ったのだ。

「被告は銃声を聞いた。それから王様が血に染ってベッドに仰臥しているのを見た。それだけなのだな」

「はい」

「王様が自殺するなどという話を、これまでに聞いたことがあるか」

「いいえ」

「それでは、ピストルも見なかったのに、なぜ自殺だという断定をしたのか。はじめから王母殿下に自殺を思い込ませようと考えていたからではないのか」

「とにかく、たまげていました。自分の耳で銃声を聞いたのです。王様がベッドの横のキャビネットにピストルを入れておられることは知っていました。そのうえ、この目で血を見たのです。部屋の中には、ほかにだれ一人いませんでした。だれかが王様を殺すなどということは、考えてみたこともありません。ご自害としか思えなかったのです」

　ナイ・チットのこの説明が、どれほど裁判官に心証を与えたかは知る由もない。とにかく、疲れはてたナイ・チットは被告席に戻り、彼の運命は裁判官たちの手にゆだねられることになった。

　ブットの証言が始ったのは、年が改って一九五一年になってからである。悲しげなおどおどした目は、彼が愚鈍なほどの忠義者であることを物語っていた。

　ブットは、自分の出生から物語り始めた。侍女だった彼の母は、王宮の中で彼を生んだのである。アナンダには子供のときから仕え、一九三八年の一時ご帰国のときには、いっしょに釣りをしたり、ドライブのお供をしたりした。スイスへのご帰還に当っては、かたじけなくも随行を命じられ、王母殿下は仕度金まで下さった。一九三八年のご帰国のとき、ついで最後のご帰国のときとお仕えしているあいだに、王様がすっかり好きになってしまいました。こう証言しながら、ブットは証人席で泣き出してしまった。

　拘置所での取扱いはどうか、と、ナソンクラは質問した。殴られ、蹴られ、鎖につながれ、薬も飲まされましたとブットは答えた。警察は、だれが（つまり暗殺者が）国王の寝室に入ったのかと繰返し聞き、だれも入らなかったと答えるたびに彼を殴った。ナイ・チットと同じように、彼も自白剤を注射されたときのことを物語った。薬がきいているあいだになにをしゃべったか記憶はないが、すべてテープレコーダーにとってあるのだと聞かされた。

　こうした証言は、聞く人の胸をうちはしたが、事件の事実関係を左右するものではなかった。事件の日の朝のことについて、彼は、すでに私が「アナンダの生と死」の八章で叙述した内容を証言した。

　ブットは、その朝午前七時に勤務につき、午前八時三十分にアナンダが更衣室の中に黙って立っているのを見、オレンジジュースを持って行こうとして、王の手ぶりで追い出されたのだ。

　銃声が聞えた瞬間、ブットは腰を抜かしてしまって、ナイ・チットが更衣室に首を突っ込むのをぼんやりと見ていた。（これは、すぐに更衣室に駆け込んだというナイ・チットの証言と微妙に食い違っている）。ナイ・チットが駆け出してきたので、ブットは「どうしたんだ」と聞いた。ナイ・チットは、ものも言わずに王母殿下の部屋の方へ走って行った。彼もあわててあとを追った。それから更衣室へ引き返そうとして裏廊下でプミポンに会い、医者を呼ぶように命じられたのである。

　ブットの有罪性は、ナイ・チットのそれと緊密に連繋していた。二人はいっしょにすわっていた。だからナイ・チットが有罪なら、ブットも有罪でなければならな

い。そのうえ、アナンダの書斎のドアは、のちに鍵がかかっていなかったことがわかった。当番のブットは、前夜のうちに鍵をかけておかなくてはならなかったのだ——暗殺者を侵入させるという目的がないかぎりは。

ブットは、国王暗殺を知っていたことも、それに加担していたことも、完全に否認した。そして、二つの奇妙な証言をした。

その一つは、死の前夜、アナンダが、便所で数枚の紙を焼いたというのだ。彼は、それが王に宛てた個人的な手紙で、出発に先立って王がそれを処分したのだろうと思っていた。もう一つは、王が死んだ日である。医者が来て国王の遺体を清めているとき、それを手伝っていたブットは、隣りの書斎の中から王母殿下とプミポン王子の話し声がするのを聞いた。ソファにすわった王母殿下は、何枚かの紙をつかんで、いらだたしげに足踏みし、プミポンは書斎の中を歩きまわっていた。ブットは、王母殿下が「あなたがそうしたいなら、好きなようになさいよ」と、プミポンをなじる声を聞いた。

このことを、ブットは捜査本部の取調べではしゃべらなかった。なぜ、いままで黙っていたのかと聞かれて彼の説明は——手紙を焼いたこと、また王がオレンジジュースを持って行った彼に言葉ひとつかけずに追い出す身ぶりをしたことから自分は王が自殺したと直感した。しかし、王室の名誉とアナンダの記憶を傷つけてはいけないと思って黙っていることにした、というのだった。

検察側は追及の手をゆるめなかった。そんなことは、自殺説をもっともらしく見せるために、ブットがあとから考えついたことではないのか。それを黙っていた事実こそ彼の有罪の証拠ではないのか、と。

ブットは、国王の死の直前に沐浴をした事実を認めた。彼は、もう一度、調査委員会で証言したあとにも沐浴していることがわかった。検事は、この事実をとりあげて詰問した。ブットは、已が罪障を消すために二度目の沐浴を受けたのではないか。

三人の被告の証言に続いて、弁護側の証人三十三人が登場した。

証人の多くは、消極的な証言しか与えることができなかった。見なかった、聞かなかった、知らなかったという話ばかりだったのである。

プリディの妻もその一人であった。彼女の証言に、世間は異常な好奇心を示したのだが、彼女の供述は、夫が王家に対して純粋な敬意を抱いていたという点を除いては、夫の政治的な言動についてはなにも知らないということに終始した。プリディ夫人になりかわって、何人ものプリディの友人が自分たちの職や地位を賭してプリディのために証言した。プリディが信頼できる人物であったこと、王族のために尽力したこと、国務のために寝る間も惜しんで働いたこと……。もちろん、プリディも完全な人間ではなかった。ある証人は、プリディが劇務の重圧に押されて、ときにはカンシャク玉を破裂させたと証言した。御内帑部の長官は、プリディがかつて一度もアナンダによる政治への容喙の事実を口にしたことがなかったと供述した。プリディ派の国会議員は、アナンダが死んだ日から急に反プリディ感情が政界に高まり、その日の院内で、彼は民主党議員に胸ぐらをつかまれたと証言した。

法廷にすわっているのは三人の被告だけだが、実際に裁かれている中心人物は、いうまでもなくプリディだった。だが、そのほかにも、亡命という霧に隠れた〝被告〟がもう一人いる。それは、この血なまぐさい犯罪の実行者、国王の暗殺者だった。その人物——ワチャラチャイについては、くわしいことはほとんどわかっていなかった。事件発生と同時刻ごろにワチャラチャイが王宮の近くにいるのを見たという証人は何人かいたが、多くはかなりの距離から彼らしい人物を見たという話にとどまっていた。しかし、三月に入ると、若く美しいチャオム・ワチャラチャイ夫人が証言に立ち、満員の傍聴席が耳をそばだてる前で、彼女の夫であり三人の子の父親であるワチャラチャイについての証言を始めた。

美しい声のチャオム夫人は、りっぱな教育を受けた、かしこい女だった。彼女の話によると、ワチャラチャイは侍従武官をやめたがっていた。給料があまりにも安かったからで、そのため三カ月以上の病気欠勤をした場合には自動的に転属させられるという内規を利用しようと仮病をつかった。国王が死んだ日の午前八時から八時半まで、ワチャラチャイは、バンガピの郊外にある家で、妻といっしょにいた。前夜、彼女が流産しそうになる騒ぎがあり、医者が来るのを待っていたのだ。午前九時ごろに車が来たので、ワチャラチャイは妻の両親に妻の様子を知らせに行った。買い物をして自宅に帰ったのは午

前十一時ごろだった。そのときのワチャラチャイは、しょげかえっていた。国王が急死したというニュースを聞いたからである。それを聞いて、彼女自身も泣いた。

検察側は、夫人の証言に一片の同情も示さなかった。彼女の両親の家はグランド・パレスのすぐそばではないか。そのうえ、運転手は、午前九時ごろに主人を王宮の近くへ送り届けたと証言している。夫人は、夫をかばおうとしているのではないか。たとえワチャラチャイが彼女の実家を訪れたとしても、その前にバロンピマン宮殿に潜入して一仕事すませる時間は十分にある。それに、彼の袖口についていた血をどう説明するのか？

弁護側は、最初に事件を捜査した警察長官を続いて証人に呼んだ。彼は、プリディによって長官の地位を与えられたことを認めはしたが、事件直後の見解と変らず、国王は暗殺ではないと主張した。プリディに圧力をかけられて強引に事故説を押し通したのではないかという質問にも、そんな圧力はなかったと断言した。彼を補佐した刑事の一人も出廷して、ナイ・チットがはじめてピストルを持ってきたとき、銃身の中にはまだ煙がただよっていたようだったと語った。しかし、反対訊問に答えた彼は、実際にピストルを手にとって観察したわけでなく、従って、銃身のにおいをかいでみて、発射されてから数日たっていると判断した警部の観察を覆すことはできないと認めた。

別の弁護側証人二人についても、ちょっと触れておこう。一人は、プリディ、ワチャラチャイ、チャリュー、ナイ・チットに共同謀議の場所を提供した例の海軍少将の夫人である。彼女は、一同の話を盗み聞きしたと称する材木商テーの供述はうそだと証言した。テーがいた部屋というのは、夫人の母の居室で、テーは入れないはずだからである。また、彼女はテーという男が信用の置けない人物であると言った。もう一人の証人——殺し屋セーの雇い主だといわれる自由タイ運動の元戦士は、セーなどという男とそんな契約をかわした覚えはないと、きっぱり否定した。

一九五一年五月九日に、弁護側の証人審理は終了した。法廷は、二年半のあいだに百六十一人の証人の供述を聞いたわけである。

残るは論告と最終弁論だけだった。まず検察側が立って、三人の被告はもちろん、プリディとワチャラチャイ

に対しても有罪判決を求めた。弁護側は、これに対して全員の無罪を主張した。そして、弁護人ナソンクラは、同時にショッキングな特殊作戦に出た。本件の公訴無効を申し立てたのである。

検察側は、公訴無効などという申請は、裁判の冒頭にやらなければ意味がないと抗弁した。裁判官は、検察側の抗議をしりぞけ、ナソンクラに趣旨弁明を求めた。

ナソンクラの論旨はこうである。一九四七年十一月のクーデターによってプリディ＝ダムロン政権を打倒した現政府には合法性がない。従って合法性のない政府が発する命令は、すべて合法的とは認められない。プラピニットの任命も、捜査本部による再調査の権限も、調査そのもの（実際、この捜査には、警察関係だけでなく、ときには政治家も参加していた）も、三人の被告の拘留も、裁判そのものも認められないというのである。ゆえに裁判は直ちに停止され、被告は釈放されなければならない。ナソンクラは、そう主張した。

この点について、裁判官は態度を保留した。こうして国王暗殺事件の公判は結審し、裁判官は判決言い渡しをひかえて合議に入った。事実、意見、推論、憶測……そんなものの厖大な集積が、第二十四号法廷の中にアナンダ国王を不死鳥のように蘇らせていた。裁判官たちは、山ほどの情報に取り組んで、これから四カ月間を考え抜こうというわけである。そのあいだも、法廷のそとの世界は、三人のあわれな被告の身のうえなど知らぬげに、時の進みにつれて世相の波を流動させていた。

そのころまで、世界の人々がシャムという言葉で連想するのは、ネコか二心同体の双生児くらいのものだった。ところが、百年も昔のシャムが、急に脚光を浴びることになったのだ。

この年の四月から、ブロードウェーでは、ミュージカルコメディ『王様と私』が大当りをとっていた。まもなく、その映画版は、世界じゅうに観客をひろめることになる。アメリカ世論はトルーマンのマッカーサー解任に反撥し、ソ連がまだ追いつけないでいる原子爆弾の貯蔵に余念がなかった。イギリスは、イランの石油を国有化したモサデグに手を焼き、ジョージ六世の肺手術に胸を痛めていた。世界はスターリンに楯ついたチトーに、朝鮮半島に燃えさかる戦火に、息をのんでいた。そして、そんな世界に流れたのは、アナンダの死の暗い謎ではな

く、いにしえのモンクット王の豪奢な宮廷生活を歌った『王様と私』の甘いメロディだった。

国王暗殺事件裁判のクライマックスを待つバンコクにも、突然、新しい政治ドラマが幕を開いた。

皮肉なことだが、プリディが力を注いでいた工事計画が、ピブン政権の下で進んでいた。メナム河口を浚渫して大型船を首都バンコクまで遡航させようという計画の目鼻がついたのである。アメリカが浚渫船〈マンハッタン〉を供与し、その引渡し式が一九五一年六月二十九日に、グランド・パレスに近い王室用桟橋の近くで行われた。

工事関係者や関係官庁代表、アメリカ政府代表やその家族たちが居並び、まさに引渡し式が始まろうとしていたとき、一人の若い海軍将校が進み出てピブン首相の脇腹にピストルを突きつけ、待たせてあったランチに拉致してしまった。そのあいだ、海兵隊の一隊は、儀式の出席者たちを取り巻いた。紳士貴顕の多くは、あわてて土の上に伏せたので、燕尾服やパリモードのドレスは泥だらけになってしまった。

反撃のいとまを与えない電撃作戦だった。ピブンは、川の中流に碇泊中の戦艦〈シーアユタヤ〉まで連行され、船室に閉じ込められた。海軍は、一九四九年二月のプリディによるクーデター失敗いらい満を持していたのである。ピブンを人質に取りさえすれば、政権奪取は無血のうちに成功するだろうという計算だった。

しかし、このときもまた、海軍は、有力指導者を全員逮捕し通信手段を押えるというクーデターの古典的手法を忘れていた。パオ麾下の軍警組織、陸軍、空軍は直ちに行動を開始した。彼らは、〈シーアユタヤ〉の下流の跳橋チャクリ記念橋を閉鎖し、戦艦と海軍基地やタイ海軍主力との連絡を絶った。川沿いの地帯をはじめバンコク各地で市街戦が行われ、空軍はピブンを釈放しなければ〈シーアユタヤ〉の爆撃を開始するぞと海軍をおどした。あくる日には、驚いたことに、空軍はその脅迫を実行し、実際に爆撃を始めた。〈シーアユタヤ〉は、身動きができないままに撃沈されたが、ピブンは騒ぎのあいだを縫って無事に救出された。彼は、暗殺の計画を、これで三度もかわしたわけである。

タイ王室史の編纂者は、このことを「ピブン元帥は、神意によってタイの運命を託されたごときである」と書いている。だが、単に悪運が強かったというほうがより正確なようである。とにかく、その日の夕方までには、ピブンは首相官邸に戻り、三十六時間続いた叛乱は終熄した。市民にも死者百三人を含む六百三人の死傷者が出た、はげしい叛乱であった。軍関係者の死傷者数は、ついに発表されなかった。

このクーデター未遂事件にもプリディが関係しているらしいといううわさは流れたが、証拠があるわけではない。いずれにしても海軍上層部が追放され、パオの警察力が一段と強化されるに及んで、当面ピブンを倒す希望は失われてしまった。しかし、もし裁判でプリディが無罪を宣告されれば、プリディ帰還の可能性は復活することになるのだ。それはプリディ派を力づけ、日和見主義者に道をひらき、プリディの政敵を落胆させるはずである。時代が変りさえすれば、プリディがバンコクに凱旋する希望も生れるわけである。

だが、もしプリディが有罪ときまれば、首相の身でありながら国王を弑した罪名は永遠に残る。遠い中国で判決のニュースを待つプリディは、あるいはチャリュー、ナイ・チット、ブットの立場に羨望のまなざしを送ることがあったかもしれない。有罪ときまれば、彼らは直ちに断罪されるが、プリディには長い長い亡命生活を送りながら死を待つ以外に方法はないのである。

一九五一年九月二十一日、木曜日。かくして判決公判は開廷した。

7

第二十四号法廷に通じる道という道は、朝早くから大混乱に陥っていた。自動車、人力車、バス、市電……それに加えて徒歩でつめかける無数の人々がいた。五十人以上の警官が、法廷の内外で警備についた。法廷に入りきれない人は、その外に群って、スピーカーの中継を聞いた。ものすごい暑さ、そのうえ長時間の公判だが、好奇心に駆られた連中は、そんなものをものともせずに立ちつくしていた。

法廷の中でも、全員が起立していた。立ったまま、彼らは午前九時から午後二時まで、裁判官が交替で読み上げる判決文に聞き入った。チャリューは、弁護人でもあるわが娘とほとんど肩を触れ合わんばかりにして立ち、ひとことも聞きもらすまいとしていた。

「仏暦二四九二年九月二十七日、本刑事法廷は、国王陛下の名によって判決を下す……」

朗読が始った。

判決文は五万語に及んだ。「タイ国チャクリ王朝第八代に当るアナンダ・マヒドン陛下が銃弾を受けて薨去され、国民をしてひとしく悲嘆の淵に陥れた重大事件にかんがみ、本法廷はその重要性において比類を見ず、かつまたきわめて複雑なる証拠、心証を慎重に考慮しつつ、本判決を余儀なからしめた本件犯行に即応するタイ国法制史上未曽有の熟慮を重ねおりたるところ……」という調子だった。

訴因一つ一つが改めて読み上げられ、起訴内容の要約がそれに続いた。弁護側は記載の訴因を完全に否認し、のみならず本件公訴はプリディ、ワチャラチャイ、チャリューをおとし入れる政治的陥穽であり、ナイ・チットとブットは「政治に無関係の者なるにかかわらず、この政治的謀略に巻き込まれたるものとの主張」を貫いてきた、とされていた。

証拠段階の要約は、アナンダの生涯の描写に始ってバンコクへの帰還に及び「国王陛下のきわめて高潔な資質は、その民主主義への情熱、静かな威厳と慈悲とあいまって国民すべての尊崇するところ」であり、やがて彼の病気、事件の日の銃声で始った顛末、プラピニットによる綿密な捜査へと判決は進んでいった。

ピブン政権下の法廷が違法であるという弁護側の公訴無効申し立てにこたえるため、政治哲学も引用され、申請は却下された。「いかなる国も、政府なくしては存在しえないことは理の当然である。クーデターの成功後に成立した政府がことごとく違法なりとすれば、一国の合法政府の定義は甚しく困難なものになるからである」というのがその理由だった。

続いて、判決は被疑事件の認定へと進んだ。国王の死は暗殺か自殺か。もし前者だとすれば、被告との事実関係はどうか。

検察側は、プリディとワチャラチャイを主犯扱いしていたが、判決はそれをしりぞけた。二人は起訴されていず、従って弁護することも不可能なのだから、本件事実に直接関係のある証拠にかぎって審議の対象にされるべきである、という理由だった。

プリディの容疑については裁くことができないという決定は、たしかに正論だった。しかし、罪の認定しだいによっては、事実上プリディを裁くことはできるわけである。国王の死が自殺ないしはプリディの関与しない暗殺であれば、彼の無罪は証明される。しかし、その逆なら、プリディの名は罪を着せられることになるからである。

そのアナンダの死因へと判決は進んでいった。宮殿内部の事情に通じるものであれば、さほどの危険を感じることなしに自由に宮殿に出入りすることができる。この段階では、法廷は、自殺、他殺ともに同等の可能性を持ちうるとしていた。そのどちらかをきめるのは、科学的証拠の役目である。

亜硝酸塩テストによって、ピストルは国王の死の少くとも五日前に発射されていたことが判明した旨を、判決は注意深く要約していた。法廷は、テストに対する反論を認め、またテストが比較的新しい手法であるため、その結果を決定的なものとして採用しがたいことを認めながらも、慎重考慮を要する重要データであるという結論を出した。

銃身の錆については、確かに異常であることを認めた。ピストルが数ヵ月も使用されなかったこと。掃除の完全性に疑問があること、あるいは湿気によって錆の量に差があることなどから、最終的な態度を保留しながら

も、亜硝酸塩テストと同様に考慮対象になりうることを認めた。

　つぎはナイ・チットが国王のベッドのそばで拾ったと自供している薬莢とマットレスの中から彼が発見した銃弾である。その両者がある時期に45口径ピストルから発射された同一弾の弾頭と薬莢であることを弁護側は論駁しなかった。だが、問題は、それらが自殺を装うためのものかどうかという点である。偽装のための時間は十分にあった。法廷は、また、頭蓋骨を貫通したのちにも銃弾が原形のままでありうるという専門家の意見を不採用と決定した。それにかわって、国王に近似した状態の遺体の頭蓋骨に対して行われた医師のテスト結果を採用した。「人間の頭蓋骨にたとえ相当な個人差の存することを考慮に入れても、銃弾が一枚の紙を貫通したのと同様の状態にあることは信じがたい」というのが理由だった。つまり、マットレスの銃弾、従って薬莢も、国王に向って発射されたものとは認めがたいということになったわけである。

　アナンダの脈拍が約三十秒間継続していたにもかかわらず、法廷はアナンダの死が即死であると認定した。では、彼はなぜ両手を両脇に伸し、眠るがごとき姿勢をとっていたのか。死後痙攣が起ったなら、死の瞬間に動かしていた筋肉は、そのままの状態で固定されていなければならない。しかし、基底核が破壊された場合には痙攣は起りえない。この点については、法廷は疑問を残していた。検察側証人が、法廷において頭蓋骨に通してみせたガラス管は、基底核のごく近くを通過しながらも、それからはずれていた。しかも、それが弾道と完全に一致しているかどうかは疑問である。そのうえ、ガラス管は直径六ミリだったが、45口径のピストル弾は十一ミリの直径を持っているのだ。

　死後痙攣には疑問ありとしながらも、裁判官たちは、医学者、弾道学の専門家、警官などが証言した常識を重視していた。その常識によれば、仰臥しながら自殺した場合には、自殺者の腕（ないしは両腕）は、胸のあたりに落ち、ピストルは首のあたりにあるはずだというのである。

　こうした科学的証拠に、もう一度、改めて一括評価が下された。亜硝酸塩反応、錆の量、現場で発見されたといわれる原形のままの銃弾などは、その個々について考慮した場合には、アナンダが別のピストルの別の銃弾によって射殺された証拠にはならない。しかし、一括して考えると証拠はなりうるというのであった。

　これらの各証拠に対する疑問は、実質証拠を形成する必要上からも綿密に検討されたが、どれ一つとして決定的なものはなかった。そこで判決は比喩を使った。「これをたとえれば、それぞれに煉瓦をつり下げることのできない細糸も、それを縒り合わせれば煉瓦の重みに耐えうるようなものである」というたとえである。亜硝酸塩と錆と銃弾の形が自殺説の否定として十分でなければ、他殺説を支えるのに死後痙攣説がある。もし、それでも十分でないなら、法廷はアナンダの姿勢とピストルの位置については完全に検察側の立証に満足している。こうして結論が下された――「従って本法廷は、アナンダ・マヒドン陛下の死が他殺によるものであるという見解を支持する」

　しかし「慈悲に満ち至高の徳を備え」た国王、他人の幸福をかつてさえぎったことのない国王が、他人の手にかかって殺されるということがあっていいものだろうか。法廷が示唆している真犯人は、明らかにプリディだった。判決文は自らその疑問について質問し、自らそれに答えていた。「何者か」が、国王が彼を憎んでいるという誤った観念を抱いていた場合には、暗殺は起りえないことではない。「犯人の動機は、被害者たる国王陛下はもちろん、「何人もうかがい知りえざるものである」と、判決文は説明していた。

　他殺と断定してしまった以上は、このうえ自殺説にかかずらう必要はないわけだが、法廷は、もう一つダメ押しに非自殺論を展開した。

　故国王は青春、健康、富、忠実な臣下のすべてを保有し「欲しられさえすれば、なに一つ手に入らないものはなかった」。万が一、タイに「きわめてご不満」であったとしても、数日後には外国へ旅立たれるのである。判決文は婉曲な言いまわしを使いながらも、国王がタイよりも外国を好んでいたことを巧みに示唆していた。また、たとえ処理できないほどの不満に遭遇していたとしても、退位することはできるのだし、そのあとで自殺することもできたはずである。

　聡明な知能と健全な判断力を備え、ほぼ完全な健康体であったろう、ことに当っては慎重で、敬虔な仏教徒で

もあった。国王が自暴自棄になって死を急がねばならぬ理由はどこにも見当らない。ご家族内部の不和も、事件の日まですべてが平和、正常であった状況からして考えられないし、王母殿下もプミポン新王も不和説をしりぞけている。

マヒドン殿下の死後二十年にわたる王母殿下の愛情、ご家族だけの長い外国生活は、自殺を必要とするようなはげしい家庭不和の可能性を打ち消している。現に王母殿下は、法廷の質問に答えて、アナンダは「どんな場合にも、絶対に激するようなことはありませんでした。不満がある場合には、憤るよりもむしろ静かに理解の道を求める性格でした」と証言しているではないか。そのうえ国王は事件の日に予定の行事を三つも持っていたし、前夜もまったく平常どおりだった。死の朝には、午前六時にカスター・オイルをとり、静かに薬効を待っていた。以上のすべてが、自殺の動機を完全に否定していた。

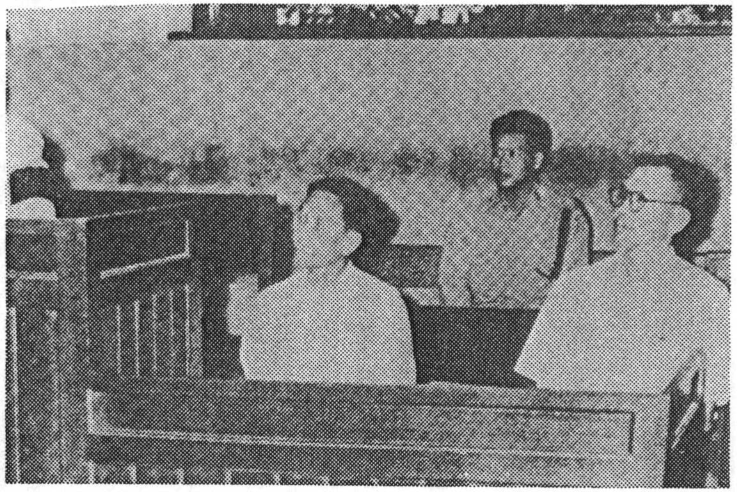
判決は、同時に、事故説についても否定の断を下した。アナンダの姿勢、傷の性格、ピストルの安全装置などから見て、事故説は採用することができない。

証拠による考究は、すべて他殺という結論を導き出す。判決朗読がここまで進んだとき、法廷内外の空気が急に緊張するのが感じられた。もはや無罪判決はありえないのである。被告たちは、もう国王暗殺という犯罪に直面する以外に道はない。その犯行に加担していたかどうかという点について、裁判官の判定を待たねばならないのだ。

高まる緊張に気づかないかのように、判決文は横道にそれて、弁護側が主張した政治的陰謀のことに触れた。しかも、判決文は、国民の感情が自発的かつ自然に起ったものであるとして、反プリディ派による故意の煽動説をしりぞけてしまった。

いよいよ被告の一人一人についての罪の認定に入った。

判決朗読が始ってから、すでに三時間が経過していた。立って聞いている被告や家族たちの緊張は頂点に達し、判決文の一語一語に有罪か無罪かのヒントを読みとろうとして必死になっていた。



第24法廷でのチャリューとブットとナイ・チット

海軍少将の家で陰謀を盗み聞きしたという材木商テーの証言の考量に入ったとき、はじめて一条の光明がさした。裁判官たちは、テーがうそつきだという弁護側の抗弁を認め　チャリューとナイ・チットがプリディやワチャラチャイと密談したというテーの証言を採用しないことに決定したのだ。しかし、チャリューの嫌疑がそれで消えてしまったわけではない。海軍少将と女中が、彼が確かにその場にいたことを証言しているのだ。チャリューがそれを否定しているのはしかえって彼の有罪性を立証するものだろうか？　法廷の結論は、そうではなかった。それは「刑事法廷における被告の通常の否定にすぎない」という判断である。

被告第一号のチャリューについて、法廷は、まず彼を有罪とするために提出された証拠を要約した。彼とプリディの親密さは認められた。友人の将校に向って国王は十三日には出発しないと告げたチャリューの言葉も同様に事実として認められた。法廷は、また、彼が自発的に退職したと述べたことを認めなかった。チャリューにとっては、裁判官のこうした判断は痛手だった。しかし、つぎの文章に進むと、希望がわいてきた。法廷は、プリディとチャリューの共謀を立証する証拠が不十分な

ことをあげ、親密であるというだけでは罪を立証することにならないという見解を示したのである。

また、友人に対して陰謀の一端を洩らしたとされている会話は、解職を不満とする心理状態が、友人に知識をひけらかすか、ないしは「西洋の迷信にもとづく無意味かつ不敬な言葉」をはかせたにすぎないと解釈された。チャリューが国王秘書を解任されたことについて、法廷は「解職によって失った収入と名誉を被告は上院議員に指名されることによって回復したのであるから、解職は陰謀の十分な動機とは判定できない」としていた。

娘と並んで被告席に立っているチャリューにとっては、これはなんという美しい、ほとんど信じられぬほどの言葉だったことだろう。父と娘の感動は、いかばかりだったろうか。判決文のこうした論旨からチャリューが直ちに結論を導き出せなかったとしても、その結論はすぐに裁判官の言葉となって法廷に響きわたった。

「本法廷は、ゆえに、チャリュー・パトムロスを無罪とする」

長い長い言葉のはてに、長い長い年月のはてに、そして、それにまさる長い苦悶のはてに、なんという簡潔な結論だろう。

いのちを拾った！　しかし、安堵のあまり息もつけないでいるチャリューには委細かまわず、判決は、二人のボーイの罪の認定へと進んでいった。裁判官は、ナイ・チットとブットがいずれも暗殺者ではないことを認めた。だが、二人のうちのだれか、もしくは双方が共犯関係にある場合は、その罪は実行者と同等である。

再び希望の光が見えた。セーという殺し屋が「さる高貴な人」を暗殺するために雇われたという証言を、法廷は認めないことに決定したからである。にもかかわらず実際に国王は殺されたのだから、だれか殺人者がいなければならない。二人のボーイが現場にきわめて近い位置にいたという事実は非常に重大なものである。判決文は、そう述べていた。

ボーイたちは、更衣室のドアの前の裏廊下にすわっていた。犯人は、国王が就寝中か便所に入っているあいだにこのドアから入ったに違いない、と、法廷は断定した。しかし、ブットは、まだ勤務についていなかったか、ほかの仕事をしていたのだろう。侵入した暗殺者は書斎か仏間にひそみ、ベッドに横になった王に頭のほうから接近して射殺し、書斎を通って表廊下から逃げたものと思われる。被告たちは、犯人の逃亡を目撃しなかったのかもしれない。書斎のドアに前夜、鍵をかけるのを忘れたのがブットだという証拠はない。

こうして犯行を組み立てていくと、両ボーイは犯罪の実行には関与しなかったかもしれないが、それでも自殺を偽装した容疑は十分にある。犯人が偽装をもっとも容易にするためには、国王の45口径ピストルを使用することだが、指紋を残さないよう手袋を着用すれば、狙いを誤るかもしれない。前もってピストルを入手しておく方法もあるが、国王がそれを発見すれば計画は事前に挫折することになる。犯人は、おそらく自分のピストルを使用したのだろう。使用されたピストルは薬莢を射出しないタイプのものか、あるいは犯人が薬莢を持ち去ったのだろう。いずれの場合も、国王のピストルの銃弾と薬莢を使って偽装する必要がある。偽装を完全にするためには、国王のピストルは彼の手のすぐそばに暗殺者もしくは共犯者によって置かれなければならない。共犯者は暗殺者に、そのピストルを渡すか、ありかを教えたものと思われる。ナイ・チットもブットも、国王の日常動作を熟知していたし、ピストルのありかも承知していた。彼らは理想的な共犯であった。

まずナイ・チットから。薬莢を拾った場所の自供があいまいなのは、それがはるか前に使用されたものである事実とにらみあわせて、偽装工作の嫌疑濃厚である。薬莢を引出しの中へ入れたのも、偽装を目的とするものだろう。三日後に警官にマットレスの銃弾を見せたのも、同じ目的からと解釈される。

ほかにも二つの重大な容疑がある。最初に王の寝室に入ったのは、暗殺者が手ぬかりした場合にそなえてピストルを王の近くに置くためだったと考えられるし、階下へピストルを持ってきたのも彼だから、安全装置をはずして、それを宮廷会議の人々に見せることも可能だったわけである。

なぜ、あの日の朝にナイ・チットが王宮へ行かねばならなかったかという点について、法廷は被告の説明をしりぞけた。プミポン用の勲章の箱があればサイズはわかったのだし、王の目をさまさずに勲章を取出すことも可能であった。

つぎに、ピストルを見つける前に「王様が自害なさい

ました」と王母殿下に報告した点に移った。彼自身が弁明するように、王様が殺されることなど想像することができなかったというなら、なぜピストルを見ないうちから理由もなしに自殺だという結論に飛躍するのか。国王が自殺した例など聞いたことがないと、ナイ・チット自身も証言したではないか。王母殿下へ報告をした言葉は偽装をもくろんだものと判断するほかない。彼は、また、王宮内の二人の使用人に対して、国王は十三日にはご出発にならないと断言している。チャリューによる同じような発言がはなはだあいまいで確信がないのとくらべて、はるかに強く犯意をにおわすものである。

では、ナイ・チットの動機は何か？　法廷は、ここで「人の心は海より深く山より高い」というタイのことわざを引用した。プラチャーディポク王いらいの宮廷での勤務は、被告ナイ・チットの心に「あらゆる奸悪な意図にもまさる感謝と忠誠」を植えつけたはずである。しかし、おそらくそれを打ち消すほどの巨額の報償が示され、彼はそれにとびついたのだろう。犯行後にナイ・チットが急に裕福になったという証拠はないが、富はどこにでも隠せるものだし、巨額の報償は暗殺計画が完全に成功したのちに渡されることになっていたのかもしれない。国王の外遊のおともにブットが択（えら）ばれたことに対する嫉妬もある。「被告ナイ・チットは盲目的な感情のために理性と忠義を忘れ、仏の蓮（はちす）を悪魔のうてなと見誤ったものである」と、判決文は述べていた。とにかく、有罪ときまれば、動機など好きなようにくっつけることはできのだ。

ナイ・チットについての叙述は、それでほとんどおしまいであった。憐憫も憎悪もない淡々とした法廷用語で刑が宣告された。「法廷は、ゆえに被告第二号ナイ・チット・シンガセニを有罪と認めるものである」

残る一人、ブットへの判決が続いた。暗殺計画が、その性格上、必要最小限の人数によって実行されること、暗殺者はブットの気づかぬうちに侵入した可能性が大きいこと、沐浴を受けるのは必ずしも罪を洗い流す場合のみとはきまっていないことなどから、ブットに関する証拠は不十分という判定だった。

ブットは、国王一家の外遊に随行できる喜びに浸っていたのであるから、国王暗殺に協力する動機がないわけであるし、彼が「しんそこからの国王への感謝」を抱いているときに、暗殺者が彼を引き込むはずもない。ブットは、ナイ・チットほどはしこくなく、「むしろ、どちらかといえば遅鈍というべきである」。そのため、銃声に対する反応も遅かった。犯人がナイ・チット一人だけが勤務しているときを避けたのは「計画を関知しないブットを連座させることによってナイ・チットへの嫌疑を柔らげ、犯行の隠蔽（いんぺい）に必要な混乱を生ずるのが目的だったものと思料せられる」。

しかし、法廷での慎重な審理によって、混乱の雲はとり払われた。結局、犯行に関係していたのは三人の被告のうち一人だけだったのである。選択の余地ない量刑であった。

「刑法の規定により被告第二号ナイ・チットを死刑とする。刑の執行は、法の定めるところによって行なわれなければならない。チャリューおよびブットは無罪とし、直ちに釈放を命ずる」

裁判官の最後の言葉が終ると同時に、ナイ・チットは看守の手で法廷から連れ去られていった。残る二人は自由が待つ太陽の下へよろめき出た。

五年かかったのである。そのことは、判決の中にも述べられていた。五年の歳月を捜査と裁判に費し「史上空前の精密さ」で証拠があつめられて、やっとのことに結論に達した。――いや、これはまだ結論ではなかった。

ほんとうの結論までには、これからさき、まだ三年五カ月もかかるのだ。

ナイ・チットは控訴し、検事側も無罪となった二人について上級審へ控訴の手続きをとった。あらゆる証拠は再びむし返され、審議された。まず文書で、続いて口頭で、検察と弁護側の応酬があった。現場検証もやり直した。公訴手続きについても論戦が展開された。下級審の判決から六カ月たって、控訴裁判はやっと結審した。こんどの判決までには三カ月かかるものと予想されていた。だが、実際には、それは十五カ月もかかった。一九五三年十二月になって、やっと判決が言い渡されることになったのだ。

牛のよだれのような裁判で被告の苦痛を引きのばすくらいは、ピブン政権の失政のごく一部にすぎなかった。ピブンが手下のパオ警察長官を使ってやっている奸智にたけた警察政治の中で、国王暗殺事件の公判は、古代ローマにおけるネロの殺人サーカスと同じ役割りを与えら

れていたのである。第一審の判決が出た一九五一年九月ごろには、さすがに柔順な国会の中からもピブン批判の声が上った。そこで十一月には、ピブンは無血クーデターを行なって国会と内閣を改組し、反対の声を圧殺してしまった。あくる十二月、スイス生活を終えたプミポン王はようやくバンコクに帰着し、ピブンの新内閣に認証を与えた。

新王は美しい王妃といっしょだったが、少くとも公的な場所では微笑を見せることがなかった。兄アナンダの死後、マスクのようなプミポンの陰鬱な顔は、結婚や四人の子の出生によっても、いつかな変らなかった。ちょっと皮肉だが、国王はジャズを作曲し、それに「微笑」というテーマをつけた。写真撮影と並んでサキソフォンやトランペット、クラリネットでジャズを演奏するのが彼の趣味だった。何人かの王制派が私に説明してくれた話によると、国王のジャズ愛好は、幼いころに教育されたクラシック音楽に対する国王一流の反抗だということである。

毎日、午前十一時から正午まで、国王はジャズ・レコードの自分のコレクションをアレンジし、あるいは自身の演奏の録音なども加えて王宮内の百五十ワット放送局から流し、国民と楽しみをともにされた。金曜の夕方は生番組だった。国王は気の合った臣下（たとえばクォン・アパイオンの下で民主党副総裁だったセニー・プラモート）らと組んで演奏された。ジャム・セッションは、ときには午前四時、五時まで続いた。そんな友人たちに王妃は、あるとき冗談まじりにおっしゃったそうである。

「あなたたちがうらやましいですわ。みなさんは、王様の愛人ですのね。金曜日になると、みなさんがおいでになる何時間も前から、王様はにこにこなさっていますのよ」

タイ人は、ちょっと変り者の王様のほうを好むようである。しかも、それがプミポンのように聡明で知的な国王であればなおさらだ。新王は、そのうえにやさしい心の持ち主なのだから申しぶんなかった。

新王のこのような好もしい資質は、しかし、先王暗殺事件の裁判にまでは及ばなかった。アナンダの死には、相変らず疑惑の雲がかかったままだった。

いつ果てるともなく引きのばされた裁判は、やっと控訴審の判決を迎えた。それは、ぞっとするほどの繰返しだった。場所も同じ第二十四号法廷、再び大群衆がつめかけ、警官が立ち、スピーカーが中継し、五人の裁判官が交替で判決文を読んだ。

朗読は午前九時に始り、二時間の昼休みをはさんで午後も続き、終ったのは翌日の午前一時五十五分だった。正味十四時間の大判決である。五人のうち一人だけが事故説の少数意見を出したが、残りの四人は下級審の証拠をほぼそのままに採用した。ただ、こんどは、ナイ・チットと並んでブットも有罪とされてしまった。

理由は簡単だった。暗殺の事実とナイ・チットの共犯関係が証明されれば、犯行の至近距離にナイ・チットとともにすわっていたブットも当然同罪だ、ブットを抱き込まなくては犯行は成功しえない、という理屈からである。で、チャリューは自由のままだがブットは刑務所に連れ戻され、ナイ・チットとともに刑の執行を待つ身となった。

検察、弁護の双方によって最高級審である大審院への上訴が行なわれた。三度び審理が繰返され、評決を残して結審に到達した。だが、事件がつかえていたので、判決は十カ月間も放っておかれた。

一九五四年十月十三日の朝、ラジオ・バンコクが短いお知らせを流した。その日に大審院判決が言い渡されるというのである。この時間まで伏せたのは、大群衆が集るのを防ごうという意図からであった。はたして、第二十四号法廷に集った人は三百人にすぎなかった。

午後一時五分に判決文朗読が始り、二人の判事がかわるがわる読み上げた。ブットはぼんやりと天井を見上げていたが、ナイ・チットには朗読される評決をひとことも聞きもらすまいとしている様子がうかがわれた。裁判官たちは、まずチャリューの名を読んだ。それまで、被告席のチャリューは傍聴席の妻と弁護人である娘のほうをじっと見つめていた。彼は二日前に再拘留されたのである。悪い結果になりそうな予感があった。やがて裁判官はチャリューの有罪判決を読み上げ、その瞬間に立っている力を失った彼は椅子にくずおれた。

単に足を組んでいたという理由で被告を死刑に処したなどという判決は、世界にもちょっと例を見ないことだろう。だが、チャリューへの大審院判決を要約すればそれだった。裁判官たちは、チャリューの王室での動務に

は不敬の態度が多く、それゆえに陰謀に加担した嫌疑が濃厚であるという検察側の主張をあっさり採択したのである。その証拠とされたのは、彼が国王は十三日には出発しないと言ったという証言である。

大審院の判決の中で上出来だった点といえば、その短かさだけである。被告三人全員に死刑を宣告し、判決公判は一時間もたたないうちに閉廷してしまった。はじめ三人、それから二人、最後に一人もいなくなる――まるで「リトル・インディアン・ボーイズ」の童謡そのままだった。

政府が三人の死刑囚の減刑歎願を審理し、それを却下するまでに、さらに四カ月の時間が流れた。

バンコクから北へ十二マイルのバンカンにあるバンコク中央刑務所で、三人は断罪の時を待った。五千人の受刑者を収容するこの広大な刑務所には平屋建の獄舎が並び、運動場、レクリエーション・ホールや美しい庭などがある。懲役囚が働く工場や野菜畑もあり、飼育場ではタイで最良種のブタを生産している。私は実際に監視塔に上ってみて、よく整った、しかも人間的な雰囲気に感嘆した。あとで冷たいコカコーラのもてなしを受けながら刑務所長に聞いたところによると、バンカンに代表されるタイ司法制度の改革は、主として戦前にプリディの手によって行われたということだった。

監視塔から見下ろす敷地の一隅に空地があり、そのそばに小さいお寺が望見される。それが処刑された死刑囚の遺体を運び込む寺で、寺に通じる門の外側には頭のない仏像が据えてあるという。このデフォルメされた仏像は、寺の敷地のそとにある場合は非常に不吉とされているそうだ。そのうえ、ここの仏像は、頭がないだけでなく、悪魔退散の祈りをこめて真っ赤に塗ってあるのだと私は教えられた。

一九五五年二月十六日午後五時、看守会議を開くためという名目で、四人全員がいつもより一時間早く監房へ戻された。そして午前零時、チャリュー、ナイ・チット、ブットは処刑場わきの小さい建物に連れて行かれた。三人とも足に鎖を引いていた。命運が迫ったのを知ったチャリューとブットは歩くことができず、看守が支えてやらねばならなかった。

教誨僧が短い説教をした。彼は輪廻と因果応報について語った。三人はなるほど無実かもしれないが、おそらく前世の悪業を背負っているのであろう。その報いがいま来たまでである。説教を聞いて、チャリューは落ち着きを取り戻した。ブットは思いきりがつかないらしい。死んだ母の葬儀に出られなかったことをくよくよと歎き続けていた。終始しっかりしていたのはナイ・チットだけである。「さあ、もうあきらめるんだよ」と、彼はブットを励した。

僧が去ると、暗闇の中から警察長官パオが現われた。この祝賀すべき〝行事〟のために、彼は純白の上衣を着、赤いベレーをかぶっていた。赤はパオによく似合う。最近ではとりやめになったが、昔のタイでは、死刑執行人は赤い帽子をかぶっていたものである。

その執行人が呼ばれた。一人につき二十七シリングの処刑手当をもらう男である。習慣によると、彼は、処刑前に死刑囚の前に手をついて許しを乞うことになっていた。だが、この場合、それはしなくてもいいという命令だったので、彼はそっと心の中で祈りをとなえたということである。

時計は午前四時をまわっていた。チャリューがまず招かれた。青白いライトが、土まんじゅうの前に据えた木の十字架を照らしていた。目かくしがされ、十字架に向って両足首がその根元に、続いて両手は十字架を抱くように交叉部に縛りつけられた。手には線香と仏華を持たせた。人生の最後の恐怖の中で、チャリューは仏に祈ったことだろうか。彼の背後には、ダークブルーのカーテンがかかった木の枠が立てられ、機関銃を持った処刑係がそれを狙った。カーテンには、チャリューの胸の位置に白い丸のマークがついている。午前四時二十分、看守部長が赤旗を振った。五発の銃弾が、チャリューの背に吸い込まれた。医師とパオが進み出て検屍し、死亡を確認した。

執行人には一服喫うだけの休憩が与えられた。やがて二十分後にナイ・チットもチャリュー同様にいのちを断たれた。最後のブットは一斉射では死なかった。銃弾が腹部に集中したからで、そのためにもう一斉射が必要だった。

すべてが終ったのは午前五時すぎである。まだ暗かった。三人が逮捕されてから七年と三カ月であった。午前九時に家族が遺体を引取りに来た。彼らは、この日に処

刑が行なわれるとは知らず、四日前に最後の面会を許されたばかりだった。国王暗殺犯人三人の遺体は、すでに寺に安置されていた。首のない、真っ赤な仏像のある寺に。

8

捜査本部を指揮したプラピニットは、完全に満足していた。成功を祝賀するため、彼は訴訟の結果をまとめて一冊の本にし、妻の誕生日を祝って友人に配った。王制派である彼の親戚や友達からはお祝いが殺到した。あれほど完璧な捜査をし、あれほど理をつくし、あれほどの熟慮のすえに下された判決が間違っていようとは思えなかった。

警察長官パオに恐怖政治を一手にまかせ、ピブンは世界周遊の旅に出ていた。ピブンも満足していた。裁判の結果がどうであれ、とにかくプリディの容疑は晴れないまま残ったのだ。彼は、かくして、暴力によって王を殺した悪漢を退治した正義の士のポーズをとることができたのである。

容疑が消えず、従って犯人引渡し請求の対象になりうるため、プリディとワチャラチャイは英米両国から亡命を拒否された。彼らを受け入れてくれるもっとも近い国といえば中国だけだった。それはまたピブンを大きく助けることにもなった。ピブンは、欧米諸国に向って、自分こそ真に反共の闘士であるというはったりをきかせていたからである。そう思いこませることによって援助はどんどん獲得でき、おかげで腐敗と軍備偏重のために破産に直面していたタイ経済は立ち直った。彼は、ロサンゼルスでは「共産主義に打ち勝つためには力しかない」とぶち、ニューヨークでは「自由世界と共産主義圏による第三次世界大戦はもはや不可避である」とみえをきった。アメリカの反共ムードに便乗しようという計算づくの言動である。アイゼンハワー大統領は、そんなピブンに勲功賞を贈呈した。

ピブンは、国王暗殺事件の公正な公判が行われたことこそ彼の政治理論の高さを証明するものだと揚言していた。だが、それは皮肉なことに、かえって英米両国の大使が非合法手段によってプリディを国外に逃した行為を正当化する以外のなにものでもなかった。もしタイに踏みとどまって裁判を受けていれば、必ず王殺しの罪を着せられるに違いないと考えたプリディの判断は正しかったわけである。裁判に提出された証拠や裁判の進行を公

正に振り返ってみると、どうしてもその結論にならざるをえないようである。

タイ王制派に私がその意見をぶつけ、論駁不可能なほど完璧な理論で彼を問いつめてみると、いつもすぐに同じ答えがはねかえってくる。

「なるほど。しかし、あなたは西洋人ですからね。タイのことはわかりっこありませんよ」

東洋と西洋が本質的に違うというのは詭弁だと私は信じている。それに、東と西が理解し合えないなら、世界の平和は実現するはずがない。個人個人について研究してみれば、東洋と西洋がそれほど本質的に違っていないことがわかるのである。イギリスの心理学者D・スタッフォード＝クラークはつぎのように書いている。

「基本的には、すべての人間は等質である。泥の家に住んでもイグルーに住んでも、あるいはプレハブや高級マンションに住んでも同じだ。政治的な拘束をする側でも、それを受ける側でも。皮膚の色、人種、宗教にかかわらず、人間は、根源的には同じような基本的本能や慾望、希望や恐怖によって動かされ、同じ慾求を感じ、程度の差こそあれ同様の充足法にたよるのである」（『現代精神病学』）

特定の社会的な習慣や歴史的背景などは、個人の行動を分析するときに、もちろん参考にされねばならない。しかし、精神病でさえなければ、どんな人間も、一般的に「人間性」と呼ばれるものとは逆のことをしないものである。どんな人種も、人間一般の理性に反する行為をとることはない。激情もまた理解不可能なものではない。プリディが国王暗殺の主犯であるのなら、タイ人が理解するだけでなく、私のような西欧人にも理解できる動機がなければならない。

そのうえ国王暗殺事件の裁判が、もし西欧の司法機関によって行われていたら、またもし裁判官の多くが（プリディやアナンダと同じように）西欧で教育を受けていたら、もしタイの刑法が西欧のそれのようであったら、もし法廷で採用された証拠が西欧の弾道学や法医学によって検証されたものであれば、そしてもし判決が西欧でいう法の正義の鏡に照らして導き出されたものであったら……そんな「もし」があったならば「西欧人にはわかりませんよ」とごまかしてしまう必要はないわけである。

いわゆる東洋の神秘にごまかされることなしに、私は、冷静に事実を検討してみたいと思う。

控訴審で、検察側は、プリディがアナンダを憎んでいたと主張した。それによると、バンコク中国人街への国王訪問および摂政をランシット王子にするかプラチャーディポク王妃にするかの問題で、アナンダとプリディのあいだに衝突があったということだ。ほかに国王乗用車をプリディが使ったために王母殿下が困ったということもあった。ホアヒンの離宮で、プリディが国王のジープを使ったこと、許可なしに騒々しいパーティーをしたこともある。クオン・アパイオンやプラモート兄弟など民主党首脳は、しばしばひそかに国王に謁見していたが、プリディは国王が民主党をひいきにすることを怒っていたことも考えられる。アナンダは、また、隠密裡にピブンと会いたがっていた。アナンダが政界にうって出てプリディを倒そうとしていたという話もある。どれもこれもアナンダ国王のプリディ不信を証明するものだ。

このような話の信憑性を確めるのは非常にむずかしい。しかし、アナンダはスイスから帰国したばかりで、政治にはまだずぶの素人だったのである。タイ政界を牛耳っていたのは、老練な政治家、そして抵抗運動の英雄でもあるプリディで、国王は彼を尊敬し、彼から学ぶ姿勢をとったと見るのが自然ではないだろうか。

十二年も昔の経済計画のときには左翼だったかもしれないが、その後のプリディは王家や王族のためには尽力してきたのだ。そのことは、裁判のあいだにも何度か証言された。一つだけつけ加えるなら、戦争中のプリディは、週に一度、アユタヤに疎開していた自分の家族を訪ねたが、そのたびに疎開中の王族と連絡をとり、不便を取り除いてやっていた。アナンダがバンコクに帰ったときに、王室に敵意を抱いていたとは考えられない。

プリディは、激情に駆られる性格の人ではなかった。長いあいだ祖師と呼ばれ、思いやりも忍耐力もあった人物だ。一方のアナンダは良心的で思慮深い若者であった。法学の研究という点では、秀才だったプリディの後輩に当る。少くともアナンダ帰国後しばらくは、二人のあいだに友好的な関係が保たれていたと信ずるにたる状況証拠は多い。それがアナンダの死の直前に急に王の暗殺もいとわないほどまでに逆転したのだろうか。その確実な証拠はあるのだろうか。

帰国から死までの六カ月間、アナンダとプリディは何百という国事を力を合わせて処理した。その中で両者の意見がわかれたことを指摘できるのはたった二つ、中国人街の訪問と摂政の任命だけである。しかも、その両者とも、証拠はきわめて薄弱である。「王様のことはもう知らんぞ」とプリディが怒った話はあまりにも荒唐無稽だし、それを支持する証拠もない。王母殿下は前者を、プミポンは両者とも知らなかった。

二つの不和は真面目に論駁する価値さえないものだが、私は、自主的な調査によって、その二つをはっきり打消す証拠を手に入れることができた。私の情報によると、中国人街の訪問を提案したのはむしろプリディのほうだし、摂政の場合も、プリディは故プラチャーディポク王の名誉を回復するためにいったん同王妃を推しはしたが、じきに王制派の意向（アナンダのではない）をいれてランシット王子に打診の使者を送っている。

アナンダが憤ったといわれるいくつかの不敬行為にも疑問がある。それらは、国王とプリディの関係が継続していたことにくらべて、あまりにも些細な事件だし、プリディがアナンダの激怒を知っていたという証拠でもないかぎりは、プリディに王を殺させるほどの憎しみを抱かせるものとはいえない。

最後に、アナンダが国王の動きに不満を持っていたという点も納得しかねる。民主党指導者への謁見、仕組まれたピブンとの隠密会見などは、アナンダが意図的にやったものだとしても証拠が不十分であるし、とくに後者はありえないことのように思われる。プリディが、自分を追い出すためにアナンダが退位を考えていると語ったといわれるうわさの証拠についても同様である。しかも、このような犯意を提出した検察側は、裏づけ材料として、アナンダがそう言ったとかプリディがそう言ったということ以外には、ほとんどなんの証拠も出せなかったのであった。

要約すれば、検察側は、プリディが王殺しを決意したことを納得させるにたる理由をたった一つでも示すことができなかった。いくつかの二次的な証拠も、それを寄せ集めて決定的な力を持つほど説得力のあるものではなかった。プラピニットによる徹底的な捜査にもかかわらず、証拠はなかったのである。

また、たとえプリディが国王を憎んでいたという証拠があったとしても、アナンダはまもなくバンコクを去り、三年間も外遊することになっている。そのあいだ国政を預るプリディが、いまという時機に自己の生命と生涯をかけた仕事と家族の行くすえを犠牲にしてまで国王アナンダのいのちを狙うだろうか。どうにも説明がつかない。プリディの経歴や性格からは、どうむりをしても説明できないのだ。よしんば最大限に譲歩してプリディが国王暗殺を狙っていたという検察側の主張を認めたとしても、彼が暗殺を実行ないしは命令した証拠がどこにあるというのか。

実行者（？）のワチャラチャイ

反プリディ派は、こうした問いかけに対して巧妙な説明を与えている。プリディがそれとなく国王弑逆の意図を口にし、それを承った忠実な手下のワチャラチャイが、プリディの意を体して暗殺をやってのけたのだ、というのである。これはトマス・ア・ベケットに怒ったヘンリー二世が「だれかあの悪僧を退治してくれぬものか」と独白したのと似ている。反プリディ派によると、プリディが実際に王殺しを意図していたかどうかに関係なく、ワチャラチャイはプリディにとりいるために国王暗殺をやってのけたのだそうである。

命じられてか自発的にかはともかく、ワチャラチャイ以外の暗殺実行者がとり上げられたことはなかった。プリディを除外した暗殺説も出なかった。それにしてはワチャラチャイという人物があいまいすぎる。ワチャラチャイの経歴、性格などから、はたして彼が暗殺者になりうるかどうかを調べるのは、きわめて重要なことだと思う。

むずかしい仕事だ。ワチャラチャイのことをよく知っ

ているという人は現在では一人もいないし、ワチャラチャイの家族のその後の生活もバンコクという大都会の雑踏の中にまぎれてしまっている。知ろうと思えば、危険を冒さねばならない。しかし、私は幸福に恵まれ、情報提供者にはいくらかの迷惑をかけながらも、ワチャラチャイという人物の輪郭をつかむことができた。

アナンダが死んだとき、ワチャラチャイ大尉は三十三歳前後だった。背が高く、ほお骨が出て、西洋人である私の目にはさほどハンサムとは思えない顔である。父親は海軍軍医長、母親は元看護婦であった。男ばかり四人兄弟の末っ子で、のちにアナンダがしばらく在校するバンコクの有名校に進んだ。

高校時代には勉強よりもスポーツに熱中し、学校をさぼって玉突き屋に出入りしていた。それを見た両親は、バンコクのクリスチャン・カレッジに進学させ、ワチャラチャイに寮生活をさせた。両親は医学部への進学を希望したらしいが、彼は海軍兵学校を択んで入試にパスした。兄が兵学校の入試に失敗していたので、これはワチャラチャイ家の失墜した名誉を回復した形になった。兵学校時代に恋愛をし、娘の両親たちも彼を気に入っていた。兵学校をほとんど首席で通し、戦争直前には中尉になっていた。海軍での勤務は順調で、戦争ではフランス領インドシナに出撃し、最先任尉官になった。

結婚したのは戦争中で、学生時代の恋人と九年間の恋愛のはてに結ばれたわけだ。その妻チャオム・ワチャラチャイのことにはすでに触れた。美人で物腰がやわらかなところは、どこか王母殿下を連想させる。チャオムは、彼女の父が二人の妻に生ませた二十人の子供の上から四番目だった。高級官僚で、子供たちにはきちんと教育を授けた父だった。チャオムは、ワチャラチャイと結婚する前は、バンコクの有名私立学校の教師をしていた。結婚後しばらくはチャオムの親の邸内に離れを建てて生活したが、まもなく高級住宅地バンガピにマイホームを得て、そちらに移った。ワチャラチャイは庭仕事に精を出し、外国へ行ったときには必ず家具や家庭用品を買ってきた。

チャオムは四人の子を産んだ。アナンダが死んだ年には末っ子が生れたところで、一番上は六歳になっていた。部下や召使いに対して寛大だったワチャラチャイは、子供にはとくに甘く、お客を招いて会食しているときなど、ご馳走をつまんで子供にやったりしていた。

日本軍によるタイ進駐で、そんな平和は破られた。インフレが始ったし、家族がふえたため大きい家に移る必要に迫られたが、海軍の給料ではやっていけないことがわかった。ワチャラチャイは海軍を退き、チャオムといっしょに商売を始めた。一種のなんでも屋で、衣類も売れば野菜も売っていた。

ワチャラチャイの生活ぶりは、決してはでではなかった。カード遊びと競馬を除いては、タイ人ならだれでも熱中する賭け事にごく普通の興味を持っていただけで、それもあまり熱心なほうではなかった。狩猟や射撃はやらなかった。お寺へはよく行ったが、信心のためというよりは坊さんたちと仏教や文学の話をするためだった。

何年かたってから、自由タイ運動に参加するようにという誘いを受けて海軍に戻った。摂政たちがピブンの手を逃れてプリディの官邸に逃げ込んだとき（「アナンダの生と死」五章参照）、メナム川を警戒したのは、そういういきさつからである。彼はプリディを尊敬していたし、プリディのほうもタイ人特有のまわりくどい会話に飽きていたらしく、短刀直入に話すワチャラチャイに好意を持った。そんなプリディに対して、ワチャラチャイは政治的な信念や能力のなさをひたむきな献身で補った。ピブンが倒れ、プリディ一人だけが摂政になったとき、彼はプリディ付きの武官にとり立てられた。アナンダが帰国したとき侍従武官を命じられたのだが、宮廷用語がしゃべれないからという理由でいったんは辞退した。そんなことは心配する必要がないと言ったのはアナンダのほうであった。

国王兄弟に射撃を教えたこと、おしのびの外出に運転手をつとめたこと、そして退職したことについてはすでに書いた。ただ、退職のことは、もう少し詳しく述べておきたい。

王宮勤務のワチャラチャイの月給は二ポンドちょっとだった。これでは礼服の洗濯代にもたりない。かといって賃上げを要求するわけにもいかない。しかたなく、知り合いの医者に診断書を書いてもらった。タイには、そんな診断書を出してくれないほどやぼな医者は一人もいない。こうしてワチャラチャイは欠勤した。三カ月間病欠すれば自動的に退職になる。

海軍に戻るつもりもなかった。家族と離れ離れに暮さ

なければならないからだ。欠勤しているあいだ、ワチャラチャイは、チャオムの店で売る品物を中国人街の卸し商へ買いに行っていた。夫婦は、よくプリディ家へも行った。プリディの義妹はチャオムとは学校時代の同級生だった。チャオムは料理が上手だったので、プリディ夫人にときどき教えていた。ワチャラチャイも、プリディと海軍との連絡役を仰せつかることがあった。ワチャラチャイが王宮をやめたことにプリディがどんな反応を示したかは不明である。しかし、タイ人は、そんなことをあまり詮議だてしないのがふつうだ。

王母殿下に派遣された医師がカード遊びをしているワチャラチャイの現場を押えたとき、ワチャラチャイは国王秘書に手紙を書いて事情を打明けた。アナンダが死んだときには、海軍からの公式な退役通知を待っているところだった。そのあとでプリディの秘書（月給二十三ポンド）になり、やがてプリディが推薦した後継のダムロン首相の秘書になった。はじめのうちは彼をアナンダの暗殺者とするようなうわさはなかった。一九四七年末に、ある政治新聞が、ワチャラチャイによる暗殺を示唆するような諷刺詩を載せたのがことの起りだった。ピブンが復帰した十一月クーデターの翌朝、プリディの運転手が車をまわしてきて、彼を安全なところへかくまってくれた。それ以後、今日に至るまで、彼の亡命生活は続いているわけである。

ワチャラチャイは、とりたてて人に好かれる性格ではなかったようだ。だが、そんなことは、もちろん証拠にはなりえない。むしろ激情のおもむくままに人を殺したり、暗殺を引受けて、それをやってしまうような男ではなかったというのが正しい。

実際の証拠（「裁判」一章参照）も、その印象を支持している。私が調べたところでは、袖口の血を発見した女中や、公務員であった運転手の話には疑問がある。事件の前後に彼の姿をバロンピマン宮殿の裏で見かけたという証言は、弁護側の反対訊問によって打ち破られている。チャオムやチャオムの両親が言いたてているアリバイは完全なものとはいいがたいが、彼らの証言を検討すると、ワチャラチャイは、とてものことに国王を暗殺した犯人とは思えない。

彼が家を出て帰るまでの時間を考えると、国王を暗殺するための秒きざみの予定表があっただけでなく、アナンダがその時刻にベッドの中でまどろんでいるという千載一遇のチャンスを予知する超自然的な能力まで備えていなければならないことになる。たとえ検察側の主張を認めても、ワチャラチャイ犯人説はなお成立しがたい。バロンピマン宮殿のそとで見かけられた人物と、その内部で暗殺を実行した人物とが、どうしても結びつかないからである。

もし、だれかが、返り血を浴びピストルを手にしたワチャラチャイを見ていたら、もしほんとうに彼が陰謀に加担していることが証明されていたら（証拠としては材木商テーと殺し屋セーの話があるだけだが、両者とも法廷で不採用になっている）、あるいはもし、だれかが彼をバロンピマン宮殿の内部で見かけていたら……それなら嫌疑をかけられてもやむをえなかったことだろう。それがない以上、ワチャラチャイを犯行に結びつける証拠はなにもない。

袖口の血も、考えてみればおかしな話である。もしワチャラチャイがアナンダを殺していれば、必ず返り血を浴びているべきだという考えかたは疑問である。実際に頭蓋骨を撃ってみて、ピストルと手と袖に血がついていなければならないと証言した専門家がいたが、ほんとうにそうだろうか。弾道学の信頼すべき教科書に紹介されているハイスピードの写真を見ると、少しばかり事情が違うようだ。

銃口から射出された銃弾は、高速度で写した写真によると、その前面に弦を離れた矢のような空気の凹みをつくる。その瞬間には、頭部の皮膚も肉も骨も脳全体も内側に向って強く押されるのである。もちろん、ワチャラチャイが銃弾を共犯まかせにせず自分で取戻しておこうとしたなら、彼の袖口はどっぷりと血に浸ったはずだ。

だが、この仮定は、ワチャラチャイが犯人であること（私は、その証拠が存在しないことを明らかにしたつもりだが）、銃弾のすりかえが行われたことを認めなければ成立しない。その後者については、三人の被告に関する証拠を綿密に調べれば反証が出せるものと思われる。

チャリューは、西欧の裁判ならあっさり無罪になっているところだ。彼に不敬な行為があり、秘書を罷免され、アナンダが十三日には出発しないと言い、彼がプリディと親しく、プリディが事件の主犯だったとしても、プリディと彼とが共謀して暗殺を実行したという実質的

な証拠は一つもないからである。彼は犯罪とどうしても結びつかない。ワチャラチャイの場合と同じく、可能性のまわりを堂々めぐりするだけで、可能性を証拠だと思い込む以外に有罪にしようがないのだ。

ブットの嫌疑はナイ・チットが事件の共犯がどうかということと有機的に連繫している。もしナイ・チットが、わざわざブットの勤務中に国王暗殺のタイミングを合わせたのなら、ブットも一味だったという可能性を除けば、ブットに犯行をかぎつけられぬように事件を仕組むなどということは不可能だったはずである。ナイ・チットがなにかを隠していれば、ブットにはそれがわかったはずだ。こう考えてくると、検察側の主張は足もとから崩れる。国王の外遊に随行を命じられたブットが計画に加わるはずがないという第一審の判決（正しい判決だと私も確信しているが）が正しければ、自動的にナイ・チットの無実も証明されることになるからだ。しかし、自殺の偽装はブットの協力なしには成功しなかったはずだということを法廷が認めた場合は、ブットの有罪は確定的になってしまう。いずれにしても、彼の運命はナイ・チットのそれと一体不可分というべきである。

そのナイ・チットが有罪にされた最大の理由は、彼が勤務時間でもないのにバロンピマン宮殿に姿を見せたことだった。タイ人は勤務時間以外には働かないという〝定説〟は、タイ人自身も信じていることであるし、日常の経験によっても確かに信じたくなる事実である。しかし、いかなるタイ人も勤務時間以外には絶対に働こうとしないなどというのはうそだ。それに、なぜあの時刻にナイ・チットが宮殿へ行ったかについて彼の説明は納得できるものだし、他の状況証拠さえなければ、法廷でも採用されたことだろう。他の証拠というのは、ナイ・チットが冗談半分に、王様は十三日には出発しないとしゃべったという事実だ。だが、それは、法廷が不採用と決定したチャリューの言葉とどれほどの差があるのだろうか。私の調査では、ナイ・チットは冗談が好きで、人をからかうのが好きな男だった。軽口は当然予想されるところである。

ナイ・チットに関して法廷がもっとも嫌疑ありとしたのは、王母殿下に対する彼の報告と自殺の偽装工作という二点だった。

彼がピストルも見ていないのに「王様がご自害なさいました」と叫んだのは事実である。しかし、法廷は、同じほど可能性のある異った解釈を見落している。恐怖に立ちすくんだナイチットの目は、なるほどアナンダのひたいの血を見ていたことだろう。だが、その目はピストルも見たはずである。なぜなら、ピストルは、ちゃんとそこにあったのだから。ピストルという物体の映像は、彼の意識下の意識に投影され、自殺という結論を出させたのだろう。ほかにも、その結論を助けたものがある。ナイ・チットは、国王がベッドわきのキャビネットにピストルを入れていたこと、それをよく取出していたことを知っていた。それに、銃声から数秒後の寝室には人影がまったくなかったのだ。

それに、もし45口径ピストルを置くことが自殺偽装工作の重要な一環であり、ナイ・チットがそれをやったのであれば、警察に取調べられたときに正直にピストルは見なかったなどと言わず、確かにピストルがあったと話しているはずではないか。ショックを受けたときの人間の記憶が理屈に合わない例は、みんなが掛け蒲団の上に見たアナンダの右腕をプミポンが見落していることからもわかる。

つぎに偽装工作である。

ナイ・チットがベッドの上に偽装用の45口径ピストルを置いたこと、宮廷会議に持っていくときに安全装置をはずしておいたことは、いずれも証拠がない。しかし、その可能性は、二つの状況に支えられたために、証拠として採用されてしまったのである。状況その一は、彼が薬莢を拾った場所について混乱した供述をしていることだ。ショックを受け、混乱している場合は、無実の人間でも犯人と同じような食い違った供述をすること、とくに怪しまれては困ると心配しているときにその傾向が強いことは繰返すまでもない。

だが、この場合もまた、法廷は、もう一つのきわめてあやふやな状況をこれにくっつけてナイ・チットに嫌疑ありとしたのである。それは、彼が警官に銃弾のありかを報告したこと、しかもそれが事件から三日たっていたことだ。しかし、ブットよりもはしこく、目はしのきくナイ・チットがそれを発見したことは不思議ではないし、三日間の時間の経過はたいした意味がない。銃弾をマットレスの中に埋めるのなら、三日後ではなく、すぐさまやったほうがずっと無難だ。ランシット王子がすぐ

に国王の遺体を検屍したいという警察長官を押しとどめることを、ナイ・チットは事前に予見することなど不可能だったはずである。

もし内部の協力がなければ、暗殺者はアナンダを射殺したあと45口径ピストルをキャビネットから取出してアナンダの手のそばに置き、自分の薬莢を回収して、かわりに国王のピストルの薬莢を置き、ほんものの銃弾をマットレスの中から拾い出して、かわりに偽装用の銃弾を入れ、そして逃亡しなければならない。たとえナイ・チットが積極的に協力したとしても、バロンピマン宮殿の反対側から走ってきた女官長がアナンダの手をとったときには脈があったほどだから、よほど万事をすばやくやる必要がある。そうでなければブットの協力——たとえばナイ・チットが王母殿下を呼びに行っているあいだに彼が偽装を完了する——でもないかぎりは成功はおぼつかない。

結論は明瞭である。偽装工作がほんとうに行われたのなら、二人のボーイの協力は絶対に必要である。法廷が自殺偽装説を採用したということは、こうして一連の証拠を絶対に必要とすることになる。もし、その証拠がないなら、偽装説は崩れざるをえない。

アナンダの手もとにあった45口径ピストルがその日に使用されたものでなかったと信じさせる理由は三つある。亜硝酸塩および錆テストと原形のままの銃弾だ。法廷は最初の一つは有力証拠として採用した。裁判官は、頭蓋骨を貫通した銃弾がときには原形のままであるという報告をしりぞけ、頭蓋骨はもっと強いはずだと勝手に断定した。生きているアナンダの骨は実験に使った死者の骨より柔い事実を無視してしまったのだ。

一審判決は、三つの科学テストは個々には弱い糸だが、縒い合わされると強くなるという論理を展開した。詭弁というほかない。何十本あっても糸は糸で、その個々の信憑性が薄いことには変りがないからだ。いずれにしても、くだんの45口径ピストルは事件の朝に発射されたものではないという結論だったが、西欧にはまったく別の見解がある。ジェラルド・バラード卿(少将)の『凶器の認定と法医弾道学』によると「銃器は、使用後数時間以上を経過した場合においては、科学的方法によって発射時刻を正確に推測することは不可能である」と書かれている。アナンダの45口径ピストルがテストにまわされたのは、死後三日が経過してからであった。

とにかく、他の証拠をどんなに認めても、偽装工作の不可能性という点で、この犯罪は成立しえない。

使用したピストルからとび出した薬莢がすぐに見つかるかどうかさえ事前にわからなかったはずだ。別のピストルを使ったのはいいとしても、銃弾がどの方向へ進むかは予測できない。盲管銃創になって、アナンダの脳内に銃弾がとどまることだってありうる。偽装をする必要があるなら、国王の45口径ピストルを使うのがもっとも手っとりばやい。しかし、法廷は、この可能性を除外した。指紋を残さないよう手袋をつけねばならず、手袋をすると撃ち損じの危険が出てくるという理由からである。

国王のピストルが使用されたと思われる理由はほかにもある。暗殺者は使い慣れた武器を用いるはずだが、45口径ピストルはどこでも買える。アナンダに射撃を教えたほどのワチャラチャイなら(もし彼が犯人なら)練習せずとも国王のを使用できたことだろう。法廷は、前もって国王のピストルを手に入れておけば発見される恐れがあると判断していたが、そんなことはなかったはずだ。偽装説は、一から十までありえない状況ばかりである。そして、偽装がなかったのなら、ナイ・チットが有罪であるはずがないし、従ってブットも有罪ではない。

二人のボーイは、チャリュー同様に無罪なのだ、彼らは無実の罪を着て処刑されたのである。

彼らが有罪にされたのは、法の真髄であり法の執行の大前提であるべき冷静な事実の認定がないがしろにされたからである。タイの標準では国王暗殺事件の裁判は公正に行われ、証拠は良心的に点検されたという。それでは、なぜ、このようなこじつけが起ったのか。

タイにおいては、裁判官の任用、昇進、弾劾などは九人の判事による管理委員会によって行われる。一見、司法の独立は保たれているような印象を与える。しかし、彼らの給与や年金は司法省の権限下に入る。管理委員会の事務局も司法大臣の任命なので、判事の人事異動などは委員会の形式的な合意を得るだけで決定されてしまう。

警察長官パオがこわい顔をしてわざわざ乗り出さなくても、司法省は巧みに(ときには、かなり乱暴に)裁判官たちに影響を与えることができる。判事たちは、司法

省に雇傭されている公務員である。まず司法省に入らなければ判事になれない制度になっている。公務員という職業がそれ自体としてとくな職業だと考えられているのだから、司法省だけが別格ではありえない。裁判官が誇りと孤高を保ち、国民も畏敬を払うという西欧風のしきたりは存在しない。二十五歳の若さで判事になっても、年をとらぬうちに退官すれば、たいした年金ももらえない。弁護士になって金もうけにせいを出さなければ食っていけないのだ。こうして、社会的地位の低い判事たちは、タイ人の性格そのままに、そのときどきの権力の風の吹くままに喜々としてなびくことになる。国王暗殺事件の公判でも、控訴審の判決に「プリディ政府は、その無能ぶりを発揮し」などという純粋に政治的な字句が挿入されていたほどだ。

厳密に論理にたよらないまま、裁判官たちが知らずしらずのうちに国王暗殺事件の評決に偏見を持ち込んだことは驚くにたりない。この特異性は、実にこの点にある。日や週で数えられる期間ではない。何年も何年もかかった裁判のあいだに、彼らは彼らなりに理詰めで結論を出し、それを法の正義の祭壇にまつった。ただし、それが実は理詰めではなく、祭壇には犯人の心臓の位置を示す白いマークのついた幕がかけられていたのである。

三人の被告は、ほんとうは重要なポイントを隠していたのだという説もある。王室の召使いは死んでも王室の秘密をかばうものだ、というのだ。しかし、長い長い取調べ、拷問、自白剤、家族の歎きなどに抗して、三人が三人とも通算二千六百五十日のあいだただの一度も秘密を口外しないほどの意志力を持っていたとは思えない。

私は、ある事情通から信頼できる話を取材することができた。彼は、この事件に関連してピブン政府によって一カ月間投獄され、三人のうち一人と同房になったことがある。そのときの事情から、被告の一人は、隠していることがあれば彼に打明けたはずだが、彼は私に向って、なにも新しいものはなかったと断言した。

アナンダが死んでからピブンのクーデターによって彼らが投獄されるまでの一年半に、三人のうちだれ一人として暗殺協力の報償をもらった形跡がないことも非常に重要である。国王を殺さねばならぬ動機はなかったし、私の調査によってもそれを発見することはできなかった。いや、むしろ逆に、私は、彼ら三人の無罪を確信するに至った。彼らをよく知っている人々も、彼らが絶対に王殺しに関係するような人物でなかったことを確言している。

この本を書いている時点で、三人の遺体は、まだ荼毘に付されていない。家族たちは、無実の罪が晴らされるまでは、彼らの魂は浮かばれず、荼毘の火も彼らが行き場のないままにただよう煉獄の火を清めることはできないと信じている。彼らの肉体は棺の中で腐りはてているはずだ。しかし、その悪臭も、不正義が発する臭気ほどにはくさくないのである。

4部　真犯人

1

アナンダは、なぜ死んだのか。

国王の死のまわりには、うわさ、憶測、さまざまなうがった説がひしめいていて、東洋人にとっても西洋人にとっても不可解きわまるものだが、それでも、そんな諸説がすべての可能性を包含しているかといえば「ノー」である。国王暗殺事件の裁判は無残な曲解のうちに終ったが、あらゆる証拠を探し出してきたという点では実に貴重な存在だった。私は、そのデータを借用して、いま、事件の核心に迫ろうと思う。

私の方法は簡単である。消去法でいくのだ。

事故死説は、ほぼゼロであることがわかっている。だが、それは、アナンダが死んだときに一人ぼっちだったという仮定の上のことだ。国王兄弟がよくいっしょにピストルで遊んでいたことは知られている。また、ごく少数の人しか知らない事実だが、おどけ屋のプミポンがときどき銃口を兄のアナンダに向け、アナンダがきびしい顔をしてやめさせるようなこともあったらしい。この〝事実〟は、タイの内情を知る西欧人たちに一つの憶説を信じさせる原因になっている。それは、プミポンが兄の病床を見舞い、ピストルを弄んでいるうちに誤って兄を撃ってしまったのだ、という説である。

この憶測に対してだれよりも有力な裏づけを与えているのは、当時十七歳だったプミポン現タイ国王その人といえる。兄アナンダが死ぬまでの陽気さにくらべて、それ以後の彼の沈鬱な顔や態度は目を見張らせるほどの変化だ。当時の彼の若さ、不愉快なことはすぐに忘れてしまうタイ人の特性などを考えると、プミポンの沈鬱さは異常なほど長く持続している。それを後悔ないしは罪の意識と解釈できないことはない。

裁判に提出された証拠の中にも、この説をバックアップする証言がある。銃声が聞える直前、女官長とプミポンは、宮殿の中のプミポンの寝室と子供部屋のあたりにいたことになっている。女官長は、プミポンの寝室で八ミリのフィルムを整理していて銃声を聞き、駆けだしたと述べている。プミポンは、銃声は聞えず叫び声がしたので子供部屋を出たと証言している。この食い違いは、

プミポンが自分の私室にはだれもいなかったと語っているのと合わせて、実に不思議というほかない。

プミポンは、叫び声がしたので表廊下へ出てみたら侍女がいたと言う。場所は、アナンダの書斎に通じる廊下である。なにかの理由で、ほんとうに書斎に鍵がかかっていなかったのなら、プシポンはそこからアナンダの寝室に入り、事件後に同じドアからとび出し侍女に会うという段取りが理論的には可能だ。その場合には、更衣室前の裏廊下にすわっていた二人のボーイとは顔を合わせずにすむわけである。

遺体が沐浴されているあいだにブットが聞いたという王母殿下とプミポンの興奮した会話も奇妙だ。

「あなたがそうしたいなら、好きなようになさいよ」

解釈のしようによっては、プミポンは、階下で行なわれている宮廷会議に自分の過失を報告したがっていたととれないこともない。同じように説明不可能なのは、その夜、プミポンが侍医ニット博士に向って「どうか私をこんな状態に放っておかないでください」と、心から訴えたことである。

きわめて不思議なことだが、裁判のあいだに、アナンダが左利きであったかどうかという問いは一度も発せられなかった。実のところは、彼は右利きで、ピストルは左手の近くに落ちていたのだ。ピストルを入れたキャビネットはベッドの左わきにあり、銃弾の射入口は左の目の上だった。もしプミポンがベッドの左わきに立ってピストルを取出し、冗談半分にそれを兄に向け、誤って発射し、一瞬の恐怖に包まれた凝視ののちにピストルを手から取り落して逃げたとすれば、そのピストルは発見された位置にあるはずである。

つぎはプミポンにとって、実に残酷な仮定だが、もし事故ではなくて故意の射殺ということになると、ふつうのことではすまなくなる。彼がアナンダの寝室へ行ったという仮定も、非常な疑惑を呼ばずにはおかない。兄殺しの意図がないのなら、更衣室のほうの入口から入るのが自然だ。プミポンは、ボーイたちに話しかけたのだから、彼らが裏廊下にいることも知っていたわけだ。

動機は？　単純である。自分が国王になりたかったのだ。兄を殺すチャンスはあった。大事なときに、だれも彼を見ている者はなかった。どこにピストルがあるかもわかっているし、使用法も知っていた。それだけの状況

証拠につけ加えるものはいくらでもある。アナンダ死後のプミポンの常識を超えた陰鬱さ。王母殿下とのあやしい会話。女官長が聞いたという銃声を聞いていないことの不思議さ。ほんとうに自室にいたのなら会っているはずの女官長を、見なかったという証言。みんなが見たというアナンダの右腕を彼だけが見なかったこと。最後に、事件の夜のニット博士への懇願。そのときのプミポンは、兄の死が事故死だろうとも言っている。45口径ピストルに安全装置があり、アナンダの慎重な性格を知っているプミポンが、事故説をとるのはつじつまが合わない。

もしプミポンが国王暗殺事件の被告席に立たされていたら、三人の被告を有罪にしたのとまったく同じ論理によって、法廷は彼を有罪にすることができただろうと思われるのだ。しかし、ここでもまた証拠になりうる事実を仔細に検討してみると、容疑はたちまちに薄れ、プミポン犯人説は影のように蒸発してしまう。三人の被告を有罪にした法廷の論理が、公平な第三者から見るときわめてばかばかしいのと同様に、プミポンを有罪にすることにも決定的な無理があることを指摘せざるをえない。つまり、プミポンと暗殺を結びつける実質的な証拠が、ただの一つも存在しないのである。

プミポンが兄といさかいをしたり、兄を憎んでいたという証拠があれば話は別だ。あるいは、事件の直前か直後にアナンダの寝室のすぐそばにいるのをだれかに見られていたり、事件の前に兄のピストルを所持していたり、二人のボーイがアナンダと話しているプミポンの声を聞くか部屋を歩きまわる足音を聞いたりしていたら、嫌疑ありといえるかもしれない。表廊下にいた侍女が、プミポンが国王の書斎のほうから来たと証言したり、王母殿下や侍医との会話の内容について彼が説明に窮したりすれば、プミポンを犯人に擬することは不可能ではない。だが、プミポンと暗殺行為のあいだに介在すべき重要かつ実質的な証拠はただの一つもないのである。

いや、状況証拠さえ欠落しているといってもいい。ローザンヌのワタナ荘の庭で、アナンダとプミポンがクラブごっこをしていたのは遠い昔の話ではない。兄弟の結束は固く、一家は王母殿下を中心に緊密な一体をなしていた。プミポンはまだ十七歳で、彼が王位を狙っていたことを信ずるに足る材料はまったくない。生れたときから王位はプミポンにとって遠いものだったし、王位に就くことがさほど楽しいものでないことを彼は知っていたはずだ。

それにもかかわらずプミポンが王位簒奪をはかったと仮定しても、わざわざ人気の多い朝、二人のボーイがドアの前にすわっている瞬間を選ぶはずがない。またジャズの好きな、外向的な青年プミポンは、ただの一度も衝動的な殺人者、人を殺すほどの激情の持ち主である一面を見せたことがなかった。そして、事件直後のプミポンの言動を分析してみると、どこにも凶悪な暗殺者ないしは重大な過失者のそれが見当らないのである。

事件後のプミポンの行動は理解できる。兄の急死というショック、アナンダの遺体に抱きつく母の姿、兄の遺体を銀甕に入れるまでの陰気きわまる儀式、兄の死の背後にわだかまっているらしい陰謀、その陰謀によって危険にさらされる自分の生命……そんなものは、彼が長いあいだ知っていたローザンヌでの安穏で自然な生活からはまったくかけ離れたものであった。しかも、兄の死という悪夢のような事件のほとぼりがさめぬうちに、自分は突然に王として推され、生命の王、国の守護者として祖国の歴史に対して責任をとらねばならない立場に立たされたのである。プミポンは、アナンダよりも人情の機微に無経験だった。それだけに、世の荒波から隔離されていたそれまでの生活を捨て、突然の変化に対応するためには、よりいっそうの踏みきりが必要だったことと察せられる。

プミポンをめぐる暗いうわさはうそであり、彼は兄の死については無罪である。しかし、憶測は、それで終ったわけではない。まだ王母殿下がいるのだ。

うわさによると、王母殿下は、プミポンを王位につけたかったのだという。プミポンのほうがお母さんっ子で、彼女の言いつけをよく聞いたからだそうだ。しかし、ご一家のむつまじさは、国王一家がバンコクへの帰途に立ち寄ったインドでイギリス陸軍関係者の何人かが実際に目撃している。彼らが見たところでは、王母殿下は優雅に、しかししっかりと二人の子を掌握し、アナンダとプミポンは絶対に母の言いつけにそむくことはなかったという。この事実は、王母殿下容疑説を一笑に付してしまうだけの重さがあるといってもいい。

国王ご一家の中に犯人がいないということになれば、

ほかを探さねばならない。たとえば、反プリディの政治家たちはどうか。

民主党はプリディが倒されれば政権を握れる位置にいた。だから動機はある。そのほかにも疑わしい点がある。王殺し事件に関連してプリディの名が上ったとき、民主党の多くはうわさを打消さず、逆にそれをあおるようなことをした。その中には、プリディの自由主義（リベラリズム）を喜ばない王制派も多くいた。王制派は、しばしばバロンピマン宮殿に伺候し、従って宮殿内部に通じている。プリディ支持派の中からは、民主党が国王暗殺者を雇ったに違いないという説も出たほどだ。だが、もしその説が正しかったとしても、民主党は皮肉な〝戦果〟しか収めえなかったことになる。民主党が政権の座についたのはプリディ逃亡後ピブンに利用された一九四八年の数カ月間だけで、それいらいずっと政治の枢要から追われることになってしまったからである。いずれにしても、プリディ派の主張には根拠がない。民主党が国王暗殺に加担していたという証拠は、ただの一つもないからだ。

民主党首クオン・アパイオンは名家の出、プラモート兄弟も王族である。彼らは右翼王制派ではありえても、国王殺しの犯人にはなりえない。ナイ・チットやブット同様、夢にも王に手をかけることなど考えない連中だ。それだけではない。彼らは玉座を狙う人間がいることを本気で心配していたからこそ、反プリディ世論をあおるようなことをしてしまったのである。

プリディが王のいのちを狙っていたと本気で信じ込んでいた王制派が、騒ぎを拡大するに至った課程は、少し検討してみる要がある。その鍵になるのは、アナンダよりさきに死んだボーイ長のチャンだ。宮殿に働く役人や召使いの中で、不吉な予言を口にしていたのはチャンだけだった。彼は、国王一家の帰国直後から、その予言をしていた。

チャンは、自分の健康を損ねていたために、精神的にも不安定になり、妄想のとりこになっていたのだろうか。それとも宮中の作法を知らないチャリューに反感を抱き、それがチャリューの後援者であるプリディや、チャリューと仲がよすぎるナイ・チットへの嫌悪に発展したのだろうか。あるいは、危険を言いたてることによって王様一家に自分がよく思われようと狙ったのだろうか。こうした理由の一つ、あるいは複数の組み合わせに

よって、チャンは自らをトロイの不吉な予言者カサンドラに擬したもののようである。

プミポンの証言どおりにチャンが45口径ピストルをアナンダに贈呈したかどうかはともかく、彼が自分が信じる予言をプミポンや王母殿下の耳に吹きこんだのは事実だろう。私の調査によると、彼は王制派のだれかれに宮中の警戒が不十分であること、王様のいのちを狙う者がいることをご注進に及んでいたそうである。そのころ、王制派はプリディとたもとを分ち、反対にまわろうとしていたときだった。その動機は、基本的にはプリディ不信である。折りも折り、チャンの言葉は、沃土に播かれた種子の役目を果たした。チャンが予言していた国王暗殺が事実になったとき、芽は成長して一気におい繁り、森になった。

人々は、森を見て、木を見ることを忘れた。裁判のことを含め、国王の死後に起ったすべては、りっぱな近代的教育を受けた人たちでも容疑と真実を混同することがあるという事実の一例にすぎない。

もし動機説から犯人追及を続けるなら、なによりもアナンダの死によってもっともとくをした人物を洗ってみなければならない。それはピブンだ。

かつてはタイの総統として太陽と輝きをきそったピブンは、戦犯容疑者として獄につながれ、アナンダの死の数カ月前に自由になったばかりだった。かわって太陽の地位についていたのはプリディだ。プリディは、絶対に政界へのピブンのカムバックを許さないだろう。しかし、ピブンはみごとにカムバックした――アナンダの屍（しかばね）を乗り越えて。

ピブンのクーデターが掲げた最大の公約は国王怪死事件の真相究明だった。その〝真相〟は、ほかならぬプリディを失脚させるためのものであった。ピブン政権が圧倒的な力によって恐怖政治をしいたこと、彼が政治の原則など捨てて顧みない男であることなど、ピブンにはプリディ以上に悪役がふさわしいように思える。王室に対するピブンの態度もはっきりしない。政治犯人を獄中にとどめ、プラチャーディポク王の名誉回復を怠ったのは彼である。プリディを倒し、再び権力を握るために、ピブンが手をまわしてアナンダを暗殺させたと考えるのは自然だ。この説をとる人々は、ピブンが処刑された二人のボーイの遺族に与えているわずかな年金をよく引き合

いに出す。ピブンの良心の苛責が払わせる補償金だというわけである。

しかし、ピブン犯人説の欠点は、アナンダの死とクーデターのあいだに時間がありすぎることだ。国王を殺したことによって直ちに時の流れがピブンに有利に動き始めたのではない。事件後十七カ月のあいだにタイ政界に起ったこと――プリディに対する疑惑、プリディと民主党の対立、荒れに荒れた国会、イギリス駐留軍が軍事的真空を残して引揚げ、それをピブン支持の陸軍が埋めたこと――を、ピブンは事前に予測することができなかったはずである。

ピブンはカムバックの機会を創造したというよりは、それを利用したというべきだが、ピブン犯人説もまた、これまでの諸説と同じく致命的な欠陥を持っている。それは、彼と国王の頭部を貫通した銃弾とを結びつけるものがなに一つないからだ。

アナンダの死と自分の利益が結びついていた人が、これですべて出尽したわけではない。残っている連中の一人は、前歴のはなはだあやしい警察長官パオである。だが彼の犯行を疑わせる証拠は一つとして発見されていない。この件に関しては、パオは完全にシロだ。

ほかにも容疑者はいないこともない。それは、単にアナンダの一生になにかの関係があったという理由だけで、疑えば疑える人たちである。召使い、王室庁職員、王族、ローザンヌの友人たち……。だが、証拠が一つもないのだから、彼らもまたすべて無罪放免してよさそうだ。もっとも、証拠のあるなしには関係なく、うわさは流れたことがある。たとえば、ギリシャ人らしい男（つまりセライダリス）と国母殿下の秘書（ナイ・アネク）は、実は国王たちといっしょに帰国して、バロンピマン宮殿のさるところに秘密裡に囲われていた、というたぐいのうわさである。事件のあとで、プミポン王が帰国したときには、ナイ・アネクも一行に従ってバンコクに帰ったのだが、奇想天外なうわさは、そんな真実にはお構いなしに跳梁したのだった。

以上あげてきた〝容疑者〟説とはまったく別の、もっと真面目な話もある。それは共産党犯人説である。国王の死に伴って起る混乱に乗じて決起し、政権をとろうとはかった共産党がやったのではないかとの憶測である。

アナンダが死んだとき、タイの共産党は非合法化され

ていた。タイの国連加盟と引き換えに大国の圧力によってその禁が解かれたのは一九四六年末のことである。それまでにも地下運動はやっていたが、非常に小規模なものだった。中国はまだ内戦の最中で、当時の東南アジアの左翼諸政党は後年のようにしっかりしたものではなかった。たとえ国王の死がタイを混迷に陥れると知っていても、タイ共産党が、それを利用して一気に勢力を伸ばすには時期が悪かった。そのうえイギリス駐留軍がいるのだから、武装蜂起するにしてもぐあいが悪いわけである。戦後のギリシャで、ちょうどそのころ、イギリス軍は共産党と戦っていたのだ。

プリディにまず全権を掌握させ、ついでそれを乗っ取るのが共産党の計略だったという説もあるが、アナンダの生前にも死後にも、この説を裏づけるような証拠はなにもない。王室は、どのみち憲法によって地位を与えられているだけで実権はなかったのだが、共産党あるいはプリディその他が王制を倒して権力を手中にしようとしていたという説は、王一家をみなごろしにしようとする犯罪計画の証拠がないかぎり成立しない。そのような計画は、痕跡すらなかっただけでなく、アナンダが死んだ日にプミポンが、ほかならぬプリディによって王位継承を慫慂されたのだった。

共産党が犯人でないとすると、容疑者のリストはおしまいである。私たちがいままで俎上にのせなかったような犯人――たとえばミスター・エックス――の可能性はあるだろうか。

結論を言おう。犯人はいない。証拠のどんな欠落も、事実のどんな状況も、バロンピマン宮殿という現場のどんな綿密な検討も、他の犯人の存在を疑わせるものではない。犯人が存在すべきあらゆる徴候、疑惑、理由がない。リストはすべてチェックした。われわれの消去法は完結したのだ。

もう一度、リストを確認しておこう。プリディは無実であることがわかった。ワチャラチャイ、チャリュー、ナイ・チット、ブット、プミポン王子、王母殿下、民主党、ピブンとその配下、ローザンヌの人々、共産党……すべて無罪という点で同様である。

だが、アナンダは死んだ。だれも殺さなかったとすれば、残る犯人はただ一人である。それはアナンダ自身だ。

2

かんじんのところについては状況証拠しかない。殺人の現場を見た人はだれもいないのだし、ましてアナンダの胸のうちを読むことは不可能だ。

アナンダが死んでからの長い年月、だれ一人としてそれらしい犯人の名前や手口がうわさに上ったことはないが、だれかが想像もつかない方法で王の寝室に侵入し、犯行後に摩訶不思議な方法で立ち去ったと仮定することは、理論的には可能である。ただ、それは言葉の上だけのことで、ほとんど不可能な手口でなければならないところから、実際的な問題としてありうるとはいえない。

人殺し、ないしは探偵小説が好きな人々のために、想像の犯人がどんな方法で国王を殺し逃亡するに至ったかという手口を、もう一度だけチェックしておこう。ただし、その犯人は、すでに私たちが当ってみた人物のうちのだれでもなく、二人のボーイも完全に無実であるということを認めたうえでだ。

まぼろしの犯人は、まずグランド・パレスの護衛を、ついでバロンピマン宮殿のそとにいる衛兵を巧みにかわす。宮殿の中の深夜番の目にもとまらない。彼は夜のうちにアナンダの私室に入って、仏間のカーテンのうしろに隠れたと仮定しよう。

午前六時に、王母殿下がアナンダに薬を飲ませに来ている。犯人は、それでもじっと動かない。彼がアナンダの習慣を知っていたなら、国王が午前八時から八時半までのあいだに起きることを承知しているはずだ。アナンダは、確かに起き上り、便所へ行った。そのあいだにだれかが寝室に入って来ても不思議ではないところだが、犯人は、このチャンスをつかんで大胆にもベットの横のキャビネットから45口径ピストルを取出したと仮定しておこう。アナンダがベッドに戻り、オレンジジュースを持って来たブットを追い返して再び眠りはじめたのを見て、犯人は、予想外の幸運に狂喜したことだろう。衛兵や王室庁職員の目をことごとくかすめ、あまつさえ更衣室のそとにがんばっているナイ・チットとブットにも発見されずに、犯人は目ざす国王と二人きりになることができたのだ。

午前九時二十分ごろ、犯人は蚊帳に近づいた。ベッドからほぼ一歩の距離でベッドを取巻き、裾に押えの棒が入れてある蚊帳だ。犯人は、わざわざ時間を浪費し、蚊帳のそとから撃たずに、その合わせ目を開いて中に入った。（現場検証では、蚊帳には穴がなかった）。蚊帳の中で、犯人は高さ四フィートのベッドヘッドによりかかり（こう推理する理由は後述する）、射撃する。

それから自殺偽装である。ピストルをアナンダの手に持たせず、その近くに置く。しかも、利き手でないほうの手の近くだ。これまでの犯人の氷のような冷静さとくらべて不思議だが仮定の話だからやむをえない。ピストルをアナンダの手に持たせなかったことは、自分の指紋が残っているかもしれないことを意味する。手袋をしていたのなら、アナンダの指紋を消してしまった可能性がある。あるいは、最後にピストルを掃除した召使いの指紋が残るかもしれない。いずれにしても、ピストルの検証が正しく行われれば直ちに自殺説が覆されるような過ちを彼はわざわざ犯さねばならないのである。

それまではよかったが、それからがたいへんだ。書斎のドアから表廊下へ逃げるほかないのだが、フロントポーチで食事の仕度をしていた給仕が、銃声を聞いたとたんに首を突き出して表廊下を見渡したのだが人影を見なかったと証言している。犯人は、このときは、まだ書斎のドアを開けていなかったのだろう。といって、ぐずぐずしてはいられない。王母殿下が走ってくる。

だが、寝室になだれ込んだ人々は、だれ一人として犯人を見ていない。王母殿下、ナイ・チット、女官長の三人はまっ先に来た。女官長はアナンダの脈が打っているのを見ているほどの早さだ。専門的なデータによれば、これは死後三十秒以上はたっていないはずだ。続いてプミポン王子、ブット、侍女、ポーチにいた給仕が来た。だれも犯人を見ていない。メインホールにいたボーイも人影を見なかった。階下にいた召使いや職員も、なにも知らない。衛兵からは、あやしい出入りの報告がない。暗殺犯人は、侵入時と同様にまったく不思議な蒸発をとげただけでなく、事件後何年もたったというのに、いまだに正体を見せないのだ。

暗殺説を採用しようと思えば、以上のすべてを認めなければならない。

犯人は壁をよじ登って窓から侵入し、窓から逃亡した

のかもしれない。あるいは、想像力豊かな某王族が主張したように、天井にひそみ、梯子を使って国王の部屋に下りたのかもしれない。しかし、裁判官たちが綿密な現場検証をしたのに、それらしい形跡はついに出なかった。私は、バロンピマン宮殿の改築が行われたときに、たまたまバンコクにいた。そして、犯人はいかなる方法によっても、発見されることなしにアナンダの私室に入ることは不可能であるという私なりの結論に達した。

暗殺説には事実の裏づけがなく、説得力のある仮説さえ立てられない状態である。しかも容疑者はすべてシロだ。とすると、どうしても自殺説が出てこざるをえないのだ。もし、前述の証拠の中に洩れがあるなら、ほとんど起るべからざることだが事故死もありうる。だが、私は、一滴の水も洩れる余地がないと確信している。洩れるどころか、証拠を調べれば調べるほど自殺の可能性は増大するのである。

なによりも、アナンダにもっとも近かった人々が、王の死の直後に見せた反応を思い出してほしい。混乱のうちに表現されたものであるから、おそらくかえって事件の真実を示すものと思われるからだ。

王母殿下は、アナンダの死因については、いっさい積極的な説明をしていない。しかし、彼女の反応は注目に値いする。

アナンダの死亡が確認されると、王母殿下は直ちにシーツとアナンダの寝巻を取除き、ニット博士に遺体を清めるように命じている。彼女が博士に向って言った絶望の言葉「こんなことが起るなんて……」には、他殺を示唆するようなニュアンスが全然含まれていない。彼女は、遺書を捜すように命じた。彼女の悲嘆は深く、今日なお息子の死については語れないほど持続的なものだ。これは、殺人者の狂気ないしは敵意に対する反応とは考えられない。

プミポン王子は、悲しみのうちにも冷静に反応した。もし犯人があたりに潜んでいると思えば、冷静ではいられなかったはずだ。「ボーイ長のチャンが私に警告していた」という証言は年月が経過してからのもので、事件直後の王子は、だれにもチャンのことを話さなかった。それだけではない。歎く母を慰めていた王子は、事件の日の夜、ニット博士に向って「兄は事故死としか説明できないと思います」と語っている。この事実はプミポンが、その日の午後に発表された政府声明という藁にすがりたがっていたことを物語っている。プミポンと同じ理由によって、声明の起草者たちは、自殺の事実を隠して事故死を装おうとしたのだ。45口径ピストルの使用法に通じているプミポンは、兄アナンダが事故死ではないことを知っていた。アナンダの死後、プミポンの態度ががらりと変ってしまったことも、事件が単なる事故でなかったことを雄弁に示唆している。

アナンダをもっとも長く知り、彼にもっとも近かった二人のこうした態度は、いったいなにを意味するのか？

事件直後の全員の反応は、意識的、無意識的の反応をひっくるめて、明らかに殺人に対するそれではない。まもなく証拠が提出され、諸種の証拠や証拠らしきものに対する疑惑が出され、長い長い裁判ののちに他殺説が確定する。だが、少くとも事件直後には、自殺説は排除されていなかったことが明瞭である。自殺はありえないこととはされていなかった。国王自殺の可能性は、深い悲哀を伴って、人々の心の中で燃えていたのである。

王母殿下と弟のプミポンを除くと、子供のときからアナンダを知り、最後の六カ月間にはもっとも身近かにいたのは二人のボーイである。ナイ・チットは、そのひとことが彼のいのちとりになったのだが、瞬間に王様は自害だと感じた。ブットは、判断めいたことはなに一つ言わなかった。しかし、彼が調査委員会の訊問でだまりとおし、のちに法廷で語った証言は、きわめて興味深いものだ。

ブットは、生前のアナンダを見た最後の人間として、彼が瞥見したアナンダの奇妙な振舞いを語った。前日に国王が手紙らしいものを焼いていたことは、ごく自然に考えて、アナンダの心に自殺があったということを示すものだ。だが、それは、待ちかねていた外遊への単なる出発準備と解釈できないこともない。それにしても、死の一時間前のアナンダの態度については、なんともふっきれない疑惑が残るのである。

ブットは実直で愚鈍でお人好しだ。彼は、ほんとうの意味で、素顔のアナンダを知っている。バスから上ったアナンダを拭いたのも彼だし、髪をといたり、一人ぽっちで仏像に祈るのを手伝ったり、ベッドに入ったアナンダの蒲団を押さえ、朝になると起したのもブットだった。アナンダと彼のあいだには、きわめて暖い心の交流

があった。外遊にブットを連れて行くことになったのもそのためだ。

ブットは、細工を弄するような男ではない。そんなことをする知慧がないのだ。もしアナンダがブットの言葉にあるように、朝のあいさつもせずにぼんやりと彼のほうを見、それからベッドにすわってひざを立て、オレンジジュースを持っていった彼を無言で追い払ったとするならば——ブットは、実際にそれを見ていないかぎりは、そんな話を発明できる男ではないのだから——実に不思議というほかない。しかし、アナンダの死の直後に起ったことがらは、もっと不思議だというべきだろう。

現場に駆けつけた人々のうちから二人の態度をくらべてみよう。女官長は、あまり参考にならない。彼女が他殺説を主張し始めたのは、事件後はるかに日がたってからだ。一方の侍女は、気づかわしげな顔をして近づいてきたプミポンに、ピストルを撃ったのは国王だと報告した。彼女は「ナイ・チットは王様がご自害なさったと言っていますが、そんなことありません。事故に違いありません」とは言っていない。彼女は、ナイ・チットの言葉を、そのニュアンスどおりに受取っていたのである。

バロンピマン宮殿の階下に目を転じて、宮廷会議のことを思い出してみよう。王族、閣僚、警察関係者……出席者全員が一様に一つの説を受けいれていた。集った顔ぶれの大部分は、憶測を信じるようないいかげんな人々ではない。まもなく、バンコクという町においては、その周辺の農村で稲が稔るように、根も葉もないうわさがどっさりと稔ることが立証されたのだが、少くとも宮廷会議の列席者たちには疑わしい点はなに一つなかったのである。

彼らが知ったこと、見たこと、聞いたことは、一つとして自殺説を疑わせるものではなかった。その中の一人か二人が疑問を抱いたのだが、知慧がついたのは日がたってからのことである。

会議に出ていたもっとも重要な人物は警察長官だった。その後、彼は亡くなったのだが、彼をよく知る人の話によると、温厚な人物で、知性も正義心もあった人だということだ。その警察長官が、直ちに宮殿を検証し、関係者を訊問したのだ。一人でやったのではない。何人もの部下を使って綿密にやらせたのである。彼は、まず他殺の線から捜査を始めて、それからアナンダ自殺という結論に到達したのだった。

このようにして、アナンダの母や弟も、アナンダ付きのボーイも、彼の親戚たちも、現代タイでもっとも輝やかしい知性の持ち主であるプリディを含む彼の閣僚たちも、警察関係者も、すべてがアナンダの自殺を積極的に支持するか、あるいは自殺という結論に反対しなかったのだ。事件直後の現場で、悲劇のすぐあとに、アナンダを知っている人たちが一様に一つの結論に到達していた。それなのに、国王暗殺事件を裁いた裁判官たちは、彼らの判断は誤りだと断定したわけだ。

実際の事件から何年もたったのちに判決が下されたことは「裁判」の第七章に紹介したが、他殺と断定した理由を煮つめてみれば二つに要約される。一つは自殺の動機がないことを含むアナンダの性格である。もう一つは、いわゆる科学的証拠だ。この科学的証拠は、アナンダのからだとピストルの位置、および死後痙攣のなかったことから偽装説を導入し、自殺説を葬り去ってしまったのである。私は、第一点をちょっとあとまわしにしておきたいと思う。もし自殺が立証されれば、アナンダの性格や動機がないことなどは決定的な反証にはなりえないからだ。

〝科学的〟証拠と称するものが、手のこんだサイエンス・フィクションの材料にでもする以外にはとるにたらないことはすでに書いた。そのうえ死後痙攣が死後三十秒間も心臓が動いている死者の場合には起りえないことを法廷は知らなかったようだ。それはともかく、この証拠は、法廷自身も認めているように、決定的なものではない。たかだか別のきめ手の証拠に対して副次的な支持情報になるだけの価値しかないものだ。そして、きめ手になったのは、アナンダが絶対に自殺することはありえないという証拠、つまり彼のからだとピストルの位置という証拠であった。

事件の最大の分岐点になったこの点を、少しくわしく検討してみよう。

ベッドの上に仰臥している人間が、自分の頭をピストルで撃った場合、彼の腕または両腕は重力の命ずるままに胸のあたりに落ち、ピストルは彼の手の中に握りしめられているか首のあたりに落ちているのが常識である。法廷で披露された警察の検屍先例によっても、この常識は支持された。しかし、先例の中にいくつかの異る結果

の出たものがあることを考えないでおくとしても、一つだけ間違いがないのは、裁判官の判断がすべてこれ「アナンダが仰臥中だった」という仮説の上に組み立てられていることである。

　裁判官の中のだれ一人として、アナンダの脳の中をやや下向きの直線を描いて後頭部に抜けている弾道が、仰臥中の自殺という仮説には合致しえないという事実に考え及んだ人はいなかった。それだからこそ、犯人がベッドヘッドのほうから近づいて射殺したのだという想像が浮かんだのだった。

　もしアナンダが仰臥中に自殺し、銃弾が彼の脳中を実際に通過したような軌跡を描くためには、彼はピストルを顔の前に構えるだけでなく、さらに銃尾をもっと上のほうへ持ち上げるという奇妙な発射位置をとらねばならない。

　しかし、もし彼がベッドの上にすわっていて自殺者が通常構えるかっこうにピストルを構えたとすれば、銃弾の通過線は、アナンダの遺体解剖によって発見されたのと同じ直線上を通過するはずである。それだけではない。法廷で証言した専門家たちは、ピストル発射時の反動は、腕をからだの中心から見て遠い位置へはねとばすはずだと述べた。だが、もしアナンダがすわって自殺したのなら、彼の上体がうしろに倒れる動作を起すことによって腕の運動は吸収され、死後のアナンダがそうであったように、両腕をからだに沿ってひきつけているという姿勢をとるに至るのではないだろうか。

　ベッドのうえに上体を起していたアナンダは、おそらく両ひざを立てていたものと思われる。ひざの上に両ひじを載せ、ひたいに当てた銃口を固定したのだろう。そうだとすると、上体がうしろに倒れると同時に両足は伸び、安らかな仰臥の姿勢をとるのはきわめて自然である。

　ひざを立てていたかどうかはともかく、ピストル発射時のアナンダのからだの動きは、彼の全身をややベッドの足もとの方向に引きずることになったはずである。実際、侍医のニット博士は、アナンダの足がベッドの足もとの板を突っ張っていたと証言している。

　さらに注目すべきは、銃弾が枕に命中していないことである。仰向きに寝ていてピストルを発射すれば、枕には必ず命中するはずだ。しかし、すわっていて撃ったとなれば、頭の中を通過した弾道の延長線は、枕のすぐ下のマットレスに突き刺さるのが当然である。しかも、銃弾射入時のショックによってアナンダのあごが上ったとすればなおさらといわねばならない。

　45口径ピストルは大きく重い。アナンダは、それをこめかみに当てるか、あるいは口中に発射することができたはずである。だが、もはや理性が十分に働かない瞬間においては、そんな「はず」は問題にならない。そのうえ、そのようなピストル位置は、ひたいに当てる方法とくらべて、ごくわずかだが失敗の可能性を残している。死にたいと願ったアナンダが、本能的に失敗を防いだことは想像される。警察が引用した先例に照らしても、もっとも多くの自殺者が自分のひたいを撃っているのである。

　アナンダは、両手を使って問題のピストルを発射したものと思われる。片手なら、手首を無理にねじ曲げなければならない。まず右手でピストルを持って射撃位置に支え、それから左手をそれに添えたのだろう。左手の親指を引き金にかけ、左手の残りの指は銃尾にまわして安全装置を押し下げたのだ。

　いろんな姿勢が考えられるが、以上がもっとも説得力のある説明だと私は思う。傷口がひたいの左側だったこと、ピストルが左手の近くに落ちていたことは、いずれもアナンダの左手が引き金を押したことを示唆している。銃がどこに落ちるかを立証することは非常にむずかしい。だが、このように考えてくると、発射の瞬間に両手が離れ、左手のそばに落ちるという動きは、合理的だし納得のできるものだと思えるのだ。

　アナンダが自殺するなどということを絶対に認めないという人もいるはずである。しかし、証拠を信じ理性によって判断しようとする人々にとっては、自殺という結論は、たとえ不愉快なものであっても明瞭である。

　容疑者は、すべて消去された。暗殺説が完全に否定されたことによって、彼らの無実は確認された。あとに残った自殺という仮説は、アナンダのからだとピストルの位置によっては反証がありえないものである。それはまた、事件直後に現場に居合せた人々がとった態度によっても論駁、否定されることがない。

　自殺という仮説が完全に論駁不可能であるのだから、私は、それを結論としたいと思う。アナンダの性格ある

いは動機のあるなしは、もはやこの結論を左右するだけの力を持つことができない。犯人捜しも完了した。だが、もっとも重要な空白を埋めないままに、この事件に終止符を打ってしまうことは、おおかたの読者が承知しないところであろう。

いったいなぜアナンダは、われとわが生命を断ったのか。残された追及の的は、そこに絞られてきた。

3

他殺説をつきつめていって最後に自殺に逢着したとき、一種の落胆を味うなどというのは、人間の悲しいさがの一つである。ほとんどの人は、自殺を殺人とは考えないが、自殺は他殺と同じように殺人行為にほかならないのだ。犯罪者と被害者が同一人物だという事実は、われわれの関心をよりいっそうこの異常な行為の上にひきつけないではおかない。もっと細かく、もっと深く、人間の魂の奥底にあるものや人間と人間の関係が研究されなければならない。

私の知るかぎりでは、自殺に関して少くとも四千五百冊の本が出版されている。ごく少数の例外を除いて、ほとんどが一八〇〇年以降に書かれた本だが。それらは主に人間が自分の生命を縮めることについての哲学的な考察に終始したものであった。

十九世紀の心理学者や社会学者は、はじめ、自殺者はすべて狂人であるという固い信念を抱いていた。今日の研究によると、狂人は、全自殺者のわずか十パーセントにすぎない。だが、一人の人が他人の自殺を見て歎く気持のうらには、相変らず狂気の死という解釈がくっついているようだ。

自殺者が近親者であった場合には、残されたものの歎きはとりわけ甚大である。後悔の情、知っていればとめることができたものをという痛恨が一方にある。また一方には、自殺は人生における明白な敗北の宣言なのであるから、それを受けとめる世評が自分に及ぶのを恐れるのである。

自殺が犯罪とされていない国においても、自殺は一種の道徳的、ときには宗教的な背徳の色を帯びている。われわれは、自殺者の心を思いやって深い恐怖に駆られる。それはまた、彼が死を選ぶに至るまでに経験した死にもの狂いの苦悩に対する同情を呼び起さずにはおかない。だが、自殺には、そんなものすべてを超越した一種の神秘性がある。肉体が生き続けているうちは生きようとするのが生命に内包された本能であるのに、自殺に先立つ最後の瞬間に、自殺者がその強固な本能に打ち勝って意志的に生命を断ったことを思い、その神秘に頭が下

るのである。

　四千五百冊の研究書も、この神秘を解明するには十分ではない。自殺の多くの側面を完全に考究しえた本は一冊もない。自殺に関する研究は、実に矛盾に満ちている。たとえば、不治の病いにかかっている人よりも慢性病の人のほうが自殺しやすいという統計がある。だが、そのような全般的な把握は、決して個々の自殺を説明しない。

　自殺がもっとも多いのは六月である。しかし、十一月に自殺する人もいるのである。また、十人の女を抱えたカトリック教徒の農婦は、都市労働に従事するプロテスタントの独身男よりも自殺する率が低いという統計がある。しかし、だからといって特定のアイルランドの農婦が自殺しないとはかぎらない。

　個々の事例になると、完全に把握することはもっと困難になる。家族が真相を隠すからである。自殺者は、多くの場合、その秘密を墓場まで持っていってしまう。遺書がある場合もある。この面での統計は少いが、自殺者の三分の一は遺書を残すようである。しかし、遺書その他の状況によってたとえ動機が説明されても、専門家によると、意識された動機は必ずしも真の動機ではないということだ。自殺者自身さえ真の動機を意識しない場合があるからである。自殺未遂者に聞けば自殺はわかる、と思う人がいるかもしれない。しかし、自殺者と自殺未遂者という二つのグループは、たとえ一部では重なりあっていても、異ったタイプの人間であるようだ。

　自殺を考えることは、不可知と取組むことだ。だが、いくつかのデータに助けられて、アナンダの自殺を考えてみることはできるだろう。どんな階級も、どんな人種も、文明のいかなる発展段階も、自殺から逃れることはできない。少くとも今日の西欧では、自殺は高い教育を受けた人々に限れば死因の第五位を占めている。統計によれば女よりも男が、若者よりも老人が自殺をしやすいが、六歳の女の子の自殺例が報告されているところをみると性別や年齢は自殺をしない保障にはなりえないようである。私が読んだものの中で、若者の自殺についてはっきりしたことを述べていたのは、十九世紀に書かれたブリエール・ド・ボワモンの『自殺および狂気の研究』だった。この研究によると、若者の自殺の多くは本能的で性急な決断によるもので、動機を追及する当っては全

人格的なアプローチが必要だということである。

　しかし、私がすでに問題にしたように、西欧式の考えかたを、いかに西欧化されているとはいえ、東洋人に当てはめてもいいものだろうか。その問いの答えになるのは、西欧に住んでいる東洋からの移民の研究だろう。それによると、人々が一つの文明から他の文明へと地理的な移動をした場合には、彼らは本国よりも移住地の自殺パターンを示し始めるという。アナンダは、その生涯の大部分を西洋ですごしたのだから、必ずしも東洋的な自殺パターンを適用する必要はないのではないだろうか。

　しかしながら、このさきタイで長く生活するのだというアナンダの自覚、タイの心とも魂ともならねばならぬ彼の地位を考えると、アナンダが西欧化され、自らも積極的に自分を西欧化しようとしていたという事実にもかかわらず、彼の心中の「タイ的なもの」は強く刺戟されていたのではないかとも思われるのだ。

　特定の社会において、自殺を誘発する心理的ストレスの一つとして知られているものに、環境の急激な変化がある。今日のタイの西欧化のスピードは非常に急なもので、バンコクのある精神分析医の話によると、現代タイ人のノイローゼの多くは西欧化への適応不能に原因を持っている場合が多いとのことである。アナンダにとっては、それとは逆の方向のストレスが作用したものと思われる。西欧的な環境の中で成人したアナンダは、バンコクに帰りついたとき、タイ人になることを求められただけではない。タイという国を体現する国王になることを求められたのであった。

　ただでさえ適応には苦痛が伴うのに、感受性が鋭く良

1945年にタイに帰還したアナンダとプミポン（後）

心的なアナンダは王位の重さに耐えかねたのではないかと思われる。少年のころ一度バンコクに帰り、儀式のものものしさや宮廷のしきたり、国民の熱狂などの手応えをあるていどはつかんだことだろうが、最後の六カ月間のバンコク滞在は、責任を負わされた生活の初体験だった。タイ国内にも、国際社会にも、ともに困難な問題が山積している時期に、アナンダはそれらを理解し、それに対する判断を下さねばならなかった。プリディに全幅の信頼を置いていたに違いないから、自分を彼の友人ないしは教え子の地位に置き、プリディの下す決定に憲法できめられたとおりのめくら判を押すこともできたはずだ。しかし、当時のタイ政界のきびしい風土や玉座を取巻く王制派のプリディに対する反感などがそれを許さなかったのだろう。（王制派が言うようにプリディがほんとうに独裁者であったなら、プリディは、彼らが国王に近づくことを許さなかったはずだが）。

思い出されるのは、パオとピブンが、アナンダとの謁見が計画されていたと証言したことである。外遊出発の前夜に、当時のピブンのような政治的にはもはや破産していた男をアナンダが引見するなどという説は、一見、荒唐無稽に聞える。しかし、そのような謁見が実際にアレンジされたかどうかはともかく、少くとも計画されていた可能性は十分にある。パオらの証言によれば、ピブンに会いたいという国王の意志は、王母殿下づきの侍女の夫を通じて伝達されてきた。謁見の場所は、わざわざバロンピマン宮殿を避け、かつて王母殿下が住んでいたスラパトム宮が予定されていたという。

私は、最近、王母殿下にお目通りを許されたときに、このピブン謁見未遂事件を質問してみたが、当時そのようなことは聞かなかった、ピブンはそのころまだ獄につながれていたのではないか、というお返事だった。ピブンは、アナンダが死ぬ数カ月前に釈放されていたのだから、これは王母殿下の記憶違いである。しかし、私にとっては、興味深い記憶違いだった。王母殿下は、アナンダがピブンに会いたいなど言いだすはずはないとは断言しなかったからである。

ひょっとすると、王母殿下はアナンダに、国王の務めの一環として、タイの政治指導者たちにひととおり無条件で会ってみることを勧めたのではないだろうか。もちろん、それは私の憶測でしかない。だが、はげしく相拮

抗する指導者たちが、なんとかして国王に接近する機会をつかもうとしていたことは事実のようだ。そのような動きが、アナンダを深く悩ませたかどうかは疑問だが、少くとも彼の平静をかき乱したことは否定できないと思う。スイスへの帰還は、一時的に重荷を取除くかもしれないが、アナンダは一生、政治のうずから逃れられないことを悟ったことであろう。

アナンダが生れたチャクリ家についても考えてみたい。異常な才人や絶対権力者を輩出した家系である。しかも近親結婚が行われている。完全にノーマルな人を生みやすい家系とはいえないようだ。チャクリ家の外戚たちの中には冗談半分に「チャクリは、みんな、ちょっとおかしい」と言う人がいる。もちろん、これは誇張なのだが、実際にこの家系の中の何人かは些細なことで突然の憤怒に駆られたり、手のつけられないがんこさを発揮したり、ときとして深い憂鬱の淵に沈むタイプの人であった。

アナンダの父に当るマヒドン殿下はりっぱな人物だが、やはりエキセントリックなところがなくはなかった。あるとき、彼は、妹といっしょに外出しようとして待っていたが、妹の仕度があまりにも手間どったので怒りのあまりわれを忘れ、服を着たままそばの運河へとび込んだそうである。そういえば、王子は、父親が実戦に参加を許してくれないからといって、突然、海軍をやめてしまった人でもある。後年には、シリラット病院での勤務を断られたのに立腹し、他の王族たちが引きとめるのも聞かずに北部タイへ移り、そこで病気にかかることになった事件もあった。一つのフラストレーションに直面すると、突如、断固たる決断をもって反応する性格だったのである。父マヒドン王子の「決断力」は、また、とりもなおさず廷臣たちがアナンダの死の直後に彼の性格を語った言葉でもあった（「裁判」六章参照）。

思慮深く、理想主義者で、他人には親切という点では、アナンダは確かに父親の性格を継承していた。それなら、父の性格の弱点も同様に遺伝していたといってもいいのではないだろうか。

アナンダがマーテルデイ幼稚園に通っていたときだが、ある日、彼が同じクラスの子にいじわるをしたので、アイルランド人の修道女が謝りなさいと命じたことがある。アナンダが言うことを聞かないので、修道女が

彼の肩をつかんでゆさぶると、アナンダは、クラス全員が見ている前でいきなりその修道女に平手打ちをくわせたという。

またあるときには、王母殿下が、ある客をインフォーマルなお茶に招いたことがある。アナンダとプミポンは給仕役をしていたが、そのうち突然にアナンダがなにかを取ってくるようにという母の命令を拒否した。がんとして言いつけを聞こうとしないので、とうとう自室へ追いやられてしまったということだ。

このような事件は、どこを探しても非の打ちどころのないアナンダの性格にはなはだそぐわないように見える。あるいは、ごく些細な欠点というべきかもしれない。しかし、物静かで従順だった青年アナンダも、ときにはチャクリ家一流の発作を起こすことがあったという証明にはならないだろうか。

アナンダのそのような性格が少年期だけに限定されなかったという証拠に、彼の人生の最後の時期における精神状態を物語る一つのエピソードがある。

スイスへの帰途、アメリカとイギリスを公式訪問することになったので、王室関係者や政府は、その準備のために国王のご出発を少し遅らせてほしいという意向を示した。ところが、アナンダは、突然、断固たる決断力をもって早い出発期日を主張し、がんとして変更を認めようとしなかったというのである。側近たちは、いつもとは違う王様の性急さに仰天した。アナンダが、なぜそんなに出発を急いだか……一日も早くバンコクでの試練の生活から逃げ出したかったのか、母となにかのいさかいがあったのか、そのほかになにか理由があったのかは、ここでは問わない。ただ、彼の異常な沈鬱さは、自殺の朝に黙ってブットを追い払った行為と関連がありそうに思えるのだ。

アナンダは、心理学者たちがいう「ムード感受性」を持ちやすい性格だったのではないかと想像される。このタイプの感受性のことは、K・G・ダールグレンの『自殺と自殺未遂』の中で、つぎのような表現によって定義づけられている。

「耐えがたいほどの外からの圧力に直面したとき、精神的に健全でノーマルな個体（人間）が自殺するかどうかを断定することはできない。この場合、ノーマルという言葉をはっきりと定義することが困難だからである。自殺の多くは、ムード的感受性の高まりのうちに決行される。ごく薄弱な動機によって、きわめて激越な反応がひき起こされるのは、よく見られる現象である。これはその個体にムード感受性があり、受けとめたムードを行動に転化するからである。自殺するに十分な動機が存在する場合においても、自殺の決行に当っては、そのような感受性が必要なのではないかと思われる。精神的に健全な個体による自殺も、当然、起りうるのである」

よく知っている人が自殺し、その人が決して自殺するタイプでない場合など、われわれはとても信じられないと首をかしげるものだが、右の説明によると、通常人の自殺は決してありえない例ではないことがわかる。自殺者の通常（ノーマル）さ、日ごろの健全さが、かえってストレス下で彼が発揮する異常な決断力を包み隠している。アナンダは、このムード感受性を持っていたのではないだろうか。専門家によると「耐えがたいほどの外からの圧力」は、それに応じて現れる自殺という行為の重大さにくらべて、ときにはごく些細な場合がありうるという。王という地位への適応のむずかしさは、あるいは、そうした圧力の一つだったのではないだろうか。

事件にほど近い某日、バロンピマン宮殿のお茶に招かれたある人は、国王が追加のケーキ一つを食べるにもまず母の許しを求める光景にひそかに驚き、心をうたれたと語っている。イギリス大使トンプソン卿は、その回顧録の中で、宮殿において「国王と、聡明で美しい王母殿下」によって開かれた昼食会に招かれた日のことを回想している。その数日後に、アナンダの突然の死という悲報を聞いたときのことを、同大使は「つい先日の昼食会で、あれほど優雅に出席者たちを接待しておられた王母殿下のご心痛を思うと胸が痛む」と書いている。このような記述は、明らかに、国王による昼食会が実は王母殿下による昼食会であったことを示すものというべきだろう。私自身が調べた結果によると、そのころ宮殿に招かれる客は、すべて国王ではなく王母殿下によって人選されていたという。もちろん、彼女が常に王のためになるような人をと心がけていたことは事実だろうけれど。

アナンダは国王であり、二十歳であり、りっぱな男であった。だが、母に対しては、いつも少年のような従順さを示していたのである。

ご一家がインドに立ち寄られたときにイギリス陸軍の

連中が見たことはさておくとして、アナンダが示した母への従順さは、彼が消化器系の病気によくかかっていたこと、そのために食餌に注意しなければならなかったことと、なにかの関係があるのかもしれない。これは、なかなか意味深いポイントだ。ワタナ荘からバロンピマン宮殿に移ったからとだけでは説明できない点がある。

弟のプミポンも王母殿下も、バンコクへ移ったために腹痛に悩んでいたという気配はない。しかも、アナンダは、その二人よりも体力があったはずだ。アナンダは痩せてはいたが、スイスでの健康な生活で、りっぱな若者に成長していた。それは、彼と握手をしたことのある人々が痛恨の情をまじえながら認めている。一家が最初スイスに居を構えたとき、王母殿下は小児科医を雇っていた。だが、のちにはかかりつけの医師さえ不要になったほどであった。バンコクでのアナンダの病気をノイローゼに原因する腹痛とみるのは医学的には妥当といってもいいだろう。

王母殿下が管理していたのはアナンダの食餌だけではなかった。彼女はアナンダのすべて、彼の全生活を管理していた。彼の全生涯を通じて、とくに父マヒドン王子の死後は、彼女はアナンダの一挙手一投足に注意を払った。平民の出でありながら二人の王を産み、育て、りっぱに育て上げる以外には自分の人生からはなにものも求めなかった献身的な女性にとっては、それは当然のことであった。

しかし、その結果はどうか。もしアナンダの生活に対する王母殿下の気遣いが度を越して大きくなれば、そのこと自体が危険を意味することになりうるのだ。アナンダは、やさしく、母思いだった。母を喜ばそうと願うアナンダは、その願望と、母がしりぞけるに違いない考えかたや感情の板ばさみになったことと思われる。もし完全に母の支配下にあったのなら、かえってはっきりと母にたてつくこともできる。だが、ことはそれほど簡単ではない。アナンダは母を喜ばせよう、反対すまいと努力はしたが、おとなに成長しようとする青年なら抱くはずの、そして一国の国王であれば当然抱いていなければならぬはずの思想や感情に、一方では責めさいなまれていたのではなかっただろうか。

それは、おとなへ脱皮しようとする青年の自己主張だ。アナンダの場合、それはまだ中途半端なものであった。しかし、彼はそんな主張のほこ先を、彼が愛し、子供のときからずっと言いつけを守ってきた母に向けることができただろうか。私は、これに関連して、革命前の北京で記録された青年の異常な自殺率について書いたつぎの一文を思い出す。

「この事実（高い自殺率）は、親への孝行と老人への尊敬の上に成立つ伝統的に保守的、家父長的な文化を考えると容易に理解できる。そのような精神風土は、若者、とくに強固な家族制度の中に縛られた女性に対して強いストレスを加え、自殺を招来せずにはおかない」（P・M・ヤップ『香港における自殺』）

この文章の中の「若者」「女性」を「母にきびしく育てられた青年」という表現に置き換えれば、アナンダの場合と驚くほど近似しているのに気づかずにはおれない。

私は、王母殿下を、決してえげつない教育ママになぞらえるつもりはない。アナンダの死は、むしろ古典的な悲劇というべきものであろう。アナンダのまわりにいた人々もすべていい人たちばかりだった。現在でも、彼らはりっぱな人々である。彼らになにがしかの欠点があったとしても、それを煮つめてみれば一滴の雨滴にもたりないことだろう。

王母殿下は、父を失った三人の子を育てねばならなかった。そのうちの一人が、世界が戦後の動乱のるつぼに投じられているときに祖国を統治することになった。彼女自身からだは決して強いほうではなかったが、亡き夫の記憶と自己に課せられた義務に懸命にこたえようと、アナンダのために献身したのだ。彼女は国民によって、いわば国王を信託されていたのである。

もちろん深い愛情もあった。確かにプミポンのほうがお母さんっ子である。兄弟がいれば、弟のほうがより母に愛されるのは世間の通例だ。アナンダ出産のときの難産も、なにかの心理的痕跡を残していたかもしれない。プミポンが王位につくことはまず考えられなかったので、彼女は、無意識のうちにもプミポンとはよりリラックスした関係を持つことができたということもあろう。アナンダと王母殿下とのあいだにもし距離があったとすれば、たかだかそれだけのことである。そして、おそらくそのために、彼女はアナンダの死後も長くはげしい悔恨の情にとらわれているのであろう。

スイスでの一家の生活は、ナイ・アネクやセライダリスたちも包み込んで、外界をシャットアウトした、非常に強固な家庭の生活だった。アナンダが友人の家を訪れるときには、セライダリスが〝母の延長〟という形でついて行った。そのため、母に叱られそうなことをするときには、アナンダは、それを隠れてやった。これは、成長期の少年にとって、きわめて自然なことである。私が、ここでもう一歩進めて当時のアナンダの生活を掘り返してみるのは、彼の悲劇の決着をつけたいからにほかならない。

国王暗殺事件裁判での証言の中で、王母殿下とプミポンは、バンコクに来るまでにアナンダが銃を持ったのは、お祭りのときの空気銃だけだったと述べた。私はそのことを知っていながら、セライダリス氏に、少年期のアナンダがピストルで遊んでいたことがなかったかと聞いてみた。絶対にそんなことはなかった、というのが彼の答えだった。

セライダリス氏は事実を知れば驚くに違いない。エコル・ヌーベルに通学していたとき、一人の級友がちょっと古いが使用できるピストルを売ろうと持ちかけ、アナンダはどうしてもそれを買いたがったという事実があるのだ。一家は質素に暮していたから、アナンダはそれを買う金がなかった。やむなく古いタイプライターを別の友人に売り、その金でピストルを購（あがな）ったのであった。

大戦の最中だから、少年が銃に興味を持つのは不思議ではなかった。アナンダは弟プミポンやセライダリスと、よく戦争ごっこをしていたほどだ。だが、彼がピストルを買った事実を家族がだれ一人として知らなかったのは、きわめて意味深長なことである。

もう一つ、アナンダ自身が意識していたかどうかはわからないが、彼の自殺に関係しているに違いないデータがある。

一九三五年、彼が十歳で王位についたとき、バンコクに置かれた摂政評議会の一人に、父マヒドン殿下のいとこに当るオスカー王子がいた。五十二歳になる温厚な人だったが、やがて政争のうずに巻込まれ。その年のうちに頭をピストルで撃って自殺したのである。国王一家に近かった彼の死は、ワタナ荘にとっては非常なショックだった。自殺には六パーセントの遺伝要因があるという。馬車につながれた馬が自由に遊べないのがかわいそうだと同情したアナンダのことである。オスカー王子の自殺は、感じやすい彼の胸の奥深くに沈潜したものと思われる。

アナンダが、その少年期の末期において、ひそかにピストルを買ったというエピソードに加えて、私は、それと同様にこれまで一度も語られたことのなかったアナンダ自身に関する秘話を次章に物語りたいと思う。それを知っているのは、外部の目から秘密をしっかりと守っている三人か四人の人だけだ。だが、アナンダの死をめぐる物語のクライマックスとして、私は、どうしてもその秘密のベールをはぎとらねばならない。それはまた、アナンダが、宦官ばかりを寵愛した伯父ラマ六世と同じ趣味を持っていたという、今日なおささやき続けられているうわさを打消すことにもなるだろう。

4

アナンダがハイデルベルグに生まれたのと同じ年、そこからほど近い町に一人の娘が誕生した。ローザンヌの西二十五マイル、ヌーシャテル湖に望むグランドソンの町に住んでいた牧師ユージン・フェラリの一人娘である。牧師夫妻には、のちに長じて医者になった男の子がすでに一人いた。生れた娘はマルレーネと名づけられた。

マルレーネが五歳になったとき、フェラリ一家はローザンヌに移った。ベルディユ街——裕福な町ローザンヌのとりわけ裕福な住宅区である。植木の多い庭の中に広広とした家々が静まりかえっている。一家は、そこにあるマンションの一つに居を構えた。フェラリ牧師は順調に昇進した。今日では、彼は大僧正で、スイス・カルビン派の六人の司教の一人になっている。背が高く、体格も堂々としていて、オリーブ色がかった顔のつやは彼の出がイタリア系なのをうかがわせる。整った目鼻立ち。物腰はていねいだが、ふとした瞬間によそよそしさを感じさせる。それにひきかえ、見るからに家庭的で愛想のいい夫人は、幸福でのびのびと育った二人の子と夫に身も心も捧げきっているようだ。もっとも、親に反抗するような子供は、カルビンが生きていたら、直ちに絞め殺せと命じたことだろう。

アナンダがエコル・ヌーベルを卒業し、一九四三年九月にローザンヌ大学の法学部に進んだとき、十三人の級友の中に女の子が一人だけいた。それがマルレーネ・フェラリだった。

今日のマルレーネを見ると、花ひらく若さのころにはどんなに美しい娘だったかが想像できる。美しいプロポーション、ハシバミ色の目、きれいな歯、豊かなブラウンの髪……。彼女の肌のほのかな翳（かげ）と話す言葉のそれとわからぬほどのアクセントが田舎生れであることを物語っているが、同時にソフィスティケートされた都会的な身のこなしもちゃんとそなえている。あまり笑うほうではないが、思わずつり込まれる微笑。おしゃべりではないが、決してうそをつかない口もとだ。マルレーネは、とくにアナンダのことになると、ほとんど話したがらない。このことは、彼女がアナンダの存命中に二、三度会ったきりその後は会っていない王母殿下の態度を思い起こさせる。

タイ国王とスイス人牧師の娘の友情は、四カ月という時間によってはぐくまれた。教室では、よく隣り同士にすわった。放課後、友人の家にいっしょに招かれて会うこともあった。アナンダには、いつもセライダリスがついていた。アナンダは、また、フェラリ家にも数度招かれた。学友たちのグループが一度か二度ワタナ荘に招かれたことがあるが、マルレーネはその中に入っていた。他の友人たちもまじえてモンショワジのクラブでいっしょにテニスをしたこともあった。あまり人目に触れぬようというのが王母殿下の方針だったから、アナンダは喫茶店、バー、レストランのたぐいにはいっさい行かなかった。友人たちが彼の家に来ることもまれだったから、他の学友たちと同じようにマルレーネを含む友人たちと気ままにつき合う機会はなかった。

それでも、本能的に二人の仲を感じとった王母殿下は、ある日、アナンダを呼んで話し合った。タイの王として、外国の女性との結婚は絶対に許されないのだ。もとより母の命にはそむいたことのないアナンダのことである。ひとこと言うだけで十分だったのだが、アナンダははっきりと母の言いつけを守ると約束した。

マルレーネの側にも同じようなことがあった。カルビニストの信念と国王の威厳などはものの数ともしないスイス式デモクラシーを信奉する牧師のことだ。アナンダの人柄には不満はないが、女性の地位が低い東洋人との結婚を許すことはできない。父親の牧師は、そう言って娘をさとした。

しかし、双方の両親が真剣に心配しなければならないほど二人の仲が深かったわけではない。会うのをやめさせるほどではなかった。仲のいい学友同士のつき合いならと親たちは安心していた。

そうはいかなかった。アナンダもマルレーネも親の意志にさからうつもりではなかったのだが、二人の仲はやがて翼を持ち、天駆け始めた。大学生活の解放的な雰囲気の中で、ほかにどうしようがあるというのだろうか。二人の近くにいた級友の一人は、アナンダとマルレーネの恋を「一編の抒情詩のように神秘な関係でした」と回想している。

二人の恋人は、このことを絶対にだれにも洩らさない

誓いを立て、忠実にそれに従った。セライダリスは、依然として学生たちの集りにもついて来た。一度はアナンダとマルレーネの映画見物に、それとは別に一度はコンサートに、いずれもセライダリスは影のようにアナンダに従っていた。大学が舞踏会を主催したこともある。だが、二人の恋人はあわれにも別れ別れで異ったパーティーに出なければならなかった。

アナンダもマルレーネも、まるで良識の標本のようであった。しかし、二人は、機会があるごとに、二人だけになるチャンスをひそかにつくり続けた。

ふつうは講義と講義のあいだにあわただしく会うのが関の山だったが、まもなく二週間に一度の割りで学校を抜け出してサイクリングに行くことを覚えた。二人は、ローザンヌを出て、五キロか六キロの遠出をした。南へ行けば湖水がある。東へ行けば葡萄畑、北と西には森があった。

アナンダは、また、よくフェラリ家に電話をかけた。まず電話がある。フェラリ家では、あわて家じゅうを片づける。それからやおらアナンダが登場した。マルレーネの母は、アナンダとはとりわけ親しそうな娘を見て、単純に喜んでいた。アナンダの慎み深い態度、マナーのよさや他人までもくつろがせる人柄に母親は好感と尊敬を抱いていた。彼女は、若い人をよく二人だけにさせておいた。あるとき、ある人が二人だけの部屋をのぞくと、アナンダとマルレーネは、動物の赤ちゃんのように部屋の中でじゃれながら鬼ごっこをしていた。しかし、恋にまかせた軽はずみはなかった。二人はいつも、お互いに結婚することはできないカップルであることを意識し、それを認めあっていたようだ。

彼らはよく長いおしゃべりに没頭していた。世界じゅうのありとあらゆることが話題だったが、なかでもよく話したのがタイについてである。アナンダはマルレーネにタイ字を教え、タイの将来、その進歩のことをいつも話していた。法律書をひろげていっしょに勉強したこともあった。マルレーネが歌を歌い、アナンダがフェラリ家のアップライト・ピアノを弾いて伴奏したこともあった。声がよかったマルレーネに、アナンダは声楽を習うように勧めた。恋人が喜ぶのを見たかったマルレーネは、その勧めに従った。

法律でも音楽でも、アナンダは常に全力をつくしてやるようにマルレーネを励した。アナンダが前期試験にパスし、彼女が落第したとき、アナンダはがっかりし、彼女の追試験の準備を手伝ってやった。追試験の結果がわかったのは、アナンダのバンコク滞在中だった。マルレーネはパスしたという知らせを電報で打ち、末尾にOOLIRAMとサインした。彼女のニックネームのMARILOO（マリルー）を逆に書いたのである。アナンダの暗号は、スイスのおとぎばなしからとった「ピコット」だった。

学校の休みのあいだは離れ離れになってしまう。だが、アナンダは手紙を出した。一九四五年の夏、フェラリ家はシャンペスのパレに別荘を借りた。すぐ近くのホテルにマヒドン家が来ていた。エコル・ヌーベルが経営する山小屋もあり、若者たちが集っていた。二人の恋人は、ランデブーの場所に事欠かなかった。

大学生活の十八カ月、二人は世間にかくれて二人だけの田園詩を謳歌していた。だが、マヒドン一家がシャンペスから帰り、九月六日付のプリディの電報が成人したアナンダにバンコクへの帰還をうながすに至って、外界は一気に恋人たちの世界へ闖（ちん）入した。それでも、バンコクへの旅行は一時的なものとされていた。再びローザンヌに戻れば、あと二年間は田園詩が続くわけである。未来がどんなに暗くても、二年という時間は、若い恋人たちの目や心から絶望を吹きとばすのに十分だった。

九月二十日、アナンダの二十歳の誕生日、ワタナ荘にはタイ人だけが招かれた。そのあとで、彼とマルレーネは、ひそかな祝賀会を持った。彼女は、恋人に銀のペーパーナイフを贈った。アナンダはささやかなプレゼントをお返しにした。小遣いがないので、いいものは買えなかったのである。だが、それといっしょに、彼はどんな金を積んでも買えないものを贈った。それは二人がいっしょに過したあいだの日記であった。二人が分かちあい心の中にしまい、これからも長く記憶する貴重な時間の記録である。

十二月はじめにバンコクに帰る前、彼はマルレーネの手紙や贈りものなどをすべて持ってきて、帰るまで保管してくれるようにたのんだ。旅行の仕度をするときに家人に見つからないよう、またバンコクで彼の世話をする召使いたちが気づかないようとの配慮である。アナンダは、銀のペーパーナイフだけを彼の持ち物の中に隠した。

二人は、だれにも妨害されずに消息を知らせあうために、用心深いトリックをつくりあげた。二人のニックネームを、それぞれ逆に綴って交信しようというのである。出発の日、アナンダは、二度彼女に電話した。二度目は空港からで、アナンダは群がる新聞記者をかきわけて公衆電話に走ったのだった。記者のうちだれ一人として、この大スクープに気づいた者はいなかった。ひとこと「さよなら（オー・ルボワル）」という時間しかなかったのだが。

真夜中すぎ、飛行機がカラチで給油しているあいだにアナンダは絵葉書に用心深く愛の言葉を書いて投函した。文面の末尾は——

「お元気のことと思います。いろいろなことに、どうか十分にお気をつけてください。しっかり勉強して、私の友情をお受けください」

友情という言葉の上に、アナンダはキスのしるしに小さい十字架を書き、最後に「T・C」とサインした。ビコットを逆にして略したのである。

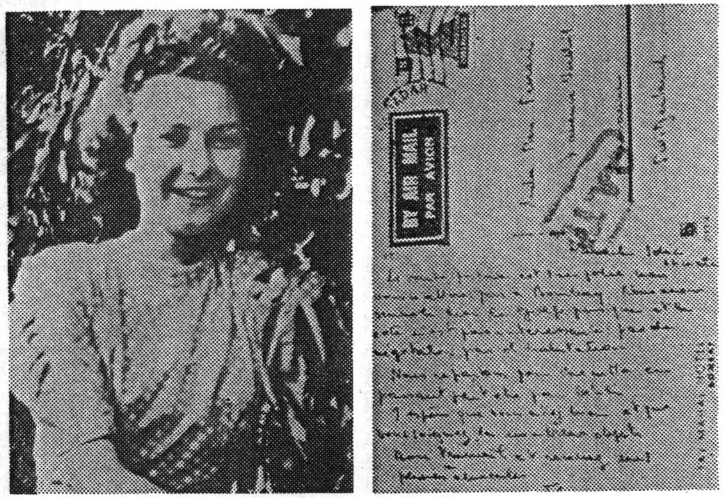
バンコクに着いてからは、少くとも二週に一度の割りで手紙を書いた。電報や手紙は、子供を産んでローザンヌに残っている姉のガルヤニやセライダリスを通じて送られたこともあった。そのどれにも、学友同士の友情より以上のものをにおわせる言葉はなに一つ書かれていなかった。

手紙の大部分は直接ベルデイユ街のフェラリ家宛てになっていた。マルレーネの手紙はバロンピマン宛てに送られた。アナンダは、スイスから届く自分宛ての手紙はだれにも見せずに即刻届けるよう召使いたちに命じておいた。あるときはアナンダは「もっと手紙を書いてほしい」と、マルレーネをうながした。三月になると、長いあいだ会わずにいるのがたまらなくなったらしい。「どうぞ、もっと心のこもった手紙を」と、電報を打った。

一九四六年六月十日の朝、マルレーネは、バンコクからの手紙を受取った。何人かの上流家庭の娘が宮殿に呼ばれたことをアナンダは報告していた。「そのうちの一人が私の妻になるかもしれないのです」とあった。二人にとっては冷たい外界の現実である。アナンダは、それに続けて暖い田園詩の世界への渇望を書いていた——

「ぼくは、ローザンヌへ帰る日が待ちきれないのです」。

そのような言葉は、どんな娘の心の中にも歓喜の炎を燃え上らせずにはおかなかったことだろう。しかし、マルレーネの心は、こなごなに砕かれた。前夜のうちに、ローザンヌのラジオ放送は、タイ国王の死を告げていたからであった。



マルレーネ・フェラリとカラチで書かれた彼女あての絵葉書

新聞記者たちがワタナ荘に殺到した。スイス政府は特別に衛兵を提供した。バンコクのニュースにくっつける関連記事を書こうと、記者たちは同級生の一人一人を探し歩いた。当然、マルレーネ・フェラリという女子学生の名も出た。彼らは、たちまちベルデイユ街のマンションを包囲した。セライダリスもつかまってしまった。

しかし、国王ご一家は、当時から二人の仲は親しい学友同士以上のものではなかったという見解で、その態度は今日なお堅持されている。ただ、世間に無用の憶測の材料を供給しないよう、セライダリスはマルレーネに新聞記者に会うことを禁じたそうだ。彼女の母も、娘を八日間というもの一歩も家から出さなかったために、徹夜でねばっていた記者たちもやがて退散してしまった。うわさは薄れて、沈黙が復帰した。マヒドン家の否定とフェラリ家の思慮深い静寂に支えられて、沈黙はいまもなお続いている。

アナンダとマルレーネのことは、国王暗殺事件裁判の

脚注とでもいうべきものである。あらゆる点で不完全であった裁判、とくに自殺の可能性を否定した裁判官の態度は、公判のあいだにアナンダのスイスにおける生活がまるで問題にされなかったという事実に照らしても、まったく無価値なものであった。法廷はスイスまで出かけていったのであるから、調査の機会がなかったという弁解は通用しない。せめて死の前夜にアナンダが燃やした手紙はだれからのものであったかを追及してみるべきであった。

　アナンダは、手紙を焼き残していたのだろうか。プットが見た光景——王母殿下が何枚かの紙を手に持ち、書斎を歩きまわるプミポンがなにかをする（手紙のことを宮廷会議に告げる?）と主張し、王母殿下が反対していたのは、その手紙なのだろうか。マルレーヌに対するアナンダの気持が予想外に深いのを知った王母殿下は、ローザンヌに帰る前にこの恋をあきらめるようアナンダに命じたのだろうか。そして、これが、うわさされる彼女と国王のいさかいなのだろうか。

　しかし、王母殿下の証言もプミポンのそれも、恋人のこと、手紙のことには言及しなかった。二人とも、いっさいのいさかいはなかったと断言している以上、われわれがこれ以上詮索するのは無益であろう。ただ一つ重要な事実は、公的たると私的たるを問わず、調査委員会や法廷に対してはもとよりごく親しい友人に向っても、王母殿下がアナンダの死の原因についてはいまだに口をとざしていることである。

　ベルンの大使館で開かれた臨時法廷では、彼女は、単に検察側の質問に対して答えなければならないことを答えただけである。検事たちの質問は、被告やプリディに不利になるようにという目的をもって発せられたものばかりだった。予断を修正する反対訊問は、行われなかった。パオ警察長官は部下をスイスへ派遣し、もっぱらプリディの恐るべき犯罪を暴露するインサイド情報を掘り出した。そのために、かつてはプリディを尊敬していた王母殿下の側近までが、まもなくプリディを憎むようになった。

　王母殿下自身は、プリディを憎んでもいなければ、ほかのだれ一人にもその責任を問おうとはしなかった。けじめのはっきりした彼女の性格は、単に疑わしいというだけの理由で人を憎むことをさせないのだ。それに、自

殺・他殺、事故のいずれをとってみても、証拠もあれば反証もあるような状態なので、ただでさえむごいわが子の死について、彼女は、憶測をめぐらすことをやめてしまったのである。

　ショックと悲しみは、彼女を自分自身の内面に向わせた。裁判とそれに続くできごとのあいだ、彼女はスイスにとどまっていた。政治と法律という重苦しい水ぐるまの回転も、はるかに遠い国のことにすぎない。二人のボーイとチャリューの処刑によって仏の運が悪魔のうてなに見誤られようとも、それは王母殿下のあずかり知らぬことである。彼女は真実を裁く立場にはない。それに、いかに努力したとてわが子の死という悲劇の上に展開した三人の運命を変えることは、彼女にはできないのだ。

　私の物語もやっと終りに近づいた。

　自殺についての権威者の一人、E・リンデマン博士は最近「過度興奮」という概念を紹介し、精神分析学者のあいだで広く使われるようになってきている。博士の説明によると、それは一連の刺戟によって誘発される病的な緊張状態（テンション）で、「そのときの状況が求める以上の過激な爆発的行動」を引き起こすものだそうである。

　前章でたどったアナンダの心理の糸を再びたぐってみることにしたい。過度興奮性の自殺は、つぎのような特徴を持っているといわれる。その人は社会的には他人（ふつう級）の劣位に立ち、優位の人から挑発を受けている。非常に攻撃的な性格を持っている場合もあるが、多くの場合、それは異常なほどのおとなしさと従順の仮面の下に隠されている。（女官長は、ほかでもないその言葉——おとなしさと従順——でアナンダを形容したのだ）。自殺を誘発する原因は、はげしい対立であることもあるし、穏やかな説論でもありうる。そして家庭の平和、家庭の秩序維持の要求が若者を強く自殺へと駆り立てることが多い。

　このような特色は、これまでにあげてきた心理学者、精神分析学者の見解などにも裏打ちされて、アナンダの場合に実にみごとに当てはまる。彼と王母殿下のあいだにいさかいがあったといううわさには証拠はないが、過度興奮理論を導入すれば、叱った王母殿下が気づかないほどの小言でもアナンダに死の決意をさせることが可能なわけである。だが、アナンダの自殺についてのもっとも適切な解釈は、アメリカの権威カール・A・メニンジ

ャーの、つぎのようなフロイト派学説の中に包含されているといえる。

「人間は、二つの基本的な本能を持っている。愛情や建設という形で表現される〝生きる願望〟と、憎悪や破壊によって表現される〝死ぬ願望〟である。成長するにつれて二つの願望は表面化するが、ふつうはうまくバランスを保っている。だが、円満な成長が阻害されたり、だれか愛する人の行為によってバランスが失われると、憎しみだけが優先する。それは憎悪の対象になっている人を殺すという行為にもつながるが、その対象に対する残存愛情が殺人を犯させない場合は、殺す目標は自分の上に転じられる。もし〝死にたい〟という意志が先行すれば自殺になる。それは〝死ぬ願望〟の一次的な表象である。だが、もし、罪の意識が強すぎて、殺すという観念や行為を罰する気持のほうが強いときは〝殺されたい〟という意志の充足を望むようになる。つまり殺す対象に自分を合一させようとするのだ。高利貸の玄関先で自殺する日本の債務者などは、その好例である」（『自分に敵対する人間』）

前半に述べられている二つの願望と同じように、最後にあげられている行為も意識されない場合が多い。「一時、あるいはもう少し多い頻度で知覚されることはありうる。しかし、それは、愛や保護や従順といった意識された行為によって仮面を着せられる」という。メニンジャーのこの言葉は、王母殿下に対するアナンダの過度とさえ思われる配慮、従順さを思い起させずにはおかない。なによりも重要なのは、自分自身に向けられた〝死ぬ願望〟が、滅すべき自分の肉体を他人と同一化し、または他人を包含しているかのように信じ込んでしまう点である。しかも同一化は無意識のうちに行われることが多いという。十歳にして突然に王となったアナンダは、ついに自分と国王というものを同一化して考えることができなかったのではないだろうか。

専門家の意見を受けいれるかどうか、それをどのように解釈するかは自由だが、アナンダが自殺したのはもはやゆるがすことができない事実というべきである。心理学者たちは、さまざまに説明しているが、きわめて素直な目でこの事件を見ただけでも、ごく単純な真実を直観することはできるのだ。

一人でベッドに横たわっている青年アナンダ。絶望に

対する抵抗力は、病気のために弱っている。彼は恋人として、子として、国王としての自分の身の上を思い悩んでいた。そうするあいだも絶望が這い寄ってくる。ベッドに起き上ってピストルをまさぐる。45口径ピストルは好きだし、使い慣れた武器だ。彼はピストルを持ち上げる。おそらく、はっきりした動機や結末は意識されない。彼は本能だけで動き、決断する。両手で銃把をしっかりと握る。もっとしっかりと。引き金と安全装置にかけた指に力が入る。あとは簡単だ。一秒の何分の一かで目的は達せられる……。

うちひしがれた気持で、ぼんやりとピストルを構えてみただけで、死ぬつもりはなかったのかもしれない。「もしやるのなら、こういうふうにしてやるんだ」と、自分に言い聞かせた。そのとき、思考と行動がふと短絡した。この可能性にも反証はない。この事件に深く関係しているさる人が私にこの説を話してくれたのだ。自殺はありえないし、事故も考えられないと、まだ信じている人たちのために、私は、彼の説を紹介したまでである。

議論の余地のない事実は、罪もない三人の人間が、いつわりの理想を掲げ悪辣な手段によって権力を握った腐敗政権によって殺されたということだ。また、同様に無実の二人は、今日なお亡命生活を余儀なくされている。そのうちの一人、プリディは、現代タイの歴史の中でももっとも秀でた人物で、彼を失う一日一日は、そのままタイにとって損失の一日一日になるというのに、である。

法の正義は人間生存のための良心に応えるものであるという原則がもはや存在しないのだから、タイはどうなってもいい、五人くらいの人間がどんな処置を受けてもしかたがないと言う人がいるかもしれない。しかし、腐敗したタイ政権は、世界の平和をおびやかすものであることを忘れるべきではない。

西欧的自由主義の最前線に立つ勇士というマントを巧みに着こなしたピブンは、一九五五年に外遊から帰った。ハイド・パークのスピーカーズ・コーナーに民主主義の象徴を見たピブンは、いたく感激して、フラメーン広場にも同じものをつくらせた。だが、政府攻撃のはげしさにいたたまれなくなったパオは、まもなく、この自由言論の場を閉鎖してしまった。ピブンは、また、それまで定員の半数が指名制だった（そのためピブン派であった）国会議員を全員投票制にすることにきめ、一九五

七年二月に総選挙を実施した。ピブン派は僅差で民主党を押さえはした。だが、不正投票がふんだんに行われた汚い選挙に反撥した市民は、タイの歴史始っていらい初のデモ隊をつくって街頭に出、学生たちはピブンの住む首相官邸の芝生に押しかけた。

一方では、一九四七年のクーデターによってピブンが復位していらい、ピブン派の中でしだいに実力をあつめ始めている一人の男がいた。ラオ族の出で、バンコク連隊長をつとめていたその男——サリット・タナラートは、まもなく陸軍司令官になり、パオに匹敵する権力を持つようになった。ピブン＝パオの打倒をひそかに期していたサリットは、汚い選挙に対する世論が盛り上ったチャンスを巧みにつかんだ。彼はピブンのもとへ使者を送って、陸軍司令部への出頭を命じたのである。ピブンが気がついたときは遅かった。かつて彼自身がそうであったように、陸軍を制するものがタイを制するのだ。サリットとの対決に破れたピブンは、自宅に帰って、こそこそと亡命の荷仕度を始めなければならなかった。

まずカリフォルニアへ行き、インドでは何カ月間かの僧院生活を送ったあと、ピブンは日本を最後の亡命地に運んだ。（訳注、一九六四年に心臓麻痺のため神奈川県相模原市で死去）。パオのほうは、国王暗殺事件の三被告が処刑の日の朝についに罪を自供したと発表したのがうそのつきおさめで、スイスへ逃亡した。「バンコクの屠殺人」がそこで死んだのは一九六〇年で、悲惨な死にざまだったといわれる。悪業のかぎりをつくして集めた巨満の富も、むしばまれたパオの運命を救うことはできなかった。かわって独裁者サリットがタイに君臨し、彼の政権は、一九六三年十二月にサリットが死ぬまで続いた。

タイ政治の腐敗は、相変らずものすごいものだ。あるタイ人の経済学者は、眉一つ動かさずに、腐敗がなくなれば外国からの援助などは不要なのですと断言する。

タイのトラック運転手は「出口」と書いてある門にバックで入っていく。こうすれば、法律にも違反しないし自分もらくだからというわけだ。まったく同様の理由づけによってタイ社会の腐敗は今日、人々の常識にさえなってしまった。タイのどこを切っても腐敗のないところはない。たとえば、タイ陸軍は銀行、ラジオ局、テレビ局、新聞社、ナイトクラブ、バス会社、工場を経営し、そのほかにゼニが流入する多くの関連部門を持っている。サリット自身は、生前はその清廉ぶりを喧伝されていたのだが、実は二十人とも七十人ともいわれる妾を抱えていたことがわかった。給料だけではたりなかったはずである。

サリットとの会見後に記者団と語る敗残者ピブン

サリットがほんとうに清潔であったかどうかなどは、たいした問題ではない。大切なのは、政治家は腐敗していると信じきっている大衆が、彼の死後に暴露された真相をいとも容易に受けいれてしまったことだ。

マイナスばかりではない。サリットは蝿と汚物が散乱していたバンコクの町をきれいにし、不正なもうけをしていた連中を見せしめに銃殺した。毅然とした態度でタイの国民生活と国際社会における地位を建て直した。国連の各機関ともよく協力し、経済、社会両面で多くの進歩をうながした。

しかし、独裁と腐敗は、依然としてタイに暗い未来を約束している。アメリカは、共産主義に反対しているからという理由だけで、腐敗した政府に資金や武器をつぎ込まないよう気をつけるべきだ。くさった反共主義者を助けるというやりかたは、中国で、ベトナムで、ラオス

で失敗した。つぎにそれがタイに移り、タイが国際的な危機の焦点にならないとだれが断言できよう。

インド洋から太平洋に至る広大な東南アジアの、タイはかなめ石である。国際的な力のバランスは、この国を支点にして動いている。西欧諸国は、ほかでもない自分たちのために、「タイにはまだ民主主義はむりです」などという古い言い訳けを拒否しなければならない。たとえタイが東南アジア条約機構を投げ出し、中立宣言をしたとしても、現政権の独裁に対する反応としてやがて起るだろう反西欧の動きにくらべればまだましだ。

今日の若いタイ人、とくにインテリのあいだでは、民主主義への道が閉ざされていることに対するはげしい不満が認められる。プリディは共産主義者だという宣伝はいまだに行われているが、彼らのあいだではプリディの名が自由と社会主義の響きを伴って唱えられている。

プリディ共産主義者説は、彼が北京から放送したといわれる反タイ的な演説、および亡命先が中国だということによって裏づけられているようだ。実際は、北京放送が流したのは、国王に宛てた彼の手紙の内容にすぎない。その中で、彼は南部タイを貫通するクラ運河の建設にアメリカの資金を導入せず、どうか王室の財産によってほしいと懇請しているだけである。同じことを、プリディは、バンコクの新聞社宛ての手紙の中でも書いている。彼が放送をした事実はないし、そのうえ北京の近くに住んでいるわけでもない。中国に亡命しているのは、国王暗殺事件に関して彼の無罪が立証されるまではタイ政府が犯人引渡し請求をするかもしれず、従ってほかの国へは行けないからだ。

中国は、やがてタイに革命が起り、プリディが中国の保護下に新政権を樹立することを夢に見ているようである。亡命先で年とともに老いているプリディは、そうした中国政府の圧力と祖国タイへの愛国心の板ばさみになっているに違いない。プリディが革命を指導するかどうかは、むしろ現在のバンコク政権の態度いかんにかかっている。

私は生前のサリット首相にインタビューして聞いてみた。もし国際的な法律家によるパネルが国王暗殺事件の裁判をもう一度検討し、処刑された三被告と亡命中の二人の無実を立証したら、サリットはプリディの帰国を許すか、と。サリットは、その問いに答えなかった。彼を後継したタノム・キチカチョン内閣はまだ新しく、この難問に取組む余裕はなさそうだ。

私が期待を託すのは、だから、プミポン国王以外にない。そのプミポンは、いまでは四児の父になっている。即位後、歳月の経過につれて風格もそなわり、責任のあるタイ観察者たちは、ますます彼に敬意を抱くようになってきている。かつては国政を左右するだけの力はなかったが、いまでは十分に実力を保有しているはずである。もしこの本の内容をお読みになったら、タイの名誉と王室の安寧のために、どうか政府に命じて国王暗殺事件の再調査を命じていただきたい。タイ人がそれをなしとげることによって示しうる偉大さは、国の名誉や王家の安寧よりもはるかに大きいというべきである。

真の立憲君主制下の民主主義という目標を与えられることによって、また真に社会の進歩のために働く機会を与えられることによって、あの楽天家のタイ人たちは、世界の広大な地区にその恵沢をひろめることができるのだ。そのためには、裁判が下した不正義を取消し、腐敗の根を絶やすための手が打たれねばならない。西欧諸国も、これまで以上に民主主義の義務と価値をタイ人に知らせる努力をしなければならない。

「卵を産まぬニワトリは飼う心要がない」という中国のことわざがある。プリディは、中国のためには、まだ一つの卵も産んでいない。中国政府に提供されたささやかな家に、これも提供された秘書と運転手を置いて、ひっそり暮しているそうである。政治とは離れて、仏教の現代的解釈の研究や翻訳に没頭しているという。髪は、それほどの年でもないのに真っ白になっているそうである。食事のときに飲む少量のワインくらいは手に入るらしいが、かつてパリで喫ったフランス煙草を手にするチャンスなどないことだろう。中国に住むタイ人の亡命者たちは共産主義者と否を問わず、かつて祖師と呼ばれたプリディの家にいまでも集り、プリディは彼らを元気づけているとのことである。

アナンダの悲劇から起った波紋は、いつの日、この力の論理に支配されつつある世界に波乱を起すのをやめるのだろうか。彼の悲劇に関連していまだに浮かばれない魂たち、アナンダの霊も含めて、彼らはいつ、成仏することができるのだろうか。そんな夢が実現するようなすばらしい日を私は待ちたい。その日まで私は、この、世

にも不思議な物語にエンドマークをつける気がしないのである。

日本版への原著者あとがき

私が原著を書いてから十年がたった。しかし、この中に紹介した素材や結論は、なに一つ変更する必要がない。

東南アジアの情勢は、十年前よりもさらに悪化している。人々の苦悩は深まるばかりである。タイにおいては、軍による独裁と腐敗が相変らず継続している。

もし明るい材料があるとすれば、それは本書の主人公の一人、プリディ・パノムヨンの身の上に起ったことだろう。昨年、彼は中国を出て西欧に移住した。私は、はじめてプリディ氏に会うという感動的な機会を経験した。運命の悪魔的ないたずらは、この勇敢、聡明でかつ礼儀正しい人物の意気をいささかも沮喪させていない。タイの人々のために正義を望むプリディ氏の胸の炎は、彼の目の輝きの中にさえ燃えているようであった。

レイン・クルーガー

訳者あとがき

これは驚くべき事実である。推理小説よりも手のこんだ、小説よりも小説的な筋書が、ほんとうに起ったとは信じられないくらいだ。しかし、ここに述べられているできごとは実際に起り、国家の枢機に干与していた人々の運命を変え、タイ三千万国民の幸福を左右したのであった。そして、それほどの重要にして複雑な事件に対して当てられた原著者のメスの静かな切り口には感嘆するほかない。真相追及に当って彼がさまざまな難関に遭遇したことには、本文の中でも少し触れられているが、おそらく加えられたであろう敵意に満ちた妨害をはねのけて真実に一歩一歩と迫っていった取材力はみごとである。

レイン・クルーガーによる原著『THE DEVIL'S DISCUS』が刊行されたのは一九六四年、ロンドンにおいてだった。この原題は、被告ナイ・チットに与えられた第一審判決の中にある言葉であり、「真を偽と、善を悪と見まがうものは、死神のうてなを仏の蓮（はちす）と思うなり」というタイの古い格言をふまえたものだ。源氏物語の鈴虫の帖にある「はちす葉をおなじうてなと契りおきし露のわかるるけふぞかなしき」という光源氏の歌をふと連想させる。

原著は、今日のバンコクの書店の本棚にはいっさい見かけることができない。それにもかかわらず、タイ在留外国人のあいだでひそかに入手、回覧されている理由は、本書の内容が現国王の兄であるアナンダ・マヒドン前国王の死の真因に迫っているだけでなく、現代タイの政治、社会を知るうえに貴重なヒントを提供しているからだろう。

訳者は、かつて新聞社の特派員としてバンコクに滞在し、つぶさにタイ政界を観察する機会を持つことができたが、タイ政界と軍部の〝ピブン的体質〟は一九七三年十月の暴動によってタノム＝プラパート政権が倒れるまで温存されていた。独裁者の国外逃亡によって一応は民主主義の軌道に戻ったかと思われるタイ政局だが、前途はまだまだ予断を許さないものがある。

長年、事件記者を職としてきた訳者にとっては「自殺か他殺か」という問いかけは、死というニュース素材を前にしたときに必ず要求される基本的作業だった。そのため、本書の中で示されている原著者の態度には一種いいがたい親近感をおぼえる。また、彼が結末に近い章で主張している「東洋と西洋は本質的に違うものではない」という点にも、まったく同感である。

ところによっては保守的なイギリス人らしい原著者の自己満足がうかがわれ、一部では事実認定に甘い点もある。決して欠点のない本ではないが「自殺か他殺か」をつきつめていって真相に逢着した大筋には論駁を許さない強さがある。それがこの書を歴史書よりはミステリー物語に近づけているゆえんといえよう。

訳者は、タイ王室に対してことさらに不敬の念を抱くものではない。むしろ逆に、今日のタイにあって常に啓蒙の役割を果しておられるプミポン国王と美しいシリキット王妃には深い敬愛の情を感じている。だから、原著者が言外に示唆している「もし王室があのときに真実を語っていたなら被告らは……」という仮定の問いかけには、どう答えていいかわからない。もしこれが日本の皇室の事件であれば、日本人はどう反応することだろうか。

本書の内容をよく理解し、あえて翻訳、出版の機会を与えられたエール出版社、渡辺勤、西田幸生両氏に深く感謝する。

徳岡孝夫

■訳者略歴■

徳岡　孝夫（とくおか・たかお）

1930年大阪市生まれ。京都大学文学部卒。シラキュース大学で新聞学修学（フルブライト留学生）。67～70年バンコク特派員。現在サンデー毎日編集次長。

著書　「ヒマラヤー日本人の記録」
　　　「太陽と砂漠の国々」
　　　「イエローヤンキー」（エール出版社）その他

THE DEVIL'S DISCUS
by RAYNE KRUGER
ORIGINAL ENGLISH LANGUAGE EDITIONS
PUBLISHED 1964/by CASSELL & COMPANY LTD.
London
Copyright © 1964 by Rayne Kruger
Japanese Translation rights arranged
through charles E. Tuttle Co. Inc. Tokyo.

タイ国王暗殺事件　¥ 1000　〒 150

昭和49年3月15日　第1刷発行

著　者　レイン・クルーガー
訳　者　徳　岡　孝　夫
発行者　西　田　幸　生
発行所　エール出版社
東京都千代田区神田神保町1―51
電話・東京291局0306
振替・東京　33914

乱丁・落丁本はおとりかえいたします。